２０１９年度

青山学院大学審査学位論文

主査　大屋　多詠子 教授

『西鶴名残の友』とその周辺

Saikaku nagori no tomo and Its Lingering Influence

文学研究科

日本文学・日本語専攻

大木　京子

目次

序　2

第一章　西鶴の雑話物と町人物　3

第一節　奇談集『西鶴諸国はなし』　3

Ⅰ『西鶴諸国はなし』巻五の三「楽しみの鱠鮎の手」　4

Ⅱ『西鶴諸国はなし』巻四の五「夢に京より戻る」　12

第二節『日本永代蔵』と『本朝二十不孝』　24

Ⅰ『日本永代蔵』巻二の二「才覚を笠に着る大黒」　24

Ⅱ『本朝二十不孝』巻一の一「今の都も世は借物」　30

第二章　『西鶴名残の友』成立と解釈　37

第一節　『西鶴名残の友』書誌と成立に関わる問題　38

第二節　『西鶴名残の友』各話解釈　53

第三章　『西鶴名残の友』と八文字屋本　178

第一節　『忠臣略太平記』と『西鶴名残の友』　178

第二節　八文字屋本における『西鶴名残の友』の受容　190

結び　216

付録『西鶴名残の友』俳人一覧　218

初出一覧　230

序

『西鶴名残の友』は、元禄十二年（一六九九）四月に刊行された井原西鶴の最後の遺稿集である。北条団水による巻頭の序文に、「諸国の雑譚、例の狂言」とある通り、本作は諸国俳諧師の逸話を笑話風にまとめた短編集の形をとり、その中には西鶴自身の経験談とおぼしきもの、笑話というより奇談に近いものも存在する。そのため本作は、古今俳諧師の逸話集、西鶴の漫談、晩年の西鶴の心境を書いた随筆的作品といった様々な捉え方がなされていたのである。

その中で、俳座の咄という性質を強調されたのが野間光辰氏であった（1）。野間氏は、『『名残の友』こそ、西鶴に最も自然なはなしの姿勢の下に、彼のはなしの持味が遺憾なく発揮せられた作品なのである」、「多分にはなしらしい小説である」とされ、「近代の小説論的立場から論ずるならば、褒貶いづれにもせよ、甚だしく批評の正鵠を失するであらう。その意味において、従来とは反対に、より多く彼の小説におけるかうしたはなしの方法を、重視しなければならない」と主張した。この捉え方が現在も主流をなしていることは誰もが認めるところであろう。

このような咄を中心とした捉え方に対して、俳論という読みを加えたのが吉江久弥氏であった（2）。吉江氏は本作を芸道論として捉え直し、「一切を笑話として割り切ろうとする向きがなおあるとすれば、再考を要することは言うまでもない」とし、西鶴の芸道もしくは俳諧に対する信念が説かれた書とされたのである。

井上敏幸氏はこの見解をさらに深化させ、元禄期における談林俳諧師の心境を読み取る。元禄に入ると談林俳諧はその勢いを失い、俳壇は景気の句へと流れていった。この新たな潮流に対する憤懣や批判を、晩年の西鶴に重ねて見たのが井上氏の説である。

現在、本作の評価はこの二つの視座からなされているといってよい。すなわち、咄に重点をおく立場と、俳論として読む立場である。もちろん、どちらか一方が正しいということではない。どちらに比重をおくのかという問題である。

西鶴の小説は、その多くが短編の集合である。それは「はなし」が西鶴の創作の姿勢だからである。そして談林俳諧は軽口の連続でもあり、軽口は西鶴の最も得意とするものであった。したがって、軽口咄が西鶴の特徴を表すものだと考える。つまり、本稿は咄重視の立場で『西鶴名残の友』を評価する。

短篇笑話集の性格を持つ『西鶴名残の友』こそ、西鶴の創作の原点を探るにふさわしい作品と位置づけ、西鶴の創作方法を今一度見直すべく、第一章では西鶴生前刊行の作品を確認し、第二章では『西鶴名残の友』全話の解釈を試みる。そして本作が後世どう読まれたのかを知るよすがとして、八文字屋本での『西鶴名残の友』の受容を検討していく。

（1）野間光辰氏「西鶴の方法」（初出「西鶴のはなし序説」『西鶴研究』1西鶴学会　昭和17年6月、改題「西鶴の姿勢」『上方』昭和17年7月、「西鶴の方法」『西鶴新攷』筑摩書房　昭和21年2月15日、『西鶴新新攷』岩波書店　昭和56年8月24日　再録）および『刪補西鶴年譜考証』（中央公論社　昭和58年11月）。

（2）吉江久弥氏「西鶴の芸道観―『名残之友』を中心に」（『西鶴論叢』中央公論社　昭和50年9月、『西鶴　人ごころの文学』和泉書院　昭和63年5月　再録）「西鶴名残之友二題」（『西鶴　人ごころの文学』和泉書院　昭和63年5月）。

（3）井上敏幸氏『武道伝来記・西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友』解説（新日本古典文学大系77　岩波書店　平成1年4月）、「『西鶴名残の友』管見」（「語文研究」第66・67号　九州大学国語国文学会　平成1年6月）。

第一章　西鶴の雑話物と町人物

井原西鶴の浮世草子作品は、好色物・武家物・雑話物・町人物に大別される。作品の中には『椀久一世の物語』（モデル小説）、『嵐は無常物語』（追善物）、『本朝桜陰比事』（裁判物）など様々な要素を含むものがあり、そうしたものは雑話物の中に分類されている。『西鶴名残の友』を分類に当てはめるとすれば、雑話物と町人物の要素を含んだ作品とすることができよう。

『名残の友』の特徴は、俳諧師を中心に置き、笑話に仕立てたところである。それを浮き上がらせるために、第一章では『名残の友』以外の作品のなかから雑話物・町人物の数話を取り上げて論じ、『名残の友』論への階梯としたい。

第一節　奇談集『西鶴諸国はなし』

Ⅰ『西鶴諸国はなし』巻五の三「楽しみの鱆鮎の手」

一

『西鶴諸国はなし』巻五の三「楽しみの鱆鮎の手」は、副題に「生類」とあるとおり、隠者の庵に現われた「鱆鮎」という不思議な生き物を描いた奇談である。「鱆鮎」は想像上の生き物で、従来その発想の源を解き明かすべく様々な説が出されてきた。まず本話の大筋を次にあげておく。

鎌倉の金沢という所に、流円坊という隠者がいた。明け暮れ丹後ぶしの道行を語って暮らしていたが、ある日、食うものにも事欠く彼の所に二匹の鱆鮎が海からやってくる。二匹は彼の身辺の世話をするようになり、流円坊のよき友となった。身体が痒いときには、言わなくてもそれと察して掻いてくれるのだが、その気持ち良さは寿命も延びるほどで、世に言う孫の手とはこうしたものかと思われた。

ある時、鱆鮎の片方が姿を見せないことがあった。百日ほど過ぎた夜中に二匹連れ立って尋ねてきて、懐かしそうに流円坊の側によると、紫衣を差し出した。よく見るとそれは故郷伊勢の大淀の上人、円山の御衣であった。訳を尋ねても鱆鮎は何も言わない。その内国元からの便りで円山の死を知り、流円坊はその紫衣を持って御寺にのぼった。それよりこの土地を衣の磯というようになった。

最後はいわゆる地名由来説話となっているわけだが、いくつか注目すべき点をあげてみる。

○地名→鎌倉・金沢・衣の磯

○隠者のもとに動物（或いは人間）が訪れる→「海から来る」

○動物は隠者の手助けをし、交流を重ねる→「身体を掻く」「孫の手」

○もたらされた物をきっかけに、隠者が御寺にのぼる→「紫衣」「伊勢大淀の円山」

本話の中心である「鱆鮎」とはいったい何なのであろうか。諸注釈書は、その名前から中国の伝説にみられる仙女「麻姑」と関連づけて説明している。

鱆鮎は猿の年経た玃（やまこ）と河童（かつぱ）とに似た想像上の獣。ここはその鱆鮎の手を、背中の痒い所を意のままに掻ける孫の手に言いかけたもの。『訓蒙図彙』八に「爪杖（さうぢやう）今按ズルニまこのて、掻杖ニ同ジ。麻姑（まこ）ハ仙女ノ名、ソノ手鳥ノ爪ノ如シ。蔡経コレヲ得テ背ノ痒キヲ掻センコトヲ念フ」とある（1）。

こうした説明に対し、宮澤照恵氏は

二匹の動物には伝説の仙女麻姑が投影しているのではなく、掻杖から逆に連想が働いて鱆鮎と命名したのであろう。即ち麻姑説話そのものは本話の構想に関与していないのである。挿絵に描かれた鱆鮎が十七八の仙女ではなく、猿に似た動物であることは、その傍証となろう。

と書かれ、新たに本話の原拠が大覚和尚の伝承と御猿場山の縁起譚にあるとした。そして「鱆鮎」については「老栖古猿宿」から影響を受けたといい、猿猴のイメージに江ノ島弁財天の童子を重ねて創られた架空の動物であるとされたのであった（2）。

確かに、本話は動物（生類）の話であって、その姿から麻姑伝説の面影をみることは難しい。挿絵に描かれる鱆鮎は動物であり、しかも背を掻いているのではなく、耳掻きを持って流円坊の耳を掻いている。

井上敏幸氏は流円坊のモデルを『新著聞集』五の十八の即往とし、即往に食物を運ぶ里人、または「伊勢よりの使僧」を、大覚に持した女体の乙護童子に転じ、更にそれを鱆鮎に転じたのであるとされた（3）。

岡本勝氏は先の二者と同じく中国説話の麻姑との違いを指摘しつつ「鱆鮎」が特に海の生物であること、西鶴がわざわざ麻姑に魚偏を付けていることに注目し、その典拠を『奇異雑談集』巻二の五「伊勢の浦の小僧、円魚の子の事」として、本話はその後日譚であるとされた（4）。

これら諸説をまとめた新大系の注を参考として次にその全文を引いておく。

本話の主人公流円坊は、新著聞集五の十八の即往をモデルとしたもの。伊勢で成長した久五郎は、相模の国真鶴（まなづる）で船頭となる。二十五歳の折船が難破、命はとりとめるが直ちに出家、一飯も持たず鵐（しとど）の岩屋に籠り念仏する。やがて里人が食物を運ぶ。六、七年後二千日回向をすると毎晩竜灯が上る。三十五歳の折赤沢の海辺で庵を結び念仏をする。村人は日々食事を届ける。ある時、買求めた抹香の中の木屑のようなものの中から観音像が出てくる。翌朝一人の僧が来て「我は伊勢よりの使僧也。昨夜の物ありや」と問うて去る。後、伊豆・相模の高僧達が法論に来るが、誰にも負けない。元禄十年（一六九七）頃八十余歳だった。この即往を「鎌倉の金沢」に住まわせ、更に鎌倉五山第一の建長寺開山大覚和尚に関する伝承を付与することで本話は成立している。伝承の一つは、大覚に侍した女体の乙護童子（本体は竜、玉舟和尚鎌倉記）、二は栄西から残された藕糸の袈裟（沢庵和尚鎌倉記）、三は、団扇を持ち如意のような簪を戴く観音像を描いた大覚形見の鏡（円鑑、新編鎌倉志）である。西鶴は、これらを各々、鱆鮎・紫の衣・孫の手に転じてみせたのである（5）。

二

以上のごとく、従来の研究では、架空の動物「鱆鮎」がどのような過程で想起されていったのかが一つの論点となっているのである。この動物は、しゃべらない他はほぼ人間のごときと書かれる。このような人外の生きものによって食物を与えられ、生活を助けられる特別な人間の話は以外に多い。例えば、西鶴が挿絵を描いたとされる『本朝列仙傳』（貞享三年刊）の「大峯比丘」では、山中に迷い込んだ義睿と大峯比丘との以下のような会話がある。

此他人倫ノカヨフベキコト。ナリガタシトノタマヘドモ。二三人ノ童子見

ヘタリ。是妄語ヲイヽタマフニアラズヤ。比丘ノ云ク。法華経ヲ見ズヤ。夫コノ経ヲ受持讃誦スルモノニハ、天ノ諸ノ童子キタリテ。給仕ヲナスベシト。

また、その夜不思議なことがあった。

初夜ノ時分ニイタリテ。異形異類ノ夜叉鬼神。其外サマ／＼ノ鳥獣。其数ヲシラレズキタリテ。アルイハ香花ヲモチ。或ハ木果。草ノ實。百味ノ飲食ヲ。サヽゲテ。比丘ニタテマツリ。禮拝供養シテ次第々々ニ列座タリ

青い唐風装束を身につけた麗しい十四五才の童子が、およそ二三人で仙人仙女に仕え、色の白い食物を給仕するという。大覚和尚に侍した乙護童子もこの類に入るだろう。こうした童子や鳥獣は『本朝列仙傳』の他の仙人、「法空」「陽勝」「睿山僧」「山谷比丘」「武蔵野僧」にも登場する（6）。そしてまた高僧の場合も同様に、異類はその人物の徳を慕って集まってくるのである。

寛永十六年、佐川田昌俊によって書かれたという『松花堂行状』には、照乗を慕って尋ねてくる異類のはなしがある。

照乗ある夕つかた、法衣あらため、すゝ引ならし、護摩堂ニ詣して誦呪し、加持せられけるに、かたハらなる、竹の中ニ、ものゝあるをとして、此堂の縁ニあかるけハひしてけり。あやしく思ひて、しりへをかへりミられけれハ、たゝなりけり、

照乗はこの「たゝ」という生物に対し、寺の子達には哀れを知らぬ者もいるから早く去れと語りかける。するとこの生物は「いとむつましけに尾打ふり、くゝといひて」帰っていった。またある時は

（照乗が）便所ニものせられけれハ、ふと来りて、衣装のすそニまつはれて、いとなつかしくしけり。哀ニ覚へけれハ、やをら弟子共にも忍てもちゐ、袖ニとり具して、くハせなとし給へり、かゝりて後ハ、人なき所ニいますれハ、いつも来けるとそ聞る、

と書かれている。古寺にでる狸の話は聞くけれども、このような事は聞いたことがないと昌俊が述べているので、この「たゝ」なる生物は狸ではない。照乗は奇怪を語らぬ平性であった。だから弟子にも「たゝ」の事を隠していたという。昌俊は、自分だけがこの事を知りえたのだと記している。そして照乗のところには、その徳に引かれて他の生類も集まったとも書いている（7）。

仙人や高僧の居所に異類や生類が集まるという話は多く存在し、「楽しみの鱆鮎の手」もこの流れを汲むのであるが、看過してはならない点が一つある。それは、本来異類が出現する場所は修行を積んだ人物の所であって、本話のような丹後節の道行きを語るような「艶隠者」の所ではないということである。「列仙伝」や「高僧伝」と同様の型を持っているとはいえ、本話の隠者は仙人でも高僧でもない。「列仙伝」「高僧伝」は当然仙人や高僧の通力や徳を語るために書かれるものである。本話はその点があいまいなのである。本話の人物、流円坊が紫衣を受け取ったということは、流円坊が円山上人の継承者だということを暗に示しているともいえる。

紫衣といえば、やはり紫衣事件が思い起こされよう。紫衣事件に巻き込まれ

て配流され、寛永九年（一六三二）に帰洛し、後に家光の帰依を受けて品川に東海寺を開いた沢庵のことである。沢庵を流円坊に重ねてみるのは的外れではあるまい。最終的に御寺へのぼったとあるので、流円坊も高僧として描かれてよい人物だった可能性はある。だが、本文に「するの世のかたりくに、彼の御衣を持て、伊勢の御寺にのぼりぬ」とあるのが気になるのである。ただ紫衣を持って御寺にのぼるというのなら、流円坊が円山上人の後継となったと素直に読むことができるのに、なぜ「するの世のかたりくに」という理由を付け足すのだろうか。後の世の話の種にといって流円坊は鱆鮎が持ってきた衣を御寺に届けた。とすると、流円坊は衣を届けただけとも読むことができてしまう。実はこれが西鶴のはなしに見られる特徴なのである。まるで意図的に対象をぼかしているようで、はっきりと人物や物事を読者に明かさない。一見わかりやすい筋書きでありながら、何かが不可解で気になることが多いのだ。

三

西鶴は流円坊に丹後節を語らせて、徳の高さを強調しない。本話の目録題も「隠者」については何も触れていない。この「隠者」が誰であるのかは、地名や寺の名などから暗示されている可能性は確かにある。しかしそれが目的であるのなら、「生類」は謎の生き物でなくてもよいはずである。童子など霊的な存在の方が隠者の徳を強調するはずだからである。しかし西鶴はそうしなかった。ゆえに読者の目は隠者ではなく生類、すなわち「鱆鮎」へと向けられる。西鶴が「謎の生類」と「丹後節の道行きをかたる隠者」を設定したのは、元来の伝記物ではないことを読者に示すためだったのではないだろうか。では一体何を書こうとしていたのだろう。

西鶴自画とされる挿絵へと目を移すと、挿絵の「鱆鮎」は竹縁に座った流円坊の横で耳掻きを持ち、立ったまま流円坊の耳を掻いている（図1）。本文では耳掻きについて何も語っていない。耳掻きはどこからくるのか。この挿絵について井上氏は「庵の椽に腰掛けている流円坊。手に団扇を持ち、鱆鮎に耳の垢を取ってもらっている。団扇・耳掻は、大覚形見の円鑑の図柄からの連想であろう」と説明している。図1は『諸国はなし』の挿絵、図2がその『新編鎌倉志』巻三に載る円鑑の図である。『新編鎌倉志』の説明文によれば、鏡の形は図のように鼎の型であるが、それを「円鑑」と号しているのは、開山大覚和尚が在世の時に自ら「円鑑」と額を書いて、昭堂に掛けさせたことによるという（8）。

（図2）

（図1）

確かに団扇については納得もできるのだが、耳掻きはどうだろう。簪を耳掻きに見立てて連想するのか、それとも後面の梅の木を耳掻きに見立てるのだろうか。どうも無理があるように思えてならない。それより、この「鱆鮎」の姿をみると、山東京伝『骨董集』に載る「耳垢取古図」が思い浮かぶ（図3）。異国の服を着た耳垢取りが、立ったまま商人の耳を掃除している図である。図の傍らには「亡友大朝此図を擬して予にあたふ。按にこれ元禄なかばの絵なるべし」と説明書きがあり、京伝は次のように紹介している。

江戸鹿子（貞享四年板）「耳垢取。神田紺屋町三丁目長官」とあり。おなじ比京にもあり。京羽二重（貞享二年板）「耳垢取。唐人越九兵衛」とあり。初音草噺大鑑（元禄十一年板）「京と江戸ゆきゝすぐなる通町の辻／／をみれば、あるひは歯ぬき耳の療治云々」老人養草（正徳六年板）に云近来（ママ）京師の辻／／に耳垢取とて紅毛人のかたちに似せて云々」とあれば元禄の末正徳の比までもありしなるべし。

五元集拾遺

観音で耳をほらせてほとゝぎす　其角

此句も耳垢取のことをいへるなるべし。

一代男後日（刻板の年号なし。按に西鶴が廿五年の追善といふことあれば、享保二年の板なるべし）二之巻に云「松浦潟平戸といふ所にわづかなる草の屋をかりて云々。髪を惣なでつけにして長崎一官と名をつき、（ママ）

都ではやる耳の療治人の似せをして京の一官顔して云々」かゝれば當時京に一官といふ耳の垢取りありしならん。（句読点濁点は引用者による）

と京伝は述べる（9）。異国風の風俗で町の辻々に立ち、耳掻きを使って往来の人々の耳を掃除するという「耳垢取」は、貞享から元禄の末ごろまでよく見られたらしい。

（図３）

これらを勘案すると、本話の「鱆鮎」は、海の向こうから来たと思われる「耳垢取」の仕草を映したものだったのではないかという考えが浮かぶ。もちろん「耳垢取」という言葉は本文になく、挿絵からのみの情報だと言われれば、その通りである。しかし「孫の手」という言葉を出し、その由来である中国の仙女「麻姑」から「鱆鮎」と名付けられた生類は、海の向こうから来た。そこには異国風の姿をした当時の「耳垢取」の姿が想起され、挿絵に描かれたのではなかったか。

西鶴は話のなかに謎を残したまま読者へ投げかけてくる。流円坊が何者であったのか、鱆鮎が何なのかといったことは種明かしされない。逆に種明かしされないからこそ読者や聞き手は気になって仕方が無いのである。気持ちの良い「鱆鮎の手」は「孫の手」だとか、まるで駄洒落のような題で肩すかしをされてしまう。そこに高僧だの仙人だのの霊験譚を真面目に語っても、奇妙で軽妙な西鶴のはなしの勢いを削ぐだけなのではないかとも思う。ただそうした懸念を持ちつつあえて本話を説明するならば、本話「楽の鱆鮎の手」は、「高僧伝」「列仙伝」の話形をもとに、そこに登場する「生類」へ焦点をあてて創り直されたものであると考える。また、その生類に近年よく見かけるようになった生業を重ねて登場させたのではないだろうか。どこかで見たことがある、そこら辺りの人々の姿が、不思議な「生類」として描かれている。そうすることによって、西鶴は「近年」の「諸国はなし」を近年の読者や聞き手に語ろうとしているのである。

（1）井上敏幸氏『好色二代男　西鶴諸国はなし　本朝二十不孝』注釈（新日本古典文学大系76　岩波書店　平成3年）。

（2）宮澤照恵氏「「楽の鱆鮎の手」の素材と方法―『西鶴諸国はなし』の研究―」（北海道大学国文学会『国語国文研究』82号　平成1年3月、『『西鶴諸国はなし』の研究』平成27年　和泉書院に再録）。

（3）（1）に同じ。

（4）岡本勝氏「『西鶴諸国ばなし』の方法」（『論集近世文学3　西鶴とその周辺』勉誠社　平成3年11月、『近世文学論叢』平成21年1月　おうふう　に再録）。

（5）（1）に同じ。

（6）『本朝列仙傳』の本文は、古典文庫341『本朝列仙伝』（古典文庫　昭和50年6月）を使用した。

（7）『松花堂行状』の本文は、『茶道文化研究　第四輯』（今日庵文庫　平成10年2月）を使用した。

（8）『新編鎌倉志』（河井恒久友水　貞享二年刊）は、国立国会図書館蔵本を使用した。

（9）『骨董集』（山東京伝　文化一二年刊）は、国立国会図書館蔵本を使用した。

Ⅱ『西鶴諸国はなし』巻四の五「夢に京より戻る」

一

『西鶴諸国はなし』巻四の五「夢に京より戻る」は、構成上前半と後半に分けられる。前半については、謡曲「藤」の当世化であるとの指摘もある（1）。この謡曲「藤」には問題があり、元禄以前に成立していたかどうか定かでないとの考えも提示されている（2）。

もし、謡曲の当世化でなかったのだとするならば、「夢に京より戻る」はどのように捉えればよいのだろうか。今一度作品にたちかえって、再検討を試みるしかない。あらすじは以下の通りである。

頃は春、夜も明けきらぬ早朝、魚売り達が堺の大通りを行こうとすると、一人の美しい女郎がしおれた藤の枝をかざしてふらふらと歩いていくのに遭遇した。驚きあきれながらも若い魚売り達は、女に魅せられたように後をついていく。女は朱座、両替屋の門口に立ち止まっては戸が開かないのを恨めしそうにしている。魚売り達がこの女を浮気女と見て、小宿へ誘うつもりで「送っていくからその藤を一枝下さい」と声を掛けると、女は「自分が苦しむのもこの枝のためである。自然の雨風すら厭い、日中花見されるのさえ辛い藤を、『見ぬ人の為』といって無情にも折っていった妻や娘達が憎くて、藤の枝を取り返しに歩いているのです。」と答え、ふっと消えてしまう。魚売り達が驚いて地元の人に話をすると、実は堺の金光寺の伝説にそのような「物語」があるという。後小松院が寺の藤を京に移植させたところ、夢に藤の精が現れて歌を詠んだので、再び寺に藤の花を植え戻した。それと同じ事が起こったのではと皆で金光寺に見にいくと、やはり折られたはずの藤の枝が元に戻されていた。それを見て、皆名木の不思議と思い、これよりこの藤を痛めることはしなくなった。

二

『諸国はなし』には異なった素材を組合せて作られた作品が多いので、構成上分裂をみせるものも少なくない。堀切実氏によれば、『諸国咄』全三十五篇中十四篇の多きを数える」という（3）。「夢に京より戻る」もこの種のはなしで、前半部と後半部の分裂は一目瞭然である。前半は堺に行った魚売り達がみた不思議な女のはなしであり、後半は『諸国はなし』の前年、貞享元年に刊行された『堺鑑』にある物語をそのまま取り入れた形となっている。本文全一丁半のうち、前半部に該当するのは一丁分。残りの半丁が『堺鑑』の伝説にあたる。この伝説に類似したはなしが謡曲『不断櫻』にあるので、次に要約しておく。

伊勢白子山観音寺には、「絶えず花咲く桜」として名高い桜の木があった。今上の命により、この桜を確認しようと一人の勅使がこの寺に訪れる。勅使が花を眺めつつ里人を待っていると、地元の浦の海人だと言う一人の老人がやってきた。そうして、その老人は、尋ねられるままにこの寺の由来を語りはじめる。

いつの時代か、寺が炎上した際に、灰のなかから一本の桜が生えてきた。間もなくして花が咲き、それより四季を通して絶えず花が咲くようになったので、人々はこの桜を「不断桜」と呼ぶようになったという。ある時、称徳天皇がこの桜の不思議を聞こし召し、京へ運ばせて南殿に植えかえさせるという事があった。盛大な御遊びが行われたが、桜はその一夜にして枯れてしまった。天皇は不思議に思われ、御製を作って、再びこの桜を観音寺に返した。すると桜は再び花を咲かせたのだという。

語り終わった老人は一旦姿を隠し、また現われて自分がこの桜の精である事を勅使に告白する。そして、この話を今上に申し上げるよう告げながら、治まる御代の久しい事を讃えつつ、舞ながら消えていったのであった。

『櫻史』（山田孝雄著　講談社学術文庫）によると、この謡曲は

これ不断櫻のいはれを説くと共に、かねて此寺の縁起にも及べり。作者不詳、旧くより観音寺に傳はれるものにして、貞享三年版の観世流二百番外百番の三として載せたれば、その流布は、久しきものと思はる。

という。つまり『堺鑑』にみられるような草木の奇特は、いたる所の名木名草に伝えられる伝説の内の一つと考えられるのである。このようなよくある伝説をもとに、どのようなはなしが創作されたのかが問題となろう。まず前半と後半を比較しつつ、問題点を剔出してみる。

前半を貞享、後半を後小松院の時代と考えると、前半・後半における時代のずれは、二百年余りになる。後半に紹介される『堺鑑』の物語は、院に関わる寺の伝説で比較的由緒正しい。それに対し前半は、魚売りの幻想であって卑俗なはなしといえる。

内容は藤の精を共通項として展開する。いずれも金光寺の藤に対するぞんざいな扱いが発端となっているわけだが、違いとしては移動距離があげられるだろう。前半に登場する藤の枝は堺の住民によって持ち帰られるため、堺から出ることはない。後半の藤は後小松院によって堺から京に移され、再び堺に送り返される。従って、目録題の「夢に京より戻る」は後半の内容を示していることになる。さらに両者には藤の枝を「手折って持ちかえる」ケースと「移し植えかえる」ケースという違いがある。

次に奇特の認識の仕方であるが、前半は魚売りの「若い者ども」が女の目撃者であり、「我も〳〵とちかより」とあるので多数の人間が同時に不思議を体験したことになる。対して後半の方では、藤を移した張本人である後小松院の夢に藤の精が現われるので、認識者は後小松院一人だけである。奇特そのものを比較すると、前半では折り去られた枝が元の藤棚に戻っていたことから、ひと

りでに枝が移動していたということになる。後半では、京で枯れてしまった藤が堺に戻ったとたんに花を咲かせたということが奇特となっている。

藤の精（女郎）の行動力にも違いが観察できる。『堺鑑』の藤の精は和歌を詠んで後小松院に訴えかけた。つまり実際に藤の木を堺に戻すのは、後小松院である。対して、前半の藤の精とおぼしき女郎は、自分自身が動いて自分の一部である枝を取り返す。この違いから次のことが言えるだろう。『堺鑑』の藤の精は「夢」という幻想世界に出現することは可能であるが、現実での直接的な行動を起こすことはできない。逆に女郎の方は人間の目に見える姿であり、現実の物体を移動させることもできるのである。従って、前半に描かれた藤の精の方がより現実に近づき、人間に影響を及ぼしやすい存在になっていると考えられる。この姿の違いは、挿絵によって明らかである（図1）。挿絵が示すものも目録題同様、後半部分の藤の精なのである。

以上、藤の移動距離、藤の木への横暴（手折る、移動する）、奇特の現象（目撃状況及び目撃者）、藤の精の姿と行動において違いが見られることを確認してきた。前半部分は後半の大まかな筋を変えることなく、それ独自の世界を構築するよう書き分けられていることになろう。この点に関して、「（『堺鑑』という）自分が拠っているものを示しながら、一方ではそれから離れて、離れた部分までが、あたかも自分が拠った伝承に存するようなふりをして、自分の世界を創っていく」という江本氏の指摘は正しい（4）。ならばこの「夢に京より戻る」も、前半部分に西鶴独自の工夫を見いだしていけるはずである。以後、前半部分に焦点をあてて考えてみたい。

（図1）

三

先にも述べたように、「夢に京より戻る」の前半部分は、謡曲「藤」の当世化であると言われてきた。しかし、謡曲「藤」から考え出されたとは思えない箇所も文章中に多く見られる。謡曲との比較において、平林香織氏は「謡曲の静物の世界」と「夢に京より戻る」の世界とは、人物構成の面で辛うじて共通性を認め得るのみで、全くと言ってよいほど異質のものである」と結論づけられた(5)。事実、謡曲の中に見られる藤の精の姿からも、また、謡曲の筋、すなわち藤にむかって和歌を詠じた僧に対し、なぜ「田子の浦や、汀の藤の咲きしより」の歌を吟ぜぬのかと藤の精が非難するという内容からも、本話前半のストーリーは連想できない。

さらに謡曲「藤」について、西野春雄氏による軽視しえない指摘がある(6)。西野氏は「本曲には近世中期以前の謡本がなく、室町期の名寄にも見えず、演能記録も元禄以降にしか見出だせないようであり、とうてい室町中期の佐阿弥の作とは考えられないのである」と述べ、『甲子夜話』および『鷲流狂言伝書宝暦名女川本』を提示しつつ、「藤」の作者を南部備後守信恩と推定された。この南部備後守信恩は延宝六(一六七八)年生まれなので(『寛政重修諸家譜』)、『諸国はなし』刊行の貞享二(一六八五)年には謡曲「藤」は成立していないことになる。しかしながら、法政大学には謡曲「藤」の貞享元年成立の写本が伝存している。柳洞の手になる写本であるが、この資料をいかに位置付けるかによって、謡曲「藤」の成立時期は異なることになる。

以上謡曲について述べてきたが、貞享元年の写本があるとしても、「夢に京より戻る」の前半が謡曲「藤」に拠るとするには疑念が残るのである。西鶴が作品で「藤」の当世化をするには、それなりの上演回数がなければならない。また、上演が数回にわたっていたとしても、謡本が版本として民間に出ていなければ、読者の想起を予定しての本話執筆は、意味をなさなくなる。

いずれにせよ、謡曲「藤」の世界から、「たよたよとした女郎」が「藤」をかざして彷徨い歩くという情景も、若い者達がわれもわれもと手を出すといった猥雑かつ軽妙なくだりも、想起できる状況にはなかったのである。

さらに、前半部の藤の精が消える場面にしても、謡曲「藤」に限定する必要はない。植物の精霊ならば、当然消え去るのが常套だからである。

四

では、本話の前半は一体何を発想契機として描写されているのだろうか。また「うつくしき女郎」を中心に繰り広げられる不思議な情景はどこからくるのであろうか。まず、花を手折るという情景をヒントとして考察を進めていきたい。

本文「見ぬ人の為とて折て帰りし人」は『万葉集』(四二〇〇)等に載る内蔵縄

麻呂歌「たごの浦の底さへにほふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」を発想契機としていると考えられる。この歌は広く知られていた歌であり、歌語として以下のように説明されている。

内蔵縄麻呂「多祜の浦の」は『拾遺集』（八八）や『三十人撰』（四）では人麻呂歌として、『夫木抄』（二一〇四）や頓阿の『井蛙抄』（三三三）では家持歌として収められており、歌が縄麻呂自身から離れて、さまざまな作者に託されながら愛誦されていたことがうかがえるのである。そして、縄麻呂歌をはじめ家持歌の「藤波の（影成す海の底清み沈く石をも玉とそ我が見る）」も含めて、多祜の浦の藤を詠んだこの『万葉集』の歌群は、後に駿河の国の「田子浦」と混同されながらも、「多祜の浦藤」という歌語までも生むに至った。―中略―また、屏風絵においても、多祜浦の美しい藤やその藤を手折る旅人が描かれ、その旅人の立場からの屏風歌も詠まれたのである。

屏風の絵にたこの浦に旅人の藤の花を折りたる所

たこのうらの岸の藤なみ立ちかへりをらではゆかじ袖はぬるとも

（金槐集　一一〇）（7）

このような和歌的世界は、美しい花の枝を手折って帰るという行動に反映され、作品の中で巧妙に消化されているのである。「夢に京より戻る」以外の西鶴作品にも多くみられるので、藤ないしは手折られる花の世界を任意に提示してみる（引用本文は『定本西鶴全集』（中央公論社）を用いた）。

1．手たれ藤田子の浦波ぬれ懸て大臣をつる松の下陰

（枝垂藤のもぢり。色は老巧の藤田といふ意味。『定本西鶴全集』頭注）

『難波の皃は伊勢の白粉』巻二「藤田鶴松」

2．されば傾城にする女は―中略―あしかるべき事にもあらず皆姿の花、銘々木々の物数奇、松にかゝり、藤のしなだるゝもだじない物、岸の山吹の色こきも捨がたし。彼女のありさまは、吉野に取違へ、初瀬かと思ひ、大宮人を見る心地するに、里の童の花あらすを、それしばし、枝折る事はいやよと、江戸のよし原言葉を聞に

『諸艶大鑑』巻一の五「花の色替て江戸紫」

3．京橋の金鎚といふお敵、五日つゞきて大寄、上野の藤を爰にうつして、作花屋内匠が、俄に咲して、揚屋の臺所迄、風もいとはぬ花棚。心ある人、手折てかざし、「見ぬ人のため」といわれしもやさし。

『諸艶大鑑』巻七の四「反古尋て思ひの中宿」

4．見知らぬ禿が、しほれし一枝をかざし、「きのふの詠め、鷲の尾の山はさかりに住きしが、見ぬ人の為に」といふを聞きて、「誠に昔男の植へ置きし名の櫻、散らぬうちに見に行かぬか」とさそふ

『椀久一世の物語』上巻四「花車は引かれてのぼりつめ」

5．白しゆすに墨形の肌着、上は玉むしの色しゆすに、孔雀の切付見へすくやうに、其うへに唐糸の網を掛、さてもたくみし小袖に、十二色のたゝみ帯、素足に紙緒のはき物、うき世笠跡より持たせて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためといはぬ計の風義

『好色五人女』巻三の一「姿の関守」

6．今小町といへる娘ゆかしく、見にまかりけるに、過し春、四条に関居て見とがめし中にも藤をかざして覚束なきさましたる人、是ぞとこがれて、なんのかのなしに縁組を取いそぐこそおかしけれ。

『好色五人女』巻三の二「してやられた枕の夢」

7．村山座の花ざかり、藤村初太夫、すぐれて可怜く、時勢粧を舞事をえたり。見し人是に悩ざるはなかりき。ある日東山の櫻に行て、さかりにちかき塩竈の一枝を、初太夫持て帰り、見ぬ人のためにもと、やさしき心ざしふかし。―中略―初太夫かざせし櫻を見かけ、（花見で酒に酔った）情しらずの男達ちかくよりて、「其花を給はれ。けふのつまり肴に、酢味噌でたべる」といふ。それ花に嵐をだに、人間の手して折かへるをさへ心なきに、ましてや、むごき言葉のすゑ、さら／／花は惜からねど、所望の仕掛気にいらねば、「しんじ申まじき」といひ捨て通り

『男色大鑑』巻五ノ一「涙のたねは紙見せ」

8．我ながら我文をなげつけしに、「多古の浦袖さへ匂ふ」と有りしは、皆之丞への思ひ入、一しほ哀さまさり

『男色大鑑』巻八の一「聲に色ある化物の一ふし」

9．花山の酒機嫌なる奴、薄色櫻をあらけなく手折、てにかざして帰る酔の顔つき、春の木のまの入日のごとく照て、眼に角を人て、往来に鞘あてをして、さはぎ来る。

『武道伝来記』巻八の一「野机の煙くらべ」

西鶴作品の中から注目すべき用例を提示してみた。以上のごとき用例を見ると、花見にまつわるエピソードが多いのに気付く。その花は藤に限らず桜・紅葉である場合もある（『武道伝来記』巻三の一・巻三の四・巻六の一、『西鶴織留』巻三の二・巻四の三等）。「夢に京より戻る」以外の場面では、「手折りて帰る」人は「心ある人」で「やさしき心ざし」を持つ人物として描かれることが多い。そしてこの「心ある人」はおよそうつくしい女性か若衆などで、『好色五人女』巻三のおさんの例などは典型例である。

また『難波の皃は伊勢の白粉』に見られるように、「藤」は「田子の浦」に結

び付けられていた。これは和歌「たごの浦のそこさへ匂ふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」から来たものである。もしこれも謡曲『藤』に拠るとするならば、謡曲『藤』は天和三年より以前に成立していなければならなくなる。したがって謡曲『藤』を媒介として「たごの浦」の歌を引用したというよりも、古くから西鶴の脳裡には「田子の浦」の歌があったと考えざるをえない。そしてそれ以降「花見」のエピソードには、「見ぬ人のため」と花（特に藤）を手折り、「かざして」て帰るイメージが定着していたのである。

五

では、花をかざして帰るという風習は実際にあったのであろうか。花見の際に枝を折るというのは、もともと「挿頭の花」のためであり（8）、また、その花を家人に見せるためでもあった。素性法師の歌に

見てのみや人に語らむ櫻花手毎に折りて家づとにせむ

（『古今和歌集』巻一　春歌上　五十五）

とある。あるいは、貴族に献上するためにも枝は折られた。『塵塚物語』には足利義満が千本閻魔堂の櫻、普賢象を所望した際のことが紹介されている。

此てらのさくら名木のよし上聞に達す。一枝を捧べし。因之彼住僧大枝を手折りて上す。その時将軍大きに御立腹まし／＼かさねては小枝を切てさし上べし。名木の大枝無情非可折取。（9）

このように、美しい花の枝を折って帰る行為は古くより行われていたわけである。江戸時代に入っても同様の風習は残っており、当時の女性達は花見に出掛ける際、皆競って美しく飾りたてていた。女性はその美しさをひけらかし、腰を落として歩いてゆく。母親は娘自慢に余念がなく、若い者達は花を見ずに生きた花を見て廻る。このような情景は、西鶴の作品内にも多くみえる場面である。元禄八年刊菱川師宣筆とされる『和国百女』にも

〇桜の花今をさかりのよし、よもに聞ゝければ、京もいなかも花見とて、もよほしゆく人多し。第一花のめい所はよし野也。ふるき歌にも、ちりまよふ花のよそ目はよし野山、などゝよみしもおもしろし。いざやよし野へゆかずとも、あたりちかき清水や、とよくになどへたちこへて、花見せんとて、さひし（妻子）をともなひ行人有。ひめもすながめて夕日になれば、さくらのゑだなど、しよまふ（所望）して家路に帰る、心ある人の発句に

家づどやちるを荷にする花のえだ（句読点濁点引用者）

などという条がある（10）。天和三年刊の『岩木絵づくし』でも

〇やよひちうじゆんの比なれば、さくらのはなさかりとて、つげきたりければ、いざ見にとて、めしつかひの女らうをともなひ、しのびやかに御出ある。さて、ともの御ためにとて、年久しき老じんをおそばちかくめしぐせられ、花しやうゑんにあきらかにして、けいけんきうはくのちり

をはす。しげりたる木のもとに、まくをはりまはし、かなたこなたの花をながめ給ふ。さても見よや、もへたつやうなしほがまや、枝をたをりてみやげにせんと家ざくら、神ぞ見事ないせさくら、さかり過ぎゆくきりがやつ、しもべのしよさにいとさくら、いろをこのむかかばさくら、などいひてながめ給ふ。おもしろさに、花のもとに、かへらん事をわするゝは、美けいによつてなり。さぞよしのはつせの花はおもひやらるなどいひて、さま〳〵なぐさみ給ふひつゝ、けふの日、はやくれになれば、なごりおしげにかへり給ふ也。（句読点濁点引用者）

（図２）　『和国百女』

とあって、花見に女性を連れてゆくことが多く、帰りには枝を手折って帰るのが一般的であった(11)。また、参詣や花見が男女の出会いになることも多く、花見帰りの女郎に声を掛ける若衆や、土産の花ちまきをかたげた下向途中の女郎に、手を貸す色好みの男なども描かれている。（図２）

このような華やかな花見の情景は町人達によって繰り広げられているが、元来花見とは、貴族や武士といった特権階級のものであった。西山松之助氏によれば「（平安の）花見は貴族たちだけのあそびで、月林寺、東山、民部卿の小野山荘、白河院、丸成寺、鳥羽殿、六条殿、京極殿、法勝寺、観音院、雲林院、西山花林、六波羅密寺、洛外花山寺、一条北辺などの花を見に行った。貴族たちは、車を連ねて行ったり、馬に乗って行くこともあった。彼らは満開の桜のもとで、蹴鞠をしたり、和歌を詠んだりしている。」という（12）。また、中世においても花のもとの連歌の会や、茶の湯、聞香などの遊びは上流社会のものであった。ようやく秀吉の頃になって、民衆が花見を楽しめるようになったが、

完全に解禁になったわけでもなかった。武家や貴族は寺院や藩の屋敷内に花を囲い込むようになり、庶民とは別の世界で花見をするようになったのである。将軍の花見に至っては、一般庶民の外出を禁止する触れが出たとも言われている。

江戸時代初期になると、庶民の花見が文献に多く見られるようになる。西山氏は、「今のように多くの人が飲み食い歌い踊る花見」は元禄のころからと考えておられ、「金持町人の出現による元禄の繁栄が市井人を花見」に繰り出すようになり、「(江戸中期以降の人が) 元禄にあこがれていたというのは、この時代が、花見踊りなどに興じた町人生活が著しく伸張した時代だったから」と指摘されている(前注に同じ)。特に京などでは、芭蕉の句「京は九万九千群衆の花見かな」にある通り、早くから花見が盛んであったらしい。したがって、西鶴が描いた花見の風習は単なる庶民生活の描写ではなく、春を謳歌する羽振りのよい町人の姿が最も表れている情景であったと考えられるのである。実際に、垣間見られる女郎も禁中の姫君ではなく、屋敷の奥に住む町人の妻や娘にとってかわっている。花見の帰りに花をかざし、女の足よわげに歩いて行く様子、そしてそのような女郎を物色し、声を掛けたり絡んだりする男達の姿は、一つの当世的イメージとして一般大衆の間に定着していた。その例として、『日次紀事』から、次の文章を引用しておく。

凡京俗春三月毎花開、良賤男女出遊、是称花見。其時多新製衣服。俗謂花見小袖。男女毎出遊必折花枝而帰。市中児童追跡而慕之。各高声請之日、須賜花一枝、欲与啼児等賜之則可賜好花。是華洛児童之諺而遠境鄙里之所不識者也。織田信長公春三月入洛始聞斯言大感之謂、実都下児童之詞也。然帰江州安土城則教城下児童而唄之云。(13)

花見の情景には一定のイメージがあって、本話「夢に京より戻る」の前半にある「その花一枝たまわれ」という魚売りの言葉も、このような当時の状況の反映と考えられるのである。

六

以上のように「夢に京より戻る」の前半部分には、花見帰りの情景が読み取れるとした。つまり「うつくしき女良の、たよたよとしてしほれし藤をかざし、人をもつれず先に立て行」という描写は、花見から帰る女の姿を写したものなのである。このような女の姿は、以前より絵に描かれていたようである。『好色一代男』巻三の五「集礼は五匁の外」に

親方七良太夫が内に、新しき薄縁敷し奥の間に、やさしくも屏風引廻して有ける押絵を見れば、花かたげて吉野参の人形、版木押の弘法大師、鼠の嫁入、鎌倉團右衛門、多門庄左衛門が連奴、これみな大津の追分にて書し物ぞかし。見るに都なつかしく。

とあるように、天和年間、花をかたげた人形の姿が大津絵の題材とされていたことが分かるのである。大津絵の発祥について、旭正秀氏は寛文年代とみなし、

貞享・元禄のころをもってその隆盛期とされた。そして、大津絵十種の一「藤娘」については、以下のように述べている。

大津絵の中で、風俗画といえば直ちに連想されるのは、あの藤娘であろう。藤の葉の模様のついた着物をきて、振り袖を片肌ぬぎにして、その手を懐に入れ、赤い紐のついた塗笠をかぶり、藤の花の枝を担げている娘の図である。髪の結い方は、笠にかくれて、ハッキリと解らないが、たぼや何かの形から俗に「鶺鴒やう」、またの名を「かもめづと」にした島田髷である。それから上着の端折りを多く取って、しごきを前で結び、蹴出しをぐんと出した容姿は、まことに粋な仇姿である（14）。

また、歌舞伎の「藤娘」に「黒の塗り笠、あるいはびらり帽子は、春の桜、秋の紅葉、四季折々の物見遊山に出かける元禄期の新しい女たちの風俗」を見てとり、「芝居の「藤娘」は大津絵の戯れ絵の世界に定着」していくとされるのは、古井戸秀夫氏である（15）。ここでいう「元禄期」とは、元禄年間を指すよりも天和から元禄にかけての時期と解釈したほうがよかろう。厳密にいえば、花見に浮かれる女性たちの存在は元禄以前に確認できるのであり、氏が引用されている『守貞漫稿』にも「四十四五ナル奥ガ昔ヲ今ニ」とある通り、塗り笠等の風俗は天和頃の女性にも当てはまるからである。笠の流行は入替わりが激しく、塗笠などは貞享になって一旦廃れ気味となったが、元禄に入って再び流行したという（16）。『一代男』にある「花をかたげた人形」や、それを描いた大津絵の女が、塗り笠を被っていたかどうかは定かでない（17）。いえることは、花見に浮かれ、花をかたげて帰ってくる女たちの姿は、天和の頃、既に大津絵に描き取られていたということなのである。そして、その婀娜なる姿が「夢に京より戻る」の「たよたよとした女」の姿に投影されたと考えられるのである。

七

さて、これまで述べてきたことを考慮しつつ、ここで本文に立ち返ることにする。夜も明けぬ早朝、堺の浦に出現した「うつくしき女郎」は「たよたよとして、しほれし藤をかざし、人をもつれず只ひとり、先に立て行」つた。この姿は、この女郎が花見からの帰りであることを示す。更に、夜明け前という時間と藤の花が萎れていることから、花見が昨日であったことも分かる。供の者がいないのは、この女が集団から離れ、単独行動をとっていたことを表すのである。したがって、若い者達が、「さてはいたづらものには、うたがひなし」と判断するのは、もっともなことといえる。

男達が「その花ひと枝たまはれ」と声をかけるのは、先にのべた通り、花見帰りの状況に添っており、『男色大鑑』巻五の一（三の本文参照）と酷似している。

しかしながら、本話での趣向は通常の花見帰りの世界からはみ出した側面を内包していた。なぜならば、花見帰りの浮かれた女と思った女郎は、どうやら人外のものだったらしいからである。では、実際に花見をしてきた人物は誰な

のか。それは「朱座」「両替屋」の「妻や娘」に他ならない。つまり、金光寺に出掛けて、覆われた幕の中で花見に興じることができた者は、羽振りの良い「朱座」や「両替屋」だったということなのである。藤の精とおぼしきこの女郎の姿は、実は花を手折った「妻や娘」の姿と重なっていく。「妻や娘」は「見ぬ人のため」といいつつ藤の枝をかざし、何人もの供を連れて昨日のうちに帰った。藤の精は、まさにその姿を借りて現れたといってよかろう。

二百年前、後小松院の夢に現れた藤の精は、無論、このような姿ではなかった。挿絵の如く、一目で人外のものと分かる姿であったか、あるいは、二百年前の風俗であったはずである。しかし、西鶴は全く違った姿でこの精霊を登場させている。

「夢に京より戻る」は「堺」の不思議な伝承をベースに、近年の生ける花の精をもって再構築したものなのである。特権商人（堺では朱座、両替屋）の妻や娘が、手折った花をかざして花見から帰ってくる姿は、人々の目を引いた。それは素人女が立てる表舞台のうち、最も華やかな瞬間でもあった。そのような町人女性の姿を藤の精に投影し、不思議に仕立てたところが趣向となっている。「見ぬ人のため」と花をかざす和歌的な雅の雰囲気や、上流町人による花見のイメージを持ちつつ、大津絵にみられるようなしどけない女の姿をした藤の精に、花見とは無縁であるかのような「魚売り」が声を掛ける。つまりは、浮かれた上流町人の女性達に、より俗っぽい若者達がいたずらを仕掛けるという情景を一方では描いていることになる。

要するに、後小松院の夢に現れた藤の精の奇特が近年起こったとしたら、いかなる姿で顕現するのかという問題である。神秘的であった藤の精は花見帰りの浮かれた女へと姿を変え、その仮にも精霊である女郎を、「魚売り」の若者達は目撃するどころか色宿に誘おうとする。西鶴は、藤の精と人々の対応をかくも変質させてしまったのである。

西鶴は『堺鑑』の逸話を参照しながら、現実的で近年風の情景を描こうとしたことになる。ゆえに花見の趣向を取り入れて、手折った花を取り返すという筋に変え、完全な夢の世界ではなく、集団幻想のごとき不思議とした。いたずらを仕掛ける存在は、町人のなかでも雑多な職である「魚売り」なのである。

思えば目録題も挿絵も、『堺鑑』の内容を反映していた。したがって読者には、文を読む前から種明かしされていたことになる。そして『堺鑑』の奇特が今起こったらという独自の世界をまず前半に持ってきて、読者の興味をひいた。『堺鑑』から端を発したはずの奇談は、逆に作者独自の近年的不思議な世界から思い起こされたかのように設定されたのである。ここに、本話の工夫を観察するべきなのではなかろうか。

（1）　江本裕氏「西鶴諸国はなし―伝承とのかかわりについて―」（『伝承文学研究』17・昭50年2月）（『『西鶴諸国はなし』と伝承」と解題し、『西鶴研究―小説篇―』（新典社　平成17年　に再録）に謡曲との関係が示唆されている。さらに井上敏幸氏は新古典文学大系で、本話と

謡曲「藤」との関係を緻密に比較検討された。

（2）平林香織氏『『西鶴諸国はなし』論―巻四の五「夢に京より戻る」の世界―』（東北大学『文芸研究』117　昭和63年1月）。

（3）堀切実氏「「忍び扇の長歌」の読み」（江戸文学13号　ぺりかん社　平成6年11月）（『読みかえられる西鶴』ぺりかん社　平成13年3月に再録）。

（4）（1）に同じ。

（5）（2）に同じ。

（6）西野春雄氏「享保前後の新作曲―近世謡曲史考―」（『能楽研究』7　昭和57年3月）。

（7）片桐洋一氏『歌枕を学ぶ人のために』片桐洋一氏編・世界思想社　平成6年3月）。

（8）西山松之助氏「日本人の花」（『花―未発の密度―』講談社　昭和53年）（西山松之助著作集第八巻『花と日本文化』吉川弘文館　昭和60年に再録）。

（9）『塵塚物語』の本文は『日本随筆全集』17　国民図書　昭和5年）を用いた。

（10）『和国百女』の本文および図は『菱川師宣絵本』（岩崎文庫貴重本叢刊第五巻　貴重本刊行会　昭和49年7月）を用いた。

（11）『岩木絵づくし』の本文は、東北大学付属図書館蔵『岩木絵づくし』（菱川師宣画　鱗形屋板）を用いた。

（12）（8）に同じ。

（13）『日次紀事』の本文は『新修京都叢書』第四巻（臨川書店　昭和43年9月）を用いた。

（14）旭正秀氏『大津絵』（美術出版社・昭32）。

（15）古井戸秀夫氏「藤娘の成立」（『近世文芸』51号　平成1年11月）（『歌舞伎　問いかけの文学』ぺりかん社　平成10年7月に再録）。『守貞漫稿』からの引用文は以下の通り。

元禄中或書日「東山花ノ春コソ面白ヤ　都女ノ色競　当世流行ル　曙染　花ノ塗笠ビラリ帽子　浅黄　縮緬抱帯　見ルモ／＼カワツタ風俗云々」同時一書日く「四十四五ナル奥ガ昔ヲ今ニ　兵庫髷オカシゲニ浅黄ニ鬱金ノ下着　上ニ飛紋ノ緋紗綾　白裡ツケテ襦珍ノ通シ袷ヲカケ　稲妻織ノ金入帯　紫ノ革足袋ニ萌黄ノ紐ヲツケ　塗笠ニ減金ノ鐶ヲウタセ　頂キナシニ赤ヒ締緒　ヨロヅイヤナルトリナシ云々」

（16）『守貞漫稿』笠の項に、塗笠を被る女性の図として、延宝中および天和四年の絵が載せられている。旭氏（14）も笠の流行に言及され、貞享頃にすたれた塗笠が元禄に至って再び流行したことなどを述べている。

（17）鈴木仁一氏『大津絵の美―街道の民画』（芳賀書店　昭和50年）に載る初期大津絵（京都市立芸術大学蔵）から、「藤娘」として定着する以

前の大津絵では、笠なしの格好で描かれていた可能性があると考えられる。左図参照。

（図Ⅱ）

第二節　『日本永代蔵』と『本朝二十不孝』

西鶴作品における単純な出典研究は、必ずしも現在好まれる傾向にない。ある話の典拠を指摘するのみでは、あまり意味がないと考えられるからである。しかし、話が創作される契機となったもののイメージや事情によっては、作者の苦心やはなしの構造を垣間見ることができるし、そこから文学的な配慮も解明できる。

第二節では、町人物『日本永代蔵』巻二の三「才覚を笠に着る大黒」と、雑話物と町人物の性質を含む『本朝二十不孝』巻一の一「今の都も世は借物」の二題について取り扱い、その話が創作されるに至った発想の原点らしき事柄について考える。

Ⅰ『日本永代蔵』巻二の二「才覚を笠に着る大黒」

一

「才覚を笠に着る大黒」は、ある放蕩息子の成功譚である。あら筋は次の通りである。

信心深い父親大黒屋新兵衛が、長男の新六に家督を譲ろうとしていた頃のこ

とである。もとは賢かった新六であるが、急に色遊びに熱中して浪費を重ねるようになった。そして暮れの決算日に放蕩が父親に露見し、新六は遂に勘当される。

家から追い出された新六は、着のみ着のまま江戸へと旅だった。無一文ではどうにもならず、自分の才覚で小銭を稼ごうとする。人の鏡を盗み、また偽薬を売るなどして旅費を稼ぎ、何とか品川まで辿り着いたのだった。

日が暮れて、新六は品川東海寺で一夜を過ごすことにする。そこでは乞食が多く寝泊りし、各々の身上を話していた。新六は彼らの話に興味を覚え、彼らに商売の秘訣を聞く。そうして江戸に入った新六は、乞食達に教えられた商売を実行し、十年も経たないうちに五千両の分限になり、土地の人の宝とされるまでになった。

以上が本話の内容であるが、構成上大きく三つに分けることができる。新六が勘当されるまでは二代目放蕩話、江戸下りの部分は道行き文、東海寺の場面は懺悔話と長者教の趣向が取られている。

これら三つの話系が唱歌「大黒舞」をもじった歌詞でまとめられていることはいうまでもない。「一に俵、二階造り、三階蔵を見わたせば」という文句で本話は始まり、「八つ屋敷がたに出入、九つ小判の買置、十で丁ど治りたる御世に住る事の目出たし」という言葉で締め括られているのであり、冒頭と結末が呼応することにより、一話の完成度が一段と高くなっている。以上のことを念頭に置きながら、細かな部分を検討していきたい。

本話に登場する大黒屋新兵衛と新六にはモデルがあると指摘されている(1)。父新兵衛のモデルは、三井高房著『町人考見録』中の巻「新屋伊兵衛」の条にみえる大黒屋二代目善兵衛とされ、新六は「大黒屋九左衛門」の条にある大黒屋の三代目九左衛門の兄弟の一人という(2)。

『町人考見録』での大黒屋は成功者ではなく失敗者として書かれているが、『日本永代蔵』では親子いずれも成功者として登場する。これは『日本永代蔵』刊行が元禄元年であり、当時大黒屋は享保の全盛期へ向かって躍進していた時期にあったからである。

西鶴は江戸本町、京都室町で繁盛していた呉服屋の「大黒屋」を描こうとしていた。二代目「新六」を文無しにまで貶め、才覚一つで大商人にまでなった人物として作りあげたのである。

実際、江戸本町に店を出す以前から大名貸しをしていたような金融業者であった大黒屋が、本話に書かれたような過程で成功をおさめるはずはない。大黒屋の成功は、金融業で成した資本に依拠していたと思われる。無一文からの成功、豪遊・放蕩による破滅をコンセプトとしている『永代蔵』に、大黒屋の繁盛をありのまま描くわけにはいかなかった。ゆえに「才覚を笠に着る大黒」は、新六が放蕩と勘当を経験したと仮定して、江戸で成功してゆく姿を描くのである。

また、注意すべきは、モデルとされた大黒屋が先に出した店は江戸本町の方で、京都室町の店が後ということである。「才覚を笠に着る大黒」では、一代目

新兵衛の店が京都にあると記されており、勘当された二代目新六の江戸店が後に出されたことになっている。つまり本話「才覚を笠に着る大黒」は、始めからモデルとされる「大黒屋」とは異なった話にする予定であった。よって本話では、事実に基づかない成功譚をいかに作り上げていったかというところに問題点を設定する。

二

今一度、冒頭の唱歌から検討してみる。「一に俵、二階造り、三階蔵を見わたせば」という文句は、「大黒が能には、一に俵踏まへて、二つににつこと笑ふて、三に酒作りて、四つ世中良ひように、五ついつものごとくに、六つ無病息災に、七つ何ごとないやうに、八つ屋敷広めて、九つ蔵を建てならべ、十でとうど納まる御世こそ、めでたかりけれ」という数え歌を想起させる導入部である。この数え歌は、室町時代物語の『大黒舞』（「大悦物語」ともいう）を始め、同じく室町時代物語の『梅津長者物語』、狂言、歌謡などにもみられ、民間芸能でも祝言の歌として広く流布している（3）。そのうち絵本で伝えられてきた『大黒舞』の内容は、本話「才覚を笠に着る大黒」の設定に深く関係していると思われる。

『大黒舞』は歳の暮れから新年にかけての話となっており、構成は以下の通りである。

1　『二十四孝』
2　「観音祈願型」の藁しべ長者譚
3　大黒天と恵比寿天の来訪
4　盗賊悪霊退治
5　幸運な結婚

室町時代物語『大黒舞』の主人公は、大和国吉野の里に住む大悦の助という人物である。「二十四孝」の大舜・文帝を引き合いに出し、大悦の助がいかに孝行者であるかを語る。大悦の助の両親はすでに七十を越える年令で、歩くのも困難な状態であった。大悦の助はこの両親を養うため、貧乏ながらも樵で生計を立てている。

さて、大悦の助の両親は、雨が降ると息子が濡れることを悲しんで、「蓑笠を持ちて常に迎えに出」、「風吹けば、山路のうち、さぞあるらんとて、着るものを持ちてゆき、大悦に着せ（4）」るのであった。大悦の助はその親のいたわりをかえって悲しみ、「我が身の事をば思はず、たゞ親の寒からん事を」憂え、清水観音に一家安定の祈願をする。

「才覚を笠に着る大黒」の前半は、この『二十四孝』と藁しべ長者譚を踏まえ、息子の孝行話や、せめて服を着せようとする親の行動が、逆の設定で引用されている。

大黒屋新兵衛が隠居の準備をしていた頃、家督を譲られた新六は色遊びに狂いだして店の金を横領するようになる。冬の決算日に使い込みが露見し、新六

は新兵衛から勘当されることとなる。伏見稲荷の借屋も追われてなすすべのない新六は、十二月二十八日の夜、何故か実家でのうのうと風呂に入っていた。新六が湯槽に浸かっていた時、俄に新兵衛が棒をもって駆けつけ、新六を裸のまま追い出してしまう。

それ、親仁様といふ声おそろしく、湿身に綿入ひとつ肩にかけ、左に帯を提て、下帯には気をつけずして逃のび、けふ旅立にも尻からげきのどく。

このエピソードによって、新六は褌も無いまま旅立つことになるのだが、この箇所は文章の流れも簡潔でスピードがあり、見せ場の一つとなっている。もちろん挿絵もこの場面を採択している（図参照）。画面中央に棒を振り上げた新兵衛、右下にあわてて逃げようとしている裸の新六。その左側には店の者であろうか、逃げる新六に綿入れを渡そうとしている男がいる。右上、部屋の中では母親と弟とおぼしき人物が親仁を止めようと右手を差し伸べ、風呂の近くには下女があわてた様子で立っている。本文はテンポ良く裸で逃げたことのみを語り、挿絵はその一瞬の状況を補足説明しているのである。

（「才覚を笠に着る大黒」挿絵）

この風呂場での一件は、新六を裸一貫で出発させるための挿入と考えられる。このように勘当されて東へ赴くという話は数多いが、実際に裸で旅立つことはほとんどない。

一夜あけて十二月二十九日、新六は雪降る中を菅笠もない状態で江戸へ向かう。伏見藤の森からの紀行は一変して成功への道筋となっている。藁しべ長者譚を彷彿とさせる部分である。

俳諧的な道行ぶりの文体を用い（5）、「逢坂の関」「勢田の長橋」「鏡山」「桜山」「老曾の森」といった歌枕をつなげて品川までの道中を創作。この間に新六は、無一文から銭二貫三百文を儲けるに至る。まず、大亀谷勧修寺の茶屋で「大勢のどさくさまぎれに咽のかはきを止」、そこで「はじめて盗心になって」

人の豊島筵を奪う。小野に至った時「特牛程なる黒犬」の死骸を貰い、音羽山の麓では里人をだまして犬を黒焼きにする。そしてそれを狼の黒焼きと偽って旅人に押し売りし、新六は銭二貫三百文を得ることになる。

一方、『大黒舞』ではどのように展開しているのだろうか。大悦の助は清水観音から与えられた藁しべから、最終的に黄金三枚を得ることになっている。大悦は鼻血の止まらない瓜の実売りに藁しべを与えて、お礼に瓜の実三つを手に入れる。次に水が無くて苦しむ上臈に出会ったので、瓜の実を与えて咽の渇きを止めてやり、礼として「衣二疋」を得る。帰宅途中、大番役を勤める武士の馬が倒れ伏しているのを見て哀れに思い、先の衣二疋と引き替えに馬を貰う。看病の結果全快した馬は、実はたいへんな名馬であった。そこで大悦はこの馬を売って、遂に黄金三枚を得るのである。

以上のごとく、「才覚を笠に着る大黒」は『大黒舞』の前半部分の逆設定となっている。加えて、両者には大きな違いがあることを見逃してはならない。つまり、新六が実力すなわち自らの「才覚」で金を手に入れたのに対して、大悦の助は「観音の御利生」によって金を手にしたということである。『大黒舞』での幸運は、基本的に大悦の助の慈悲心に基づいている。貧乏であるはずの大悦の助が、常に与える側となっているからである。だが、「才覚を笠に着る大黒」の新六は、人から奪う立場にある。新六は自力で成功するかわりに、「盗み」「詐欺」「押売」を犯さざるを得なかった。それゆえかえって真実味を帯びてくる。

歌枕などで飾られ、見た目美しくカムフラージュされた本話の「犯罪」は、すでに指摘されるところである(6)。それは本論文の主旨に直接関わっていないので、ここでは詳述しない。言いたいことは、「才覚を笠に着る大黒」の前半部分において、室町時代物語の『大黒舞』がモチーフとして引用されているということなのである。さらに、大筋は『大黒舞』を踏まえつつ、それを逆手に取って皮肉を用い、元の「奇跡」から遠く離れて事実らしく描き、暴露話のように仕立てなおしている。

『大黒舞』では、この後にようやく恵比須大黒が登場する。おのおのが祝いの歌を舞うという場面で大黒が唱歌を歌い、前半が終了するのである。そして後半は恵比寿大黒が盗賊退治をする話へと展開してゆく。つまり、この物語が『大黒舞』と題される所以となった部分は、「才覚を笠に着る大黒」では利用されなかった。「大黒」に関連してくる話はあえて避け、清水観音の御利生のところだけを使っているのである。

「才覚を笠に着る大黒」後半では、『三人法師』『二人比丘尼』などでも知られる懺悔話のスタイルがとられる。東海寺門前で披露される乞食達の身上話は、悲喜こもごも泣き笑いの様相を呈し、そこで『長者教』のごとき商売法の手ほどきが語られる。ここではもはや『大黒舞』の影響は全くない。新六の成功譚の後半部分に別の話(長者教)を取り入れることで、前半の『大黒舞』の臭い

をまったく消し去ったのである。

その結果、独自の話を創り上げることに成功した作者は、本話のラストに『大黒舞』の唱歌の残りを使った。「八つ屋敷がたに出入、九つ小判の買置、十で丁ど治りたる御世に住る事の目出たし。」

三

以上「才覚を笠に着る大黒」の創作において、室町時代物語『大黒舞』が根底にあったことを述べてきた。その発想から創作にいたる過程を、再度ここでまとめておきたい。

本話冒頭と締め括りの文句は、唱歌『大黒舞』の引用とだけ説明されてきた。しかし実際には、創作の元となる物語を暗示していたのである。

『日本永代蔵』は大晦日から元旦にかけての話がそのほとんどを占めているが、室町時代物語『大黒舞』はその意味でも好都合の材料であったと考えられる。作者は物語『大黒舞』の設定をそのまま使い、親から服を着せ掛けられるのではなく、親に身ぐるみ剥がされる主人公に置き換えた。そして主人公新六を藁しべではなく、自己の「才覚」と「犯罪」で成功に導き、別の話型で話に変化を付けて「笠大黒屋」の話に仕立て直したのである。最終的には新六を長者とし、『大黒舞』上巻のラストと同じく、唱歌「大黒舞」で一話を完結させた（7）。しかしこの時には既に、作品は材料から乖離してしまっているので、室町時代物語『大黒舞』が読者の頭に蘇ることはない。

以上のことを勘案してみると、「才覚を笠に着る大黒」は、始めから種明かしされていたと考えられる。しかしこれまで室町時代物語『大黒舞』に行き着けなかったのは、冒頭の唱歌に惑わされたからである。唱歌そのものが、現代人を含めて広く知られていたために、冒頭の一文の説明で留まってしまった。室町時代物語『大黒舞』が、本話発想の段階で作者の頭にあったとすれば、「才覚を笠に着る大黒」の趣向、あるいは全体の構成が、うまく説明できるのである。

（1）　日本古典文学大系『西鶴集』下（野間光辰氏校注　昭和35年）の補注、「大黒屋」の項に詳しくまとめられている。これによれば、「本話に登場する新兵衛は大黒屋二代目の祖善兵衛で、新六は町人考見録に見える三代目九右衛門の兄弟の一人ではなかったか」と推定されている。『町人考見録』にある「善兵衛」は浄瑠璃にうつつをぬかして身代を潰した者として書かれるが、これについて日本思想大系59『近世町人思想』（中村幸彦氏校注　岩波書店　昭和50年）の補注では、『西鶴集』の注を引きながら「すればこの新六が、浄瑠璃の善兵衛にまた相当するか」という。

（2）　（1）に同じ。

（3）　『室町時代物語集』五（横山重校訂　井上書房　昭和37年）の解説お

よび日本古典文学大系『室町物語集』下（徳田和夫氏校注　平成４年４月）の脚注。

（４）本文は日本古典文学大系『室町物語集』（底本は国文学研究資料館蔵の近世前期写の絵巻）に拠った。

（５）日本古典文学全集『井原西鶴集』三（谷脇理史校注　小学館　昭和47年）の頭注参照。

（６）谷脇理史氏「『日本永代蔵』の一側面―隠蔽、曲筆、諷刺の方法」（『国語と国文学』67巻12号　平成２年12月）（近世文学研究叢書１『西鶴研究と批評』若草書房　平成７年５月　に再録）。

（７）『大黒舞』の諸本には唱歌が上巻の最後に位置しないものも存在する（蓮左文庫本、英勝寺蔵本など）。しかし、内容の順序からして唱歌は上巻の最後にあるべきものである。今西実氏「翻刻解題『大古久まい』」（『山邉道』第18号　昭和49年３月）でも、「解題に見られた「大悦物語」は、いわゆる大黒舞が巻末の結びに出てくることになっているが、掲出伝本（天理図書館蔵本、現蔵者不明本（国会図書館蔵本か））に徴しても、本来途中の二神遊宴の部分にあったものが、略本のため誤って巻末の大黒の舞に続けられたものと見たい。」と言われる。国文学研究資料館蔵本も、唱歌は上巻末（二神遊宴の部分）にある。

Ⅱ『本朝二十不孝』巻一の一「今の都も世は借物」

一

『本朝二十不孝』巻一の一「今の都も世は借物」の主人公は笹六という人物である。本話は二十四孝説話「庾黔婁」の話を素に不孝話として作り替えられたものといわれ（１）、父親の死を願う放蕩息子の話となっている。概要は次の通りである。

京の都には様々な職業があり、種々の道具を貸し出して金を取る商売も存在していた。借り手がいての商売だが、借物の中でも悪いものは金である。特にあくどいのは、親の命を担保にした「死一倍」なる不正な借金で、親不孝の第一であろう。

京には「悪所銀を借出す」借金仲介業といった商売まであって、人知れずそれで儲ける者もいた。名は長崎屋伝九郎、年中嘘をついて裕福になった男である。金の貸し手を探すだけの商売であるようだが、不正ゆえか金額ゆえか、一度に相当な手数料を得ている。その長崎屋に、二十六歳の笹六は「死一倍」の仲介を頼んだのである。

笹六にしてみれば、相続するはずの金を、相続する前に使おうと思ったにす

ぎないのかもしれない。甘い考えで一千両もの金を借り出すが、借金に伴う先払いの利息分や手数料、礼金などを取られ、手元には四百六十五両しか残らなかった。その残金も、集まってきた人々にせびられ、関係ないはずの金まで取られて全て無くなってしまうのである。

金が消えればとりまきも消えて、一人残された笹六は、神頼みに走って父の短命を願った。祈願叶って倒れた父を、待ちきれなくなった笹六は毒殺しようとする。孝行者を装って薬を噛み砕いてやる時、笹六は誤ってその毒薬を自分で飲んでしまい、悶絶して死ぬことになる。

最後の文は皮肉である。生き返った父が、その死因も知らずに息子の死を嘆いたと語っている。また金の貸し手は、「死一倍」が不正な取引であったために訴訟もできず、金が返却されなかったことを語っているのである。

このような筋書きをみていると、「今の都も世は借物」は悪者ばかりで悲惨な話のようにみえる。だが全体に滑稽みを帯びているせいか、そのブラックユーモアは読者を引きつけてやまない。特に作者の意図が垣間見えるのは、父の命の値踏みをする場面と、神仏祈願のところであろう。

二

無一文になった笹六は、「諸神諸仏をたゝきまはし、七日がうちに」と父親の短命を祈ることになるが、ここで笑いを誘うのが、多賀大明神への祈願である。このくだりについては、暉峻康隆氏が以下のように解説されている。

西鶴は、笹六をあわれな犠牲者として描こうとはしない。人におだてられて悪のりするどら息子として描かれる笹六は、むしろ滑稽感すら与える。とりわけ、「江州多賀大明神に参り、親の命を短く祈れど、何をか聞きしこの神は寿命神なれば、なほ長生きを恨み」といった描写は、笹六が必死であればあるほど、おかし味が生まれてくる。死一倍という社会悪ともいうべきものにふりまわされる笹六の姿は、あわれであると同時に、たえず滑稽感をともなっているのである（2）。

確かに、焦りだした笹六の行動は的がはずれていて可笑しい。寿命神に短命を祈るなど馬鹿なことに違いない。だが、意外にそれは、信仰の裏側を描いているようにも思える。

元来多賀大社は寿命の神として有名であったという（3）。この由緒正しい多賀大社に対して、西鶴はあまり良い書き方をしていない。例えば、『新可笑記』巻二の五「死出の旅行約束の馬」では、多賀の社の神酒や御供を盗む老人夫婦が登場する。夫婦は社人に捕らえられ、神前を汚したとして役人に引き渡されそうになった。夫婦はその際に、次のような申し開きをしたのである。

かたじけなくも当社は、命を守らせ給ふ神ならずや。此両人は家貧しく世をわたるべき舟もなく、老の浪立恥をすつる身に、何の病もなくて命のおはるかなしさに、しばしの程もおしまれ、きのふもくらしけふもまた御供に命をつなぐ

これを聞いた社人は、「今又此両人が命をとらば、寿命を守らせ給ふ大明神の威力うすし」といって、夫婦を無罪放免する。ところが、話が後半に入ると、この恩赦も空しく老夫婦は死んでしまうのである。それも知り合いとの約束を果たすことなく、十日も経たないうちに夫婦は「先後四日の中に相果られ」たという。

「死出の旅行約束の馬」の中心は、死人に対しても約束を守った「文武兼たる侍」の美談にあるが、前半に位置する多賀大社の話はなかなか興味深いものである。神酒御供がなくなったのを、社人は始め「是を奇瑞と神に威をましてさた」していた。それを多賀大社の禰宜自身が「正法に何かふしぎなし」と否定するのである。つまり、本当の宗教には不思議なご利益などないと言っているのである。一般の社人よりも、禰宜の方が現実的と言えるだろう。

また、老夫婦は、明神が寿命神であることを逆手にとって命乞いをし、社人は明神の威力が疑われるのを恐れて老夫婦を許すのである。

老夫婦が結局死んでしまうということも考え合わせると、始めに「古代より祈り伝へて、江州多賀の社は、寿命神と諸人あがめ奉りしに、諸願かなはざると云事なし」と大社を賛美していた作者の言葉が疑わしくなってくる。一体、当時の多賀大社に対する信仰はいかなるものだったのだろうか。

三

多賀大社に対する当時一般人のイメージを知るには、本書『本朝二十不孝』が刊行された貞享三年、あるいは貞享四年頃、多賀大社がどのような状況にあったかを考える必要がある。

多賀大社が神社であることは言うまでもないことだが、神仏習合の流れによって、当時領地内には不動院すなわち僧坊が建立されていた。『多賀信仰』によると、多賀大社の管理は、別当とされた天台宗の僧坊不動院によって行われていたという（4）。この管理体制は、神仏分離が行われる明治まで続けられおり、当然江戸中期においても不動院による支配はなされていた。

江戸時代、多賀大社の守護者は徳川幕府に代わり、領地高は将軍から安堵されるようになる。「徳川家綱朱印状写」（寛文五年七月十一日）は、当時の領地高を三百五十石であったと伝えている（5）。しかし実際には大社維持費に満たず、多賀大社は社領高の増加を幕府に訴訟した。結局その願いは成就されず、井伊直孝が「公方様少々御気色悪被為成御座候條、御神領御少分ニ而は、御祈祷も御勤難被成可有御座候間」として自領から不足分の百四十七石余を多賀大社に寄付したと「井伊直孝書状」（慶安四年四月八日）には記載されている（6）。

以上のことから類推するに、管理を任されていた不動院は、大社維持の責務に少なからず苦悩していたことが考えられる。

寛永十一年には多賀大社一大造営が行なわれたが、これは不動院五代別当慈性の努力に拠るものであった。慈性は造営費拝領の為に幾度も出府し、要路での請願を重ねたといわれている（「多賀大社造営願書並由緒口上書諸入用積立書」

文化八年六月）（7）。多賀大社の不動院管理時代における維持状況は、別当職に着任した人物の裁量に準拠していたともいえる。

このような大造営があったにも拘わらず、多賀大社の荒廃は早かった。慈性が没する寛文三年（一六六三）までの二十五年間の内に、すでに所々が破損。「観音院勧進帳」（明暦元年十一月十八日）は「無力修造。而已。降（風霜）侵壇、四壁頽廃、聖像破損　未如之何耳。」と伝え（8）、五十年余り経た元禄年間には、神社仏閣悉く大破に及んだという。先にあげた「多賀大社造営願書並由緒口上書諸入用積立書」も元禄十一年の大造営までに、多賀大社は荒廃しきっていたといっている。この時も九代別当によって嘆願がなされていた。

造営巳来、星移物換春去秋来故、神殿年々仁朽古、端籬日日仁破壊世利。故仁公寛愁之傷之中腸甚熱支。依之訴修補之事於東武告営作之願於有司。雖然政事繁多公勤匪一。故賜命令数愈年序。於于茲公寛猶盡粉骨凌厳冬候溽暑赴東帰西、委身盡心已六載、一日不安寝食矣（9）。

以上のように、五代慈性の後、慈純・慈秀・尊宏・光歓（公寛）と九代に至るまで、多賀大社は悲惨な様相を呈していたことがわかる。

四

これまで述べてきたことを考慮すると、貞享年間の多賀大社における状況が窺い知れる。すなわち、「今の都も世は借物」が執筆されたと考えられる貞享年間、多賀大社はその維持費に苦しみ、建物はほぼ朽ちかかっていた。多賀大社そのものの存在が危うい時期にほかならなかった。

元禄までに大破した理由は、ほとんど述べられていない。元文五年の由緒書きに、多賀大社の末社といわれた都恵神社の記載があり、これには「大風ノ時、社宇ヲ吹倒セシニヨリ、村中僅ニ神殿を構ヘタリシ故、コノ度再修復ハナラズ、建直ニナリシ故、間数昔ヨリ社宇縮マリケリ」と書かれている（10）。このような台風の影響なども考えられるが、その他では管理杜撰があげられる。

修復費用を拝領する為に奔走する別当がいた時はよい。しかし、大社の維持費はもとから不足気味であった。寛永年間の井伊直孝のごとく、惜しみなく援助する庇護者がいた時期はまだよかったが、寄付は常にあるものではない。その証拠に、延享三年の大破については同等の寄付を得られず、手当として「諸国勧化御免被下置」た程度であり、宝暦、明和、そして「御本宮神社・仏閣・御供米土蔵・自坊共悉ク類焼」したという安永二年の時でさえ、やはり諸国権化御免や富興行を許される程度に過ぎなかったのである（11）。多賀大社は、その時々において財政難に陥り、荒廃を止める手立てに苦心していたことがわかる。

このような多賀大社の財政を支えていたものが信者からの寄付である。有力者からの大口の寄付を基盤として、配札を行なう坊人からの収入や、それに伴う多賀講（寿命講）の講料なども維持費にまわされた。年三回の祭事は、地元の豪農などを「馬頭人」として一神事に奉仕させ、経費を請け負わせたのであ

る。この役は相当な負担になっていたらしく、馬頭人役の免除願い（「馬頭彦根魚屋町満太郎」「寛永十七年四月神事馬頭人覚」「萬治三年九月神事差定覚」等）や奉納金に関する訴訟（「貞享二年九月神事差定覚」等）などが数多く出されている（12）。こうした場合、奉行所が介入して有無を言わせず神事につかせることが多かった。

次に、収入源を支える「坊人」であるが、この「坊人」とは布教活動を行なっていた集団のことを指し、遠国へ旅して神札を配り歩いた者達をいう。その札を購入した他国の人間が多賀大社の信者となるのである。この「坊人」の役割については、『多賀信仰』で以下のように説明されている。

この「坊人」は熊野、伊勢神宮、石清水八幡宮、加茂神社、日吉神社などの諸大社に見られる「御師」と呼ばれる人達である。「御師」の概要を宮家準氏は「社寺に所属し、参詣者をその社寺に誘導し、祈祷、宿泊などの便宜をはかる宗教者をいう」と規定し、次に「御師は特定の信者（檀那と呼ぶ）と師檀関係を結び、その為に祈祷をし、巻数、守札、大麻などを配布し、その代償として、米銭の喜捨をうけた。」と解説していることから江戸時代坊人の活躍を示す当社の記録からも、「御師」も「坊人」も同一の性格のものであることがわかる。

そしてこのような坊人の誘導によって多賀大社参詣に出掛ける集団を「講」といった。これは延命祈願のために数名が金を出し合い、代表者が多賀大社に参詣することになっているもので、お布施を納める代わりに土産として札や御神酒などをもらって帰るのである。明和四年の「紀州那賀郡講参」には、その際に振る舞われた馳走等が詳記されている。これによると、初日夕方に祈祷が行なわれ、帰郷時に「御祈祷之札此時講親江渡ス。講親へ箱札其外へ寺札一枚供物一包宛ニ而遣」したと書かれている（13）。

講の仲間はその土産を分配され、延命が成就されることを祈った。こうした「寿命講」は寛永年間に活発化され、京都をはじめ近隣の国から全国へと広められたという（14）。

以上、貞享から元禄にかけての多賀大社についてまとめてみると、まず建造物そのものの建直しを必要としていたことがあげられ、次に寿命講によって信者の拡大を図っていたこと、またその「講」を経済的基盤としていたことが分かるのである。

こうした事情を西鶴が知っていたかどうかは定かでない。だが、江戸時代中期における神社仏閣の現状は、盲目的な信仰を妨げる要因になり得ることがわかる。それまで有り難がって拝んできた対象は、身近になった反面その実情を表したのだった。故に町人階級の信者は、神仏を信じてはいるものの、疑いも又含み持ってしまうのである。そのような信仰の変化が、作品に投影されているとすれば、本話「今の都も世は借物」の別の読み方も可能ではなかろうか。もとに戻って考えてみたい。

五

本話おいて不孝の核になる「死一倍」という借金とは、親の死後相続した財産で倍にして返済するというものである。したがって、借り手は後継ぎ息子か婿でなくてはならず、その親が五六年のうちに死ぬ確率の高い者でなければ金を借りることはできなかった。

貸し手は、当然、借り手の親の命を秤にかける。「今の都も世は借物」では、そのくだりが内容の残酷さに反して軽妙に描かれている。

此中も見ますれば、(親仁さまは)見世に御腰をかけられ、根芋をねぎり給ふ言葉つき。大風の朝、ちり行屋ね板を拾はせらるゝ心づかひ。あれならば、御養生残る所有まじ。まだ十年や十五年に灰よせはなるまじ。死一倍はかされまじき。

この「貸せない」という言葉に反応した笹六は、「外にしまふてやる思案も有」とまで言い、その場にいた数名の太鼓持ちさえも「時節を待ず、埒の明さしましやう御座る」と答えるのである。つまり、近年中に父親が死なないときは、計画的に殺人を犯すといっているのである。その話に納得した貸し手側は、「さもあらば、手形の下書き」と言って「死一倍」を承諾する。

ここに集まる人々は、笹六はじめ長崎屋伝九郎、貸し手の手代、幇間達のいずれも、笹六の父が早く死ぬことを願っている。彼らは金を出し合うために顔を突き合わせているのではない。親仁の死を下敷きにした、事後の利益を打算しているのである。

ここで多賀大社の寿命講を思い出してみてほしい。寿命講では、皆で延命を願って金を出し合い、代表者が参詣に赴いた。本話では、親仁の短命を皆で願い、有り金を取り合っている。いずれも「命」をかけた金のやりとりとなっており、それを一方では延命に、一方では短命に使っているのである。

すなわち本話は、寿命講の慣習を逆に進行する展開になっており、多賀大明神を信仰する者にとっては皮肉となる内容を含んでいるのである。表現上では従来どおり神を信奉しているようでいて、作品内容全体にはご利益に対する不信感のようなものがちりばめられている。それは作品創作の段階で作者の脳裏にあったものが、皮肉といった形で投影されたものだと考える。

（1）　佐竹昭広氏『絵入本朝二十不孝』（岩波書店　平成2年1月）
（2）　暉峻康隆氏　鑑賞日本古典文学『西鶴』（角川書店　昭和51年11月）解説。
（3）　『多賀信仰』（昭和61年9月、多賀大社社務所）
（4）　（3）に同じ。
（5）　『多賀大社叢書』第一巻文書編（昭和50年8月、多賀大社社務所）
（6）　（5）に同じ。

（7）（5）に同じ。「多賀大社造営願書並由緒口上諸入用積立書」には「多賀大社御造営之儀、寛永年中　公儀江御訴訟被申上候。御先代直孝様江尊勝院慈性大僧正御内願被申上候」とある。
（8）（5）に同じ。観音院住持定圓によるもの。
（9）（5）に同じ。「元禄十二年當社造営開始奉告祝詞」。
（10）『多賀大社叢書』記録編一（昭和53年2月）
（11）（5）に同じ。
（12）『多賀大社叢書』記録編一（昭和53年2月）・二（昭和53年10月）
（13）『多賀大社叢書』記録編三（昭和54年5月）
（14）（3）に同じ。

『日本永代蔵』巻二の三「才覚を笠に着る大黒」および『本朝二十不孝』巻一の一「今の都も世は借物」二題について述べてきた。ここで共通する点をまとめてみる。

「才覚を笠に着る大黒」については、その構成の根底に室町時代物語『大黒舞』があったことを述べた。『大黒舞』の内容は、冒頭の唱歌のみでなく前半部分の全体に活用されたのだと考える。

「今の都も世は借物」では、寿命講を短命講のごとく置き換え、皮肉をもって多賀大明神の信仰を取り入れたとした。

どちらも神を扱った話であるが、「大黒」にせよ「多賀大明神」にせよ、創作においては神を単なる材料として扱っているという点で一致している。ここでは従来信仰や伝承によって人々が崇めてきたものを、現実的な醒めた目で見ながら利用している。この二題からでもわかるように、西鶴は描く対象となる事柄を、既存の姿のままでは描かない。必ず別の視点で捉え直してから作品に取り込んでくる。西鶴の作品が独創性を持っているとするなら、こうした既存の事物を材料とみなす醒めた目を、一つの原因理由とすることができるのではなかろうか。

以上、第一章では雑話物・町人物の数話を取り上げ、西鶴の創作方法を見てきた。その方法の一つにあげられるのが、神仏・奇特・伝承等を現実のものに置き換えて語るという方法である。これを当世化といって説明するむきもある。もともと雅と俗を取り混ぜて遊ぶ談林俳諧をしてきた西鶴であるから、そうした発想の転換は、やはり創作でも遺憾なく発揮されたと思われる。

創作において、西鶴は既存の伝承などをある程度分かるように示しつつ、それを現代的または現実的な見方や考え方に転換する。それが「多分にはなしらしい小説（1）」とされた所以であろう。昔話のように軽い調子で話し始められたストーリーは、いつの間にか人間の現実を語っているのである。そうした部分が黒田侯をして「世上へ出し、使番、聞番、留守居の役にいゝつけ侍らば、

かゆき所へ手のとゞくやうにあらん人がら」（伊藤梅宇『見聞談叢』）といわしめたところだったのではないのか。

祈願する人に向かって「それは無理だ」と現実を語る神仏、奇特や伝承も実際目にするとこんなところではないかと思わせる描写など、信仰や精神の世界を現実的な醒めた目で見据える西鶴だからこそ、黒田候は使番や留守居の役にするといいかもしれぬといったのではないだろうか。

寺田寅彦は西鶴を唯物論的だといった（2）。科学者のような目をもっているとか、心理分析的だとかいうその評は、「それで本当のところはどうなのか」という部分を語ってみせる西鶴の創作方法に対する評なのである。

このような西鶴の方法は、『西鶴名残の友』ではどのように表れているのだろうか。西鶴の創作方法の一つを理解した上で、第二章では『名残の友』の成立と解釈について論じたいと思う。

（1）野間光辰氏「西鶴の方法」（初出「西鶴のはなし序説」『西鶴研究』1 西鶴学会　昭和17年6月、改題「西鶴の姿勢」『上方』昭和17年7月、「西鶴の方法」『西鶴新攷』筑摩書房　昭和21年2月15日、『西鶴新新攷』岩波書店　昭和56年8月24日　再録）および『刪補西鶴年譜考証』（中央公論社　昭和58年11月）。

（2）寺田寅彦氏「西鶴と科学」（初出『日本文学講座』第十五巻　改造社　昭和10年1月、『寺田寅彦全集』第五巻　岩波書店　昭和60年12月に再録）

第二章　『西鶴名残の友』　成立と解釈

『西鶴名残の友』は、北条団水の手によって刊行された西鶴最後の遺稿集である。西鶴没後七年にして、ようやく刊行された作品であるため、団水の補筆・出版事情・執筆時期・主題・咄本との関連等、作品成立に関わる問題が取り上げられてきた。よって従来の研究は、作品を総体的に捉えることに終始してきたのである。こうした状況に対して、「一篇一篇の作品に即した形での素材・典拠の探究、また、一篇における西鶴の手法等についての論究はやや手薄であるとの印象はぬぐいえない」との指摘もあった（1）。今後は各話に対する詳細な研究が求められることであろう。

こうした先行研究と指摘を踏まえて、第二章では『西鶴名残の友』の成立と各話の解釈について、私なりの考えを示したいと思う。第二章第一節では本作

の成立事情を、第二節では各話の解釈を論ずる。

（1）井上敏幸氏「『西鶴名残の友』管見」（『語文研究』第66・67号　平成1年6月

第一節　『西鶴名残の友』成立事情と諸問題

先に述べたとおり、『西鶴名残の友』の成立には多くの問題があるとされている。本作を論じる場合は成立事情が関わってくるため、各先行研究の主張を確認しておく必要があろう。成立に関する研究はおよそ以下のものがあるが、それぞれの立場をまとめ、研究と主張の推移を提示しておく。

1．片岡良一氏「遺稿といわゆる西鶴本」（初出『井原西鶴』至文堂　昭和1年3月、『片岡良一著作集第一巻』中央公論社　昭和54年8月再録）

片岡良一氏の捉え方は北条団水の序文を受けたものとなっている。『西鶴名残の友』は西鶴作であり、俳諧師としての随筆的な作品であったため、団水は「俳諧師西鶴を追憶するに相応しい遺稿」として保存し、没後七年の刊行となったと述べる。

2．山口剛氏『西鶴名作集』日本名著全集解説（日本名著全集刊行会　昭和4年）

山口剛氏の解説は非常に重要である。後の研究はこの解説を出発点として進められたといっても過言ではない。氏は、版下の筆跡から『西鶴名残の友』は西鶴作に疑いないとされた。さらに登場する俳人の逸話、俳号の記述や誤記は、西鶴自身の筆によるとする一因になるという。また、奇談的な題材も団水補筆とは考えられず、西鶴の他の作品と関わりのある挿話が見られること、冒頭と結びの構成方法は西鶴作品に通じること、売れ行きが見込めない内容だったため書肆が出版に消極的であった可能性があり、団水が擬作したとしてはあまりに報われない書であったことなどが指摘されている。そして刊行遅延の主な原因も、出版に躊躇した版元の事情によるとされている。

3．潁原退蔵氏「江戸文芸論考」（初出『国語国文』8―1　昭和13年1月）、「西鶴著作考」（『江戸文芸論考』昭和12年）、『潁原退蔵著作集』17　中央公論社　昭和55年5月　再録）、「日本文学書目解説　5」（『上方　江戸時代』（岩波講座日本文学　昭和7年9月、昭和8年4月）

潁原退蔵氏も団水の序文を信じてよいとされ、『名残の友』を西鶴作とし、団水による偽作を否定する。片岡氏と同様に、西鶴晩年の作であり、内容が随筆的であったために出版が遅れたと推測している。

4．野間光辰氏「西鶴の方法」（初出「西鶴のはなし序説」『西鶴研究』1　西鶴学会　昭和17年6月、改題「西鶴の姿勢」『上方』昭和17年7月、「西鶴の方法」『西鶴新攷』筑摩書房　昭和21年2月15日、『西鶴新新攷』岩波書店　昭和56年8月24日　再録）および『刪補西鶴年譜考証』（中央公論社　昭和58年11月）

野間光辰氏は『名残の友』を西鶴作として論じている。生前に一書として完成していた本書が没後七年経ってから刊行されたことへの疑問から、団水の補綴や擬作の疑いが生じるとする。だが、出版遅延には別の解釈もでき、西鶴の他の作品との比較論も西鶴作を否定する論拠にならないとして、『名残の友』を西鶴作としている。

『刪補西鶴年譜考証』においても同様に「虚と実を綯ひまぜた咄が西鶴持前の味であり、本書はそれを最も自然な姿勢の下に打寛いで、遺憾なく発揮した紛れもない西鶴の真作である」とある。また、総目録にある「西鶴名残の友　自筆」の文字は団水筆、総目録以下本文板下の筆跡は西鶴自筆とする。挿絵は素人臭いが西鶴でなく、団水あたりのすさびと推測している。

5．滝田貞治氏「西鶴遺稿集をめぐる諸問題」（『西鶴研究』2　西鶴学会　昭和17年12月）

滝田貞治氏は団水の序文を信じて疑わない。「目録の下に団水の筆で自筆と記されてゐる如く全部正真正銘の西鶴自筆である」とし、『名残の友』を「西鶴晩年の芸術並びに心境にうかゞふべき価値高い作品」と評している。

6．暉峻康隆氏「西鶴著作考　西鶴名残の友」（『西鶴　研究ノート』中央公論社　昭和28年5月）

暉峻康隆氏は、『名残の友』を自筆稿本と認め、『哥仙大坂俳諧師』『古今俳諧師手鑑』『古今俳諧女歌仙』などをあげて、西鶴が『名残の友』を書くべき必然性、または趣味性を持ち合わせていたとする。さらに成立年

代について言及し、西鵬号の使用時期と実在俳人に関する記述から、「『名残の友』の成稿の元禄四年中なることは動かぬところであろう」とされた。

暉峻氏は、『名残の友』の逸話には西鶴自身が登場する章が十五章あり、その逸話の事実性を指摘できるものも少なくないとして具体例を列挙している。しかし「多くの場合俳壇的事実と挿話とは故意にモンタージュされてゐる」と指摘。「事実とフィクションを巧みに組合わせ、嘘らしからぬ嘘によつて笑はせるといふ西鶴のこの方法は、出典が明らかでない場合でも、すこし注意して読めば誰しも気づくところであ」り、「明るく諧謔的な談林俳席の気分をそのまま、きはめて気楽に俳諧師としての多年の見聞を語つたのであらうが、身についた小説の方法が無意識のうちに働いて、このやうな戯作的随筆ができ上つたのであろう」と述べる。そして自筆稿本のまま保存されていた理由も、職業意識をはなれて気分本位に書き流した例外的作品だったからとされた。

7.

中村幸彦氏「西鶴がくだれる姿」（初出『日本古典鑑賞講座』第17巻　昭和32年7月10日、『中村幸彦著述集』第二巻　昭和57年6月再録）および「万の文反古の諸問題」（初出「萬の文反古の諸問題」慶應義塾大学国文学研究会『国文学論叢〈第一輯〉西鶴研究と資料』至文堂　昭和32年12月10日、『近世作家研究』三一書房　昭和36年5月25日、『中村幸彦著作集』第六巻　中央公論社　昭和57年9月　再録）

中村幸彦氏は「西鶴がくだれる姿」で『名残の友』巻三の四を取り上げ、巻三の四の芭蕉評を西鶴が書いたとするには若干疑いがあるとされている。

「万の文反古の諸問題」では、『万の文反古』擬作説に対する反論を書いており、その中で『西鶴名残の友』について言及している。西鶴の筆跡鑑定で『名残の友』との比較による方法も併用されたが、それは『名残の友』の総目録に団水による「西鶴自筆」の極め書があるからである。そして中村氏は「西鶴真筆類と比較して、その事（名残の友が西鶴自筆であること）はうたがいない」とされた。

だが、不審と思われるところもあるとしている。章末、丁のうつり、挿絵の前後に文字の大きさや間隔の不自然さがあり、他と字配が異なるという。さらに挿絵の不体裁などもあげて、「『名残の友』の原形原稿を作った人は、別にあり、その人は大部分は西鶴の原稿を用いながらも、所々に字配をかえ、伸縮を試みたのではなかろうか」という。

中村氏は疑念をはさむ余地のある部分として他者補筆部分と謄写部分を論文中に提示している。そして『名残の友』の剽窃が指摘されていた『丹波太郎物語』（正徳五年、江島其磧序、横本）との比較を行って次のように結論づけた。すなわち、「『名残の友』は自筆と称されるけれども、

若干他筆を混ずる」、「『名残の友』の西鶴に似て西鶴筆ならずと思われる所を書いた人が、『丹波太郎物語』の大部分を書いた人と同人である」というものである。

8．宗政五十緒氏「西鶴後期諸作品成立考」（初出「西鶴の後期諸作品の成立についての試考」龍谷大学国文学会『国文学論叢』第10輯　昭和37年12月、『西鶴の研究』未来社　昭和44年4月　再録）

宗政五十緒氏の論は『西鶴名残の友』が未完成作品であったという推測から始まる。理由は、①各巻の話数の不均整、②各巻の実丁数の不均整、③冒頭荒木田守武に呼応する末章の欠如、④没後刊行の作品がすべて未完成作であること、加えて⑤刊行の遅延（仮に⑤とする）をあげている。氏は『日本永代蔵』と『世間胸算用』の製作過程を例としてあげつつ、「同書（『名残の友』）は西鶴が主題―俳諧師の登場する滑稽譚―に沿うて少しずつ適当する話を集めていた製作中途の作品であると考えることが前掲の（①～⑤）の疑問をもっとも合理的に解決しうるのではあるまいか」という。その補注に、巻末の祝言的言辞は西鶴以外の者の手が入っている可能性が存するとも書く。

さらに完成稿を「六巻三十六話」と推測。「歌仙の数であり、俳諧師たちの逸話集に相応しい話数のはずである」と述べ、「西鶴は、俳諧の祖守武・宗鑑の讃仰を巻首に掲げ、彼の師にして、かつ、人をして「宗因なくんば我／／が俳諧今以貞徳の涎をねぶるべし、宗因は此道中興開山なり」（芭蕉）（『去来抄』修行教）といわしめた、宗因の追慕・賛美を巻尾に置いた、俳諧師たちの登場する、滑稽（それは談林俳諧における「俳諧」の意味でもある）譚の草子を作り、宗因十三年忌の追善の業とすべく予定していたのではなかろうか」とされた。よって西鶴が予定していた刊行時期を「元禄七年の春、宗因十三年忌のとし」と推測する。また、実際の刊行が遅延した理由については、中村幸彦氏の説をうけて、「一部を団水が補作し、整理された形態として刊行しようとして、自身の手元に、人目をさけて永く保存していたのであろう」としている。

宗政氏の論で注目しておきたいのは、具体的な成立過程への言及である。氏は初めから宗因追善を意図して作られたかどうかは断言できないといっており、「俳諧師の登場する滑稽譚」を作り集め、いくつか作成した時に「一応一つの草子の形態にしてお」き、「草子の形態になしつつあるうちに、西鶴はこの書に他の目的―宗因追善の意味を含む草子製作―を付加した」とされている。この考えは第二節の解釈に関わるので留意しておきたい。

宗政氏は自身で本論文の要約をされているが、その中で『名残の友』の成立に対する疑問を明確に列挙している。以下に参考として載せておく。

①　『名残の友』は完成作品であるのか。

②一巻に含まれた話数に凹凸があり、不均整であるのはなぜか。

③西鶴の浮世草子は多く、末尾を祝言的な言辞で結ぶか、冒頭に呼応するような言辞で結ぶかであるが、『名残の友』の巻末の祝言言辞は簡単すぎはしないだろうか。

④俳諧師の登場する作品であるのに、西山宗因が出現しないのはなぜであろうか。

⑤完成作品ならばもっともであるが、未完成作品であるとするならば、この書が単なる草稿ではなくて西鶴の手で浄書されていたのはなぜであるのか。

⑥話数の多いこの書の刊行が西鶴遺作の最後になったのはなぜであるのか。

⑦巻三の三章を示す章数が「一」となっているのはなぜか。

⑧巻三の七章を示す章数が「九」となっているのはなぜか。

⑨巻三の四章は話が中絶しているような感じがするが、私の思いすごしであるのか。

⑩巻三の三章の挿絵は見ひらき一丁分（七丁裏・八丁表）あるが、左の絵柄と右の絵柄とは連続しているというには抵抗を感じるが、これは私の思いすごしであるのか。（左右の絵柄の非連続的な感じは、巻一の一章の挿絵にも感じる。）

①②③④⑥は前記仮説（未完成作品説）で解決でき、⑤⑦⑧は刊本が製作過程での第一期成立本を整理編纂しなおしたものとすれば理解できるという。⑨は他章成立後に付加された章と考えられ、⑦⑧もこの付加に絡んだ結果であるとする。⑩も後の編纂者、出版者たちによる改変としている。

9．野間光辰氏監修天理図書館編『西鶴』（天理大学付属天理図書館　昭和40年4月、12月増補）

図版解説によれば、西鶴の自筆で西鶴の著作であることは疑う人もないが、版下の大部分が西鶴草稿の謄写であるとする。謄写が数名にわたるか、西鶴病中の老筆であったためか、様々な版面を呈するという。また、巻三の四「さりとてハ後悔坊」のみは筆跡および内容から西鶴作かどうか疑問とし、版下は『万の文反古』の版下を書いた人の筆と推測している。図版の例として、「西鶴筆によること明瞭なる版下の標本」、「西鶴の草稿を甚だ粗雑に謄写したと思はれる例」、「西鶴の筆意を忠実に傳へるさま」をあげる。跋文は団水の筆蹟とする。

10．若木太一氏「『西鶴名残の友』挿絵考」（『語文研究』28号　昭和45年5月）

若木太一氏は、『名残の友』の挿絵が『日本永代蔵』『男色大鑑』等、先行作品の挿絵を模写・模倣したものであることを実証している。また、挿絵師については「編纂に最も密に関与した人、団水のすさびではないかという野間氏の想像は自然であろう」とするが、団水自画の例が少ないため、憶測としかならないという。

11．島田勇雄氏「西鶴本のかなづかい―『西鶴名残の友』について―」（『神戸大学文学会　研究』47号　昭和46年1月）

島田勇雄氏の論は、『名残の友』の版下が西鶴自筆でないという予測から始まっている。イ音便・ワ行・ハ行等の仮名遣い、「の」の書体、「に」の書体を取り上げ、自筆とされる『西鶴諸国はなし』『近代艶隠者』『本朝桜陰比事』と比較。これら三作と『名残の友』の仮名遣いには相違するところがあり、特に字体では『名残の友』巻一の一が自筆でないと結論づけた。但し、そもそも自筆三作の中でも例外が存在していて使用率に動きがあり、彫師の巧拙や版木の状態など整版本の筆跡鑑定が困難であることも筆者は認めている。また、謄写に関しては未検討であるとして、決定的な結論には至っていない旨が述べられる。

12．乾裕幸氏「『西鶴名残の友』の芭蕉評」（『西鶴論叢』中央公論社　昭和50年9月30日）

乾裕幸氏は、『名残の友』に他作介入の可能性があるという中村幸彦氏の指摘をうけ、その最も疑わしい一章である巻三の四「さりとては後悔坊」を分析。一話の構成において芭蕉評の部分が不自然であるとし、芭蕉に対する好意的な所感から、団水の加筆と結論づけた。

13．市川通雄氏「『西鶴名残の友』をめぐって」（『文学研究』49号　日本文学研究会　昭和54年6月）

市川氏は、山口剛氏の説を踏襲し、企画や物語は西鶴自身の意図と筆になるものと推測する。団水によって編集されてはいるが、作品に対する西鶴の意図はそこなわれていないとし、「作品全体としての章立ては未完成であったが、現存の個々の物語は、西鶴によって書きあげられた状態にあった」とされた。だが、題材の不足と叙述面での不徹底さがあり、西鶴としても欠陥として認識されていただろうという。執筆時期については、遅くとも元禄四年中に書かれていたという暉峻康隆氏の説に従う。体力の衰えた西鶴が、元禄元年頃に自身の文学の源泉である俳諧の活動を復活させたことが、俳諧や俳人たちを題材とする『名残の友』著作へ向かわせたとする。

14・金井寅之助氏『『西鶴名残の友』の版下』（初出『近世文学資料類従　西鶴編　19　西鶴名残の友』勉誠社　昭和55年２月、『西鶴考　作品・書誌』八木書店　平成１年３月11日　再録）

金井寅之助氏は『名残の友』を西鶴の作品であると明言している。「たとへ資料を提供するものがあつても、完全に西鶴の作品に化してゐると思ふ」と述べ、団水は編纂のみを行い、作品そのものには手を加えていないとした。但し最終章末尾の言辞は団水の補筆とする。

『名残の友』に宗因が登場しないことと、門人の名が少なすぎることから、未完成の作品であったという宗政五十緒氏の説に賛同している。そして『名残の友』は同時代の俳人たちのゴシップ提供の作品であり、虚実とりまぜて有名無名の俳人に結びつけた噂話としたのであった。

俳諧師としての随筆であるとか晩年の心境を語るものという従来の見方から離れ、ゴシップ集という新たな捉え方が提供されたことになる。実はこうした捉え方は、『名残の友』の話を「俳席の座興として語られた雑談」（前掲『西鶴新新攷』）とした野間光辰氏や、「事実と挿話とは故意にモンタージュされてゐる」（前掲『西鶴研究ノート』）という暉峻康隆氏の捉え方に近い。「俳人の逸話や俳諧の興行にことよせた作り話で、大笑いしながら語られた」（野間）とか、「明るく諧謔的な談林俳席の気分をそのまま」（暉峻）語ったものという考えは、そのまま金井氏の「作られた噂話が俳人の性格や習癖を髣髴させる時、読者は拍手を送るであろう。その性格や習癖がわかれば、名残の友はもつと面白く読める筈である」という考え方と通じる。

金井氏は書誌学的考察を行い、中村幸彦氏の説に一部賛同しつつも、若干異なる見解を出している。『西鶴名残の友』の版下は、「西鶴自筆の草稿本を、忠実の度合ひはさま／＼ながら、謄写したもの」で、謄写はおよそ四筆に分類できるという。また、『丹波太郎物語』の版下も『名残の友』と類似した四筆に分類できることから、『丹波太郎物語』は西鶴自筆らしくみせるために『名残の友』の謄写者を雇ったのではないかと推測する。

さらに巻三の四「さりとては後悔坊」の一章を団水作とした乾裕幸氏の説にも言及し、西鶴と団水の俳諧観については賛同しつつも、一章全てを団水作とすることには疑問を呈している。ここは芭蕉の生得の脱俗を讃えたのであって、むしろ俳諧観などに捉われない西鶴のおおらかさを見るべきという。

次に句点の黒丸・白丸の混用を一覧にして提示している。句点は巻、章、謄写者などに関係なく混用されているという。西鶴の自筆版下本は大抵黒丸であって、『名残の友』の白丸黒丸混用は、版下筆者（謄写者）の不用意さと彫師の癖による不用意さによると推測。また、彫師はおよそ四

丁ずつ連続の分担だったと分析し、特に版面が醜い部分は粗雑な版下と拙劣な彫刻が結びついたせいともいっている。

『名残の友』の章番号の枠は四種類あるが、分類された筆跡に混在することから、版下筆者によるものでなく、もともと西鶴の原稿にあったものと見ている。ただしこれが何を意味するのか不明とした。

版心の文字は彫師によって書かれ、彫られたものという。また、句点の黒丸白丸によって版心の文字の形が変わると指摘。よって「句点の黒丸白丸は、彫師による所も大きいと見るべきであろう」とされた。さらに挿画のみ版心を異にする場合があることにも言及している。版心が彫師によるものとすると、彫師はおよそ七人。一人最高版木十二枚、最低二枚であるという。

以上のように、金井氏は『名残の友』の書誌を詳細に調査した。その結果、版下、章題の番号、版心等における乱れや句点の不統一、挿画の稚拙さなど、他の遺稿集にさえ見られないほど「出版の慌ただしさを思はしめる」という。そして何故団水はそのまま出版したのか、その出版状況は謎としている。

『西鶴名残の友』の版については、天理図書館編『西鶴』（前掲）の指摘をうけつつ、入木訂正の事実から四版あるとされた。すなわち、未発見の初版本、入木訂正された再版の「恨ハ」本、さらに「うらみお」と入木訂正された第三版、巻四「十六終」から「終」を削った第四版である。これらについては後掲の諸本書誌を参照されたい。

15．冨士昭雄氏「西鶴作品団水序作考」（初出『国語と国文学』57巻2号　昭和55年2月、日本文学研究大成『西鶴』国書刊行会　平成1年5月、『西鶴と仮名草子』笠間書院　平成24年に再録）

冨士昭雄氏は、助作者や「西鶴工房」の存在を否定してはいないが、『名残の友』には、やはり西鶴晩年の思想の反映が看取され、団水助作の余地は少ないように思える」とされる。

16．塩村耕氏「『西鶴名残の友』の芭蕉評について」（初出『国語と国文学』67巻3号　平成2年3月、『近世前期文学研究―伝記・書誌・出版―』若草書房　平成16年に再録）

塩村耕氏は『名残の友』を未完成原稿であったとみるが、巻五の六「入歯は花のむかし」以外は概ね西鶴作としてよいとしている。巻三の四「さりとては後悔坊」を再検討し、従来問題とされていた「只俳諧に思ひ入て心ざしふかし」という芭蕉評は、「そこだけを取り出して好意的な評と受け取るのではなく、むしろ皮肉を読み取るべき」と主張する。そして「その芭蕉評にこめられた皮肉を読み取るならば、構成の緊密、細

部の表現に配慮の行き届いた点、咄の巧みなる換骨奪胎、何れを取り上げても、これを西鶴以外の作家の補作とする根拠を見出すことは出来ないのである」と結論づけた。塩村氏の見解の特徴は、西鶴の俳諧観に蕉風俳諧を含めた連歌風俳諧への批判意識を見る点と、「俳諧に距離を置いた」晩年の西鶴が他の俳諧執心者に対して冷笑的であったとする点であろう。いわば時代の流れまたは俳壇の流れに取り残された敗者の遠吠えのようなものとして『名残の友』を捉えているところが注目される。

17．西島孜哉氏「『西鶴名残の友』論序説（『武庫川国文』40号　平成4年11月）、西島孜哉氏「『西鶴名残の友』の主題と位置（『武庫川国文』41号　平成5年3月、「『西鶴名残の友』論」と改題し、『西鶴　環境と営為に関する試論』勉誠社　平成10年に再録）。

西鶴筆の原稿はあったが、西鶴の意図（世のひとごころへの認識）が書肆に理解されず、書肆との意識の乖離が出版遅延を生んだ。その後、団水の努力で刊行に至ったとする。

以上、成立に関わる主な先行研究をあげ、その主張するところを確認した。『西鶴名残の友』の成立に関わる問題について、どのような意見主張があったか経緯をまとめてみたい。

まず、『名残の友』が西鶴作であるかという問題については、1の片岡良一氏以降、概ね西鶴作とすることで一致している。11の島田勇雄氏は、西鶴自筆の版下ではなく、仮名遣いも疑念があるとするが、西鶴作を否定するまでには至っていない。

次に、『名残の友』が完成作品であったかという問題だが、これは意見が分かれている。完成作品と一口にいっても、論それぞれの「完成」に段階があるからである。出版を目前にした完成稿があって、西鶴自ら版下を書いていたとするのは、1の片岡良一氏から6の暉峻康隆氏までである。これらは「西鶴自筆」という団水の極め書を信用しての見解であった。

7の中村幸彦氏以降は、西鶴自筆草稿を下地にしているが、版下は別人の手によるもので、一部内容に他者の補筆があるとする。8の宗政五十緒氏は、西鶴によって浄書されていた点を踏まえて一次完成稿があったとする。しかし作品そのものは未完成であったとし、一部を団水が補筆したという。9の野間光辰氏は版下の大部分が西鶴自筆草稿の謄写だという。また、巻三の四のみは他者による補筆の可能性があるとする。13の市川通雄氏は山口氏と同様西鶴の筆によるとするが、全体としては未完成とみている。14の金井寅之助氏は、未完成稿だが団水の補筆は最終章末尾の言辞のみとし、版下は西鶴自筆草稿の謄写とする。15の冨士昭雄氏は西鶴工房の存在を否定しないものの、団水による助作はないとする。17の西島孜哉氏は、団水の補筆は可能性として非常に少ない

とし、手が加わったのは極わずかという。版下の乱れは書肆の消極性がもたらしたもので、版下作成の杜撰さから生じたとする。

12の乾裕幸氏以降は、作品内容に踏み込んでの主張となっている。他者補筆の可能性が指摘された巻三の四の内容について、乾氏は団水の加筆、14の金井寅之助氏と16の塩村耕氏、17の西島孜哉氏は西鶴作としている。

挿絵は素人による付加という意見で一致しており、西鶴先行作品の挿絵を模写・模倣したとする10の若木太一氏の指摘にはほぼ異論がない。但し挿絵が誰の手によるかは推測の域を出ず、不明である。

補筆、または補作とされる部分は各論で異なる。11島田勇雄氏は巻一の一、7中村幸彦氏・8宗政五十緒氏・9野間光辰氏・12乾裕幸氏は巻三の四、16塩村耕氏は巻五の六を他者補筆とする。

第二節より『西鶴名残の友』の内容を論ずるにあたり、概ね金井寅之助氏の論に賛同した立場で解釈を進めたいと思う。つまり『名残の友』は西鶴作だが、未完成草稿であった。版下は西鶴草稿を他者が謄写したものである。団水は序文・目録・最終章末尾の言辞を補って刊行した。第二節では、このような立場をとるとした上で、各話を解釈していく。

以下、『西鶴名残の友』諸本の書誌を提示しておく。

【西鶴名残の友　諸本　書誌】

『西鶴名残の友』の諸本は多く伝存していない。入木等の存在から、現存する本よりさらに前の版が想定されている。それを仮に初版としている。

【再版本】

○英国ケンブリッジ大学所蔵本

この書誌情報は『西鶴名残の友』（近世文学資料類従　西鶴編19　勉誠社）の解題（金井寅之助著）を参考にした。

装丁　縦二六・四糎、横一七・七糎。
クロース装。表紙裏に「一九六九・三・三一」の印がある。遊紙一丁のあと版本が原装のまま続く。
以下は版本書誌。大本。和綴。五巻四冊を一冊に合綴す。

表紙　原表紙。紺色。縦二五・五糎、横一六・七糎。

題簽　左肩。四周双辺。
外枠（そとのり）　縦一六・六糎、横三・九糎。
内枠（角書）　縦一・九糎、横三・三糎。
内枠（書名）　縦一四・〇五糎、三・三五糎。

左上角、破損。

外題　「絵入　西鶴なこりの友　四　五終」。但し、「四　五終」を墨で×印をつけ「合　全」と墨書する。一冊に合綴する際に、第四冊の題簽を使用。

内題　巻一の総目録の初めに「西鶴名残の友　自筆」

尾題　なし。

版心　「友一（〜五）丁数」

丁数　巻一　十二丁
巻二　十三丁
巻三　十五丁
巻四　十二丁
巻五　十丁

挿絵　巻一　三図四面（内一は見開き）
巻二　三図六面（全て見開き）
巻三　四図六面（内二は見開き）
巻四　三図五面（内二は見開き）
巻五　二図二面

匡郭　四周単辺。
巻一序丁表　縦一七・六糎、横一三・五五糎。
巻五「二十一終」裏　縦一七・七糎、横一三・四糎。

序　「浪速滑稽林團水散人序　元平」年記なし。

刊記　「元禄十二巳卯歳首夏吉辰　浪花書林　開板」。

印記　巻一序丁表に、「英国　薩道文庫」「待賈堂」「菊之屋」「小八」。他に三印あるが、写真淡く、或いは墨にて抹消して不明。淡いものはアストンの蔵書印なりという。
巻二、三、四の各巻「一」表の書脳に、「菊之屋」及び、墨にて抹消した二印あり。

識語　巻一　「一」表上欄に、横書にて、ペン書「FJ754.2」、その下に、鉛筆にて「Saikaku nagori no tomo」とあり。
巻一　「二」表下欄、巻三「四」表上欄に落書あり。

○国立国会図書館支部東洋文庫蔵岩崎文庫本

再版本とされるもののうち日本国内にあり、かつ五巻全てを備えるものは本書のみである。書誌は原本および『岩崎文庫貴重本叢刊・浮世草子編』を参考にした。

装丁　大本。袋綴。五巻四冊を一冊に合綴す。

表紙　枯葉色原表紙。縦二五・七糎、横一七・二糎。
題簽　左肩。四周双辺。
外枠、縦一六・六糎、横一三・九糎。内枠、縦一六糎、横三・二糎。
外題　「絵入　西鶴名残の友（全）（一ヨリ五迄）」
（「全」は一、二、三のいづれかの文字に墨を加へて「全」と改めたものか。「一ヨリ五迄」は墨書）
内題　「西鶴名残の友」
匡郭　巻一　序「一」表　縦一七・五糎、横一三・五糎。
同裏　縦一七・六糎、横一三・二糎。
本文冒頭「四」表　縦一七・八糎、横一三・三糎。
巻二　本文　「一」表　縦一七・六糎、横一三・三糎。
同裏　縦一七・九糎、横一三・三糎。
巻三　本文　「一」表　縦一七・九糎、横一三・三糎。
同裏　縦一七・九糎、横一三・四糎。
巻四　本文　「一」表　縦一七・六糎、横一三・五糎。
同裏　縦一七・六糎、横一三・五糎。
巻五　本文　「一」表　縦一七・九糎、横一三・三糎。
同裏　縦一七・九糎、横一三・四糎。
丁数　巻一　十二丁
巻二　十三丁
巻三　十五丁
巻四　十二丁
巻五　十丁
挿絵　巻一　三図四面（内一は見開き）
巻二　三図六面（全て見開き）
巻三　四図六面（内二は見開き）
巻四　三図五面（内二は見開き）
巻五　二図二面
版心　「友一（〜五）丁数」
序　「浪速滑稽林團水散人序　元平」年記なし。
刊記　「元禄十二巳卯歳首夏吉辰　浪花書林　開板」。
織語　表紙右上、墨書「大珍書」
備考　巻二「二」裏「三」表の挿絵人物に落書がある。
用紙が薄いため、文字不明の個所がある。

【三版本】

○古典文庫吉田幸一氏旧蔵本

古典文庫および笠間書院から出されている影印本は、虫損部・文字の欠損部分等から判断して、巻一・二は東洋文庫本を用い、巻三・巻四・五は吉田幸一氏旧蔵本を用いたと考えられる。吉田幸一氏旧蔵本は、第四冊が題簽のある一冊として、元の姿をとどめている唯一の本である。縦二五・六糎、横一七・三糎。吉田幸一氏旧蔵本の書誌は、東洋大学図書館蔵古典文庫旧蔵書目録を参照した。東洋大学図書館に所蔵される『西鶴名残の友』は、巻三と巻四・五の二冊である。なお、国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースは吉田幸一氏本を初版としている。

装丁　大本　縦二五・六糎、横一七・三糎。
巻三　一冊、巻四・五　合一冊の計二冊。
表紙　鶯鳥無地表紙
題簽　（巻三）
後題簽（原題簽を透写したもの）「絵入　西鶴名残の友」
岩崎文庫本の題簽（巻三か）を透写し、巻数を書き足したもののようである。
或いは、他に巻一の題簽が存在し、それを透写したが、その後失われたのか。現存本に該当するものはない。
（巻四・五）
左肩。子持枠題簽　縦一六・五糎、横三・九糎
「絵入　西鶴なこりの友　四五　終」
匡郭　四周単辺。縦一七・八糎、横一三・一糎　一面一一行
丁数　（巻三）　一五丁
（巻四・五）　二二丁
挿絵　（巻三）　見開き二図、片面二図
（巻四・五）　見開き二図、片面三図
版心　「友」

○古典文庫本（昭和33年4月25日刊）
挿絵中、巻三「四」表、同巻「十八」裏、「十九終」表には落書がある。
○『影印本西鶴名残の友』（笠間書院　昭和46年4月刊）
第四冊の表紙は、古典文庫本同様、吉田幸一氏本の写真である。
底本には、破損した部分を墨書にて補写した箇所が若干ある。
巻四「一」表十行目「酒にみだれてのこ」
同十一行目「してすこし浦山敷心に」
巻四「二」表九行目「又古室の独」
同十行目「小皷うたせて井」
同十一行目「筒の曲舞うたハるゝハ。是又いたりせんさく彼是見る」

○天理大学附属天理図書館本

装丁　大本。袋綴。五巻四冊を一冊に合綴す。

表紙　替表紙。雲母泥円形花紋白表紙。縦二四・八糎、横一六・八糎。

題簽　原題簽。左肩。第四冊の題簽を貼り、題下の「四　五終」の部分を白く消した跡がある。四周双辺。

外枠、縦一六・五糎、横三・八糎。内枠、縦一六糎、横三・三糎。

外題　「絵入西鶴なこりの友　四五終」

内題　「西鶴名残の友」

版心　「友一（～五）丁数」

匡郭　巻一　序「一」表　縦一七・五糎、横一三・四糎。

同裏　縦一七・六糎、横一三・一糎。

本文「四」表　縦一七・九糎、横一三・三糎。

巻二　本文「一」表　縦一七・七糎、横一三・四糎。

同裏　縦一七・七糎、横一三・四糎。

巻三　本文「一」表　縦一七・八糎、横一三・三糎。

同裏　縦一七・八糎、横一三・四糎。

巻四　本文「一」表　縦一七・五糎、横一三・三糎。

同裏　縦一七・六糎、横一三・三糎。

巻五　本文「一」表　縦一七・九糎、横一三・三糎。

同裏　縦一七・九糎、横一三・四糎。

丁数　巻一　十二丁

巻二　十三丁

巻三　十五丁

巻四　十二丁

巻五　十丁

挿絵　巻一　三図四面（内一は見開き）

巻二　三図六面（全て見開き）

巻三　四図六面（内二は見開き）

巻四　三図五面（内二は見開き）

巻五　二図二面

序　「浪速滑稽林團水散人序　元平」年記なし。

刊記　「元禄十二巳卯歳首夏吉辰　浪花書林　開板」。

印記　序「一」表上欄に「兎角庵」。目録「三」裏左下隅に「中しま／とうふや」。その他、巻一「四」表、巻五「十（二十一）」裏左上に同じく「中しま／とうふや」。

識語　表紙の右肩に墨書「ツ」。巻四「十六」表挿絵の船上の人物で、前から一、四、五人目の頭部に落書あり。巻五「二」表挿絵の右側人物の頭部の髪及び二つの枕は落書。同巻五「十九」表挿絵の中央以外の人物の頭部及び姥の眼に落書あり。

備考　用紙、繊維は固いが薄い。薄いために文字の欠けた所あり。菓園文庫蔵書目録も参照した。

【四版本】

○正宗文庫本

本書の書誌は、金井寅之助氏の報告を参考にした。

装丁　大本。袋綴。巻四巻五合綴の一冊のみ。替綴糸。

表紙　淡墨色原表紙。裏表紙は表皮を欠く。縦二五・五糎、横一七糎。

題簽　なし。

外題　左肩。墨「名残の友　四・五」

版心　巻四「十六終」の「終」なし。

匡郭　巻四「一」表　縦一七・四糎、横一三・三糎。
　　巻五「一」表　縦一七・八糎、横一三・三糎。
　　同巻「二十一終」裏　縦一七・六糎、横一三・四糎。

印記　巻四「一」表右下隅に「正宗文庫」

識語　裏表紙見返しに、同筆にて、「此本又かし無用事」「佐敷上町　東□（不明）井や」「此本かしうしなう無事」

備考　下部の書脳より本文にかけて虫損あり。刷りよし。但し、巻四ノ一「小野の炭かしらも消時」以外の挿絵に、すべて落書あり。他にも墨にて落書多し。

以上、『西鶴名残の友』諸本の書誌を提示したが、ここで各版の違いを述べておく。現存本のうち、ケンブリッジ大学所蔵本、国立国会図書館支部東洋文庫蔵本を再版本とし、初版が他にあったと想定しているのは、再版本に入木訂正と見られる部分が存在するからである。巻三の四丁柱の左右に匡郭の割れ目があり、柱の幅も他と比べてひどく狭くなっている。これは巻三の二の題「元旦の機嫌直し」を入木したためと考えられている。また、巻二の十八丁表、六行目「馬」の後に版木を削ったとおぼしき空白があり、巻四の五ノ九丁裏、五行目「いき」も入木されている。これらの訂正が入る以前の本を仮に初版として想定しているのである（1）。

再版本の巻三の十六丁表、八行目に「恨ハ」とあるところを、入木訂正して「うらみお」とするのが三版本である。四版本は、巻四の十六丁柱にある「十

六終」の「終」を削って「十六」としているもので、現在は正宗文庫所蔵の、巻四巻五合綴の零本一冊だけが確認されている。四版本は問題の巻三が存在しないため、「恨ハ」「うらみお」のいずれの本文であったかは分からない。

版次をまとめておくと、再版本以前の版を仮に初版とし、巻三に「恨ハ」とある本を再版、巻三に「うらみお」とある本を三版、巻四に「十六丁」とある本を四版としているわけである。

これら諸本で注目される点は、入木訂正が巻三に集中していることである。三版本の巻三には「うらみお」以外に次のような訂正がある。

十四丁の丁付け―「廿四」を「十四」に訂正。
十七丁の丁付け―「十三」を「十七」に訂正。
十九丁の丁付け―「十九」を「十九終」と訂正。
十六丁表五行目―「ふみばづし」を「ふみはづし」に訂正。
十六丁表十一行目「ぬけ」を一部修正。
十六丁裏五行目「執行」を一部修正。
十六丁裏九行目―「漢」を「渓」に訂正。

このように、巻三に訂正が多く見られることは、本書の成立を考える上で注意すべき点であり、各話の内容と合わせて論じられる必要があろう。

（1）　金井寅之助氏「『西鶴名残の友』の版下」（初出『近世文学資料類従西鶴編19　西鶴名残の友』勉誠社　昭和55年2月）（『西鶴考　作品・書誌』八木書店　平成1年3月11日に再録）

第二節　『西鶴名残の友』各話解釈

第二章の冒頭で述べたとおり、昭和から平成初期まで、『西鶴名残の友』研究の主流は成立論であった。一話の解釈を扱ったものとしては、岡雅彦氏（1）や吉江久弥氏（2）の論考があったものの、それ以外は典拠の指摘にとどまっていた。平成元年に井上敏幸氏による新日本文学大系注釈が出されて以降は、徐々に解釈論が増えて、現在では一話一話の分析を積み重ねる方向へと移行している。版面の乱れ多い遺稿集であり、西鶴の他の作品と比較して差があるとされたために、浮世草子としては低評価であったが、短い文章の中にまとめられた逸話は、作家の力量を大いに感じさせるものが多い。それゆえ、再度細かな検討をし、評価を試みる動きが出てきているのである。

本作の各話は、ある人物・事物を契機として語り出され、しつこさのない軽

い笑いでもって終わるように仕組まれている。しかしながら、その鮮やかな手法を私たちは未だ全て理解しえていない。そこで、文意をとることから始めて、いくつか気づいた点をあげつつ、各話の再検討を試みた。本作の眼目は笑話であるという視点に立ち、話の構造を勘案しながら、どこに面白さがあるかを論ずる。

（1）　岡雅彦氏「西鶴名残の友と咄本」（『近世文芸』22　昭和48年7月）
（2）　吉江久弥氏「西鶴の芸道観―『名残之友』を中心に」（『西鶴論叢』中央公論社　昭和50年9月、『西鶴　人ごころの文学』和泉書院　昭和63年5月に再録）。「西鶴名残之友二題」（仏教大学通信教育部『鷹陵』№62　昭和50年6月・8月、『西鶴　人ごころの文学』和泉書院　昭和63年5月に再録）

〔注〕頻出する以下の書籍・論文類は略称で表記する。

○「西鶴の方法」
野間光辰氏「西鶴の方法」（初出「西鶴のはなし序説」『西鶴研究』1西鶴学会　昭和17年6月、改題「西鶴の姿勢」『上方』昭和17年7月、「西鶴の方法」『西鶴新攷』筑摩書房　昭和21年2月15日、『西鶴新新攷』岩波書店　昭和56年8月24日に再録）

○「岡氏」
岡雅彦氏「西鶴名残の友と咄本」（『近世文芸』22　昭和48年7月）

○『対訳』
麻生磯次氏・冨士昭雄氏『対訳西鶴全集16　西鶴俗つれ／＼・西鶴名残の友』明治書院　昭和52年）

○『新大系』
井上敏幸氏『武道伝来記・西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友』（新日本古典文学大系77　岩波書店　平成1年）

○「長谷氏」
長谷あゆす氏『『西鶴名残の友』研究　西鶴の構想力』清文堂　平成19年9月）

◆『西鶴名残の友』**序文**

団水による『西鶴名残の友』序文は、以下の通りである。

洛陽を去て七年、浪花西鶴が草庵を守る雨の夜、跡は消せぬかたみの反古のうちより、一書を探り得たり。諸国の雑譚、例の狂言をしるせり。みづから筆を染ぬれば、故人にあふこゝろばせして、函底に籠置、折ふしごと

の寝覚の友とす。これを伝聞、書林某来て、強て求めけるにまかせて。梓に行ふと也。

この序文の内容は、京都を去って七年間、浪花西鶴の草庵を守っていたある雨の夜、古歌に「誰か世にながらへてみんかきとめし跡は消せぬ形見なれども」（紫式部　新古今集　八）と詠まれるように、西鶴が書き留めて跡が消えずに残った形見の反古の中から、一書を探し出した。諸国の雑談、例の狂言を記したものである。西鶴自身が筆を染めたものなので、故人に逢うような気持ちがして、箱の底に入れておき、折々の寝覚めの友とした。これを聞き伝えて、本屋の某が訪ねて来て、強いてこれを求めるのにまかせ、出版することにしたのである、といったものである。

「洛陽を去て七年」とあるので、団水が京都から大坂へ移転してきた時期は、『名残の友』が刊行された元禄十二年四月から逆算して、元禄六年中と考えられていた。さらに李梅撰『俳諧いふもの』（元禄十五年刊推定）の団水跋

魚千里罔極ノ恩ヲ酬ン為ニ、難波西鶴ガ故庵ヲ守ルコト七年ニシテ帰り来テ、フタヽビ洛ノ高倉ニ藜杖ヲ掛テ蝸室ニ屈伸スルコト二歳也。

の記述により、西鶴の没後間もなく、つまり元禄六年八月からそれほど時を経ずに団水は大坂へ移転したと考えられていたのである。

これに対し、野間光辰氏は『俳諧童子教』巻中所収、順水・団水両吟歌仙の前書を以て、団水大坂移居は元禄七年のことと改められたのであった（1）。現在では野間氏の説が定説となっている。

『俳諧童子教』の刊年は、住吉大社蔵本でのみ確認が取れるもので、

奉納俳諧童子教一部一冊

元禄七年甲戌霜月朔日

紀州若山本三町目　嶋孫八衛門尉重幸　順水撰之

となっており、確かに元禄七年の刊行である（2）。そして順水・団水両吟歌仙には次のようにある。

北条団水入道京にかりねせし夕、枕をならべて風雅をうたふ。今年居を移して難波の俳林西鶴庵に移るを訪ふ。此亭須磨明石を眼下に引よせ涼しさは武庫の颪を受たり。或日尋て一ねいりす。

涼風も過れば毒か昼枕　　順水

汗穢足にてお皃踏ム蝿　　団水

右左烏帽子の掛緒紫に　　同

南隣は律を吹なり　　順

野間氏はこの前書を、「今年（元禄七年に団水が）居を移して、難波の俳林西鶴庵に移るのを、（順水が）訪ねた。」と解釈している。つまり読点は「今年居を移して、難波の俳林西鶴庵に移るを訪ふ」となるわけである。また、元禄七年六月刊の『熊野がらす』に載る団水の肩書きが「大坂」となっていることも勘案して、元禄七年春頃に移転したと推定されたのだった。

この『俳諧童子教』の前書きであるが、読点を移動することで別の読み方も可能なのではないだろうか。「今年、居を移して難波の俳林西鶴庵に移るを、訪

ふ」とした場合、解釈は「今年（元禄七年）、移転して難波の俳林西鶴庵に移った（団水）を、（順水）が尋ねた。」となる。つまり「今年」は「訪ふ」に掛かると考えるのである。こう解釈した場合、団水は元禄七年以前に大坂へ移転しており、そこへ順水が訪ねたということになる。

このような解釈の違いは『西鶴俗つれ／＼』の団水序でもあった。

花の春もみぢの秋去て、さだめなき時雨月のはじめ、此俗つれ／＼をながきかたみにして、松寿西鶴のかぎりある今はの時、とりまぎれたるさうしの中より、この比見さらえて、書林何某にゆづる。

この一節を引用し、藤村作氏が「西鶴は十月の初めに没したのではないか」という疑問を提示された際に、野間氏は次のごとく否定されたのであった。

冒頭の「花の春もみぢの秋去て、さだめなき時雨月のはじめ」は、「この比見さらえて、書林何某にゆづる」に続くもので、西鶴の没後几辺の堆積混雑の中から、遺稿『俗つれ／＼』を見出して書林八尾甚左衛門に与えたのが、即ち「時雨月のはじめ」であって、その顛末を叙して序文を認めたのが「元禄八亥龍正月のはじめ」であったのである（3）。

これもまた、冒頭の時を表す語が文中のどこに掛かるかによって、解釈が異なってしまった一例である。

話を『名残の友』にもどすと、もし「今年」が「訪ふ」に掛かるとすれば、団水は元禄六年中に西鶴庵へ移っていたことになり、遺稿集序文の団水号も、そのまま矛盾なく理解できることになる。試みに、遺稿集にみえる団水の表記を列挙してみる。

『西鶴置土産』（元禄六年冬刊）団水序

難波俳林西鶴菴　団水　松寿　平元

『西鶴織留』（元禄七年三月刊）団水序

難波俳林　団水誌　滑稽堂主

『西鶴俗つれ／＼』（元禄八年正月刊）団水叙

正月のはじめ筆を

浪花俳諧堂西鶴菴　団水撮　松寿　平元

『西鶴名残の友』団水序

浪速滑稽林　団水散人序　平元

『万の文反古』に団水序が付されていないのは気になるところであるが、元禄六年に刊行された『置土産』と、元禄七年以降刊行の『織留』『俗つれ／＼』の号に、違いは見られない。団水が元禄六年冬の時点で「難波俳林西鶴菴」と記したことは、やはりその時より西鶴庵に留まっていたと考えても良いのではなかろうか。おそらく京と大坂での生活が重複していた時期もあったであろう。それ故に、団水の大坂移転を元禄七年と断定することもまた難しいのである。

さらに、『俳諧童子教』の問題の条に、移転祝いの雰囲気がないことも、疑問を払拭しきれない理由の一つである。

『西鶴名残の友』刊行は元禄十二年四月である。西鶴が没した元禄六年より数えて七年が経っていた。巻末予告の『筆蔵』がその後どうなったかは不明であるが、一応遺稿は全て整理刊行されたのであろう。翌元禄十三年に、団水は京へと帰っていったのである。

以上、『名残の友』序文に関わる団水の大坂移転の時期であるが、元禄六年中であった可能性は未だ残されていると考える。

（1）『西鶴年譜考証』元禄七年「春、京都北条団水大阪に移つて西鶴の旧廬を守り、自ら二代西鶴と称す。」天理図書館蔵綿屋文庫の『いふもの』は昭和の写本である。いずれにせよ俳書の記述によって、移居の年代を断定することは困難であろう。

（2）『俳諧童子教』は住吉大社蔵本を使用した。

（3）『西鶴年譜考証』元禄六年「八月十日、西鶴難波に没す。享年五十二歳、法名仙皓西鶴。八丁目寺町誓願寺に葬る。」で述べられた一節。野間氏は「八月十日死去の事実は、あらゆる点からいって、もはや疑ふべくもないのである」と断定された。

◆巻一の一「美女に摺子木」

巻一の一は、俳諧の祖ともいうべき荒木田守武の紹介から始まる。まず内容を確認していく。

伊勢山田の荒木田守武は初めて俳諧の本式を立てた人で、それより代々の作者は俳諧をよく理解するようになった。それまでは百韻を続けるということもなく、即興の詠み捨てと変わりなかったが、そのような時代に守武は千句を出したので、並ぶもののない作者である。それで守武と宗鑑を俳諧の父母ともいうのである。俳諧も和歌の一体であるから、神国伊勢にふさわしく、それゆえ伊勢山田は後世まで俳諧作者の絶えない所なのである。その後、女では珍しく有名になった光貞の妻という俳諧師が現れた。俳諧もかりそめでなく、歌書の講釈までする彼女は、伊勢や小町のように昔の人ではなく目前に存在する人であったから、万人がもてはやしたのだった。

ここまでが前半である。守武から伊勢山田を出し、伊勢山田のつながりで光貞妻を紹介した内容となっている。この光貞妻が後半の要素となる。

伊勢にほど近い伊賀上野に、正道という七十余歳の俳諧師がいた。俳諧に

執心し、特に光貞妻に憧れて、夢でもよいから一目見たいと切望するあまり、彼女の自筆短冊を肌身離さず身につけて、始終その発句を口ずさんでいた。ある時、自分が次の世に生まれ変わったら、こんな歌道に心ざしの深い女になりたいものだと思い込みながらうたた寝をした。

里帰りから帰ってきた正道の妻が奥座敷へ行くと、朝顔の模様の蚊帳の中に紅の布団を敷き、房付きの枕に髪をかけて眠る四十程の女がいた。嫉妬した妻が摺子木を振り上げつつ近寄ると、正道が妻の悪口を言っている。怒った妻が打ちかかると、正道の夢がさめ、美女と見えた姿は消えてしまった。妻が次第を語ったところ、正道も隠さず「俳道より思入ての女すがたならん」と話した。

『対訳』は、類似の話として『新可笑記』巻四の二「歌の姿の美女二人」を指摘している。『新大系』は、強い願望が就寝中の夢に現れ、それを他人に見られるという型の説話は、他に『二代男（諸艶大鑑）』巻四の二、『世間胸算用』巻三の三があるとする。

『二代男（諸艶大鑑）』は葡萄を食べたいと思いつつ寝た女郎が鼠となったはなしで、『胸算用』は金が欲しいと思って寝た男の姿が金の塊に見えたというものである。いずれも切望するものに姿が変わるという点が類似し、美女との関わりはない。美女が登場するのは『新可笑記』巻四の二であるので、『名残の友』巻一の一と比較してみる。

出雲大社の神主が和歌に執心し、特に歌人の伊勢・小町に憧れて病気になってしまう。その彼のもとに伊勢・小町の面影が立ち現れるようになる。勇敢な別の神主が半弓で面影を射たところ、面影は消えて草花だけが残っていた。うたた寝をしていた病気の神主を起こしてみると、彼も既に死んでしまっていた。

和歌と俳諧の違いはあるが、執心によって女の姿が現れるという展開の仕方は非常に似ている。ただし話の設定には落差がある。『新可笑記』は奇談としての側面を濃厚に残しているからである。遥か昔の女流歌人に憧れた神主は、けがれた現世を厭い、あの世で伊勢・小町に会うことを願って病となる。彼はすでに生きる気力がないわけで、そこに幽霊のごとく伊勢・小町の面影が出現した。神主の姿が女として現れたのでないことは挿絵を見れば明らかだろう（1）。神主にこの伊勢・小町の姿が見えていたかどうかだが、挿絵をみる限り、神主には見えていなかったようだ。目前に美女がいるにも拘わらず、下を向いているからである（図　参照）。会いたいと願う神主には見えず、家の者には見えている。とすれば、神主自身の魂または執心が伊勢・小町の姿として現れたとも解釈できる。ゆえに弓で射られた魂は消えて、神主もやはり死んでしまうのである。「美女に摺小木」との違いは、伊勢・小町が遥か昔の人だということと、面影を具現した男が出雲大社の神主という存在だったということ、男の姿が女に

変わったのではないということである。

「美女に摺小木」の方は、同時代人の「光貞が妻」が憧れの対象であり、憧れた男も伊賀上野の正道という老人に設定されている。俳壇ではほとんど無名の正道という男を登場させることにより、卑近ながらもリアリティのある設定になっているのである。正道は七十余歳という年齢で光貞妻に憧れ、光貞妻の自筆短冊を秘蔵する。その姿は現代の芸能人に対するファンのようなもので、どこか笑いを誘う。「いかなる艶形にもありつらん」といって光貞妻の容姿を夢想しているのは、美人だとの噂でも聞いたせいだろうか。

不思議なのは、正道が「我又の世にうまれ替り、かゝる哥道に心ざしの深き女になれかし／＼」と言う部分である。つまり、光貞妻のような女に生まれ変わりたいと願っている。通常なら光貞妻に親しみたいと願うはずではなかろうか。正道は独り言の中でも、自分の妻が俳諧に通じていたらよいのにと嘆いているから、本来ならば光貞妻のような女と馴染みたいとするのが普通の、流れであろう。このような疑問から、『新大系』はこの部分を「「なれよかしなれよかし」の「よ」が落ちた表現」とし、「慣れ親しみたい、なじみになりたいの意」と解釈しているのである。だが、正道の妻が目撃したのは女のしどけない寝姿だけで、そこに正道の姿はなかった。姿はないのに声だけが聞こえていて、「亭主夢さめて、美女と見えたる形はなし」と書かれている。そして最後の言葉が「俳道より思ひ入ての女すがたならん」なのである。これではやはり正道の姿が女の姿になったと解釈できてしまう。『対訳』は「次の世に生まれ変わったら、このような歌道のたしなみの深い女になりたいものだ」と訳し、「美女と見えた姿は消えてしまった」としているので、正道の姿が女に見えたと解釈しているようである。これは寝姿が小判に見えたという『世間胸算用』の趣向と同じといえよう。

いずれの解釈も可能だが、ここでは『対訳』の解釈に寄りたいと思う。とい

うのも、その方が可笑しさを強調できるからである。正道の想像では、光貞妻の姿は艶形だった。つまり色っぽい女として想像している。だから現れた姿は「しどけなき寝姿」で、「年の程四十にあまれる女らうながら、さかりといはゞ今なり」と描写されているのである。七十余歳の正道は自筆短冊を抱きしめつつ色っぽい光貞妻を想像しながら、朝顔模様の蚊帳の中で赤い布団と房付きの枕に寝ていた。この蚊帳と赤い布団も幻なのだろうか。消えたのが美女の姿だけであるなら、正道は赤い布団に寝ていたことになる。そして彼の妄想が膨らみ姿が女になったところで、帰宅した妻に踏み込まれた。驚いた妻に向かって正道は「かくさず」話す。何を隠さず話したのかというと、もちろん彼の妄想の内容なのである。

『新可笑記』と比べて『名残の友』は生々しい。昔の美女ではなく今の美女に憧れて悶々とし、妻に摺小木で殴られそうになって目が覚め、妄想を白状している。一見奇談なのだが、やはり可笑しさの方が勝るのである。そこが『新可笑記』との違いといえよう。そもそも有名俳諧師であった光貞妻を色っぽい女として描写することも可笑しいのだ。しかも七十余歳の男が四十余りの艶女に成り代わるとは、奇妙というより呆れるというよりほか言葉がない。光貞妻への憧れはよく分かるが、その行き過ぎた異常さが笑いを誘うのである。

中国の干宝著『捜神記』では、気の惑いで男が女になったり女が男になったりするいう。西鶴が直接『捜神記』を見た可能性は低いが、こういった趣向の話が西鶴の耳に届いていても不思議ではなく、本話も気の惑いによって女の姿になったと見ておきたい。

守武の頃から時代は進み、俳諧は世間で大流行し、有名俳諧師は憧れの対象となった。それはまるで現在の芸能人のようである。光貞妻も作品だけでなく、本人そのものが噂の対象となったことが読み取れよう。人々は有名俳諧師を一目見ようと集まり、自筆短冊を求めたりする。近年は俳諧を志しながら俳諧師そのものにも憧れる一般の作者達が増えたのであって、そうした世間の有様を奇談風の笑話として仕立てたのではないだろうか。

なお正道が思い憧れた「光貞が妻」については検討を要する。本名「みつ」と称し、杉木吉大夫の妻となる。この杉木一族は、伊勢の貞門俳人・望一の親戚筋にあたる。光貞とみつとの間に生まれた子供が、利休流わび茶を継承した宗旦四天王の一人・杉木普斎であった。よって、一族に俳諧を興ずる下地は当然のこと十分にある。

光貞の妻すなわち「みつ」の俳諧活動は活発で、その句は諸書に見え『犬子集』『毛吹草』等、枚挙にいとまない。河崎延貞（宝永六年没）の『蟄居紀談』は、光貞が妻のことを紹介して「其名の高く聞へて京にては伊勢小町と称しけるとや」と伝えているので、西鶴が本話において「むかしをきく伊勢・小町・小式部は云々」と表現しているのは理解できる。西鶴の『古今俳諧女歌仙』序に、「むかしの伊勢小町は。すぐれて美女を伝へて。絵に書ける。衣紋靚粧。くろ髪のみだれ迄。逶迤に。千嬌をあらはし、今見る人にも魂をなやませける。

是美形にして。名を残すにはあらず。哥道を弄し徳ぞかし」と西鶴は紹介し、その巻頭に光貞妻を配している。

伊勢山田の女也。哥道に心ざしふかく世／＼の俳諧集にも名をふれて花咲の翁書れし物にも此女はもれじ。重頼も五人のまれものにしるせり。住所の神山の春日を詠めてゆたかなる一句に

ひらきてやけふ日のはしめ伊勢暦　　光貞妻（2）

巻頭第一として紹介するところをみると、西鶴にとっても光貞妻は別格だったのだろう。伊勢山田の「みつ」に「伊勢小町」の評判あらばこそ、西鶴のいう「今の光さだつまは、目前の沙汰なれば、万人のもてはやしけるもことはりぞかし」が必然性をもつのである（3）。

補足として、文意の取り方について述べておく。「天の岩戸のあかりをはしり」の部分を、『好色一代男』巻八の三「一盃たらいて恋里」の「台所に大らうそく明りを走る」を参照して「あかりをはしり」と『対訳』『新大系』は解釈するが、別の捉え方もあるのではないか。ここは「あかりをばしり」と把握すべきであろう。なぜそう考えるのかというと、第一に『好色一代男』の文例が特殊だからである。「大らうそく明りを走る」は「大らうそく」の「明り」が照り輝くことと、人々（八百屋・肴屋）が「走る」こととを同一の文におさめ込んだために生じた文章のねじれであって、それを文例とするわけにはいかないだろう。第二の理由として、「美女に摺小木」の場合は、対句表現になっているわけで、「あかりをばしり」そして「此道の広き所をわきまへ」るのである。つまり「しり（知り）」と「わきまへ」る行為が照応していなければならない。よって、「あかりをばしり」と判断すべきと考える。

以上、巻一の一「美女に摺小木」を笑話に重点を置きながら読んできた。『名残の友』は俳論的内容と笑話的内容が組み合わされてできた作品でもある。そのことは先行研究で指摘される通りであって、本話を俳論として捉えるむきも当然存在する。吉江久弥氏は『名残の友』に描かれた芸道に対する人間のあり方を分類した。すなわち

（一）芸道に無縁の人
（二）芸道に携わりながら心得違いを冒している人
（三）正しく努力する人
（四）名人

の四種である。そして本話「美女に摺小木」の主人公正道は、（三）正しく努力する人なのだという。巻一の一は、ひたすら道に打ち込む理想的な俳諧修業者を描いた咄であり、西鶴の芸道論『名残の友』の冒頭の位置を占めるに相応しい内容なのだとされている。吉江氏は

此の書（名残の友／引用者注）における作者の真意がえせ芸能者とまことの芸能者とを峻別しようとするにあること、そしてその底に、ひたむきの修業によって終には何ものにも束縛せられない融通無礙の境に至るべき、まことの道を信念として主張しようとする気持が一貫していることは、容易に窺い知ることが出来る

と述べておられ、『名残の友』は

従来笑話・漫談として享受されるだけで、正当な評価を受けないまま今日に至った。一切を笑話として割り切ろうとする向きがなおあるとすれば、再考を要することは言うまでもない。これは名人の自在なはなしの方法で語られた、又は語られようとした芸術作品であると同時に、右の如き意味での芸道論なのである。俳諧のことが中心となっている点から言えば、俳論である。

という（4）。こうした芸道論、または俳論として『名残の友』を捉えるとき、巻一の一「美女に摺小木」は執心譚となり、「俳諧に全身全霊を打ち込んだ人物のこころがフィクションを以て描かれ」た話となるのである。吉江氏はさらに「主人公の名正道も此の作りばなしに相応しく命名せられたものと考えられる。つまり、いやしくも俳諧に心を寄せる人はかくあるべし、かくあるのが「正道」であるというところから名付けられたのであろう」という（5）。俳論として読むか笑話として読むかによって、ここまで主人公の姿が変わるというのも面白い。こうした点が西鶴作品の魅力なのだといえよう。

本稿では笑話としての読み方をさらに俗化し、主人公正道を妄想激しい高齢俳諧師として見て、近年増加する俳諧流行にかぶれた作者達の興奮ぶりを描いたものと考える。

（1）吉江久弥氏「西鶴の芸道観―『名残之友』を中心に」（『西鶴論叢』中央公論社　昭和50年9月、『西鶴　人ごころの文学』和泉書院　昭和63年5月に再録）。「西鶴名残之友二題」（仏教大学通信教育部『鷹陵』№62　昭和50年6月・8月、『西鶴　人ごころの文学』和泉書院　昭和63年5月に再録）は神主の姿が二人の女性の姿になってみえたと解釈している。

（2）『古今俳諧女歌仙』の本文は『定本西鶴全集』第十巻（中央公論社　昭和29年12月）を使用した。

（3）吉江久弥氏「名残之友二題」は西鶴が『名残の友』を執筆するさいに『女歌仙』を手元に置いて創作したのではないかとする。

（4）（1）の「西鶴の芸道観―『名残之友』を中心に」

（5）（1）の「西鶴名残之友二題」

◆巻一の二「三里違ふた人心」

本話は『徒然草』第十段を踏まえた言葉から始まる。自分を含めて今時の俳諧師には偽物が多いと述べ、次いで本物の俳諧師である津田休甫を紹介するという内容である。休甫の紹介は、虎の絵に毛抜きを描き添えた話、裸で都を通った話、百韻の平点が抹消の印だった話の三つの逸話で構成されている。

まず前半の毛抜きを添える話の類話として、『軽口福蔵主』（正徳六年刊）巻一「髭貫」と（1）、『百登（なり）瓢箪』（元禄十四年刊）巻一の八「ひげぬき」（2）が指摘されている。

次に休甫が丸裸になる話は、『撰集抄』の増賀聖の逸話によるかとされ（3）、百韻の逸話は『醒睡笑』巻六「推はちがうた」にある宗養の話を用いたものといわれている（4）。

さらに虎の話に関しては、『摂津名所図会大成』巻十二「栗東寺」の項にも記載があること、『橘庵漫筆』巻五では『西鶴名残の友』巻一の二をそのまま採り、挿絵も同じ構図のものを掲げているとの指摘がある（5）。

『軽口福蔵主』『百登瓢箪』『摂津名所図会大成』『橘庵漫筆』は、ともに『名残の友』より時代があとで、典拠とすることができない。つまり、『醒睡笑』以外は『名残の友』の方が古く、典拠不明とされている点が問題なのである。

栗東寺の杉戸に虎の絵を描き、髭を描き忘れて片すみに毛抜きを書き添えた逸話は、本来抽象的なある俳諧師の笑話として語られていた可能性がある。もともとは画竜点睛の逸話に拠った笑話だったのではなかろうか。たとえば『弘法大師行状記』巻五に「大内書額」という話がある。嵯峨天皇が応天門の額を弘法大師に書くように命じた。染筆して額をあげてみると「応の字の上の円点」がないことに気づいた。大師は下から筆を投げて点を加えたという。いわゆる名筆伝説にはこうした逸話が多く、それらを絵画の世界に転じた笑話が存在した可能性がある。その「ある俳諧師」の話を休甫の逸話としたところに西鶴の意図があった。

本話では名筆の窮余の一策が「毛貫一本書添」える「作意」に変質している。「作意」が俳諧師に必要な要素であることはいうまでもない。髭を描き忘れたのなら、髭を書き足すのが通常であろう。だが、休甫は俳諧師である。ゆえに通常のままであってはならなかった。素直に書き忘れを認めて硯を引き寄せ、髭を書き足すのかと思うと、何食わぬ顔で毛抜きを書き添える。その通常でない当意即妙な「作意」が俳諧師にとっては重要なのである。この章の最後に「此作意にて俳諧の程思ひやられけると、人皆感じぬ」とあるように、俳諧に限らず、全てにおいて通常でない発想をすることが俳諧師には求められていたのであり、それを自然体で実行できるのが休甫だったと語っている。

第二の逸話は、都を昼にも拘わらず丸裸で通ったという話だが、ここに『撰集抄』「増賀聖」のパロディを観察したのは井上敏幸氏である（6）。増賀聖は、伊勢大神宮の示現により、名利を捨てて裸でさすらったという人物だった。裸である点は確かに同じであるが、休甫は「魚鳥も人の食せ次第に、出家といへばそれなり」と描写される存在であって、完全な僧侶とはいえない。「増賀聖」

のつきつめた境地と比較した場合、あまりにも逕庭があるのではないだろうか。むしろ竹林の七賢の阮籍のような隠者の方が印象としては近いだろう。『晋書』によると、阮籍は酒を嗜み、髪を乱して「裸袒ニテ箕踞ク」と伝えられている。また『世説新語』の「任誕第二十三」には、劉伶の話として「或ハ衣ヲ脱ギ裸形ニシテ」等の文言がみえ、世の常識から逸脱した人を描いている。このような隠逸者の逸話は当時の人々にとって馴染み深いものだったに違いなく、『西鶴名残の友』巻二の五「和七賢の遊興」に描かれる隠者の奔放な生活も、その一例としてあげられよう。

巻三の四「さりとては後悔坊」にも休甫が再登場するが、そこにも「津田休甫が紅鹿子の女小袖着て、昼中に大坂の町を通りしも、其身道者の徳あらはれ、目にかくる人もなかりき」とあって、本話と同様に人の目を気にすることのない自由奔放な隠逸者といった一定のイメージが認められるのである。また、『西鶴大矢数』第三十六の

馬の上からうなづいて行
一生は休甫坊主が夢なれや
難波の浦で夜とも昼とも

も参考になろう。このような付合が成立するということは、馬上で何かを考えながら通り過ぎていく休甫の姿が人々の脳裏に定着していたのではなかろうか。人の窺い知れぬ自分だけの世界に入り込んだまま、人前を馬に乗って通っていく。そのような休甫の姿が一定のイメージとしてあった。だから「一生夢の如し」（謡曲「歌占」）というように、何事にも捕らわれず、夜も昼も夢のように過ごしていると付けているのである。『名残の友』の本文には乗馬の描写はないが、挿絵に丸裸で騎馬する姿が描かれているのは、そうしたイメージによるものと考えられる。

さらに、『誹家大系図』は休甫のことを「平日物ニ拘ラザルノ一奇人ニテ、人モトムレバ俳句ノ下に休甫居士キと戯ニ書シトゾ」と紹介する。ものに拘らない奇人であり、「休甫こじき」と署名するおかしな人という認識が、休甫に対する一定した印象だったのである。

井上氏が指摘した増賀聖は周囲の人々から狂人扱いされたが、休甫は人々から狂人扱いされることはなかった。逆に俳諧師または道者として、その徳を称えられ、他者の及ばぬ境地を得た人物として尊敬されている。この違いは何なのか。俳諧師は一風変わっていることが求められていたが、奇人であることは「是」であって、狂人であることは「非」だったわけである。この境界線が西鶴にとっても重要だったのではないか。見せかけではなく、自然の奇智が理想なのであって、それが冒頭の「兼好が作り木を嫌ふ事」につながっていく。

第三の逸話は野間光辰氏の指摘されるとおり、『醒睡笑』巻六に拠ったものであろう。『醒睡笑』の本文は以下の通りである。

庄官たる者、堤の祈祷とて発句をし、百韻興行の後、宗養のもとに遣はし、

点をこひければ、九十九句に点かかり、発句ばかりになし。「されはいづれも、かたの如く出来たるものよ」と思ひ、わざと出立ち行き、尋ね聞くに、「いや、点にはあらず。一句にてもよしと思はぬより、皆消したるなり」。「発句はよきかや」。「さればとよ。今の発句、きれ字なし。常ならば沙汰の外なるべけれど、堤のためにせめてならんと、こればかりに、棒をあびせぬ」と申されし（7）。

この話の可笑しさは、句に付けられた棒線が、平点ではなく抹消の意味だったというところにある。その点については『名残の友』も同様である。しかし落ちの部分が違っている。『醒睡笑』では、発句に切れ字がないのは論外なのだが、堤の祈祷に「切れる（切れ字）」は禁句だから抹消しなかったと語り、宗養の機転が一話の落ちとなっている。だが、『名残の友』の内容は堤とは関係がない。したがって「切れ字」による機転は意図的に使われなかったことになる。この機転にあたる部分を『名残の友』では「其俳諧は何の用にも立ず。かたはしからわるひ分を消て帰しぬ。けさぬ句どもは沙汰におよばす。以来はすこしたしなみ給へと、目をむき出して睎りける。」という台詞に変えているのである。ここに西鶴の意図を読み取ることができよう。ここでの休甫は、土産を持って礼を述べに来た堺の連衆を「目をむき出して」叱っている。台詞も「何の用にも立ず」「かたはしからわるひ分」「沙汰におよばす」「すこしたしなみ給へ」といった非常に率直な言葉が並ぶのである。つまり笑話本来の落ちを、休甫という人物の人となりを表す台詞に取り替えたのだった。人との付き合いには時に忖度が必要であるが、休甫はそれを必要としなかった。良いものは良い、悪いものは悪いといい、人の評価を気にとめない。あるがままであるからこそ、句も面白いのである。それが俳諧師だと西鶴はいいたかったのではないのか。

以上、三つの逸話を理解した上で、本話の構成を今一度確認してみよう。「身を其まゝ成人こそ殊勝なれ」という主題がまず示されて、その主題に合致する休甫の紹介へと移行する。裸であろうと気にせず往来するという、まさに自然体の奇人である休甫自身の逸話があり、これを毛抜きと百韻の笑話で挟み込んで、その自然体ぶりを強調したのが本話なのである。笑話自体は他の人物でも成立するが、休甫の人となりを語る際に、この二つの笑話を選んで組み合わせたところに西鶴の巧さがあった。しかもただ並べただけでなく、休甫に関わる逸話を挟んだことにより、笑話も休甫の逸話となり得た。ここに西鶴の語りの巧さをみるべきであろう。

（1）　野間光辰氏「西鶴の方法」『西鶴新新攷』（岩波書店、昭和56年）
（2）　岡雅彦氏「西鶴名残の友と咄本」（『近世文芸』22　昭和48年7月）
（3）　井上敏幸氏『新大系』脚注。
（4）　（1）と同。
（5）　（3）と同。
（6）　（3）と同。

（7）『醒睡笑』の本文は、東洋文庫31『醒睡笑　戦国の笑話』（平凡社昭和41年5月）を使用した。

◆巻一の三　「京に扇子能登に鯖」

本話では、まず「物毎に気のつかぬ人こそおかしけれ」と主題が最初に提示され、その後に松永貞徳の近所の人の話、能登の浦人の話、岩倉あたりの人の話の三つが列記されている。通常、話題になるのは「気のつく人」のことであるが、「気のつかぬ人」を話題にしているところが滑稽の構図となる。「気のつかぬ人には貰うべし」（『せわ焼草』）とあるごとく、とかくやっかいな対象なのが「気のつかぬ人」であろう。

最初の逸話では、貞徳のことを「目安の談合」をしている人と勘違いする、鞍馬屋吉左衛門という人物が登場する。彼は銭店を生業としていて、風流事には無関心だった。だから「近ひ隣殿なれども、一代公事訴訟いたさねば、貞徳をたのみ、俳諧書てくだされいと、御無心申事もな」いなどと言ってしまう。訴訟をしたことがないので俳諧を頼む必要が無かったといっているわけで、吉左衛門は「俳諧」が何なのかもわかっていない人だったということになる。香道で用いる「衛士籠」を、その小ささゆえに「雛の綿の塵よる物か」と誤解した田舎人と同様、いわゆる愚人譚といってよいだろう。

続いて、京の俳諧師が能登の人から扇を贈られ、返礼として鯖を贈った話が載る。上杉本「洛中洛外図屏風」は言うに及ばず、『毛吹草』にも「山城の名物」として「御影堂の扇」「小川に舞扇」「富小路に扇骨要」などが紹介されており、京都の名物といえば扇があげられた。他方、『本朝食鑑』にもあるとおり、「能登の名物」としては「鯖」が有名であった（1）。

『進物便覧』（文化八年）を参照すると、「みやげは土産にして其土地に産する物を（中略）贈るを専一とすべし」とある（2）。つまり、能登の人は鯖を贈るべきだったのに、京の名産物である扇を贈ってしまった。その錯誤に対して、京の俳諧師は能登の人に鯖を贈ったのである。お互い相手の国の名産物を贈りあう滑稽の構図となっており、能登の浦人が、京から自国の名産品の「鯖五さし」を馬につけて帰る様子には、救いようのない可笑しさがある。この笑話の典拠はいまだ報告されていないが、互いに名産物を贈りあう笑話があったのではなかろうか。『名残の友』では、鯖を贈り返した人物を貞徳だととれるように、貞徳のご近所であった吉左衛門の話の後に続けて語るのである。実はこの能登の浦人は、百韻一巻に点を付けてもらうために上京したのだった。つまり俳諧を嗜む人だったのである。俳諧をする人に機転が必要であることは既に述べたとおりである。そんな人物が贈答の基本さえ分かっていなかった。だから「俳諧する程の作者には、気のつかぬ事」と言われたわけである。

ここで見えてくる俳諧師の人柄はどのようなものであろうか。貞徳とおぼし

き俳諧師は、贈答品に呆れながらも口や顔には出さない。浦人は真面目に吟味して、五本の扇を大事に運んできたのだ。その気持ちは汲まねばなるまい。だが、何と言っても俳諧をするのならば、やはり気が利かねばならないのである。率直に批判するのは京らしくも俳諧師らしくもないので、鯖五さしを贈り返したのだった。「扇五本」に「鯖五さし」と数を合わせているのも面白い。落語にもある「ぶぶ漬け」の逸話を思い起こせば分かりやすかろう。それとなく伝える京都の気遣いなのである。本来は気遣いなのだが、大坂や地方の人間には意地悪に取られてしまうこともあるのが問題かもしれない。本話で語られる貞徳の印象は、巻一の二で語られた休甫とは逆である。率直にものを言わないず、機転を利かせて対応する京の俳諧師という姿が強調されている。

この話で最も問題になるのは最後の逸話であろう。「岩倉のあたりなる里」から歳暮の句とともに「雉子の足に干鰯（ごまめ）むすび付て」贈られるのだが、どこに笑いがあるのだろうか。諸注は、岡雅彦氏「西鶴名残の友と咄本」の指摘をうけて、『はなし大全』（貞享四年）上の九「籠舁が餞」を載せる。以下は『はなし大全』の本文である。

かごかき成者むすめをおく大名へ奉公に出しけるが、このむすめ御手かゝりて御子息などできければ、とのよりをやもと御せんぎ有て、国本へひつこすやうにとつかいがね下さるる。さらばいそぎ下らんとて、かごかきども立所へいとまごひに行。ともだち共何角のあいさつして、さて、われらが事なれば、はなむけにせんじゆまでかごをかいていんといふ。ぢたいすれどぜひといへば力なくて宿へかへる。さて、よあくるとかごかき共ふうふともにかごにのせ、千寿をさしてかいてゆく。せんじゆになればかごよりおり、鳥目壱貫文さし出す。いかな／＼壱文もうけませぬ。此通りでござるとて、ぼうをはづす。みればみれば（ママ）ごまめをつけておいた（3）。

確かに干鰯がつけてあったという部分が一致しており、本話との関わりは理解できる。だが、そもそもこの「駕舁が餞」と本話「京に扇子能登に鯖」とがいかなる関係にあるのかが諸注では解説されておらず、今ひとつ釈然としない。

この条は、お歳暮であれ正月の歳旦帳への謝礼であれ、「雄子の足に干鰯むすび付て」贈る行為に問題があるのではないだろうか。『進物便覧』に「本朝古来より齎（つかいもの）をするときは其品々に干魚（ひもの）を添て贈る事例なり（中略）のしは足利家のときより熨斗蚫を用ひられしより隆（さかん）にのしを用ふることなり。ゆへに今も年玉あるひは鏡餅をすゆるに田作（ごまめ）を添ふる事古例に倣へり」とあるごとく、贈答品に熨斗を添えるのが一般的な作法なわけである。この「岩倉のあたりなる里」人は「雉子の足に干鰯むすび付」て送ってきた。その行為自体がいかにも田舎人らしく可笑しいのではなかろうか。

『はなし大全』「駕舁が餞」の場合も、干鰯をつけておいたということから、

娘の両親自身をご進物として送り届けたということになるのであり、そう理解すれば、駕籠舁き達が駄賃の鳥目一貫文を受け取らなかったのも納得がいくのである。そしていずれの場合も、田舎人や駕籠舁きのご進物であって、干鰯を直接物に結びつけているところが可笑しいのだろう。特に岩倉の里人の雉子は、歳暮の発句を見せるついでに贈ってきたものだった。やはり俳諧を嗜む人なのである。にも拘わらず、田舎者丸出しで進物に干鰯を結びつけてきたのであるから、送られた方も「是は」と言って笑うしかないのも頷ける。「岩倉のあたりなる里」人は、一般の風習を不十分にしか認識していなかったのである。

この世間ずれした奇妙な贈り物の様子を、『徒然草』にいう「よき友三あり。一には物くるゝ友」（一一七段）というきわめて人間的かつ普遍的な論理で閉じていったところが、みごとな落ちになっている。人間社会の本質が書かれた『徒然草』の一節がさりげなく紹介されることにより、世間ずれした贈り物も容認されていくところに可笑しみがあるのである。

ここで本話の構成を確認してみたい。まず都花咲に住む松永貞徳が紹介され、本話が貞徳に因んだ話であることが示唆される。そして近所に住む鞍馬屋の主人を出し、都の人間でさえ俳諧を知らないのだから、まして田舎人が俳諧を理解せずとも仕方が無いといって視点が田舎へと移される。近年は田舎でも俳諧を嗜む者が出てきたらしく、その例として能登の浦人、岩倉の里人が登場するが、いずれも俳諧をするような機知に富んだ人物ではなかった。人は良いが「気のつかぬ」田舎人だったため、可笑しな贈答になってしまった。何にせよ物をくれるのは有難いことだと締めくくっている。話の展開も自然で、よく考えられた構成であるといえよう。進物に絡んだ二つの笑話は、贈られる側が都の風流人でなければ成立しない。ゆえに都に住む花咲の翁と称された貞徳がこの二話と結びつけられたのであろう。貞徳のもとに、かような進物が実際に届いたかどうかは確認のしようがないが、かの一流文化人が、田舎の自称俳諧師に苦笑している様が想像されて面白い。

こうしてみると、本話は、巻一の二「三里違ふた人の心」と非常に似た構成であることに気付く。『徒然草』を用いながら大坂・京都の有名俳諧師を紹介し、三つの逸話を並べている。最後の逸話で、有名俳諧師のもとへ集まってくる自称俳諧師たちが語られ、彼らのずれた行動が叱られたり笑われたりするのである。いずれも笑話を組み合わせて、休甫や貞徳の人となりを強調する。これが『名残の友』の創作方法の一つなのである。

（1）『和漢三才図会』には、「能登国土産」に「鯖　世ニ佐志鯖ト禰ス」、「山城国土産」に「扇子　御影堂」とある。

（2）『進物便覧』（文化八年刊　書林河内屋嘉七版）の本文は国会図書館蔵本を使用した。

（3）『はなし大全』の本文は、大東急記念文庫善本叢刊　第六巻『噺本集』（汲古書院　昭和51年8月）を使用した。

◆巻一の四「鬼の妙薬爰に有」

本話で描かれる俳諧師は、江戸俳壇の長老であった斉藤徳元である。もとは織田秀信に仕えた武家で、貞徳とも昵懇だったとされる（1）。本話ではこの徳元のみが登場し、他の俳諧師は描かれない。その代わりに鬼が登場するという、これまでとは異なる展開を見せる。以下はその内容である。

六月の初め頃、徳元は江戸の伝馬町から都へと出発した。粟田口蹴上にさしかかった時、苦しんでいる鬼達に出会う。年配の鬼によれば、処刑された塩漬けの死体を食べて喉が渇き、蹴上げの水を飲んだところ食あたりを起こしたという。治療を頼まれた徳元は、塩漬けを食べ慣れている周辺の烏を捕らえて煎じ、それを与えて鬼達を助けてやった。鬼達は「あの世へお越しなされた時に、お礼はあちらで」と言って帰って行った。

本話は咄本ではなく狂言を下敷きにしているが、笑話であることに違いはない。野間光辰氏によって狂言「雷（神鳴）」によると指摘され（2）、岡雅彦氏（3）、楠元六男氏（4）、また諸注は全てこれを踏襲している。典拠とされた狂言「神鳴」のあらすじは次の通りである。

東へ下る藪医者の前に神鳴が落ちて腰を痛める。神鳴は医者に鍼を打ってもらって、天に帰ろうとする。その折、鬼は治療代を請求されるが、八百年間水損のないようにし、また医者を典薬頭にすると約束して昇天していく。

相異は指摘されるものの、鬼が人間の治療を受けてお礼をしようとするという大筋が同じであることから、西鶴が狂言「神鳴」を参照していることは否定されない。さらに岡氏はこの狂言「神鳴」の伝本について言及し、寛永頃書写の和泉流天理本を紹介している。天理本では、中風の治療をしてもらった雷が、「後で眷属を引き連れて屋敷に落ち、大勢でお礼を申しあげよう」「名残惜しいが、子供が待っているので気がせく」などと言って、有難くもない好意を示したとあり、伝本上は、天理本の方が滑稽味はあると述べている。問題は、この狂言を西鶴がどう利用したかである。以下順を追ってみていきたい。

本話前半三分の一にあたる道行文について、岡氏は「用語を吟味してきび／＼とたたみかける文体は後半の口語体の文章とは対象的で、その転換が咄のうまさである」といい、楠元氏は狂言「神鳴」の道中を具体的に見せたもので、「歌枕の本意を忠実になぞりながら、卑俗なものをぶつけたり若干の齟齬をみせたりと、微妙な工夫を観察できる」といっており、いずれも首肯できる。西鶴は他の章と同様にここでも笑話を再構成しているわけで、笑話の抽象的人物を特定の俳諧師に置き換えるという方法を用いて、狂言「神鳴」の医者を徳元

に置き換えているのである。

ではなぜ徳元なのかを考えなければなるまい。本話で斉藤徳元が設定された必然性について、『新大系』は俳諧師と医師の服装の類似から、鬼は徳元を医師と間違えたとしている。楠元氏は服装の類似だけでは主人公を徳元にした理由にならないとして、次のような見解を示した。合戦を落ち延びた経歴を持つ徳元は死体や鬼に遭遇するに相応しく、さらに『斉藤徳元研究』の記述から（5）、徳元は「医師として寓される資格を十分にそなえていた」とした。よって徳元は狂言「神鳴」の医者と重ねられたのだという。この指摘は妥当であろう。寛永五年（または六年）に江戸へ移った徳元は、その後も幾度か上京しているし、医師としての心得もあった。ゆえに旅をする医師という狂言「神鳴」の主人公との置き換えが成立したことは納得できる。

ここで気になるのが笑話そのものの作り替えである。典拠の狂言は雷神の鬼であって、獄卒ではない。本話の落ちは地獄の鬼でなければ成立せず、ここに西鶴の手腕をみるべきだろう。楠元氏はこの転換について『滑稽太平記』の記述をひいて説明している。関ヶ原の敗北から落ち延びて高野山へ入ったということは、「死体なり鬼なりに遭遇する可能性を保証していく」とし、獄卒に会う必然性を徳元に求めている。『新大系』は「西鶴は、医者を徳元に、雷を鬼に翻案し、徳元に当意即妙の、きわめて庶民的な治療をさせることでもって、俳諧的機智に富んだ一篇の笑話に仕立てた」とする。つまりいずれも西鶴が徳元の経歴に合わせて狂言「神鳴」を書き換えたといっているわけである。

確かに後半の描写には滑稽な表現が多用されていて、西鶴の咄のうまさが存分に発揮されているといえよう。岡氏はこの滑稽に対し、

鬼の病む所を描いては「鬼が死んで行所がないとおそろしき目より泪を流し」とか「角のうなだれて此面影見るも哀れなり」と云った表現は、作者の自由な転合口であり、又、「中にも物なれたる鬼らしくかしら少しはげて、ぢごくの虎落分別ありそふな皃つき」などと云った表現は、鬼のイメージとは程遠いものであり、ごくありふれた云い方をするならば、鬼の地位を人間の位地まで引づりおろし、そのイメージのちぐはぐな相違に依って笑をかもし出している。又、「ぢごくには近付のおいしやも御座れど」と云う鬼の言葉も人間臭いし、「あの世へ御越なされた時、お礼はあれにて」と云う言葉も考えて見ると笑せる。

と述べ、すこぶる評価が高い。そしてこの落ちにあたる滑稽を治療に見たのは楠元氏である。本話の場面設定が粟田口蹴上で、今熊野権現社や今熊野神社に近いこと、烏は神の使いであり、熊野神社では、誓紙に記された約束が破棄されれば熊野の烏が三羽死ぬとの信仰もあることに言及し、

本話ではその因果関係を逆転させているわけで、熊野ゆかりの烏が殺された段階で、約束は反故にされる運命にあった。―中略―『西鶴名残の友』巻一の四における約束の方が何の具体性もないだけに滑稽である。「御礼はあれにて」という言葉は、守られる筈もないまったくの空手形だった。徳元のほどこした治療そのものが、約束を反故にする原因になっているわけ

で、ここに本話のおとしどころがある。

とされたのだった。

後半部分の軽口は岡氏の言う通りである。塩漬けの死骸をつまみ食いするとか、蹴上げの水で腹痛を起こして虎皮の腰当てをさするとか、地獄には行きつけのお医者がいるだのというあたり、ひどく人間臭い獄卒達になっていて可笑しい。だが落ちの部分に関しては説明が不足している。また楠元氏は「約束の反故」を落ちだとしている。ここに一言付け加えておきたい。

この「お礼はあれにて」という落ちの一言は、「お礼は地獄で」と単純に解釈してよいのではないだろうか。徳元の当意即妙な治療で鬼達は無事回復した。火の車を飛ばし、鉄火を振らせて嬉しそうに去って行く鬼達を、にこやかに見送る徳元が想像される。そこに投げかけられたのが「あの世へ御越しなされた時、お礼はあれにて」という一言である。つまり暗に死んだら地獄に落ちると言っているのだ。お礼というなら極楽往生とくるのが昔話の常套であるはずが、地獄でまたといわれても嬉しくない。ここで地獄と言わずに「あれにて」とぼかすところが味噌である。ちょっと待て、どういうことかと引き留めて聞き返したくても、鬼達は暢気に「さらば／＼」と遠ざかっていく。残された徳元はどんな表情を浮かべていたであろう。狐につままれたような困惑顔をしていたのではなかろうか。

無邪気な鬼達と困惑する徳元という構図は、先に述べた和泉流天理本の落ちを思い起こさせる。雷が眷属共々お礼を言いに座敷へ再来するという咄である。これは多数の雷が家に落ちるといっているのであって、まさに「有難くない好意（6）」でしかない。できれば疎遠でいたい雷に名残惜しまれても困るのである。こうした落ちは本話においても同様である。人間としては獄卒達に親しまれても困るし、極力地獄での再会は避けたいのである。しかし鬼達は名残惜しげに再会を誓って去って行った。この有難くない好意という「ずれ」が本来の笑いであって、そこを岡氏は「考えて見ると笑せる」と表現したのではないのか。

本話の落ちの危ういところは、徳元が地獄に落ちたとの推測も可能になることだが、創作当時、斉藤徳元は数十年前に亡くなっていたのであるし、西鶴もそれを意図したのではなく、単に獄卒の笑いを語ることに重点が置かれたのだと考える。

（1）『新大系』脚注。

（2）野間光辰氏「西鶴五つの方法」（『文学』35巻9号～37巻3号、昭和42年9月～44年3月に分載）（『西鶴新新攷』岩波書店　昭和56年8月に再録）

（3）岡雅彦氏「西鶴名残の友と咄本」（『近世文芸』22号　昭和48年7月）

（4）楠元六男氏「はなしの切れあじ」（『芸能文化史』21号　芸能文化史研究会　平成16年7月）

（5）安藤武彦氏『斉藤徳元研究』和泉書院　平成14年7月）

（6）　（3）の表現による。

◆巻二の一「昔をたづねて小皿」

本話で語られる俳諧師は山崎宗鑑と考えて良いが、巻一各章と比較して、登場人物の設定に若干変化が見られる。まず梗概をあげておく。

永貞・保俊・春倫・宇野河内という大坂の俳友たちが、山崎に住んでいた宗鑑法師の一夜庵跡を訪れた。同道していた京の色茶屋の主人月夜の四平という者が、そこで瀬戸焼の小皿一枚をみつけて「宗鑑お内義、白粉とき」といい、その趣向に一座が盛りあがる。さらに宗鑑の庵にあった額「泊り客人、下。長あそびの客人、中。立帰りの客人、上」の話を聞いた四平は、その言葉を紙に書き、自分の経営する宿屋の入り口に貼りつけた。この愚か者は長生きをすることだろう。

本話で紹介しようとする俳諧師は山崎宗鑑と思われるが、話の中に直接登場するわけではない。巻一の一に紹介された荒木田守武と同様、一世紀前の人物であるから、西鶴が生まれる以前に没した伝説的存在だったわけである。したがって、宗鑑の逸話は後世の俳諧師たちの口を用いて語られる形をとっている。

山崎を尋ねた四人の俳友は永貞・保俊・春倫・香具所の宇野河内である。彼らの軌跡については、長谷あゆす氏の論文が参考になる（1）。長谷氏は山崎宗鑑に梵益を重ね、本話は実は梵益を忍ぶ内容であるとされた。梵益は山崎一夜庵を再興してそこに住んでいた人物だが、天和二年頃に没したといわれる。西鶴は彼を『好色一代男』に登場させており（2）、『古今俳諧師手鑑』『物種集』『二葉集』『高名集』で彼の句を採用していることは指摘の通りである。西鶴が編集に携わったこの四つの俳書は、いずれも西鶴が注目する人々を取り上げたものであるから、西鶴が梵益を重要俳諧師と見ていたことは理解できよう。この梵益と同時代の俳諧師として先の四名が出てくるわけである。それぞれの入集俳書を提示してみる（3）。

永貞（岡山氏。大坂の俳諧師）
　慕棨集（常辰編・万治三年刊）
　烏帽子箱（立以編・寛文元年十一月立圃序）
　埋草（成安編・寛文三年刊）
　佐夜中山集（重頼編・寛文四年刊）重頼系
　遠近集（吉竹（可玖）編・寛文六年刊）
　落花集（高滝以仙編・寛文十一年三月自序）
　続境海草（阿知子顕成編・寛文十二年七月自奥）

保俊（竹野氏。大坂の俳諧師）
佐夜中山集（重頼編・寛文四年刊）
古今俳諧師手鑑（西鶴編・延宝四年十月自序）
物種集（西鶴編・延宝六年刊）
春倫（浜田五郎左衛門。大坂の俳諧師）
鸚鵡集（梅盛編・明暦四年刊）
捨子集（梅盛編・万治二年刊）
懐子（重頼編・万治三年刊）
佐夜中山集（重頼編・寛文四年刊）重頼系
小町踊（立圃編・寛文五年刊）立圃系
大和巡礼（岡村正辰編・寛文十年六月奥）
遠近集（吉竹（可玖）編・寛文六年刊）
落花集（高滝以仙編・寛文十一年三月自序）
続境海草（阿知子顕成編・寛文十二年七月自奥）
宇野河内（浄治。大坂の俳諧師）
弁説集（良保編・寛文元年九月刊）
貝殻集（正法寺成安予編・長谷寺秀政補編・寛文七年四月秀政序）
寛伍集（南元順編・寛文十年奥）
蛙井集（山口自足子清勝編・寛文十一年正月奥）
落花集（高滝以仙編・寛文十一年三月自序）
古今俳諧師手鑑（西鶴編・延宝四年十月自序）
梵益（宗鑑室・宗鑑古跡住・桑門・山崎）
口真似草（梅盛編・明暦二年十月刊）
鸚鵡集（梅盛編・明暦四年刊）
新続犬筑波集（季吟編・万治三年刊）
糸瓜草（道甘編・寛文元年刊）
鄙諺集（安静編・寛文二年三月刊）
小町踊（立圃編・寛文五年刊）立圃系
遠近集（吉竹（可玖）編・寛文六年刊）
玉海集追加（貞室編・寛文七年九月自跋）
新百人一句（谷口重以編・寛文十一年正月自序）
難波草（中村宜久、井口如貞共編・寛文十一年七月奥）
大海集（宗臣編・寛文十二年七月序跋）
到来集（胡兮編・延宝四年九月自序）
古今俳諧師手鑑（西鶴編・延宝四年十月自序）
物種集（西鶴編・延宝六年刊）
二葉集（西治編・延宝九年刊）
高名集（風黒編・天和二年刊）

これらの入集する俳書をみれば、長谷氏が指摘されるように、本話登場の俳

友たちが寛文頃に活躍する俳諧師だったとわかる。特に永貞・保俊・春倫は『遠近集』『佐夜中山集』などに揃って名が見える人々なのである（4）。保俊は『遠近集』に名がないのだが、『佐夜中山集』で「武野保俊」、『古今俳諧師手鑑』に「大坂武野」、『物種集』には「武野」とあるので、「武野氏」であることは間違いない。そこで『遠近集』を徴すると、同姓の俊興（竹野氏　大坂）、俊佐（竹野氏　豊後屋又兵衛　大坂）が入集している。とすれば彼らの同族であるかもしれない。

宇野河内の俳号が浄治であることは『古今俳諧師手鑑』に「大坂宇野河内浄治」とあることで確認できる。入集する俳書としては『落花集』が他三名と同じである。いずれにせよ、彼らは寛文十年頃に活躍していた俳諧師だと理解してよいようである。浄治のみ名前を「宇野河内」と記され「香具所」と職業が紹介されるのは、やはり月夜の四平の台詞にある「宗鑑お内儀、白粉ときにうたがひなし」と関係があろう（5）。

梵益の俤を見るという説について一言添えておく。この説によると、天和二年（一六八二）頃に没した梵益の住居跡を、十年ほど前の寛文十一年（一六七一）に亡くなった宇野河内が訪問するということになり、そのあたりの時間的な齟齬が気になるのであるが、西鶴からすれば没年を厳密にするよりも、梵益と同時代である点と、白粉との関連を重視して、宇野河内を登場させたとも考えられる。とすれば梵益の存在は一種の「ぬけ」と捉えればよいわけで、その可能性は認められよう。

次に、宗鑑法師の逸話についてみていきたい。前半において描写される一夜庵の様子は『徒然草』を踏まえた表現「はるかなる苔路はいつ人の通へるしるべもなく、松・杉・かしはいやがうへに枝たれて」と語られるように、寂れた状態であった。そして周囲から聞こえる時鳥の鳴き声から、「かしがまし此里過よ時鳥、都の墮馬髻（たわけ）我を待らん」という宗鑑の狂歌が紹介される。この狂歌は『天水抄』『久留流』『片言』などでよく知られていたものである（6）。

再び庵の描写になり「ひだりのかたに筧の竹絶て、まかせの水の落行風情、爰ばかりの時雨ぞかし。石居の跡もそこ／＼に残りて、庵は西南を請られ、月はむかしの連俳、その法師すがた、今見る心して哀れふかし」と一同感慨に耽る様子が描かれる。「月はむかしの」は『玉葉和歌集』の「久方の月は昔の鏡なれやむかへばうかぶ世々のおもかげ」（実兼）を踏まえる表現で、「昔を偲ぶ」意味を表すとともに、「月夜の四平」を登場させる装置の一部となっている。

後半部分は謡曲「忠度」の本文をなぞるかたちで展開する。謡曲「忠度」の影響に注目したのは井上敏幸氏である（7）。「「昔をたづねて小皿」における、小皿の見立て、謡曲「忠度」の俳諧化、宗鑑の壁書という三つの話材は、実はばらばらにただ思いつくままに並べられたといったものではなく」謡曲「忠度」の「詞章に基づく連想が自らに咄の流れを決定していく形でもって構成された、西鶴独自の一篇だった」とされる氏の指摘は秀逸であった。これにより「月夜の四平」の職業が宿屋であったことも、謡曲「忠度」の「城南の離宮に赴き都

をへだつる山崎や。関戸の宿は名のみして。泊りも果てぬ旅の習」などの詞章、また「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」といった引用歌から連想されて設定されたものであることがわかるのである。さらに、「俊成」を「定家」に、「歌の望み」を「たばこ入」にすり変えて俳諧化したことも理解できる。

「月夜の四平」の「月夜」は、謡曲「忠度」の「月も宿かる昆陽の池」、または先にあげた『玉葉集』の和歌から付けられたかと思われる。これについて長谷氏は、一夜庵名物として花や月は意識されていたとし、「花の宿」から「遊び宿」、一夜庵別称「対月庵」から「月夜」が想起されたとされ、「遊び宿の亭主、月夜の四平」はその存在を現した時から「当世風に卑俗化された宗鑑」としての笑いを放っていたのではないか」と述べておられる。そして「定家」も遊女を表し、「遊女のもとにうっかり煙草入れを忘れる」という内容に変えたのだという。謡曲「忠度」の俳諧化の例として参照すべき指摘である。

次は、宗鑑の壁書を利用した落ちについてまとめておく。この落ちは、まず暉峻康隆氏が『百物語』（万治二年）上の十四「宗閑が額の事」によると指摘した（8）。その後、岡氏が『宗鑑法師一夜庵建立縁起』（延宝九年）にも同様の話があり、俳諧師の間では周知のものだったとされた。確かに宗鑑の逸話は諸書にのり、俳諧師ならば誰でも知っていた話であろう。その表現の具体を確認してみると、次のようになる。

『名残の友』
泊まり客人、下、長あそびの客人、中、立帰りの客人、上

『百物語』
一、上の客人立かへり　一、中の客人日がへり　一、とまり客人下の下

『宗鑑法師一夜庵建立縁起』
上客立帰　中客一日　下客泊懸

類話は木下長嘯子の『挙白集』にもみえ、浮生著と想像される『滑稽太平記』（成立年未詳）にも勿論紹介されている。

『滑稽太平記』「山崎宗鑑の事」
上の客人立帰り、中の客其日帰り、下々の客泊がけ

表現の近さや、西鶴が見た可能性がある書という前提で考えると、『百物語』が穏当かとも思われるが、この壁書は有名でよく話の種にされていたので、特に典拠として一書を想定する必要はないだろう。

最後に一言添えておきたい。「月夜の四平」が小皿に執着する様子は、風流に固執する数寄者の姿を模したものではないだろうか。風流に執着し過ぎる非現

実的な数寄者の例としては、『袋草紙』（藤原清輔著）等に載る帯刀節信と能因が有名である。能因が長柄の橋の鉋屑を懐中の袋から取り出して見せたところ、節信は紙に包んだ「井堤のかはづ」の干からびた死骸を取り出した。そして互いに感嘆して去って行ったという話だが、こうした珍妙なものを愛玩する数寄心の延長線上に「月夜の四平」の小皿もあると考える。この伝統的な数寄心に立とうとする滑稽さがあればこそ、謡曲「忠度」の詞章は生きてくるのである。忠度は『千載集』への入集を希望して、わざわざ俊成の住む都へ引き返していった。対して「月夜の四平」は宗鑑の内儀（そもそも法師に内儀がいるはずがないが）の白粉解きと思い込んだ小皿を、わざわざ取りに戻る。能因と節信がみせた由緒あるものへの拘泥は数寄心であった。四平はその数寄心を披露しようとして、逆に愚かさを披露してしまったのである。その滑稽さが謡曲「忠度」の詞章にのせて描写されるところに、笑いが生じる。この勘違いした数寄心は、宿屋の入口に掲げられた文言によってさらに増幅されていき、「さぞ此男長生をすべし」という感嘆とも呆れともとれる言葉で締めくくられるのである。

（1）長谷あゆす氏『『西鶴名残の友』研究　西鶴の構想力』（清文堂　平成19年9月）

（2）浅野晃氏「『一代男』中の俳人―梵益・桂葉・重當・福富―」（『皇学館大学紀要』一　皇学館大学　昭和38年3月）（『西鶴論攷』勉誠社　平成2年5月所収）

（3）俳書一覧作成には、今栄蔵氏編『貞門談林俳人大観』（中央大学出版部平成元年）、雲英末雄氏監修『元禄時代俳人大観』（八木書店　平成23年～平成24年）、乾裕幸氏『俳諧師西鶴』（前田書店　昭和54年6月）、長谷あゆす氏『『西鶴名残の友』研究　西鶴の構想力』（清文堂　平成19年9月）を参照した。

（4）長谷氏は永貞の初入集として『玉海集』をあげるが、『玉海集』に載る「永貞」は京三条柏氏（作者次第では小西氏）となっていて同一人物か不明であるため、一覧に載せなかった。また、宇野河内についても初入集として『玉海集』をあげているが、『玉海集』に載る「浄治」は「吉野宇野」とあり、大和国に分類されている。こちらは「宇野」という氏が同じであることから、同一人物の可能性もある。吉野から大坂へ移住したとも考えられるが、ここでは一覧に載せなかった。ただし、『『西鶴名残の友』研究　西鶴の構想力』第二部第一章「巻二の一「昔をたづねて小皿」」注16に示された『季吟十会集』（季吟撰　寛文十二年刊）所収の十一吟百韻（寛文六年七月廿七日興行）が「香具屋伝兵衛浄治」の興行であること、岸田家文書『歌仙』「跡問はん」百韻（寛文十一年春興行）前書から宇野河内が寛文十一年正月八日には没していたと指摘されたことは、重要である。これにより今後更に俳諧師「浄治」の動向が明らかになることを期待する。

（5）（4）であげた長谷氏の著書「巻二の一「昔をたづねて小皿」」注16

において、「想像を逞しくすれば、西鶴が本話に登場する宗鑑ゆかりの品を「白粉とき」としたのは、既に故人となった彼（宇野河内／引用者注）にちなんでのことかもしれない」とされている。

（6）『対訳』『新大系』などで指摘されている。

（7）井上敏幸氏「『西鶴名残の友』管見」（『語文研究』第66・67号　九州大学国語国文学会　平成1年6月）

（8）暉峻康隆氏『定本西鶴全集』第9巻（中央公論社　昭和29年）

◆巻二の二　神代の秤の家

本話は安原貞室の描写を主とした話で、巻一の津田休甫、松永貞徳、斉藤徳元と同様の構図をもった一話となっている。

全体は貞室に因んだ三つの話から構成されている。一つ目は、地下でありながら風雅の道に生きた人物で、琵琶の名器を智恩院に残したという話。二つ目は、住吉の汐干に行こうとして、よい発句ができなかったので下々の者だけを行かせたという話。三つ目は、貞室が浄久のもとを訪れた際に、琵琶の箱を認識できなかった土地の者たちが、「神代の秤の家」だろうといった笑話である。

この三話ともに、何らかの発想源があったものと想像される。貞室が無名という琵琶を智恩院に残したという話は典拠不明であるが、越智越人編『鵲尾冠』（享保二年成）に「貞室は家をうり、小町が琵琶を買ふ。一世の風流もゆかしく」とあり（1）、鳳林承章著『隔蓂記』の寛文五年正月十八日の記事には、誓願寺の方丈で興行された琵琶の演奏会に貞室も出演していることが伝えられている。また同記事は、「後段之時、貞室出也」と指摘し、さらに「貞室町人之由」とも付言する。これらの情報から判断すると、貞室と琵琶とは間違いなく深い関係にあったといえる。

続いて住吉の汐干の話は、三田浄久著『河内鑑名所記』（延宝七年刊）の伝える

京の貞室金剛山へ参詣ありし折ふし、柏原村浄久が亭に尋来り給ひて、夜ふくるまで物語し侍る。発句所望せしに、貞室いはく、方々よりはいかいにせめられ、此度ハはいかいをのがれにあるきさふらふ。其上此道に志ふかしといへ共、折にしたがい、よき句計ハ出ず。免し給へと有

という逸話が、発想の原点と考えられている（2）。そしてそのまま浄久亭での逸話へと移行するのである。

浄久亭での逸話も『河内鑑名所記』をなぞったものであるが、最後の部分で既存の笑話を組み合わせているのは、巻一各話と同様の方法である。笑話について、冨士昭雄氏は類話として『杉楊枝』（延宝八年）の「秤の家を氏神とあふぐ」を指摘している（3）。また、野間氏「西鶴の方法」は『軽口福蔵主』（正徳六年刊）を指摘する。この『軽口福蔵主』は、巻一の二「三里違ふた人の心」、巻三の二「元旦の機嫌直し」においても関連が指摘される作品であるが、岡氏

によって「「福蔵主」は改題本であるので、正確には、元禄十四年刊行の「軽口百成瓢箪」が二年前に出た「名残の友」の咄を利用したとすべきである。」と訂正された。

類話としては指摘の通りであって、琵琶を納めるものと秤の家の類似点に着目したところが新たな趣向となっている。しかも、全く見たことのないものだったので、「神代の秤の家」と、全く的外れな事を得意気に言ったという落ちまで付されているところが眼目となろう。

本話はおそらく三田浄久の『河内鑑名所記』から発想され、安原貞室の逸話としてまとめられたものと考えられるが、注目すべき点は意図的に描写をかえていることである。貞室に対する西鶴の評価は思いのほか高い。「惣じて和歌に心をよする人は、ゆたかに年月おくらずしては甲斐ぞなし。」「貞室程の作者、世のつねの発句なきにはあらず。世の沙汰にならざる一句はいと口惜と、此道に執心ふかき事を感じぬ。」と西鶴はいう。その評価の高さについては井上氏も言及しており、「貞室の場合は、いかなる場面においても「世の沙汰にならざる」ような句は作れないとする、「まこと」の俳諧師としての徹底したプロ意識が理想的に描かれて」いるという（4）。西鶴にとって貞室は理想的俳諧師の一人であって、批判の対象ではなかった。巻一に登場した俳諧師達と同様に、後続の者が憧れる人物であり、作品だけでなく貞室本人が人々の注目を集める存在であったと西鶴は捉えているのである。そしてそれは浄久が貞室を迎える場面で表現されたのだった。

『河内鑑名所記』には貞室が浄久亭を尋ねたとあるのだが、西鶴は浄久が貞室の旅宿を聞きつけて、「我宿の面目」だといって迎えたとしている。そして「近在の俳友、せめてはお皃成とも見たしと、浄久の門に市をなしぬ」と書いた。これは貞室の人気ぶりを表した表現であり、浄久の心酔ぶりも合わせて読み取れるよう作りかえた部分なのである。

こうした浄久の歓待に気をよくしたのか、「何がせかぬ貞室、京に帰らん事をわすれ」て初夏まで滞在する。この「何がせかぬ貞室」という言葉は、本話初めの逸話にある「ゆたかに年月おくらずしては甲斐ぞなし」と符合し、貞室のゆったりとした雅びな性質を強調する。そして雅びを主とする貞室とは明らかに対象的な、日々仕事に忙しい下女達の台詞「俳諧師といふものは、気のつかぬものにて、長あそびをする」を出してくるのである。

巻一の三「京に扇能登に鯖」で語られたように、本来俳諧師は「気のつく人」でなければならなかった。その俳諧師である貞室が、風流も何も関係ない下女にとっては逆に「気のつかぬ人」にされてしまうところに可笑しみがある。さらに前話巻三の一「昔たづねて小皿」で宗鑑に「中」と評された「長あそびの客人」が、ここでは貞室のこととなっていることにも注意すべきであろう。この部分を貞室批判とみるのは西鶴の意図からずれると考える。やはり立場違えば評価も異なるということ、たとえ貞室であっても、無風流の人にかかればこの言われようだという可笑しさを表したものと捉えたい。そして下女よりもさらに「ひとつも埒あかずども」であった小百姓達は、琵琶を「神代の秤の家」

と得意顔で言った。下女から小百姓の台詞へと畳みかけるように落ちへと繋げたのである。

最後に、三田浄久について述べておきたい。本話には貞室以外に了味と三田浄久が登場し、了味には貞室の門弟として同行者の役割を与えられている。浄久の役割は、巻一の一「美女に摺粉木」の正道と同じである。有名俳諧師に憧れる熱心な俳人の一人としての役割である。その描写に「老のたのしみ是ひとつと極めて、句の善悪にもかまはず、只題目のかはりに是ぞとのおもひ入、殊勝なり」という言葉があり、特に「句の善悪にもかまはず」と書くあたりは語弊があるようにもみえる。しかしそれは俳諧を志す者としてまだ貞室の水準に達していないことを言っているのであって、ここには批判の意味はないと理解する。「元禄元年八十一歳の高齢で、最後まで俳諧に執心しつつ没した浄久の事実を踏まえたもの」とする井上氏の言葉に従いたい。

なお、貞室が三田浄久宅を訪問したのは、明暦二年（一六五六）以前のこととされるが、本話の執筆時期は三田浄久が他界した元禄元年（一六八八）以降のこととする説にも賛同する（5）。本話における西鶴の意図は貞室を描くことにあって、浄久ではない。浄久をも持ち上げると中心がぶれてしまうため、浄久は貞室より一段下の求道者的位置に配置される必要があった。著書『河内鑑名所記』を知る西鶴に浄久を皮肉る意図はなかったと考えるが、やはり気を遣うところでもあったろう。浄久を本話に登場させるにあたって、没後であることがこのような描写を容易にしたと考える。

（1）『鵲尾冠』の本文は、日本俳書大系7巻『蕉門俳諧続集』（春陽堂　昭和3年）を使用した。

（2）井上敏幸氏『新大系』脚注。『河内鑑名所記』の本文は、上方芸文叢刊3『河内鑑名所記』（上方芸文叢刊刊行会　昭和55年2月）を使用した。

（3）冨士昭雄氏「西鶴の素材と方法」（『駒沢大学文学部研究紀要』27号　昭和44年3月）（『西鶴と仮名草子』笠間書院　平成24年に再録）

（4）『新大系』。

（5）（4）に同じ。

◆巻二の三　今の世の佐々木三良

本話は西鶴が伏見へ赴いた折の話としてまとめられている。

西岸寺の任口のもとを訪ねて長話をするうち、大坂へ帰ることを忘れてしまった西鶴は、ちょうど盛りなので宇治の蛍を見ようと、伏見の俳諧師である多門院の門加、兼松友世たちを誘って上林のもとへ行った。皆で付合をしつつ歩き、宇治橋の通円茶屋で休んでいると、元は信州の歴々で、今は伏見に住んで

いる山名外見という浪人も来合わせた。昨日の雨で濁った荒波をみて、佐々木・梶原が先陣を争った時もこのような荒波だったろう、今は渡ることのできる武士もいるまいと西鶴らが笑ったところ、負けず嫌いの山名外見が腹を立てて、自分も逆巻く宇治川を馬で渡ってみせると言い出した。腕に覚えのある外見は見事川を渡って喝采を得、「其時の佐々木、人間、我等も人の形を得たり」と得意そうに言った。その時、川岸で物を洗っていた老女がその様子をみて笑ったので、理由を尋ねると、佐々木・梶原が馬で渡った時は、対岸に敵が具足をつけて武器を持って待っていましたと言い、また笑った。

本話冒頭の一文が、『大坂独吟集』（延宝三年）に収載される鶴永独吟百韻の詞書に酷似していることは既に「西鶴の方法」で指摘されている。

○本文冒頭

都出て櫃川をわたり、心の行水につれて、伏見の里の日高く、茶筅売も見えず、酒商人も出ず、くだり舟待夕暮までの淋しさに、油掛の地蔵の立せたまふ、西岸寺の長老任口の許へたづね

○『大坂独吟集』鶴永独吟百韻詞書

伏見の里に日高につき、下り舟待ついとまありければ、西岸寺のもとへ尋ねけるに

西鶴が任口を訪問したのは寛文七年（一六六七）の初夏、西鶴が二十六歳の時のことであり、冒頭がその記憶をなぞるかたちで書き出されたことは間違いないだろう。本話は任口を懐かしむ意味で創作されたと思われるが、任口自身の逸話などは特に語られず、笑話の登場人物に置き換えられることもなかった。本話より前の話で紹介された俳諧師たちは前時代の存在であって、西鶴にとっては距離のある人々である。だから笑話中に取り込んだ形で描くことも可能であった。しかし、本話の任口は西鶴が好意を抱く知人である。いかに冗談であっても笑話の登場人物に置き換えることはできなかったのではないだろうか。ゆえに「たがひに世の物語りもめづらしく、難波に帰る事をわすれぬ」と交流の事実のみを語ったのである。そして伏見に縁ある俳友を登場させ、笑う対象そのものは山名外見という全く関係のない人物を設定したのだと考える。

西鶴と同道する多門院の門加は、『西鶴諸国はなし』巻一の五「不思議のあし音」にも描かれた人物である。『諸国はなし』も伏見での話となっており、「旦那山伏の多門院」と紹介されている。さらに西鶴の『古今俳諧師手鑑』に「伏見多門院　問加（ママ）」として句も載せられていることから、西鶴と直接交流があったのであろう。

兼松友世も伏見の人で、同じく『古今俳諧師手鑑』に載る。宇治上林は『名残の友』最終話巻五の六で再度登場する人物である。したがって、伏見で実際

に交流した俳友を西鶴は本話でまとめて紹介したことになり、そこには当然、揶揄と誤解されるような描写は見受けられないのである。

本話に組み合わせられた笑話は、俳友と同様に伏見との繋がりで選定されている。甲府館林侯の御付家老、黒田信濃守直相の話である。以下その本文をあげておく。

此の直相以前は源右衛門と云ふて御徒頭勤めける節、宇治の御茶御用にて上られし時き、宇治川を馬にて渡る。元より弓馬の達者なれば、なん無く向ふの岸へ上りて昔し佐々木梶原は名馬を賜はりて渡りしと聞けば名馬の力を借りて越したるなり。我は常の馬にて越えたり。さのみ渡りにくき川にも非らず。聞くと見るとはちがふ物なりと云はれしに、其側はらに茶つみの女大勢居たりしが、其中の年よりたる女云ひけるは、昔し佐々木殿かぢ原殿の渡し時は、川向ふに敵の大軍川の半途を射落さんと待ちかけたり。今殿の渡り給ふには川向ふに射落さんとする敵も無く、其上川下に数艘の船をあの通り並らべて御けが無きやう致し置ければ、佐々木殿かぢ原殿の渡りし時とはこと大に変れりと云ひければ、直相馬上ながら其女に向ひ、いかにも老女の云はるゝ如くなりと云ふて行き過ぎける。直相後までも此事を云ふて言慎しまずんば有るべからずと常々人に語られしと也。（本文は真田増誉著『明良洪範』国書刊行会　大正元年）

この話は『古老茶話』巻下や『明良洪範』続編巻二に載る事実譚で、古くは木村捨三、後に野間氏「西鶴の方法」によって指摘されたものである。野間氏は「信濃守を信濃浪人とし、茶摘女を物洗ふ老女に改めたものに過ぎない」というが、直相の話は本来偉人伝の一部なのであって、笑話ではない。賤しい茶摘女の老女に指摘されて、素直に反省する直相の実直さが語られた話なのである。これを笑話に作り替え、伏見での見聞として組み合わせたところが西鶴の趣向であった。

◆巻二の四「白帷子はかりの世」

『はなひ草』の奥書より始まる巻二の四は、その著者である雛屋立圃について書かれた一章である。西鶴は、まず「世の重寶草とて、そも／＼俳諧のいろは付、是を見ぬといふ事なし」と述べて立圃の功績を讃える。次に立圃を評して「連歌をしつて、句がらをやすらかに仕立られければ、俳言うとからず」と言い、それに比べて「連歌しらず」の「当流つかふまつる俳諧」は、「あさましし」と批判している。

立圃の俳諧について貞室は、

いかに俳諧なればとて、余り平懐に誹言ばかりを云散したるも無下也。すゑ／＼までも長く伝て、やごとなき方／＼の御遊の席過たる酒の折からは、興句にもなるやうに花車尋常にこそ句作りをしまほしけれと思はるゝ故に、連歌にすこし誹言をもたせたる句躰をすかるゝと見えたり。付合なども数を極置て新敷付合をせず。（『五条之百句』寛文３年自序）

と評しており、その俳風は堂上好みの安らかな連歌風であった。また、立圃には『連歌俳諧相違の事』といった俳論もある。西鶴は、そうした立圃の俳風を理解した上で、俳諧のあるべき姿を「古風・当風のまん中にありとしるべし」と説き、以前は自分も俳諧において「無用の吟味つよき事も有」ったと反省し、「世に長いきして、万むかしに成事を、ひとつ／＼おもひ出すもあはれなり」と昔日に思いを馳せていくのである。

以上のような内容が本文三分の二を占めているのであるが、ここまでは俳諧に対する西鶴なりの捉え方が書かれているといえよう（１）。

滑稽譚として読むべきは、その後の部分である。

其立甫も、つゐに船岡山のけぶりの種に、野辺のおくりをする時、諸方門弟、聞つけ次第に都にのぼり、死目にあいけるも殊勝なり。珠更京の弟子分は、昼夜枕に付添て、りんじゆの時迄見届ける。

爰に堀川の上に、広親とて、夫婦ながら立甫俳の弟子にて、けふ別れ事をかなしみ、女の身なれば、代りに手代葬礼に出しけるに、白帷子なければ、天蓋持の役も成難しといふ。かたびら二つ取出しいづれにても気に入たるを着て行といふ。時に腰元が、ひとつ借ましたひといふ。我は何にかするといへば、紅うこんの着物の上に是着て私も泣ますといふ。

この部分の落ちは当然最後の一文「紅うこんの着物の上に是着て私も泣ます」にある。しかし一体どこが滑稽なのだろうか。井上敏幸氏は『新大系』で次のように脚注をつけている。

白の小袖、袴が喪服（いろ）であるが、当時既に喪服一式を貸す店があり、貸喪服屋（かしいろや）と呼ばれた。腰元が喪服を色に取り違えている所が滑稽である。

この解釈によれば、腰元が「喪服（いろ）」と「色」を間違えて、「紅うこん」と言ったことが可笑しいのだということになる。つまり腰元の無知を笑いに仕立てたと見るのである。確かに、愚者の無知を笑うという落とし方は、咄本等で多用される方法であり、本書『名残の友』でも使用されている方法ではある（２）。しかし、今ひとつ納得がいかない。何故腰元は「紅うこん」という色の着物に白帷子を着なければならないのだろうか。そこには何らかの意味があったのではないか。試みに、もう一つの解釈を提示してみようと思う。

まず後半の内容を捉えながら考えていく。立圃の弟子であった広親夫婦は、立圃の葬儀に参列することにした。しかし広親の女房は「女の身」であるため、

代わりに手代を葬礼に出そうとする。手代は「白帷子を持っていないので、天蓋持ちの役を務めることもできません」と訴えた。そこで広親夫婦は白帷子を二つ取り出し、「どちらでも気に入ったのを着て行きなさい」と言ったという。

ここで、白帷子に関して、若干の説明を加えておきたい。現代では葬儀に黒色を用いるのが一般的であるが、江戸時代は白色を用いていたようである。ルイス・フロイス著『日欧文化比較』によると

我々は喪に黒色を用いる。日本人は白色を用いる（第一章　30）。

とあり、喪服の色の違いを、西欧と日本の違いとして挙げている（3）。これについて、岡田章雄氏は次のように解説する。

ヴァリニャーノは「白色はわれわれにとって楽しい、喜ばしい色である が、彼ら（日本人）にとっては喪の、また悲しみの色である。彼らは黒色と桑実色とを楽しい色としている。」といっている（Boxer, The Christian Century In Japan, p77）。　白色と黒色に対する東西の風習の対照が興味をひいたのであろう。喪服については、鎌倉・室町時代には武家の間で、鈍色（薄墨色）に染めた此貝布〈さよみのぬの〉（細く紡いだ麻糸で織った布）の素服が用いられた。江戸時代には男は麻上下、長上下、熨斗目上下、女は白無垢に白い帯を着けた。

喪服は元来、華美を避けることを主としたので、白色のものを用いるようになったのであろう。慶長十五（一六一〇）年細川幽斎の葬礼の記録によれば、辻堅の士はすべて白の小袖に上下、服従の者は無紋の羽織、舎人は烏帽子に白の素襖、故人の愛馬には白い手綱をかけ、総体を白い馬絹で蔽い、また弓、鑓、長刀、太刀、骨箱なども白絹で包む。女中、女房等は白の絹をかずいていた。喪主忠興は鈍色の束帯であった（4）。

つまり江戸時代の喪服は白だったのである。故に葬儀に参列する手代が「白帷子」を必要としたのも当然であった。では、腰元が「白帷子」を借りたいと言ったのは何故なのであろうか。まずはそこを考えねばならない。

井上氏の解釈では、腰元もまた喪服を必要としたという意味になる。だが、腰元は広親の女房と同様「女の身」であるから、立圃の葬儀に参列するはずはない。腰元は誰の葬儀に出ようというのだろうか。参列はしないが喪服を着て一緒に悲しみたいという意味なのか。いずれにせよ、腰元が喪服を必要としたという解釈では、あまり滑稽とも思えないのである。では、彼女が望んだのが喪服ではなかったと想定してみたらどうだろうか。

葬礼以外で「白帷子」が必要になる場合といえば、やはり祝言が浮かぶ。『女重宝記』巻二の一「祝言の次第」には

女は父母の家を家とせず、夫の家をわが住家とする故に、夫の家に帰といふ義にて、帰ともいふなり。されば、死たるものは、ふたゝび帰らぬ習なれば、嫁入してはふたゝび父母の家に帰らぬといふ縁をとりて、輿、乗物を蔀より出し、門火をたき、塩と灰とにて、打ちいだす事の死人のまねびをする事、上／／方にも有事なり。祝言のめでたき首途に死人のまねびをして咒といふは、よく／／帰ことを忌む故なれば、嫁入の女中は舅・姑に

孝行をつくし、夫を敬ひ、下／＼の者をあわれみて、帰らぬ様にたしなみ給ふべし。

という記述が見られ、結納の際に白の小袖と表紅の小袖を送り、祝言でこれを着るのだと説明している（5）。祝言で白色を用いる点については、別の解釈もある。

婚礼に白き小袖を用る事、葬礼の学び也と、今世上にいふ人あり。甚あやまり也。葬礼に白色を用るは、悲しみの時なれば美麗彩色をもとめず、物をかざらざるを本意とする故也。婚礼に白色を用るは、婚礼は人倫の大本、白色は五色の大本也。故に白色を用る也。用る所の白色は同じけれども、本意は同じからざる也。又産の時白色を用る本意も婚礼に同じ。（『貞丈雑記』三）（6）

このように、そのいわれがどうであれ、婚礼に白色を用いていたことは確認できる。現代の白無垢もそうした流れを受けているわけである。婚礼当日は紅梅の練貫などの上に白小袖を着ていたらしく（7）、また、夏中の婚礼では白帷子を用いていたという（8）。つまり江戸時代には、「白帷子」は葬礼・婚礼のいずれにも使われていたことになる。

ここで、今一度本文に戻り、「落ち」にあたる腰元の言葉を考え直してみよう。手代が白帷子を借りたいと申し出て、広親夫婦が帷子を二つ取り出した。その時、すかさず腰元が「私も一つお借りしたい」という。広親夫婦は不思議に思って、お前は何に使うのだと聞く。すると腰元は「紅うこんの着物の上にこれを着て、私も泣きます」と言う。つまり、嫁入りの時にこれを着て、私も泣きますと言ったのである。

このように解釈した場合「私も泣きます」の「泣く」が、百八十度異なった意味で使われていることになろう。広親夫婦と手代が葬礼の相談をしている際に、私もこれを借りて嬉し泣きをしたいと言ったとすれば、この腰元は相当とぼけたことを言っていることになる。葬礼の準備に便乗して借りたいといっているのだから、なかなか抜け目のない腰元だといえる。しかし腰元自身にしてみれば、立圃と交流があったわけでもなく、故に葬儀もそれほど重要ではなかったわけで、出されていた「白帷子」を見て、自分の祝言を夢見てしまったとしても怒るに怒れないのではないか。

巻一の三「京に扇子能登に鯖」に、貞徳のことを「諸国の目安の談合いたさるゝ分別者」と思い違いしていた銭店の主人がいたが、この腰元も彼と同じ種類の人間だったのである。俳諧や芸道とは無縁であった人間の、突飛な発言や行動は笑いを誘う。この話の落ちも、そうした笑いなのではなかろうか。

さらに付言するならば、本話の落ちを嫁入りと捉えた時、西鶴の発想がどこから来たのかも考え合わせることができよう。立圃の職業は「雛屋」であった。雛とは嫁入りを模した人形であり、また嫁入り道具でもある。また、「天蓋」の存在も、嫁入りの情景を連想させるに十分だった筈である。「雛屋立圃」の話に嫁入りの落ちを付けたのも、こうした発想から生まれた趣向の一つだったと考えることができる。

（1）本話前半にある雛屋立圃の紹介文から読み取れる西鶴の俳諧観については、井上敏幸氏と水谷隆之氏の説が参考となる。井上氏は『新大系』の解説で、当該部分を「元禄時代流行の俳諧を激しく非難している」と解釈し、続けて次のようにいう。

貞享から元禄にかけて流行した景気の句は、蕉風の成立をうながし、西鶴のいう俳諧は、和歌・連歌とは全く相容れない、眼のさめるような作意と見立による笑い、或いは軽口によって笑い尽すものでなければならなかった。こうした俳諧観を持つ西鶴によって、現代流行のまるで連歌のような俳諧は、まさに「あさましき事」、あきれ果てて物もいえない体のものだったのである。「連俳のわかちなくては、何を以て俳諧と申べきや」という口調には、理解できない故の憤りさえもが感じられる。

水谷隆之氏は原文を提示しつつ「立甫は連歌をしつて、句がらをやすらかに仕立られければ、俳言うとからず」に傍線を引き、

その裏を返せば、「句がら」を「やすらか」に仕立てるのは良いが、そうすると「俳言」が担う〈俗〉の意味がいっそう重要になる、連歌に通暁していればそれを相対的に理解できるが、当流の俳諧師たちは連歌を知らぬゆえ、「俳言」の「うとさ」が目立っている、との批判として捉えられる。―中略―奇抜な俳言を使わなくなった当流のおだやかな連歌風俳諧において「興有る」句作りを実現するためには、俳言のもつ意味とそれが句にもたらす作用へのよりいっそう深い理解が不可欠であるが、当流の俳諧師にはそれがないと言うのである。西鶴が『俳諧のならひ事』に、「俳言つよく、然もやすらか」なる俳諧がよいという、一見矛盾する主張をしていたのもこのためである。すなわち、当時の西鶴は、当流の「やすらか」なる句体そのものは受け入れたうえで、しかしそれによって目立つようになった「俳言のうす」さ――現実性、通俗性のよわい俳言の弊を問題としているのだといってよい。

と述べている。両者の説を参考に筆者の思うところを述べれば、本文中には西鶴自身の反省を含めた言葉があり、「古風」から「当風」へと俳諧が変化してきたことを冷静に思い返す様子が語られている。したがってそこには「激しい批判」ではなく、当流の句体そのものには理解を示しながらも、それを真に理解する者が少ない今を危惧する思いが表されているのだと考える。

（2）『西鶴名残の友』巻一の三・巻二の二なども同様の方法が用いられている。

（3）岡田章雄氏訳注『ヨーロッパ文化と日本文化　ルイス・フロイス著』（岩波文庫　平成3年6月17日　原訳書『大航海時代叢書』XI（昭

和40年9月13日刊）を文庫に収めたもの。）

（4）（3）に同じ。

（5）『女重宝記』の本文は現代教養文庫1507『女重宝記・男重宝記　元禄若者心得集』（長友千代治校注　社会思想社　平成5年11月）を使用した。

（6）『貞丈雑記』の本文は故實叢書第1巻『貞丈雑記』（明治図書出版　平成5年6月）を使用した。

（7）「はだ、そのうへに、こうばい、そのうへに、ぬひにてもはくにてもしろあや、もんはさいはひびし、かづきはしろをりもの」（伊勢貞陸著『嫁迎嫁入記』　国会図書館蔵本）

（8）「六月朔日より肌に白帷子をめし、其上に同じく白帷子をめし、帯をして、こしまきをめし、白練のかづきをめし候。」（伊勢貞丈著『婚礼法式』上　明和2年成　東京国立博物館蔵本）

◆巻二の五「和七賢の遊興」

本話は在原業平の和歌「世の中に絶て桜のなかりせば」を冒頭に引用し、禁野に住む蒲釼の紹介へと進んでいく。

蒲釼は禁野に隠遁する僧だった。法師でありながら髭も伸ばし放題で唐人のような姿をしていた。折々に発句を詠みながら何事にも構うことなく七十余歳の日々を過ごしていた。ある時、諸国の俳諧師が偶然一度に蒲釼を訪ねたことがあった。和州の正式、大坂の秋月、武州の未得、京の春可、伏見の道甘、備前の胤及、そして亭主の蒲釼の七人は竹林で酒興にふけるが、それこそ和七賢のようである。酒が足りず困っていた折、片山里の親仁二人が馬に酒樽をつけて通った。蒲釼らの事情を聞いた親仁たちは酒樽を下ろして一緒に酒を飲みはじめた。大いに酔った親仁たちは乗る馬を間違え、そのまま馬に任せて帰っていった。別の親仁の帰宅に驚いた家人が後で親仁を取り替えに来たという。

蒲釼の住む交野の禁野から連想して『伊勢物語』第八十二段の桜狩を冒頭に置き、蒲釼を紹介する。『伊勢物語』第八十二段は、周知の通り、惟喬親王と紀有常、在原業平が水無瀬離宮に赴いた際の段である。三人は渚の院の桜の美しさを愛でて酒宴と詠歌に一日を過ごし、帰り道では天の川のあたりで宴を催し、離宮に戻っても歓を尽くしたという。つまり交野での宴会が文学的伝統として理解され、西鶴はこの伝統にのっとりながら、本話を展開していくわけである。

酒盛りということになると、当然のこと竹林の七賢が想定しうる。『連集良材』は竹林の七賢を解説して、「晋ノ世ヲ去テ竹林ニ琴詩酒ノ三ヲ友トセシ人也」という。交野周辺は桜の名所でもあるが、竹林も多い。京都西から大阪へ

の間に位置し、今も山に入れば竹林を楽しむことができる。竹林と文学と酒とが揃いになる対象として「竹林の七賢」が連想されたのは自然のことであろう。そして蒲釼をはじめ正式・秋月・未得・春可らは俳人であるわけで、詩を俳諧に置き換え、七賢に擬したのである。これらの俳人たちがどのように選定されたかは明らかでない。諸注も特にその具体をあげていない。可能性としてあげるなら、『古今俳諧師手鑑』（西鶴編　延宝四年）であろうか。本話登場の俳人すべてが句を採択されており、その活躍時期は西鶴からみて一世代前の人々なのである。試みに、その句を列挙してみる（数字は『古今俳諧師手鑑』の通し番号）（1）。

○蒲釼（河内交野）　禁野　釈蒲釼
　136　闇に出梟や月の鼠とり
○正式（大和郡山）　和州郡山　池田正式
　27　老か身のしろせめよするせいほ哉
○秋月（大坂）　大坂　片山秋月
　114　なかめやる月や心のかよひふね
○未得（江戸）　江戸　石田未得
　24　あひぬれは今肌涼しなかれ川
○春可（京）　京　織竹毫齋春可
　19　松に藤かゝるめてたき齢かな
○道甘（伏見）　伏見　富（高）瀬道甘
　74　幽なは身のひけしたる蛍哉
○胤及（備前）　備前　岡本胤及
　63　ちる花もまててふや菊の霜掩ひ

本文に「国里をへだてし俳友」とあるように、それぞれ別の地域から集まった俳諧師であることが確認できるが、『古今俳諧師手鑑』二百四十六人の中から彼らを選んだ理由は判然としない。実際に交流があった可能性もないわけではないのだが、寛永年中（一六四二～一六四四）に没したという春可がいることを考慮するとそれも難しいか。先に述べた通り西鶴の一世代前で交流可能な時期の人々を選んだとも考えられよう。

末尾の馬を乗り違える話は、『新大系』で指摘される通り、諺「老馬道を知る」（他に「老馬の智」「馬に道まかす」「老いたる馬は道を忘れず」などともいう）が発想の元であろう。『韓非子』説林上篇にあって、『蒙求』「管仲随馬」で知られたものである。確かに、引用例は枚挙に遑無く、『平家物語』や謡曲「遊行柳」にもみられる。ただし、これらの利用は笑話としてではない。桓公一行が道に迷った際に管仲が「老馬之智可用也。」と述べ、老馬に従ったところ、事なきを

得たというものである。これを笑話に仕立てたところに趣向があった。これについて『新大系』脚注は次のように解説する。

本話は「親仁が替りました」で落ちとなるが、この落ちを導くために西鶴が用意したのは、「老馬道ヲ知ル（馬ニ道マカス）」だった。この諺は、韓非子・七に出て、蒙求の「管仲随馬」で広く知られていた。落ちへの展開は、酒を飲み尽くした和七賢のそばを、「親仁二人」が「我馬にのりつれて」通りかかった時に始まり、この二人が馬を乗り違えた所で装置は完了していたといえる。

井上氏が指摘される通り、まさに馬を取り違えるところに笑話たる所以がある。この酩酊して前後不覚になるという筋は、『世説新語』任誕第二十三に紹介される「山季倫」なども関係するか。「山季倫」は泥酔して馬に乗って錯綜したと書かれている。「竹林の七賢」の話は『世説新語』で知られているので、同書に載る話が発想に影響していた可能性はある。

なお、本話で描写される蒲釼の姿は、「唐人のごとし」で、「白髪まじりの髭ぼう／＼として」さながら「捨坊主」と描写されている。つまり竹林の七賢もこの段階においては乞食坊主という印象で捉えられていたことを指すのであって、隠者像の日本的展開として興味深いところである。また、日本的伝統（交野の禁野）の発想と中国種の「竹林の七賢」の話が矛盾なく融合されており、その融合が俳人の逸話として再編成されているところに創作方法の妙をみることができよう。

（1）　本文は『定本西鶴全集』巻十巻（中央公論社　昭和29年12月）を用いた。

◆巻三の一　入日の鳴門浪の紅ゐ

本話前半にある阿波の鳴門見物は西鶴の経験に基づいた話で、元禄元年～三年のこととされる（1）。まず梗概を提示しておく。

冬の海荒い時期に、阿波の鳴門を見ようと誘われ、淡路島を経由して徳島へと赴いた。葎友・釣寂・吟夕と共に俳諧を興行した後、鳴門を見に出かけたが、すさまじい景色に驚いた。里の海士というところに西行が休息したという草庵があり、ゆかりの煙管筒、火うち袋、覚書一冊を見学した。その浜辺伝いに物寂しい庵があって、ちょうど霰が降り始めたので頼ろうと近づき中を覗いたところ、由ありげな老女が書物を読んでいた。その様子がただごとでなく、恐ろしさを感じた一行は無言で立ち退いた。話に聞く清少納言の亡魂であろうかと、小者を再び見に行かせると、庵はすでに消えていた。阿波の城下には「源氏祖母」と呼ばれる乞食がいたが、その老女は狭衣・枕草子・伊勢物語を注まで暗記していた。風雅な芸を持ちながら、乞食をしているのにはわけがあ

るという。この老女は雲行きを見て数日先の天気を当てる能力があったので、肥後の人が彼女を自国へ連れ帰ったところ、老女は「淡路千光寺山はどこか、その山の雲行きを見なければ日和はわからない」といったそうだ。

西鶴の阿波旅行に関しては、野間光辰氏が元禄三年（一六九〇）十一月（元禄一ないしは二年の十一月・十二月の可能性も示唆）と推定した（1）。しかし、谷脇理史氏は『武道伝来記』巻七の三を根拠に阿波旅行を貞享三年（一六八六）以前とし（2）、石川了氏は谷脇説に賛同している（3）。ともに状況証拠をよりどころにするが、本話に関して言えば、西鶴がいつ足を運んだかということよりも、阿波に対する西鶴の認識の方が重要である。近年紹介された西鶴自筆の「磯崎松画賛」（4）は、本話を分析するのに興味深い情報を提供している。画賛には「むかし西行法師世の中をわたりくらべて、阿波の海門を越て、磯崎といふ所の松に〈又も来て見ん〉と読残れる一木は、今に其葉色の替る事なし云々」とあり「里の海士足袋はくすがた見る世かな」の句が録されている。この行文は、本話の「里の海士といふ所、〈又も来て見ん磯崎の松〉と、西行法師が読残せしも、まことにおもしろの気色や」と密接な関係を持っていることは説明するまでもない。要するに、西鶴の脳裏には阿波に対する一定の印象があって、繰り返し使用されていたということなのである。

本話は三つの逸話で構成されており、西行・清少納言・源氏という、古典作家の連想で展開しているところが注目される。西行の逸話については、『撰集抄』巻四の七「明雲僧正藤野ノ浦二隠居ノ事」をふまえているとする井上敏幸氏の指摘がある（5）。確かに一部に文章の類似がみられ、西行が阿波の国に赴いたことは、『撰集抄』巻一の七「新院ノ御墓白峰ノ事」や『西行物語』「白峰参拝」等を考慮して、納得のいくところである。西行の残した覚書などの趣向は、『西鶴諸国はなし』の序文にいう「頼朝のこづかひ帳」などの発想と類似しているわけで、西鶴一流の諧謔と解してよかろう。

続く清少納言の亡魂に関しては、定本西鶴全集で『遠碧軒記』（延宝三年序）を（6）、『新大系』では『撰集抄』巻七の一「唐ノ亭子ノ事」を典拠としている。『撰集抄』の方は「けだかくらうたき女房」が書物を読んでいるのだが、『名残の友』の方では「年の程は見定めがたき老女」に転じられている。このような清少納言の落魄伝説は広く知られていた。零落した清少納言について、『無名草子』は「檜垣の嫗の娘」と書いているし、『古事談』第二では鬼女のような形相の尼姿で描いている。さらに北村季吟の『春曙抄』にも四国流浪伝説が紹介されているわけで、一般的に知られていた話を使ったと考えられるのである。つまり清少納言の四国流浪伝説と老女伝説とが合体すれば西鶴の描く世界は自ずからできあがるのである。ただし設定の趣向は『撰集抄』巻七の一に準拠しているとみたい。

この清少納言に対して、「源氏祖母」を持ってきたところは、平安期の代表的女流作家で照応させた趣向と解釈できる。「源氏祖母」については、野間光辰氏が指摘するように（7）『二葉集』（延宝七年刊）の付句「六条まいり源氏のば

ゝかと肝をけし」の用例に徴して、当時有名であったらしいとする注釈書が多い。しかしこれについては再度検討してみる必要がある。付合の全体を掲出してみる。

一むらの鷺たつな東西
六条まいり源氏のばゝかと肝をけし　西友（8）

前句の「一むらの鷺たつ」から付句の「肝をけし」が引き出され、前句の「東西」から源平の合戦の「源氏」が導き出される。平家の武将が飛び立つ水鳥に驚いて退散する「富士川」の場面は有名で、謡曲「清経」にも「白鷺の群れゐる松見れば、源氏の旗を靡かす多勢かと肝を消す」の文言もあることも考えれば、「鷺」から「肝をけし」の言語連想には必然性が見て取れよう。以上のような連想から前句と付句は構成されているのである。そして付句の「源氏」を『源氏物語』の「源氏」と取りなせば、当然のこと六条御息所が出てくる。謡曲「葵」の「はなやかなりし身なれども、衰へぬれば」の文言からもわかるように、六条御息所から年増を意味する「ばゝ」の連想も可能になるわけで、この言語構成をもって偶然的に発生してきたのが「源氏のばゝ」ではなかっただろうか。この言葉をとらえて、「当時著名だったらしい」と評するのには問題があると思われる。「源氏ばゝ」の実在を指摘するのなら、より多くの用例を重ねていく必要があろう。

なお、日和見の件に関して、『閑田次筆』（文化二年）に類話があることも指摘されているが、これは『名残の友』の影響と考えられる。

（1）　野間光辰氏『刪補西鶴年譜考証』（中央公論社　昭和58年11月）
（2）　谷脇理史氏「西鶴―その作品に見る旅」（『解釈と鑑賞』55巻3号　平成2年3月）（近世文学研究叢書1『西鶴　研究と評論』　若草書房　平成7年5月再録）
（3）　石川了氏「特集　元禄の小説　西鶴鳴門観潮行臆説」（『江戸文学』23　ぺりかん社　平成13年6月）
（4）　天理ギャラリー特別展『天理図書館貴重書展―近三十年の蒐集から』（天理ギャラリー　平成13年11月）
（5）　井上敏幸氏『『西鶴名残の友』管見」（『語文研究』66・67号　平成1年6月）
（6）　『定本西鶴全集　第九巻』（中央公論社　昭和26年）頭注。
（7）　野間光辰氏「西鶴の方法」
（8）　『二葉集』の本文は古典俳文学大系3『談林俳諧集1』（集英社　昭和46年）を使用した。

◆巻三の二　元旦の機嫌直し

本話は全体の三分の二を占める前半部分を菱屋重好の逸話として描き、後半三分の一で高崎玄札を紹介する形となっている。

京で絹商売をしていた菱屋は俳諧を好み、俳号を重好といって大発句帳にも名が載った人である。その妻は歌道に通じた宮仕えの美しい女で、常に紫の衣装を着ていたことから「絹屋の紫式部」と呼ばれていた。俳諧と妻のために家業がおろそかになった重好は次第に貧乏になってしまう。宝船を描いた紙を枕の下に敷いて寝たところ、夫婦は初夢を見た。妻は都の富士に煙が絶えて薪の黒木を小刀で割る夢を、夫は駿河の富士ほどの白米と田子の入海ほどの若布汁という夢を見た。安部晴明に占わせたところ、急いで江戸へ下って稼げという。重好は占い料を出世払いとし、その十二文を賽銭に使った。江戸で身代を立て直した重好は、ある年の初夢に「蔵の内にてなく声ぞする」の句を見た。これを気に病んで床についていた重好の所へ高崎玄札が挨拶に来たので、早速妻は相談した。玄札が「貧神大黒殿にたゝかれて」と付けたのを聞いて重好は元気になった。

前半部の重好の内義が「絹屋のむらさき式部」と称されている部分は、巻三の一「入日の鳴門浪の紅ゐ」の末尾と関係していると思われる。前章の「源氏祖母」から「絹屋のむらさき式部」が繋がっており、さらに「源氏祖母」の話が天気占いであったのに対し、本話の方は夢占いになっている点も照応している。巻三の一と巻三の二の間には、ある程度の傾向をもって話を配列しようとする意識が看取できる。

都における夢占いの類話として、『醒睡笑』巻六の三十八「児の噂」、『昨日は今日の物語』上の七十、『わらひくさ』上巻の六、『軽口露がはなし』巻五の七が岡氏によって指摘されている。空腹のあまり富士山や三上山などが飯であったらよいと願う笑話である。他にも『仁勢物語』など多く類話はあって、『新大系』はこの発想を「広く知られたもの」としている。

後半部の「高崎玄札」の夢解きに関しては、『鹿の巻筆』巻三の七「夢想の読みそこなひ」が野間光辰氏によって指摘されている（1）。また、『新大系』は『百登瓢箪』（元禄十四年刊）に焼き直しがあるという。ただし、句型に若干の違いがあり、前句と付句が逆転している。付合そのものは『犬筑波集』（天文八～九年頃成）と『物種集』（延宝六年刊）に見えるが、『新大系』が指摘する『物種集』の用例が本話の元であろう。

『犬筑波集』

蔵の隅にも泣く声ぞある（2）

大黒に貧乏神のたたかれて

『物種集』

蔵の内にはなく声ぞする

貧乏神大こく殿にたたかれて　　高崎玄札（3）

作者名「高崎玄札」の一致、前句と付句との関係等を考慮すれば、『物種集』を横に置きながら執筆していると推測される。『物種集』は西鶴編の俳諧付合集であるから、もともと西鶴にとっては同付合が頭にあったのであろう。高崎玄札を描こうとしたときに、この付合がまずあって、先行の笑話を組み合わせたと考えられる。

菱屋重好については詳細が分かっていない。重好という名は『鷹筑波』（西武編　寛永十九年刊）、『毛吹草』（重頼編　正保二年刊）、『毛吹草追加』（重頼編　正保四年刊）などに見えるが、同一人物かどうかは未だ明らかでない。俳号に重とあるので重頼門であったか。

高崎玄札の逸話は『滑稽太平記』（写本　延宝七年頃成）に詳しい。もともとは伊勢山田の人で、江戸へ出て医師となったが、医師より俳諧の方が勝っていたので、添削を業として過ごしていたらしい。巻一の四の斉藤徳元、巻二の四の雛屋立圃とは懇ろだった時期があり、三人の三吟百韻『若狐』（承応元年刊）で世間に知られていたという。失敗譚も一部あるものの、おおよそはその活躍を伝えている。この『滑稽太平記』は貞門俳人の伝記であるが、その書名の通り、俳人間の確執が多く記された俳書である。写本のみであるから西鶴が目にしたかどうかは不明としかいえない。ただ、『名残の友』の宗鑑、貞徳、貞室、立圃、正式、玄札、徳元、成安、未得、立志、休甫と登場人物が重複するうえ、妙句や機転を描いた滑稽ともとれる話が多いことなどを勘案すれば、本書執筆の動機の一つであった可能性もあろう。

（1）　野間光辰氏「西鶴の方法」
（2）　『犬筑波集』の本文は古典俳文学大系1『貞門俳諧集1』（集英社　昭和45年）を使用した。
（3）　『物種集』の本文は古典俳文学大系3『談林俳諧集1』（集英社　昭和46年）を使用した。

◆巻三の三　腰ぬけ仙人

本話での描写対象は藤井徳庵である。

変わった身なりをしていることを「しゃらくさい」というのは、藤井徳庵の俳号「社楽」からはじまった冗談である。泉州堺の藤井徳庵は変わった人だった。髭は伸ばし放題、唐織を着て奥座敷に閉じ籠もり、仙術を会得しようと三年あまりを茫然と過ごしていた。ある日、鳥たちが自分の手から餌を食べる様子をみて、自分は仙人になったと思い込み、秋の夜に二階蔵の屋根から住吉の方へ向かって飛び降りた。棒樫の枝をこすり捨石の中に落ちて腰を抜かした徳庵の呻き声を聞き、人々が駆けつけた。俳友たちが見舞って「先へうたん酒を

呑給へ」とすすめると、まだ仙人のつもりだった徳庵は「其瓢箪から馬（こま）は出ぬか」といった。

本話は、岡氏の指摘によって、『はなし大全』上の十二「仙人のしならひ」、『十訓抄』七「思慮を専らにすべき事」、『浮世物語』巻五の七「浮世房蛻たる事」の先行三書に類話があることが知られている。このうち最も近いのは『十訓抄』という。場所、修行期間、かすめた木、腰打つ石または巌、人の見舞い、玄宗の話が引用される点など、随所に共通点が見いだせることから、「『名残の友』の咄は『十訓抄』に基づいた」とされた。そして俳諧師と咄との結びつきについて次のように論じている。

『十訓抄』の咄を、人間でありながら仙術を行なおうなどとしゃらくさい（傍点は原文のまま）じゃないかと批評（批判ではなく洒落の精神で）を下し、社楽こと藤井徳庵を持って来る手法は巧みである。既に俳諧師中間の間で徳庵をしゃらくさいと云っていたのか或は作者の洒落であったのかは分明ではないが、この社楽と『十訓抄』の結び付きこそ作者の自慢であったと云えよう（なお、この咄の焼直しに『浮世親仁形気』巻三の二の咄がある）。

氏の指摘に異論はなく、諸注もこれを踏襲する。話の基本形はこの『十訓抄』に準拠しているとして、途中で引用される玄宗皇帝に関する部分に関しては、『新大系』が指摘するように、『堪忍記』巻四の十四「職人の堪忍・六」によったものである。

『名残の友』
されば唐土の玄宗皇帝は、音律の名人にて、二月の初に花の咲ぬ事をおそしと、楼臺にのぼり鞨鼓うち給へば、余寒払つて梢の花開色見せけるとなり。

『堪忍記』
又玄宗皇帝は、音律の上手にて、二月のすゑに花咲きし事をそきを待かね給ひて、たちまち余寒をはらひ、春の気あたゝかにきざして、梢の花ぶさひらけしとかや

『名残の友』
又鄒燕は篳の妙を得て、六月に冬の調子をふきて霜をふらせし事も語り伝へり。

『堪忍記』
もろこしの鄒燕といふ人は、篳篥に妙をきはめ、六月に冬の調子を吹ぬれば、たちまちに霜をふらしたり（1）。

以上のように、本話の場合、その基づく作品がすでに明らかにされているといってよい。さらに井上氏は「堺と住吉の距離的近さから、住吉より生駒山へ毎日通ったという生馬仙人のイメージをかさねたもの」とも指摘する（2）。『諸

国はなし』巻二の四「残る物とて金の鍋」に生馬仙人が登場することは誰もが思い浮かぶところであるし、生駒山が仙人や通力と深い関係を持つことは、摂津周辺に住む者なら当然知っていたはずであるから、これも納得のいく説である。本話最後にある諺「瓢箪から駒が出る」も、元は「思いも寄らぬ事が事実となってあらわれる」「ありえないはずのこと」（3）を意味するが、ここでは生馬仙人のように必要な物を吹き出してみせる意味も含まれていて、自分の仙術によって何かありえない物が瓢箪から出ないかと、こんな状態になっても仙人の心を忘れていない執心を笑っているのである。

この仙人について井上氏は、『合類大因縁要文』巻十一の一「上樹仙人」との関係も指摘しているが（4）、こちらは本話との関係というより挿絵との関係と限定した方がよいようである。

なお諸注は藤井徳庵の逸話に関して、『志不可起』（享保十二年成）六下および『譬喩尽』（天明七年成）七を紹介する。これは『西鶴名残の友』からの転用と考えてよかろう。

俳諧師について述べておくと、本話に登場する成安・成之・顕成はみな堺の俳諧師であって、『古今俳諧師手鑑』に取り上げられた人物である（5）（数字は『古今俳諧師手鑑』の通し番号）。

藤井徳庵（玄柳　徳庵　社楽）

一五九九～一六六〇　堺の人　200　木の春や梅松か枝の金盞銀

成安（正法寺成安）

一五八二頃～一六六四　堺の人　37　花は昼もあふなき風の扇子哉

成之（池嶋宗吟）

生没年未詳　堺の人　119　白雨や所によりてかは草履

（成之編の俳書『塵塚』が寛文十二年刊であることから、没年は一六七二年以降か。）

顕成（阿知子林奄）

一六三五～一六七六頃　堺の人　73　紅葉丶や北は南は三の秋

生没年などからみて、ほぼ同時代の人物と考えられ、徳庵の見舞いに訪れたことにしても不審に思われない人々を採択したことがわかる。また、巻二の五「和七賢の遊興」の構図とよく似ている点を指摘しておきたい。巻二の五と本話いずれも、『古今俳諧師手鑑』に載せた俳諧師の中から、ほぼ同時代と思われる人々を登場させており、その主人公となる蒲釧・徳庵も、唐人めいた風貌と似通った描写になっている。この唐人めいた風貌は、世間にかまわぬ隠者という一定の印象となっているので、西鶴の中の隠者像がこうした風貌だったのであろう。

西鶴は、藤井徳庵の話として創作する際に、同時代同地域の俳諧師を選んで

おき、彼らを一つの笑話の中で動かして見せたのである。こうした方法が何度か使われていることに注意する必要があろう。

（1）『堪忍記』の本文は近世文学資料類従仮名草子編『堪忍記』（勉誠社昭和46年）を使用した。

（2）『新大系』脚注。

（3）鈴木棠三氏・広田栄太郎氏編『故事ことわざ辞典』（東京堂出版　昭和51年5月）

（4）井上敏幸氏「西鶴文学の世界―中国文学とのかかわり」（松田修氏・堤精二氏編『講座日本文学　西鶴上』（至文堂　昭和53年1月）

（5）生没年は前田金五郎氏「地方俳壇としての堺」（『国語と国文学』34巻4号　昭和33年4月）、永野仁『堺と泉州の俳諧―泉州俳諧史の研究』（大阪経済大学研究叢書　新泉社　平成8年3月）を参照した。

◆巻三の四　さりとては後悔坊

本話は、団水加筆の疑いが何度も取り沙汰された曰く付きの話である。まず内容を確認していく。

何事も人によって風俗が変わるのも面白いことである。

連歌師の牡丹花肖柏は牛の角に金銀箔を施して赤い綱を引き、あちこち乗り回していたが、人柄ゆえにそれを笑う人はいなかった。津田休甫は赤い女小袖を着て大坂の町中を通っても、道者の徳があるから誰も気にしなかった。これらは行動が自然であるから可能なのであって、人が真似てもできることではない。讃州の一三子は瓢箪好きで十数個を腰に付けていたが、一つで済むとかどうかではなく、それが物好きというものなのだ。江戸の松尾桃青は諸国を修行し、人の批評もかまわず俳諧に専念している。

「今時の宗匠一体子細らしくせぬはなかりし。何とやら目立けれども、面々の身なれば、無用の異見も成難し」

俳諧を少しかじった商売人を、若い者たちがおだてて宗匠とした。剃髪させて妻とも別れさせたのに、肝心の門人を一人も取り持たなかった。男は生活の手段もなくなり、髪が伸びるまで花火線香を売っていた。秋から先はどうなったかわからない。

牡丹花肖柏の逸話については、類似記事が『本朝遯史』（寛文四年刊）巻下に「ソノ洛中・洛外ヲ経歴スルヤ、牛ニ騎リ、金箔ヲ以テ牛角ニ塗ル。見ル者コレヲ怪ミコレヲ笑フ。肖柏恬然（テンゼン）トシテ意ニ介セズ」とあり（1）、『扶桑隠逸伝』（寛文四年刊）巻下「牡丹花」にもほぼ同様の記事があると指摘

されている（2）。

商売人に関する逸話は、『醒睡笑』巻一「ふはとのる」第三話にヒントを得たものという（3）。これは、鍛冶職人が鞠の印可を得て田舎にくだり、結局身分がばれて鍛冶に戻ったという話なのであるが、俳諧との関わりが無い。その点を問題とした楠元六男氏は、「俳諧にまつわる笑話は多いわけで、『宇喜蔵主古今咄揃』巻四の九「はいかいうらおもての事」や巻五の九「はいかい師同意病の事」、さらには『軽口大笑』巻四の七「文盲者秀句の事」などにみえるような、今時の宗匠についての揶揄であったり、俳諧に関する失敗談の延長線上にあると判断すればよい。しいて何によったと決定する必要はなかろう」とされたのであった。

成立問題は、中村幸彦氏が「西鶴がくだれる姿」（4）および「万の文反古の諸問題」（5）で後人補筆の可能性を指摘したことから始まっている。その後、野間光辰氏が、巻三の四は「萬の文反古の版下を書いた人の筆と思はれる。芭蕉の笠の銘の逸話も取入れるが、はなはだ纏まりが悪く、西鶴作に疑問」とされて、一気に補筆説へ傾くようになる（6）。乾裕幸氏は、これらの補筆または版下別人説をうけつつ当時の俳壇状況を考え合わせ、本話を第三者の加筆と結論を出した（7）。

これら先行する補筆説に対して反論したのが塩村耕氏である。氏は「『西鶴名残の友』の芭蕉評について」で、好意的芭蕉評と捉えられてきた従来の説を否定し、芭蕉評にこめられた皮肉を読みとるとともに、西鶴自身の俳諧観とまったく矛盾しないことを主張した（8）。井上敏幸氏もまた補筆説を否定し、西鶴の俳諧観から芭蕉への批評を読み取ろうとしている（9）。

楠元氏は、乾氏と塩村氏の説を比較し、井上氏の段落分けに従いつつ本話を解釈し直している（10）。氏は「今時の宗匠一体子細らしく云々」の一文を後半の導入部として捉え、格好だけで実力も無い宗匠の例として「小商ひしてゆるりと渡世する人」を登場させたのであり、そこに加筆を思わせる不自然さはなく、また芭蕉への皮肉も認められないとされた。

以上のような先行研究を見回してわかるのは、実のところ本話の問題点が「今時の宗匠一体子細らしくせぬはなかりし。何とやら目立けれども、面々の身なれば、無用の異見も成難し」という本文の解釈に集中するということである。今時の宗匠は皆それらしくしているばかりで、何となく目立ってはいるけれども、結局それぞれのことだから無用な意見もできないといっている部分である。この格好だけの「今時の宗匠」を一三子と桃青（芭蕉）のこととして読めば皮肉となり、小商いする人のこととして読めば矛盾も皮肉もない内容となるのである。この表現は巻五の五「年わすれの糸鬢」にある「面／＼のあたまなれば、我心まかせの物好」という部分に似通っていて、興味深い。

ここで一度、登場する人物を整理しておきたい。肖柏は連歌師であり休甫は俳諧師であるが、ともに昔の奇人として有名だった。それに続く讃州の一三子、武州の桃青（芭蕉）はともに当代の奇人である。一三子が無数の瓢箪を腰につけるのも、芭蕉が笠を被って諸国執行するのも、同じ物好きだといっている。

そもそも本話冒頭に「風俗の替りたるも一興」といっていて、可笑しな行動を批判しているわけではないのだから、腰に瓢箪をつけようが諸国修行をしていようが批判にはあたらないはずである。巻一の三での津田休甫も、人の目を気にしないことを評価されていたことを考え合わせると、芭蕉評の「人の沙汰はかまふにもあらず」も批判の言葉ではないと思われる。さらに、一三子は西鶴が編集した『古今俳諧師手鑑』に載る人物であったことを見逃してはならない。西鶴自身が手鑑に採択した人物を、なぜここで批判する必要があるだろうか。『名残の友』には同じく『古今俳諧師手鑑』に載る俳諧師が多数登場しているが、彼らは批判の対象ではなかった。それを思えば、「今時の宗匠」批判は一三子や芭蕉に向けられたものではないはずなのである。

本話は「其人によりて、風俗の替りたる」例を列挙することから始まっている。肖柏・休甫はいうまでもなく、一三子・桃青もまた奇妙な人物であるが、それは批判に値しない。問題は「一体子細らしく」することなのである。言い換えれば、「人を作る（巻一の三）」ことが問題なのである。人がおだてあげるまま俳諧師ぶったり宗匠のまねをしたらどうなるかというと、門人もいないまま茫然と過ごして線香を売るはめになるのだといっている。この展開に不自然さはなく、一話はまとまっていると見てよいのではないだろうか。

では本話に加筆はないかというと、それはまだ決定的ではないと考える。なぜなら、『名残の友』各話の創作方法と比較すると、やはり構成に違いがあるからである。本話はいったい誰を描写しようとしているのだろうか。一人の俳諧師を笑話の上にのせて語る巻一、巻二の方法は該当しない。西鶴の経験によるものでもなければ、同時期同地域の俳諧師を選んだわけでもないのである。一三子は讃岐、芭蕉は江戸の俳諧師であり、彼らを直接繋げる俳書も今のところ指摘されていない。この微妙な登場人物の羅列が我々を困惑させる。ただし、先に述べたように、表現などは巻一の三に似ていて、笑話との組み合わせという意味では問題はない。今のところ、違和感はあるが、西鶴による文章としておきたいと思う。

（1）『本朝遯史』の本文は近世文芸資料15『深草元政集第４巻』（古典文庫　昭和52年）を使用した。

（2）『新大系』脚注。

（3）（2）に同じ。

（4）中村幸彦氏「西鶴がくだれる姿」（初出『日本古典鑑賞講座』第十七巻昭和32年7月10日、『中村幸彦著述集』第二巻　昭和57年6月再録）

（5）中村幸彦氏「万の文反古の諸問題」（初出「萬の文反古の諸問題」慶應義塾大学国文学研究会『国文学論叢〈第一輯〉西鶴研究と資料』至文堂　昭和32年12月10日、『近世作家研究』三一書房　昭和36年5月25日、『中村幸彦著作集』第六巻　中央公論社　昭和57年9月　再録）

（6）野間光辰氏監修　天理図書館編『西鶴』（天理大学付属天理図書館　昭和40年4月、12月増補）

（7）乾裕幸氏「『西鶴名残の友』の芭蕉評」（『西鶴論叢』中央公論社　昭和50年9月30日）
（8）塩村耕氏「『西鶴名残の友』の芭蕉評について」（『国語と国文学』67巻3号　平成2年3月号）（『近世前期文学研究―伝記・書誌・出版―』平成16年3月に再録）
（9）井上敏幸氏「西鶴と芭蕉―『名残の友』における桃青評―」（『雅俗』第5号　雅俗の会　平成7年1月10日）
（10）楠元六男氏「はなしの切れあじ―『西鶴名残の友』をめぐって」（『藝能文化史』第21号　芸能文化史研究会　平成16年7月31日）

◆巻三の五　幽霊の足よは車

巻三の五「幽霊の足よは車」は、出羽の国を舞台として、歌枕を連ねつつ展開していく話である。本話の内容は、以下の通りである。

出羽の国を遊歴して「恋の山」に行きかかった主人公（西鶴とする説もある）たちは、「身のくるしげな」女の幽霊に出会う。その幽霊は、自分より年上の女に男をとられた経緯と死に至った状況を語る。怨霊となった女は、裏切った男と女を取り殺そうとして彼らが住む家の二階に駈け上がろうとするのだが、梯子を踏み外して腰を痛めたという。同道の出家は「汝も思ひとまれ」と言い、「侍ひなれば腰ぬけとて役に立ねど、幽霊はくるしからず」と諭し、膏薬をつけてやって幽霊と別れた。

『新大系』はこの話の典拠として『宗祇諸国物語』巻四の四「嫉妬夢に怪し」を指摘する。この話は次のような話である。

都を出た宗祇は、火打坂の銀七という者の所に宿をとった。夢の中で、三十ばかりの女に呼び止められ、願い事を打ち明けられる。夫銀七が別の女に通うようになり、それを恨んで自分は死んだ。その女はすでに取り殺したが、夫は三十番守護神が枕上にいるので命を取ることができない。どうかこの毒薬で殺してほしいという。宗祇は、さまざまに嫉妬の罪を説き聞かせ、霊女を勧化する。理に伏した霊女は消え、宗祇も夢から覚める。このことを宿の亭主に語ると、実際その通りであったという。

まず本話の場面設定から確認すると、出羽の象潟から酒田・袖の浦を経て恋の山に至り、恋の山へ分け入ったところで、女の幽霊に出会う設定となっている。いうまでもないことだが、象潟・袖の浦・恋の山ともに歌枕であり、この辺りの行文に和歌伝統が嵌め込まれていることは間違いない。

本文には「袖の浦といふ所、古歌にも読（よめ）るとおもへば、すこしの松原も、つ

ねならず物さびて、詠(なが)めなり」とあるが、『俳諧類船集』で「袖の浦」を検索してみても「松」の項目は見つからない。にも拘わらず、西鶴は「すこしの松原も、つねならず物さびて」と指摘しているわけであるから、「袖の浦」と「松」とを結びつける出典が介在していなければならない。そこで「道の記」や名所和歌集などをひもとくと、『松葉名所和歌集』に「旅衣立よるいその松陰に涼しくかよふ袖のうら風」が『夫木和歌抄』から引用されている。ここはこうした歌に発想の原点があったと思われる。しかも、この歌でも旅人が袖の浦にやってきて風景を眺める設定になっており、本話の情景と付合しているのである。

次に、本話では袖の浦において、玖也裏書の「唐木の文台」が出てくる。「唐木の文台」とは紫檀・黒檀などの輸入材料で作られた文台のことをいう。ここにいう玖也の裏書を持つ文台が、実際に唐木作りであったかどうかは知る由もないのだが、少なくとももう一つの文脈を背後にみておくべきであろう。「袖の浦」は定家の「白妙の袖の浦なみよる／／はもろこし舟や漕渡るらん」（『松葉名所和歌集』等）で有名であり、この歌は『伊勢物語』二十六段の「思ほえず袖にみなとの騒ぐかなもろこし舟の寄りしばかりに」を視野に入れて成立したものである。このような和歌的世界のイメージが、本話の底に流れていることを念頭に置く必要があろう。また、「袖の浦」は輸入品の水揚げ港であったため、「袖の浦」を「もろこし舟」と関連づける世界がこの土地にあったとも考えられる（2）。

この延長線上に、「恋の山」の世界が登場するのである。「恋の山」とは本来、つもる恋の思いを高い山にたとえて表現したものである。「恋の山路」などの語もあるように、成就しがたい恋を山のイメージで比喩的に表現した語であった。この一般的な言葉が、後世実在の土地に当てはめられたもので、特に湯殿山と関係が深い（3）。しかも湯殿山は、昔から「語るなかれ」「聞くなかれ」といましめられた神域で、本殿も拝殿もない場所である。

後代のものではあるが、呂茄編『三山雅集』（宝永七年）は湯殿山を解説して「権現霊場は甚深秘蔵にして、言語に出すべからず」という（4）。また芭蕉は『おくのほそ道』に「語られぬ湯殿にぬらす袂哉」と詠んでおり、こうした伝統的世界を背後において本話を分析すると以下のような構図が浮かび上がってくる。

そもそも「恋の山入てくるしき道ぞとはふみ初てこそ思ひしりぬれ」（『千載和歌集』）や「人やりの道とはしらぬ恋の山我が心よりまよひそめつつ」（『新葉和歌集』）の歌などに明らかなごとく、この山では苦しい思いをして迷わなければならなかった。だからこそ本話の幽霊は文字どおり「身のくるし」さ故に迷って現世に出ているわけである。そして年上の女に男を奪われて、まさに「くるしき道」に煩悶している。この幽霊が「恋の山」で主人公と出会い、諸々の経緯を打ちあけるところが可笑しい。「語るなかれ」「聞くなかれ」の世界の逆転の構図といってよい。さらに、「二階座敷にふたりの声を聞つけ、心のせくまゝにのぼれば、梯の子をふみはづし、思ひの外腰をいためぬ」と幽霊は嘆く

くのだが、ふつう幽霊は忽然と現れたり消えたりするものであって、梯子をのぼる必要などないはずではないか。それを梯子を踏み外して腰を打ったというから、まるで生きた人間のようであって幽霊らしくない。しかもこれに塗り薬を与えた、というから手が込んでいる。こうした人外のものを人間臭く描写することは西鶴にとってはお手のもので、本書巻一の四「鬼の妙薬爰に有」の鬼も同様であるし、巻五の五「年わすれの糸鬢」の妖怪姥が火もこれに当てはまる。

なお、本文によれば、幽霊が傷めたのは「腰」であり、また「侍ひなれば腰ぬけとて役に立ねど、幽霊はくるしからず」といわれて出家に膏薬を塗られたのも「腰」であった。しかし後に付された挿絵では「足」に膏薬を塗っていて、若干の齟齬が認められる。この「足弱車」は「頼りない」意味で使われており、幽霊が「おそろしき皃つきはすれど、むかしと替り、一念よはく届きがたし」と描かれるのと呼応していよう。挿絵の「足」は章題の「足」の文字に引きずられた結果とも考えられる（5）。

以上のように、本話後半では『宗祇諸国物語』巻四の四の終末部分が完全に転化せられ、効果的な話の落ちに作り替えられている（6）。『宗祇諸国物語』の宗祇は、嫉妬の罪を説いて幽霊を勧化した。納得した幽霊は消えて宗祇も夢から目覚めるのである。西鶴はこの勧化の部分を、膏薬にかえている（7）。「毒薬」で夫を殺そうとしていた幽霊が、本話では「膏薬」を塗られてなだめられ、しかも消えることさえせずに、ふつうに「別れ」たと書かれている。ここに西鶴の趣向が見えてこよう。『名残の友』の創作方法として笑話と俳諧師の組み合わせがまず論じられるが、その他にも、本来は笑話でないものを笑話に作り替えて組み合わせるといった方法が見受けられる。その場合は西鶴の作り替え自体を重要視すべきなのである。

さて、この章前半では出羽象潟に赴いた俳人として、仙台の三千風・南都の言水・大津の道甘・南部の幽閑・最上の清風・秋田の桂葉・祖寛の名を出し、最後に大坂の玖也が岩城の城主風虎に招待されたことに言及する。この中でもっとも重要なのは、やはり玖也であろう。なぜなら、本話の肝腎な部分で玖也の「文台や袖の裏書かへる雁」も引用されているわけで、「恋の山」における未練話に風虎と玖也との交流が関係していると考えられるからである。「幽霊の足よは車」で展開される嫉妬話は、風虎（内藤義泰）の父である、内藤忠興公の奥方の話が影響しているのではないだろうか。内藤忠興公は陸奥磐城藩の二代藩主で、藩政史料として知られる『土芥寇讐記』には、内藤帯刀こと内容忠興の逸話として次のように報じている。

帯刀、酒宴ヲ好ミ、女色ニ耽ル。其ノ妻嫉妬之強キ事、前代未聞也。然ルニ帯刀妾余多扶持シ置、潜ニ家人共ニ預ケ置ク之処ニ、内室聞出シテハ、自身長刀ヲ持シ、妾預リタル家人之方ヘ押シ入ル間、預リノ亭主ヲ始、妾モ辛キ命ヲ助カリ、直ニ浪人ト成リタル者、若干ナリシ（8）。

このような強列な嫉妬話が契機となり、後半の恋の山の条が形象されたと考えることもできる（9）。

（1）『新大系』脚注。

（2）袖の浦周辺では宋銭・白磁・青磁など多数出土しており、この浦が輸入品の水揚げ港であったことを裏付けている（『山形県史』）。

（3）「恋山　袖浦　袖ノ渡ハ奥州、袖ノ湊ハ筑前恋ノ山ハ酒田領ニ有リ。其西ノ海邊二袖ノ浦有リ。　新勅　恋の山しげきおざさの露分て入初るよりぬるゝ袖哉　顕仲」（『和漢三才図会』出羽）。

「袖浦　坂田ヨリ半道南方、即坂田湊入口ナリ。漁村ニテ家弐百軒斗アリ。（中略）湯殿山　中山を恋山ト云フ。坂田ヨリ東南へ一日路アリト云。雪アリ」（丸山可澄『奥羽道記』元禄四年成　村松友次編　古典文庫583冊『都のつと・奥羽道記・はなひ草大全』古典文庫平成7年6月）。

『武道伝来記』巻三の一「人指ゆびが三百石」にも「粽の小笹は恋の山出羽の国庄内に」とある。

出羽三山参詣は近世に入って特に盛んになったという。湯殿山は出羽三山の総奥之院と称され、熱湯を湧出する巨岩を御神体とするために社殿はない。その原始的形態から三山のなかで最も多くの信仰を集めた。また、湯殿山はもと女人結界とされ、参詣できない女人のために大日坊が湯殿山女人遙拝所を設けた。上古の人々は、葬列の出発を「山行き」と称し、山は死者の行く場所、村人たちの墓所でもあった。霊山には死霊や祖霊などの諸精霊が住む場所として崇拝されるとともに、他方では悪霊や悪鬼などの邪神が住む霊地として恐れられたという（『山形県史』）。

『山形風流松木枕』（明和六年頃　山形市史資料第64号『山形風流松木枕・山形雑記・山形石ひろい』　山形市史編集委員会編　昭和57年11月）には「六七月湯殿山参詣の行人、関東より奥州迄沢山にて（中略）幾千人と言う事をしらず、わづか二ヶ月の内に旅人を扱い一ヶ年の渡世と成事、湯殿山のおかげにあらずや」とみえ、当時の盛況ぶりがうかがえる。

（4）『三山雅集』（羽黒験者文殊院呂茄編　宝永七年刊　国会図書館蔵本）。本書は出羽三山の地誌で、各地に因んだ和歌・俳諧を添える。湯殿山の項には「往詣の街頭にて此世を去し親子妻妾の恋しきに、其人の情実あるは、雲霧の中に彷彿としてその俤に逢へる」とも記されている。

（5）章題にある「足弱車」について、長谷氏は謡曲「金輪」が取り入れられているとされる。

（6）『新大系』脚注に「西鶴は、筋を簡略化し、俳諧的道具立てとテンポの速さでもって、勧化を膏薬にすり変え、見事に滑稽み溢れた一篇に

仕立てたといえよう」と指摘される。至極納得のいく説であり、本稿もこれに従う。

（7）長谷氏は「膏薬」の意味として、「松山玖也と、彼を磐城に招いた内藤風虎。両者は「松」と「藤の丸」によって象徴される。この二つの言葉を取り合わせると、「松」を原料とし、「藤の丸」の商標をもつ「膏薬」が連想される。このような俳諧的発想に基づいて膏薬を登場させ、一話を締めくくるところに、西鶴の作意があったのではないか。」とされている。こうした言語連想による解釈は、ともすれば、あらゆることが関係ありとなりかねない方法であって、牽強付会となる危険性がある。「膏薬」に関しては強引に結びつけた感があるが、連想がもたらすものとして、この説も一つの解釈と捉えておきたい。

（8）『土芥寇讐記』巻第十八「内藤能登守藤原義孝」を参照。本文は、金井圓氏校注『土芥寇讐記』（新人物往来社昭和60年7月）を利用した。『寛政重修諸家譜』によれば、内藤帯刀忠興の室は、当時庄内を治めていた酒井忠勝の妹であったことが分かる。もしそうだとすれば、本話はかなり皮肉の強い話となろう。但し、『土芥寇讐記』に載る「内室」が酒井氏の出であるか確証はない。

（9）長谷氏は本話の背景に浅香事件や小姓騒動が関係しているという。この事件は内藤家に関わる重大な不祥事であって、そのため藩は大揺れして崩壊寸前にまで至った事件であった。現在、内藤家文書は見やすくなっているものの、江戸時代にあっては外に出してはならない話だったのではないのか。藩関係の者が軽々しく口にできる話題でもないし、他地域のものが、おいそれと広めることができたか疑問に思うところである。

◆巻三の六　ひと色たらぬ一巻

本話の背景には俳書『虎渓の橋』（延宝六年刊）があり、事実譚として捉えられている。

江戸から田代松意が俳諧の修行のために上京してきた折、那波葎宿の家で葎宿・松意・西鶴は三吟三百韻三巻を完成させて、『虎渓橋』を編んだ。一休みするところへ、軒続きのさる御方から百韻の加点を依頼される。七十三句に点を付し、内二十八句を長点とした。名判を付した後、再度一巻を吟味してみると、百韻に恋の句がないことに気がついた。それで「此一巻に腎薬呑せたく候」と奥書して返却したという。

まず本話の執筆時期について考えなければならない。葎宿・松意・西鶴三人の交流の時期は、田代松意の動向から判断して延宝六年秋のことと推定される（1）。しかし、本文中に「葎宿・松意・西鵬」とあるため、本話執筆時期は、

西鶴が「西鵬」号を使用していた元禄元年から四年までのこととなる。

『虎渓橋』の三吟興行について、「明らかに松意の才が最も劣ると断ぜざるを得ない成績で、西鶴が、この遠来異境の同門松意の上京を、俳道修行のためと高くから見おろした如きの筆つきも、あながち彼の理由なき高慢のなせるわざとみるのは当らない。」と木村三四吾氏はいう（2）。

本文の「発句、当流のしかけ、取まはし、心行、殊更気色のおもしろく、一句〳〵かんじて、脇書にかるロをつくし」をうけて、『新大系』は「大名の百韻を評した部分には、景気尊重に傾く元禄俳壇への西鶴の皮肉がある。景気の句偏重が恋の句を忘れさせたとの謂である」というが、これは本話が元禄頃に成立したことと、当時流行の「景気の句」に西鶴が賛同していなかったことを踏まえての批評である。西鶴と元禄俳壇との関係はその通りであったが、「ひと色たらぬ一巻」に西鶴の俳壇批判が投影されているか否かは別問題ではないだろうか。実際本文では、「去御方」から委ねられた百韻に対して、「大かたならずよき作意」と評しているのであって、決して批判的には眺めていない。残念ながら、恋の句がないという致命的な欠陥があったわけで、その点をとらえての落とし話にすぎないとみた方がよいと考える。

井上氏の『名残の友』に対する解釈は、『新大系』解説で明らかなように、「元禄期における談林俳諧師西鶴の心境そのものが基本的創作意識であり、その心境に基づく様々な批判や自己の立場の主張が、そのまま創作意図であった」とするもので、元禄期の俳諧に対する憤懣や、俳諧師批判を読み取るところが特徴である。したがって、先にあげた大名の百韻に対する「当流」風をもって「皮肉」と読むのも理解できなくはない。しかし、本話はあくまでも笑話なのである。

俳諧に関する笑話は、『醒睡笑』巻六「推はちごうた」などに多いパターンであるが、恋の句がない一巻に「腎薬呑せたく候」と軽口で落としたところが眼目なのである。そして「月も又都のひがし山」と始まる趣向は、『虎渓橋』が秋の発句から始まる連句三巻であることをふまえれば、当然のことということになる。また、「駒をはやめ、関の岩角踏ならし、けふ逢坂の山を越」は、『拾遺集』の「逢坂の関の岩角踏みならし山立ち出づるきりはらの駒」をふまえたものであるが、西鶴らが松意を迎えたことを示唆していよう。なぜならば「駒迎へ」は、古く八月十五日に諸国から献上する馬を逢坂山まで出迎えた故事に基づくからである。なお西鶴には、「逢坂の関の」の歌をふまえた「ふみならし人形づかひや駒むかへ」（『点滴集』）もある。また、『虎渓橋』の連句を見るに、「手くろ者関はゆるさじ」（松意）とか「花をふんで岩根の床」（西鶴）の例もあり、逢坂山を越えるイメージを連想させる句も見える。

さらに、本文にいう「世の笑ひ草になれる」は、「虎渓の三笑」にちなむものであり、『虎渓橋』所収の「酔の色や是三人の笑ひ草」（江雲、これは葎宿のこと）を反映していることはいうまでもないだろう。

付言すると、本話のように俳諧師が集うところへ何らかの依頼が持ち込まれる様子を描く章は、他に巻四の二「それ〳〵の名付親」、巻四の三「見立物は天

狗の媒鳥」がある。似た構図のものが比較的近い場所に配置されていることになり、こうした俳諧師の座の描写が『名残の友』巻三以降で取られたことは注意しておきたい。

（1）　今栄蔵氏「田代松意」（「国語と国文学」34巻4号　昭和32年4月号）。諸注も松意の上京は延宝六年秋のこととし、翌七年冬に帰江したとする。

（2）　木村三四吾氏「田代松意」（『俳句講座』　明治書院　昭和33年11月）。

◆巻三の七　人にすぐれての早道

本話は、ある人物が今井正盛、可慶法橋などと四・五人で吉野へ行った時の話として書かれている。この人物を西鶴本人として読まないのは、今井正盛が西鶴より一世代前の貞門俳人で、活躍時期も寛文末頃までと考えられているからである。まず梗概を提示しておく。

昔、吉野で連歌の会が催された時、滝の音がやかましくて支障を来したので、庵の主人が滝に萩柴を投げて音を静めたという。その庵もしばらくは無人で荒れていたが、最近都人の尼が住むようになった。

ある時、比丘尼の話を聞いた正盛・可慶法橋など四・五人がこの庵を訪れた。和歌の話をした後で身の上を尋ねると、比丘尼は話し始めた。比丘尼は北国の生まれで、父はその国の大名に仕える者だった。祝儀能のとき、太夫が翁の面を忘れて式三番を演じかねていたのを、自分の父が駆け出していって、六里半離れた太夫の里まで瞬時に往復し、能面を調達したという。人々は不審がり、狐だとの噂がたつと、家中の付き合いも絶えてしまった。とうとう母が父を刺し殺し、母も自害したが、父は狐に間違いなかった。その後比丘尼はこの吉野で父母の菩提を弔っているという。不思議な思いをしながら聞いていると、庭に多くの狐がやってきて、比丘尼を慰め元気づけたのだった。

本話の冒頭に、萩芝を投げ込んで川音を鎮める話があるが、これは『井蛙抄』巻六の故事を使用したものという（1）。全体は「吉野」という場所にちなんだ話として創作されているため、まずどのようなところであるのかを調べる必要があろう。

吉野といえば天武天皇、源義経、南北朝時代の南朝が想起されるように、世から身を隠すイメージがあり、隠者の住む場所として相応しい場所であることが理解できる。また、謡曲「桜井」に「かくれ家の吉野の川の水清き」や、『野ざらし紀行』に「むかしよりこの山に入りて世を忘れたる人の、おほくは詩にのがれ歌にかくる」とあることからも、比丘尼の隠棲場所として吉野が設定されたことは不思議ではない。

次に、なぜ僧ではなく比丘尼なのかという点であるが、『大和名所記』（延宝

九年刊）が参考になろう。『大和名所記』「吉野袖振山」の条には「神女降臨」の記述があり、琴歌譜「乙女子がをとめさびすもから国を袂にまきてをとめさびすも」の引用とともに、五節の舞の根元であると説明されている。これは、天武天皇建立という櫻本坊に所蔵される巻子本『日雄寺継統記』によった記述で、もとは「櫻本坊略伝」（室町時代）に記載されていた伝承である（2）。その内容は、天武天皇が吉野宮で琴を奏していると突如雲中に天女が現れ、舞を舞って五度袖を翻した。その際に、琴歌譜「少女（をとめ）ども少女（をとめ）さびすと唐玉を袂に纏きて少女（をとめ）さびすも」と歌ったとされ、五節舞の起源となったというものであった。この伝承から「袖振山」は歌枕となり、「わぎもこが袖ふる山も春きてぞかすみのころも立わたりける」（『千載和歌集』春上　大江匡房）などの歌が詠まれている。また、西鶴の付合にも以下の用例がある。

『胴骨』（延宝六年刊）「何者」　〈西国・由平・西鶴の三吟百韻三巻〉

吉野の奥から禿かはしやる　西鶴
紅しほり袖振山の風情にて　西国
雲は白地かよいふたつ割　由平

さらに謡曲「国栖」にも同様の内容が確認できる。

謡曲「国栖」

三吉野なれや花鳥の、色音によりて音楽の、呂律の調琴の音に、峯の松風かよひ来る。天つ少女の返す袖、五節の始これなれや。少女子が／＼、其唐玉の琴の糸、ひかれかなづる音楽に、神々も来臨し、勝手八所此山に、木守の御前蔵王とは、王を蔵（かく）すや吉野山。即ち姿を現して、即ち姿を現し給ひて、天を指す手は胎蔵、地を又指すは金剛、寶石の上に立つて、一足を引つ提げ東西南北十方世界の虚空に飛行して、普天の下、卒土の内に、王威をいかでか軽んぜんと、大勢力の力を出し、国土を改め治むる御代の、天武の聖代畏き恵、新たなりけるためしかな（3）。

以上のように、付合、謡曲、地誌などに引用されていることを勘案すれば、吉野と女神・乙女を結びつけることは容易であったと考えられるのである。

続いて問題になるのは狐との関わりである。吉野と狐といえば、浄瑠璃『義経千本桜』の狐忠信が思い浮かぶが、これは延享４年（一七四七）初演であるから問題にならない。ただし忠信に化けた狐は源九郎狐であって、大和にいたとされる伝説の源九郎狐がその発想源である。源九郎狐は播磨の刑部狐の兄弟で、いたずらな狐とされるが、なぜ吉野と結びつくのだろうか。そこには吉野の部族にまつわる伝承が介在していると考える。

『古事記』『日本書紀』には吉野の古部族を説明する記述があるのだが、その内容は以下の通りである。

『古事記』中巻「神武天皇」

＊神武天皇が八咫烏に案内されて吉野川に着き、初めて土地の民に遭遇した場面である。

爾に天つ神の御子、「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は贄持之子と謂ふ」と答へ曰しき〔此は阿陀の鵜養の祖〕。其の地より幸行でませば、尾生（あ）る人、井より出で来。其の井に光有り。爾に「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は井氷鹿と謂ふ」と答へ曰しき〔此は吉野首等の祖なり〕。即ち其の山に入りたまへば、亦尾生る人に遇ひたまひき。此の人巌を押し分けて出で来。爾に「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は石押分之子と謂ふ。今、天つ神の御子幸行でますと聞きし故に、参向へつるにこそ」と答へ曰しき〔此は吉野の国巣の祖〕（4）。

この「尾生る人」について『日本古典文学全集』頭注は、「吉野の木こりは、現在も冬の間、防寒その他の目的から尾のついたままの獣皮を腰につけるという」と注釈している。しかしそのまま読めば「尾のある人」となって、人と関わる獣すなわち狐を連想させるのである。ここで紹介される部族「国巣」は「国栖」のことであり、先に提示した天武天皇を援護した部族と合致する。

また、吉野山には弁財天の社があるが、弁財天は狐にのる女神（ダキニ天）に通じるとされている（5）。こうした吉野と狐の関わりに、大和の源九郎狐のイメージが重ね合わされたのが本話の内容だったのではないか。つまり『大和名所記』などに紹介される天武天皇の伝承から、狐の部族に擁護される存在、尼の連想がなされたと考える。

これまで、北国生まれの尼が何故吉野へ隠棲するのかが今ひとつ理解できなかった。だが、北国で両親が非業の死を遂げたため孤児となった十三歳の娘が、父の部族つまり吉野国栖の部族に庇護されたことになったと解釈すれば、その疑問は解かれるのである。本話最後に「色／／の狐庭につくばい、此びくにをいさめける」とあるのは、「尾生る人」の部族が比丘尼を庇護しているという意味だと理解したい（6）。

さらに付け加えると、比丘尼が「我十三の事なれば」親の「跡とふために此姿」と述べるくだりは、十三才で大きな転機を迎える「愛護若」、「苅萱」の石童丸、「山椒太夫」の厨子王丸などの延長線上にあると考える。説教浄瑠璃や謡曲、御伽草子などには、十三才の折に人生の大きな転機がくる例が多い。例えば謡曲「接待」にも「十三の年継母を怨み都に登り」とある。『ゆめみ草』（明暦二年）には「十三はあらまだ若や名月女」の句もみえ、当時十三という年は女性が成人になる年齢であり、また大きな転機を迎える年齢であると容認されていたのだろう。こうした背景から、比丘尼の年齢が設定された可能性がある。

このような吉野の伝承を背景として一話が作られているわけだが、そこに登場するのは今井正盛と法隆寺の可慶法橋であった。どちらも『古今俳諧師手鑑』に載る大和の俳諧師であることから、地理的理由によって本話に名を載せたと

考えてよかろう。

最後に、狐の早足について述べておきたい。狐が不思議な早さを持っていることは、『類船集』（延宝四年刊）に「狐―走」とあることからも理解でき、諸注が紹介する源五郎狐（菊岡沾涼『諸国里人談』寛保三年刊）も例としてあてはまる。すなわち、大和の源五郎は片道十日余りかかる関東までの道程を、わずか七、八日で往復したという話である。柳田国男の「狐飛脚の話」に「狐には遠距離を僅かな時間で往来し、また過去や未来の出来事を告げる力があると信じられた」との指摘もあり（7）、狐の早足は一般的な認識だったと思われる。だからこそ、瞬時に城と里を往復した比丘尼の父親に狐の疑いが浮上したのである。こうした狐にまつわる伝承は全国各地にあったと考えられ、一つの典拠を求めることは困難であろう（8）。

成立の問題も付け加えておきたい。本話は笑うところのない哀れな話であって、笑話の多い『名残の友』の中では異質である。実は次の巻四の一「小野の炭がしらも消時」も哀れな話で、笑うべき内容がない。この二話が続けて配置されていることには注目しておく必要がある。

（1）『定本西鶴全集第九巻』（中央公論社　昭和26年）頭注。

（2）中岡清一氏『大塔宮之吉野城』（吉野叢書刊行会　昭和12年）、首藤善樹氏『金峰山寺史』（総本山金峯山寺　平成16年11月1月）

（3）『謡曲二百五十番集』（赤尾照文堂　昭和53年7月）の本文を用いた。

（4）荻原浅男氏校注『古事記　上代歌謡』（日本古典文学全集1　昭和48年11月）の本文を用いた。

（5）吉野裕子氏『狐―陰陽五行と稲荷信仰』（ものと人間の文化史39　法政大学出版局　昭和55年）。日本では稲荷・白狐・ダキニ天が習合した「狐にのる女神（ダキニ天）」が存在し、これがやがて弁財天に通じていくことは、中村禎里『狐の日本史　古代中世篇・近世近代篇』（日本エディタースクール出版部　古代中世篇平成13年6月　近世近代篇平成15年10月）に詳しい。また弁財天については、太田叙親・村井道弘著『南都名所集』（延宝三年序）には「天の川には弁財天の社あり」と書かれ、『吉野山独案内』（寛文十一年）にも「弁財天の山の寶かかぎ蕨　成仏」とある。

（6）本話最後にある狐の慰撫について、梁誠允氏はその影響を『大倭二十四孝』（寛文五年刊）「二の宮花満」にみておられる（「『西鶴名残の友』「人にすぐれての早道」と狐飛脚伝承」（『国語と国文学』95巻6号平成30年6月号））。落胆する二の宮が都の稲荷社で助けを求めた折、狐の群れが現れて彼を慰めるというもので、挿絵が似ているということだが、ここでの狐は変化して戦の場面を披露し二の宮を慰めているわけで、本話の内容とは直接重ならないのではないだろうか。

（7）柳田国男「狐飛脚の話」（『柳田国男全集』10所収『孤猿随筆』　筑摩書房　平成10年4月）

（8）　梁誠允氏よると、比丘尼の父が忠義報われず殺害される話は、『新編鎌倉志』の種本『絵入鎌倉物語』の「志一稲荷伝説」と、秋田・山形・長野などに伝わる「与次郎狐伝説」などを盛り込んだものだという（注（7）の論）。『新編鎌倉志』は『西鶴諸国はなし』や『懐硯』などでも利用されていて、可能性がないではない。ただ、狐の伝承が日本全国に存在していることを考えると、全体的に一致する伝承でないと証明は難しいと思われる。

◆巻四の一　小野の炭がしらも消時

本話は西鶴自身が登場する経験談的な内容である。

京へ上った西鶴は、「師走の廿日過」ぎ頃、俳友の団水・言水と共に北山、竜安寺へと散策に出かけた。冬にも拘わらず北山で宴をひらく都人の優雅さを見て豊かな気持ちになり、竜安寺の池のはたで「鴛鴦のつまあらそひ」を見物する人々や、風流ごとに興ずる人々の様子を目の当たりにして、その「いたりぜんさく」に感嘆する。帰りに小野の炭竈を見物したが、そこでは百八十年以上生きているという「今浦島」という炭焼きが、突然身体が燃えると苦しみ出して沢へ飛び込んだところ、そのまま消失したという哀れな話をきいた。

本話に描かれる西鶴の上京は、元禄三年（一六九〇）冬のことである。野間光辰氏『西鶴年譜考証』、宗政五十緒氏「北条団水年譜」、宇城由文氏「池西言水年譜」に徴して元禄三年冬であることは間違いなかろう。そして団水の『団袋』が、この折りの両吟半歌仙を編集したものであることはいうまでもない。したがって、本話は元禄三年冬以降の執筆とみてよい。

本話に描かれている竜安寺の鴛鴦に関しては、『雍州府志』「竜安寺」の項に「冬に至りて、鴨鶩・鴛鴦群り集り水上に游泳す。洛人、奇観とす」（原漢文）とあり、事実に基づいていることがわかる。竜安寺は臨済宗妙心寺派の寺で、細川勝元が掘らせたという鏡容池があるが、「方丈は勝元の館書院を以つていとなみ、庭前の築山、池辺の風色は勝元の物数寄」（秋里籬島著『都名所図会』）と紹介されるように（1）、趣向を凝らしたしつらえとなっていた。そうした風流な場所で、鴛鳥によせて和歌を詠む御所めいた女蔦たち、中将棋をさす内儀たち、「井筒の曲舞」をうたう後室（後家）が、それぞれの風流を楽しんでいて、その様子に西鶴は「洒落すぎた今の世の中」や「贅沢な物好み」を感じるのである。

「中将棋」について『新大系』は「大・中・小将棋とあったが、実際に行われたのは、中と小。―中略―室町時代より元禄時代頃まで流行した」と説明するが、「中将棋」がなぜ洒落すぎだといわれるのかが今ひとつ理解できない。窪寺紘一氏によると、「室町・戦国時代の貴族は主として中将棋に耽る一方、武士や町人は小将棋を愛好するに至った」という（2）。増川宏一氏も「中将棋は江

戸時代の後半になっても消滅しなかったが、愛好者は漸減していったのだろう」と指摘している（3）。だとすれば、元禄期にも『中象戯初心抄』（元禄十年）、『中象戯指南』（元禄十六年）等の棋書出版を確認できるものの、もはや時代の主流は小将棋に傾いていたと考えてよいのではないか。そうした動向にありながらも貴族好みの中将棋を愛好するという、前時代の風俗を根強く継承する京都ならではの様子を目の当たりにして、西鶴は「しやれ過ぎたる今の世」を感得したのであろう。

そして都の人々の風流に感嘆した西鶴は、「同じ人間のうまれ所、田舎住ひのいと口惜。身は煙の種となる物を」という感慨を述べる。この「身は煙の種となる」という一言から後半の炭焼翁の話へと展開するのである。

西鶴らは竜安寺からの帰途、小野へ寄って炭竈見物をし、「今浦嶋」の話を聞いた。この炭焼翁の哀れな話は、直前に置かれた「生まれはどうであれ人間は必ず死に、その身は焼かれて煙の種となる」という言葉から連想されたもの、または具体例なのではないだろうか。翁は百八十年以上もの間、明け暮れ炭を焼いていて身体も「くろがね」のようになってしまった。六月の中頃に突然身体が熱いと言い出して苦しむので、皆が団扇であおいでやったが、かえって身が燃えるといって沢に飛び込み、「じゆつ」といって消えて形も残らなかったというのである。つまり死んで荼毘に付されるという意味の「身は煙の種なる」を、怪異風に仕立て直したのが本話であったと考える。

この後半の話からはいくつかの先行作品が想起される。その一つは白居易の「賣炭翁」である。「賣炭翁」はあまりにも有名であるから、「炭焼翁」から「賣炭翁」への連想も難しくはあるまい。あげるまでもないだろうが、おおまかに内容を確認しておく。

炭を売る翁の頭は白く、顔は煤だらけで手は真っ黒だ。自分自身は単衣を着て雪の寒さに身を震わしているのに、炭の値が下がるのを心配して気候が寒くなることを願っている。炭を積んだ車に乗って早朝出発してきた翁は飢え疲れ、市の門外で一休みをしていた。そこに宮の使者がやってきて、ほんの少しの絹（半匹紅綃一丈綾）を代価として牛の角に巻き付けると、炭をすべて持って行ってしまった。

社会的弱者の姿が描かれるこの「賣炭翁」を考えると、前半で紹介された都の人々の優雅さが際立ち、「同じ人間のうまれ所、田舎住ひのいと口惜」という言葉がより納得のいくものとなるのではないだろうか。

二つ目は『平家物語』巻六「入道死去」である。清盛は「身の内のあつき事火をたくが如し」という状態になって苦しみ出す。その熱さは、水をはった浴槽につかっても身体が冷えるどころか水が湯になるほどであった。筧の水を流しかけても「石やくろがねな（ン）どのやけたるやうに、水ほどばし（ッ）てよりつかず。をのづからあたる水はほむらとな（ッ）てもえければ、くろけぶり殿中にみち〳〵て、炎うづまひてあが（4）」ったという。清盛は熱病で悶死し、その遺骸は愛宕で火葬されている。この愛宕については諸説あるようだが、京都大原と西鶴が認識していたのであれば小野との接点ともなろう。また、「引捨た

る柴つみ車に腰掛て、三人ともにしばらく足を休め、里人をまね」く場面を、熊谷直実が帰依した法然の大原談義を意識したものとすると、『平家物語』との関連も深まる。また、『団袋』に「夜話」としてある、

振舞んあたごのはづれ比叡の雪　　団水
情にあたる小野の炭竈　　西鵬

の付合も参考となるか。

三つ目は「団を持てあふぎけれども、中／＼此風にて燃る身の堪忍ならず」という一文からの想起で、先行作品というより作法からの発想である。炭などの火力を増す場合、団扇などであおいで風をおくるのが一般的であるが、本話の炭焼翁も団扇であおがれてかえって燃えることに苦しんでいた。これは最終文に「扨は年／＼あいつもりての炭火、水に消ける」と表現されているように、翁の身体が炭そのもののようになっていたことを意味している。人体が可燃物化した話とみたとき、その発想は西鶴も嗜んでいた茶の湯の炭点前から連想された可能性はないだろうか。『雍州府志』巻六には「円大なるもの、胴炭といふ。これを炉の中央に置き、これより左右、小炭を比並す。なほ人身の胴に手足を加ふるがごとし」（原漢文）とあって、炭を人間に見立てて点前の手順を解説している。こうした炭点前の発想が、燃え尽きる人間という話のもとになったとも考えられるか。

後半の話は現代でいう人体自然発火現象のような奇談の類いであって、笑話との組み合わせが多い『名残の友』の中では異質なものとなっている。この哀れな話が、全く笑う部分のない巻三の七の次に配置されていることには注意せねばならないだろう。

本話は冬の寂しい描写から始まって、燃え尽きた翁の哀れな話で終わる。この暗い印象に西鶴晩年の心境を読み取るのは井上敏幸氏である。井上氏は『新大系』の解説で、上京した西鶴が団水との両吟歌仙二巻を試みて結局半歌仙で終わったことに言及し、「おそらくこの当代俳諧との決定的な断絶感が、団水との両吟俳諧の事実を記すことを潔しとせず、「俳諧の友とせし団水・言水などと、うき世の事どもを語りなぐさみて」と、あたかも咄ばかりをしたという叙述をもたらしたに違いない」という。また、本話の寂しい風景や「隙坊主」「我身をうち笑」ったという西鶴自身の描写から、「当代俳諧との断絶感からくる心の動揺が、こうした暗いイメージをもたらしたに相違ない」とし、「せはしき心」を「世間的な意味での師走の「せはしき心」なのではなく、当代俳諧との断絶を確認せざるを得なかった心の動揺からくる一種の「いらだち」だったとみるべき」と主張するとともに、「田舎住ひのいと口惜」と記す部分を「やはり当代俳諧から突き放されてしまった西鶴の心の動揺がもたらした述懐だったと考え」たのであった。

こうした西鶴の「当代俳諧に対する憤懣」は、元禄三年頃の西鶴書簡に「此ごろの俳諧の風勢気ニ入不ㇾ申候ゆへ、やめ申候」とあるのを背景として読み

取られたもので、『名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」でも同様の心境を指摘されている。

確かに『名残の友』には、西鶴自身の老いを述べた部分が散見できるが、井上氏のいうほど救いようのない寂しさが全体を覆っているわけではない。本書に描かれる俳諧師にまつわる笑いや俳友との交流には、ある種の達観した軽さのようなものがある。それは年齢を重ねた俳諧師が、落ち着きをもって状況を把握したり回想したりして、軽い口調でそれを語っているからではないのか。先にあげた『団袋』の付合も、客の西鶴へ雪の景色を振る舞いましょうと述べた団水に対して、炭竈のように心があたたまりましたと西鶴が応えたものだった。水谷隆之氏は本話をあげて「やや自嘲気味に老の寂しさを述懐している」としつつ、この付合について「気心の知れた団水との両吟であるゆえこの心情を忍ばせて、共に見物した炭窯の火で心の中もあたたかくなった、と言ったものであろうか。ただし、当句をとりたてて述懐句とみる必要はない。発句に名所（あたご・比叡）が詠まれたため、名所（小野）を出した」と解説されている（5）。この付合の状況が本話の背後にあるのならば、「当代俳諧に対する憤懣」の表明を読み取るよりも、団水との交流を見る方が、西鶴の意図を汲んだ読み方になるのではなかろうか。

（1）　本文は、ちくま学芸文庫『都名所図会』筑摩書房　平成11年）を使用した。

（2）　窪寺紘一氏『日本将棋集成』（新人物往来社　平成7年1月）

（3）　増川宏一氏『将棋Ⅱ』（法政大学出版局　昭和60年11月）

（4）　本文は『平家物語』上（日本古典文学大系32　岩波書店　昭和34年）を利用した。

（5）　水谷隆之氏「『団袋』新収西鶴・団水両吟半歌仙注釈稿（二）」（『京都語文』18号　平成23年11月）（『西鶴と団水の研究』（和泉書院　平成25年2月所収）

◆巻四の二　それ／／の名付親

本話は名前の付け方に関する話である。

益翁・由平・来山・如見・豊流・賀子・万海などが集って「ほとゝぎすの千句」（未詳）を興行した。夕方から酒興となり、その後、蛍見に船で出かけて話に興じていると、太鼓持ちの「生酔の九八」が出てきて、産婆の母親が公家衆の御息女と新町の太夫との子供に命名することになったので、知恵を授かりたいと無心した。依頼された俳人たちは、軽口にまかせ、公家衆の御息女の息子を「琴丸」、太夫の息子を「三味線丸」とつけて「それ／／の名付親さま」と大笑いした。

この笑話の典拠として、「西鶴の方法」は『私可多咄』巻五の十八の影響を指摘する（1）。『新大系』は『醒睡笑』巻二「名付け親方」に話の発想があるとし、類話として『私可多咄』をあげている。

『私可多咄』の内容は以下のとおりである。

源氏の流れをくむ某が、息子と娘の命名を共白髪の老夫婦に依頼したところ、息子を「楊名介」、娘を「小枕」と付けた。その理由を問うと、源氏に因んで『源氏物語』から「楊名介」、髪が固くなるから「小枕」と付けたといったという。野間氏はこれを「古風な笑ひ」とするが、本話のような身分による名付け分けとは異なる。

『醒睡笑』巻二は、名付けに関わる十九話を載せるが、身分差をそれぞれの名に表すといった話はない。強いてあげるなら第五話であろうか。ある百姓が「畠山右兵衛佐」という身分違いの名を自分に付けて得意がっていた。それを見かねた坊主が、言いにくいので上下をかえて「山畠助兵衛」にしたらどうかと提案したところ、百姓も納得したという話である。身分に即した名という点ではこちらの方が近い。

また、『醒睡笑』巻五には音の認識が身分によって異なる話がある。はたはたという不審な音に対して、和歌を詠む人の子は「水鶏の声」といい、侍の子は「具足の音」といい、農人の子は「麦をつく音」といったという話である。

本話と完全に一致する笑話はまだ発見されていないのだが、命名や身分差に関するものは存在していたわけであるから、本話のような話が創作される下地は既にあったといってよかろう。

これらの典拠説に対して別の視点から本話を分析したのは楠元六男氏である（2）。本話前半部の「草の名も所によりておもしろし」という諺に注目し、草の名は所によって変化し、人の名は身分によって変化するという内容を、本妻と妾の子供に対する命名話で落としたものとされたのであった。この諺は『菟玖波集』巻十四の「草の名も所によりて変るなり／浪速の芦は伊勢の浜荻」（救済法師）を淵源としたもので、西鶴にはこれを意識した役者評判記『難波の皃は伊勢の白粉』（天和元年か）があることはよく知られている。

この説に従えば、「草の名も所によりておもしろし」の「草の名」から本話の場面「難波江」が引き出され、「難波江」から季節「芦かる比」が導き出されたことになる。冒頭の「俳諧師の名乗」の問題から出発し、最終的には子供の名前をつける話で終わっていることから、一話全体は名前の問題で統一されるのだが、本来は地域によって変化していく名前が、身分によって変化しているところに一話の笑いが込められた。要するに「草の名も所によりて変るなり」の人的あしらいによって、本話が成り立っているというのである。

楠元氏の説では本話全体が諺によって構成されていることになり、場所や時期は事実に基づいていないことになる。こう理解した時、野間光辰氏の次の言葉が思い起こされよう（3）。

由平・来山・賀子・万海等一座の、ほとゝぎす一日千句興行の事実は、こ

れも確かめる資料を今持ち合はせてゐないけれども、やはり実際に有つたことと考へてよいであろう。しかしそれらの事実に惑はされて、そこに語られた西鶴の作りばなしを、実話と混同することは誤りである。何気なしに、実際にあつた事柄を持ち出して、そのまことらしさに聞手を惹き入れつつ、いつの間にか、彼自身の作りばなしの世界に誘ひ込んで、最後に上品な軽い笑ひをとる。これが西鶴の例の狂言であり、はなしの行き方である（傍点はママ）。

つまり「ほとゝぎす一日千句興行」が事実であったとしても、本話の設定が事実に基づいているとは言い切れないわけである。本文にある諺から場所と時期を設定し、その場所にふさわしい大坂の俳諧師を登場させた。そして諺を人の上に置き換えて具体化し、一座を笑いでおさめたのが本話なのである。まさに西鶴の例の狂言といえよう。ふと示されたこの諺によって、本話は構築されたのである。

（1）　野間光辰氏「西鶴の方法」

（2）　楠元六男氏「はなしの切れあじ」（『芸能文化史』第21号　芸能文化史研究会　平成16年7月）

（3）　（1）に同じ。

◆巻四の三　見立物は天狗の媒鳥

巻四の三は、京都四条河原の見世物についての話となっている。

京都では顔見世興行の噂も落ち着く頃になると、正月の出し物を考え始める。見世物小屋の木戸番たちも集まって、春の見世物として何か変わった生き物がほしいと思案していた。だが、おおむねの作り物はやりつくしてしまって素材がない。そこで、「世のおかしき事ども沙汰いたされし」俳諧の会に伺って、皆様の作意で見世物を案出してくれと依頼した。一座していた「おどけたる人」がこれに対応し、古流の孔雀、中古の力持ちなど「手ぬきのない物」が重宝されるが、やはりどれも古い。新しい出し物なら、松前の一番大きな梟を天狗の媒鳥にして「生の天狗」を落とし、見世物にすればよかろうと答えた。そして「かゝる媒鳥のためしあり」といって、人より鼻の高い数馬という浪人が京都中の後家を落としていたが、終いには皆が見知って後家も引っかからなくなったと語ったところ、「点者の物がたき似船・常牧・我黒・晩山その外の連中」は、後家の囮は新しい趣向だといって笑いとばしたという。

本話は「天狗の媒鳥」を「後家の囮」と見立てた趣向が落ちとなっているが、これが何故新しい趣向とされるのかを考えておきたい。まず「鼻高」が天狗の異称であることは説明するまでもなかろう。その天狗を落とすという意味で

「天狗の媒鳥」というわけだが、そもそも「天狗の媒鳥」という言葉は鼻の高い女性に対して使われており、遊女評判記『桃源集』にその用例が見いだせる。

○中町　吉野　かほよし。さりながら。鼻珎しきまで高し。とりもちをぬれば。天狗のおとりになるよし。髪のてい見事なり。様子もよし。心はよはし。一義の時のけいくるわ第一なり。

問名云吉野　松部耐相儔
隆準如高祖　念為天狗囮
敷しまの大和にはあらぬしまばらのよしのゝ鼻の名こそ高けれ

吉野は珍しいほど鼻が高いので、同類と勘違いした天狗までも誘い落とすことができるという冗談、または揶揄である（1）。また、『西鶴織留』巻四の一「家主殿の鼻ばしら」でも鼻の高い女性を揶揄する言葉として使用されている。

扇屋の女房が「家主の内義の鼻は人にすぐれて、阿太子山の天狗の媒鳥に見立た」といって笑った。揶揄された家主の女房は「わたくしの鼻柱を遊女のごとく売物にはいたさず」といって腹を立て、扇屋の女房にくってかかった。扇屋の女房は「嵯峨の筆屋といふ旅籠屋に天狗のこまんといふ人たらし女があつたが、どこやらの家持のお内義に生移しと、見しらぬものはないが、今は京のどこにか御座るぞ」と、家主の女房の過去を暴露するかたちで応酬する。この諍いがもとで扇屋は引っ越しを繰り返すこととなる。

『西鶴織留』では、鼻が高い女性として『源氏物語』の末摘花が例にあげられており、必ずしも「鼻高」が美人を意味するわけではなかったようであるが、ここで「遊女のごとく売物」「天狗のこまんといふ人たらし女」といっている点を考えると、やはりある程度鼻が高いことは男をたらすのに有効であったとみてよかろう。

こうした女性を形容する「天狗の媒鳥」という言葉を、「おどけたる人」は「松前の一番鼻」という具象で言い換えている。そして「生の天狗」を生け捕りにして見世物にしようという本気とも冗談ともとれる言葉には、本来人をさらう存在として認識されていた天狗を（2）、逆に捕獲するという意味合いも含まれていた。つまり第一段階では「天狗の媒鳥」の具象化と、人さらいを逆に捕らえるという発想の逆転が提示されたのである（3）。

そして第二段階として「鼻高の数馬」を紹介する。「鼻高」が女性ではなく男性に使われる場合、男性の陽物を暗示するとされ、これに欲求不満の後家が引っかかるというのである。女性を形容する「天狗の媒鳥」という言葉からさらに下卑た生々しい解釈となっていることが理解できよう。したがって、第一段階で示された「ミイラ取りがミイラになる」的な発想が、さらに「たらされる側の男がたらす側になる」、裏を返せば「男をたらすはずの女が、身体的魅力を自慢する男にたらされる」という意味に置き換えられたことになるのである。本文にある「かゝる媒鳥のためしあり」の「かゝる」は、「落とすものが落とされる」という立場逆転を指すのであり、さらに下卑た意味合いを付加した点が

「新しき仕出し」と評された所以なのであった。

さて、次に俳諧師について考えねばならない。この二つの話が「俳諧の会」で話題にされているところには、注意が必要である。最も単純に考えれば、京都四条河原の見世物芝居から京俳壇の点者四名を導き出したとなるのだが、どうもそう簡単な話ではないという。『新大系』は「京俳壇の中心に居た似船以下の俳諧師を登場させ、「物がたき」と形容した裏には、天和期の漢詩文調、元禄期の景気の流行を主導したこの連中に対する、西鶴的批判が窺える」と総括する。さらに水谷隆之氏は、この四名が『俳諧物見車』で非難されていたことに注目し、以下のように述べている（4）。

ここに挙げられた「似船・常牧・我黒・晩山」は、当時、京俳壇の第一線にいた新風の点者達であるが、ここではこの四人が、『俳諧物見車』（可休編、元禄三〈一六九〇〉年九月刊）でその巻頭に並べられ、まっさきに非難されていたことに注目したい。―中略―『西鶴名残の友』にある「天狗の囮」の話や、京中の後家を「おとした」という「鼻高の数馬」の話は、諸国点者に自作歌仙を送りつけ、その〈囮〉にまんまと引っかかった点者達の誤判を〈鼻高に〉あざ笑った『物見車』の編者可休を彷彿させるのである。さらに、その『物見車』の首巻序文には、「朝顔に黄あり白き有」という発句を「今時都に誰彼と名を知られたる人」に送り、上五文字を置かせたとある。そしてそれが掲載されたのが、まさに上述の似船以下四人の京の宗匠たちなのであった。

つまり本話は、『物見車』の作者の悪行をからかったものであり、元禄三（一六九〇）年秋以降の執筆とみて誤らないであろう。そして「点者の物がたき」とは、可休が送りつけた歌仙に点を掛けるばかりか、くだんの発句に上五まで置いてやったという、「似船・常牧・我黒・晩山」たち四人の京点者の実直さの謂いであったと考えられる。

このように、水谷氏は「鼻高の数馬」に可休を重ねており、さらには『新大系』の説を踏襲して以下のようにまとめている。

「世のおかしき事ども」を「沙汰」していたはずの「俳諧の会」の京点者たちが、「いづれもさまの御作意にて、見せ物になりますもの、出してくだされませい」という見世物の興行師の頼みにさえ応えられぬさまを描いて、京点者たちを「物がたき」つまりは古くさいと形容して揶揄したのには、「世のおかしき事」についての当流俳諧師の新たな「御作意」の凡庸さ、陳腐さをいう、西鶴一流の皮肉が込められていたと思われるのである。

これらの説はいずれも「物がたき」という表現に注目し、西鶴晩年の俳諧観を積極的に『名残の友』に見ようとしたもので、その解釈は否定されるものではない。しかし、さほど俳壇的思惑を導入しなくても、本話を理解することは可能である。景色・眺望を旨とする元禄景気の流行を主導した「物がたき」俳人たちも、本話では「新しき仕出し」と笑い捨てているわけであり、その笑い捨てた内容はきわめて人事的要素に満ちあふれたものだった。こうした人事的世界、すなわち「天狗の媒鳥」「後家のをとり」を、「物がたき」俳人たちも興じ

たのだとも読みとれるのである。たとえ西鶴に京俳壇を批判する思いがあったとしても、『名残の友』の表現はぼんやりとしていて明確な攻撃性を露わにしない。このような「揶揄ともとれる」という曖昧な表現こそが、『名残の友』の特徴だともいえるのである。

（1）『桃源集』の本文は、天理図書館善本叢書第十一巻『遊女評判記集』（八木書店　昭和48年9月）を使用した。

（2）『懐硯』巻五の一「俤の似せ男」には、行方不明者にそっくりな男が、天狗にさらわれたと嘘を言って、行方不明者に成り代わる話がある。また、『好色盛衰記』巻四の三「情に国を忘れ大臣」には、金吾という女郎を「讃岐の天狗が撮（つかみ）たるやうにも風聞、京の太郎坊がつかみしやうにも沙汰いたせし」とあり、「人をさらっていく」という意味で天狗を用いている。さらに、『嵐は無常物語』上では「母親是自慢して鼻高ふすれど、難波あたりに天狗のすめる椙山もなく、誰かおそるべき。」とあり、鼻を高くすることが天狗を招き寄せるとしている。

（3）「天狗」の見世物については『嬉遊笑覧』に記述がある。喜多村信節は『洞房語園』を引用しつつ「さいつころ葺や町小芝居にて、天狗のみせもの／＼と呼ばつて手をたゝき人を招く。何ならんと偽さるゝとは知ながら、這入てみれば梟の額の毛をむしり丹を塗こみ、ちいさき兜巾をかぶせ、紙にて裁付をはかせ、其体画ける天狗の如し。世の中をたはけにしたるやうなれど云々」と紹介し、「今も鴟などを作りて天狗の巣立とてみすることなど往々あり」と批評している。元禄の頃からそうした見世物があったと想像することも可能である。なお、「みゝづくは人に頭巾をぬはせけり　其角」（『宰陀稿本』）の用例もあり、西鶴が描いた趣向が必ずしも特異なものではなかったことはわかる。

（4）水谷隆之氏「西鶴晩年の俳諧と浮世草子」（『東京大学大学院文学論集』2号　平成19年6月）（『西鶴と団水の研究』（和泉書院　平成25年2月15日所収）。

◆巻四の四「乞食も橋のわたり初」

本話の冒頭は、西鶴の生活を垣間見せる一文となっている。

垣根の蔦かづら、秋霜にいたみ、朝皃あさましく、花見し朝とは格別に替りて、松の夕風、綿入着よといはぬばかりの声さはがしく、南どなりには、下女が力にまかせて、拍子もなきしころ槌のかしましく、うき世に住める耳の役に聞ば、北隣には、養子との言葉からかい、後には俳言つよき身の恥どもいひさがして、跡は定まって、盃事になるも、「おかしき人心」と、

我はひとり淋しく、雀の小弓など取出して、手慰みするに、

季節が秋であるため感傷的な文章になっているが、孤独を感じるその原因を、市井の騒音の中に見いだしているところなどは西鶴らしい。人との関わり合いを絶った隠者というよりは、「おかしき人心」を苦笑するご隠居といった様子である。南隣で打つ調子外れの砧の音がうるさいと言い、北隣から聞こえる夫婦喧嘩の声をいやいやながらに聞いているのだと続ける。その実、仲直りする夫婦の様子を窺うにつれ、人恋しくなってしまう。その彼のもとに、遠く江戸から其角がやって来た。この時、西鶴がいかに嬉しかったかは想像に難くない。

竹の組戸たゝきて、亭坊／＼とよぶ声、関東めきたり。誰かと立出るに、あんのごとく其角、江戸よりのぼりたる旅すがたのかるく、年月の咄しの山、富士はふだんの雪ながら、さらに又おもしろくなって、露言・一晶・立志・挙白などの無事をたづねて嬉しく、一日語るうちに、互ひに俳諧の事どもいひ出さぬも、しやれたる事ぞかし。

この話を元禄元年十月から十一月のこととすると、其角は二十八歳、西鶴は四十七歳（1）。若々しい身軽な旅姿をした其角の登場は、独り住まいの亭主の心を明るくした。四年ぶりの再会ということもあって、当然話は盛り上がったはずである。更にこの訪問は、江戸住の俳人達のうわさ話をするに都合の良い出来事でもあった。

前半最後の「互ひに俳諧の事どもいひ出さぬも、しやれたる事ぞかし」は、従来問題とされる一文である。『新大系』は

一日話して、互いに俳諧を口にしないとは洒落たことだと記しているが、「此ごろの俳諧の風勢気に入り申さず候」（長澄宛西鶴書簡）という、西鶴の心境も微妙にかかわっていよう。

とし、俳諧から遠ざかっていた晩年の西鶴の心境と関連づけて考えられた。

実際には、二人が意図的に俳諧の話を避けたわけではなかったようである。というのも『俳諧秘蔵抄』に、その時のことと思われる記事があるからである。

此句（「唐崎の松は花より朧にて」の句・引用者注）連歌也と西鶴が難じたるなれど、桃青は全身俳諧なるものなりと其角が一言に、閉口して答なし（2）

この記事について、野間光辰氏は「言下に其角の反駁に遭うて沈黙せしめられたことは、さすがに触れたくなかつたであらう（3）」と述べ、また『其角全集』年譜編においても

『俳諧秘蔵抄』の記載は、「其角の一言で閉口」とあり、これを文字通りに

とれば、西鶴の方から言い出して、其角の一言で、西鶴が口を閉じたので、西鶴の気持ちになってみれば、後の記憶で、『西鶴名残の友』のような記載となったと考えられるので矛盾とはならないであろう。

とされている（4）。これらはいずれも西鶴が口を閉じてしまったという捉え方であって、当時の俳諧に後れてしまった西鶴というイメージが強くなる。このような捉え方から、『新大系』では『名残の友』の創作意識を元禄期における談林俳諧師西鶴の心境そのものと規定し、創作意図を　1当代俳諧への憤懣、2咄への傾斜、3今時の俳諧師批判、4理想的俳諧世界の主張、の四点に絞ったのであった。こうした俳諧に拘泥した見解について西島孜哉氏は以下のように疑問を呈している。

西鶴の淋しさを晩年の懊悩と解することは可能であろう。しかしその淋しさは、俳諧にかかわるもののみであったのであろうか。晩年の浮世草子作家としてのあり方そのものに原因するものではなかろうか。井上氏のいう3当代俳諧師への批判は、俳諧師西鶴にこだわった解釈ではなかろうか。（5）。

『俳諧秘蔵抄』は寛延四年に書写され、三十一年後の天明二年に再び清書されたものである（6）。その記事の取材源は明らかでなく、またどちらか一方の立場から書かれた可能性もある。そう考えてみる時、本話において『俳諧秘蔵抄』の記事にさほど拘る必要があるのだろうか。

事実がどうであれ、西鶴自身が「しゃれた事」と記しているのであれば、本話での読みもそれに従って進んで良いのではなかろうか。本文中、西鶴は其角について一言も批判をしていないのである。俳諧師同士が久しぶりに再会する。互いに本業の俳諧抜きで他愛のない話を楽しむ「しゃれた」一日だったと読む方が、むしろ西鶴の意図に添った読み方だと考える。

長谷あゆす氏は、この前半部に謡曲「砧」の趣向を読み取っている。長谷氏は本話と謡曲「砧」の本文を比較し、「松風」「砧」「養子との言葉からかい（夫への恨み言）」「和解」「弓」という展開の接点から、冒頭部分は謡曲「砧」を踏まえているとされた。さらにこの謡曲「砧」が引用する漢詩「聞夜砧」（『白氏文集』十九）から白楽天を結びつけ、「酒好き」の共通点で其角を重ねたという（7）。ここで注目すべきは、其角編『虚栗』（天和三年刊）に言及していることである。冒頭で列挙された俳人「露言・一晶・立志・挙白」のうち「露言」以外は『虚栗』に出句しており、本話に描かれる西鶴と其角の話題はこの『虚栗』であって、本話の構想は貞享元年の其角来訪時まで遡るとされたのであった。貞享元年当時の西鶴と其角の会話であるならば、「互ひに俳諧の事どもいひ出さぬも、しやれたる事ぞかし」の一文も、「俳風の違いを超えた其角との友情が意識されていたとも解することができ」、「一世一代の大イベント（二万三千五百句興行・引用者注）に際して江戸から応援にやって来てくれた其角を思い、彼と話に花を咲かせた折のことを好意的に描き出したものとも捉えうるのである」と述べている（8）。

本話前半の俳人は江戸繋がりで列挙したとも考えられるし、貞享元年頃の西

鶴が本話に描かれるほど淋しい境遇にあったのかは疑問だが、「互ひに俳諧の事どもいひ出さぬ」という一文をもって「当代俳諧に対する憤懣（『新大系』解説）」であるとか「其角が気を遣って、西鶴が嫌がっていることを口にしなかっただけ（『新大系』解説）」と取るのは、些か蕉風側に立ち過ぎた見方で首肯しかねるのである。本話で西鶴は其角を批判してはいない。逆に其角に因んだ話として一話を成立させようとしているのだから、「好意的に描こうとした」という長谷氏の考えに賛同したい。

長谷氏の論考は本話に描かれる其角来訪が、貞享元年と元禄元年のどちらに基づくかという議論から始まっていた。元禄元年とすれば、『新大系』のように晩年の西鶴の心境を読み取ることになり、貞享元年とすれば、長谷氏のいうように本話に漂う寂しさも趣向の一つということになろう。

問題は、本文に「あんのごとく、其角江戸よりのぼりたる」とあって、本話の設定が「其角との再会」になっている点である。其角来訪を貞享元年とした場合、西鶴は其角とそれ以前に会っていなければならない。しかし其角の上京が記録によって確認できるのは貞享元年と元禄元年のみであった。これについて長谷氏は、西鶴が天和二年に江戸へ下った際に、其角と知音となっていた可能性があるとされたのである。

ここで考えたいのは、其角来訪の事実と本話の執筆時期が同じなのかということである。西鶴の経験に基づく事実が描写されていたとしても、執筆時期がそれと同時期とは断定できないのではないか。例えば、本書巻三の六「ひと色たらぬ一巻」は、田代松意が江戸からやってきて、西鶴らと三吟三百韻を催した時の話となっている。これは延宝六年のことであって、『虎渓橋』（延宝六年頃刊）の成立に関わる内容であることは確かである。ではこの話が延宝六年頃に執筆されたのかというと、それは違う。本文にある西鶴の名前が「西鵬」となっているからである。西鶴が「西鵬」と書名していた時期は元禄元年から元禄四年までであるから、執筆時期は元禄元年以降ということになろう。つまり、事実の時期が貞享期まで遡るとしても、執筆時期まで遡るとは必ずしも言えないということなのである。

結局本話の執筆をいつと想定するかであるが、複数の俳諧師の名を列挙すること、経験譚としての本話のありようから考えて、元禄元年以降の執筆とみる。ただし、『新大系』のように西鶴の懊悩を冒頭に読み取るのではなく、其角から導き出された趣向による秋の情景と捉えたい。

長谷氏はこの其角との関連から、冒頭部分の世界を謡曲「砧」と重ねて解釈した。長谷氏が指摘する「砧」の世界は、本話においては西鶴が住む隣近所の様子として描かれている。隣の夫婦喧嘩を聞いて「おかしき人心」と思う西鶴の心境は、「うき世」に住みながらも俗世間に染まりきれない人物のそれである。周りの世界に馴染めず、一歩離れて観察する。それゆえの孤独感やわびしさが、秋を描く冒頭文をより淋しく印象的にしている。こうした西鶴側の心境はどこから来ているのであろうか。

この問題を解く鍵は、『源氏物語』「夕顔」の巻にあると考える。源氏は五条

の大弐の乳母の病気を見舞うのだが、隣家の夕顔に興味を覚える。しばらくしてある仲秋の夜、夕顔の宿に一宿することになる。その辺りは非常に卑俗な町の雰囲気で、「またなくらうがはしき隣の用意なさ」なのである。そこでは「踏みとどろかす唐臼の音も枕上」と覚え、「あな耳かしがまし」という状況であった。さらに隣の「賤の男」の「あはれ、いと寒しや」といった生業の話なども聞こえ、虫の声・衣うつ砧の音も、渾然として聞こえてくる場面である。ここで源氏は「いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ。くだくだしきことのみ多かり」「忍びがたきこと多かり」と閉口するが、前栽の露や虫の声を聞いて、かえって風変わりで面白いと思い、全ての欠点が大目にみられるという。こうした源氏の心境は、西鶴の心境に重なる。西鶴は自宅の周囲の状況を、さりげなく『源氏物語』の「夕顔」宅の描写になぞらえつつ、その卑俗で庶民的な様相をクローズアップさせたのではないか（9）。

このような視点から眺めるとき、西鶴はこの自宅から出ていくように設定されていることがわかる。源氏と夕顔とは廃院にやがて出かけていくのだが、その設定に照応するかのごとく、次の場面では轍士に誘われて西鶴らが出ていく展開となっている。

では、その後半部分を考えていきたい。後半になると内容はがらりと一変する。其角来訪の翌日のことである。乞食にまつわる話でまとめられており、目録題に相当する「橋のわたり初」の話と、笙を吹く乞食の話の二つが描かれている。

西鶴は轍士に誘われて八尾まで俳諧の催しへ出掛けた。途中、乞食達の住む川岸を通った彼は、興味を覚えて「しばし立どまりて様子を見る」のである。後半初め、道傍に広がる寒々とした秋の景色を描き出し、前半との季節の符合をみせる。しかし、次に登場する乞食達には、厳しい季節の到来を悲観する暗さが微塵もない。

海道よりおのが住家への細道に、すこしの溝川流しに、木竹をひろひ集めて、五尺にたらぬ橋をかけ、けふ渡り初とて、欠徳利に酒を入て、祝義といふ

乞食達は「橋のわたり初」を明るく祝っている。中でも白髪の老人乞食は、十三の年より乞食をして、これまで一日もひもじい思いをすることなく、子供も十二人、夫婦息災であると我が身の栄花を喜ぶ。他の乞食は、八十八の枡掻を真似て、この老人から八十八の竹箸を切ってもらうのである。乞食なりの栄花が少々間抜けて見え、滑稽な場面となっている。「それ／／の身祝ひおかしや」は「乞食も身祝い」などの諺をもじった表現であり、蔑視というよりも、やはり様々な人間世界を「おかし」と捉えている西鶴の感想といった方が妥当であろう。

このような見聞が事実に基づいているかどうかは判断しかねるのであるが、似た題材が『はなし大全』（貞享四年刊）中「乞食も夷講」にも見られることから（10）、乞食に関する話として挿入されたものと推する。従って、轍士同道の催しが事実であったとしても、其角来訪の翌日という設定は虚構である可能

性が高い。

この話の「落ち」に当たる部分には、次のエピソードが挿入されている。榎木に登って何かを探す乞食がいるのを西鶴らは見つける。話しかけると、「笙の舌をしめすによし」とされる鴻巣の石を探しているのだという。乞食の身分で笙を吹くのかと聞けば、乞食は「手なれし笙を取出して、秋風楽の調子」を吹いた。「さるほどに人はしれぬもの。乞食に筋なし。あれは極楽の乞食なるべし」と西鶴達は聞き捨てて通った。

後半部分は、三つの諺によって構成されているといってよい。橋の渡り初めの部分は「乞食も身祝い」「乞食も朝祝い」といった諺、笙の乞食の部分は、西鶴の慣用である「人はしれぬもの」と「乞食に筋なし」「乞食に種なし」という諺を組み合わせたもので、いずれも諺の具体化なのである。

周知のごとく、笙は雅楽に用いられる楽器の一つで、一般町人でさえ扱うことは少ない。つまりこの男は、古人の伝えを知る程の教養を持ち、笙をたしなむほど裕福な暮らしをしていたということになる。「やせかれて色こじろき」ことから、乞食になって間も無いということも分かる。どのような事情があったかは知れぬが、人とは分からぬものだと思うのも自然であって、諺「人はしれぬもの」「乞食に筋なし」の具体化として創作された話と理解することができる。

最後に「あれは極楽の乞食なるべし」と言って聞き捨てたとあるが、これは仏教絵画にある飛天の姿を連想したものと考える。飛天とは、一般には虚空を飛ぶ天人のことで、浄土の空中を飛びながら天の花を散らし、あるいは天の音楽を奏し、あるいは香を薫じて、仏を讃える天人を意味する（11）。中国・日本では笙を吹く姿で描かれる場合も多い。西鶴は、木の上で懐かしげに笙を吹く乞食の姿を、笙を持ちながら優美に飛翔する天人に見立てたのであった。考えてみれば、極楽に乞食などいるのかと言いたくなるのであるが、「笙」などを吹くのだから「極楽の乞食」なのだろうと「聞き捨てた」ところが面白い。全く相いれない存在であるにも拘わらず。妙に納得してしまう一言である。この発想の妙味が、乞食話の落ちとなる。

乞食と楽器の名器とが関係する話は、蝉丸伝説等に明らかなごとく、多様なバリエーションをみせつつ諸資料にみえるところである（12）。そうした蝉丸乞食説のごとき話の延長線上に、笙の笛の話もあると考えられよう。

長谷氏はこの繋がりを西鶴の『独吟百韻自註絵巻』から解いている。長谷氏が指摘する『自註絵巻』との合致は重要であるため、七十二～七十四句の付合を以下にあげて確認しておく。

七十二　鴻の巣おろす秋の夜の月
七十三　平調の笙の息つぎ静にて
七十四　詩人時節の露を哀み

七十二と七十三は、「鴻の巣」から「笙」を、「秋」から「平調（秋の調子）」を付けたと自註は説く。七十三と七十四は、「平調の笙」を吹く人物を「詩人」と

みての付合。自註ではこの詩人を「林間に酒好きの老人」としている（13）。この「林間に酒好きの老人」が「林間煖酒焼紅葉（林間に酒を煖めて紅葉を焼く）」（和漢朗詠集・白氏文集）の連想から白楽天であるとした長谷氏の見解は尤もである。さらに、この付合を本話に重ね合わせ、七十四の「詩人」すなわち白楽天を本話の乞食に取りなしたとされた。確かに「笙―鴻の巣の石―秋風楽」「林間に酒―白楽天」の連想は理解できる。だが、「白楽天―乞食」とはならない。乞食を結びつけるには、其角が間に入らねば理解できないのである。

其角と乞食を結びつけるのは何か。本話で描かれた二つの話、前半の其角来訪の話と後半の乞食話とは、ただ並べてあるだけで、ほとんど関係が無いように見える。日記風に綴った記事をそのまま載せている感もあるが、果たしてそのように受けとって良いのだろうか。『名残の友』の話は、いくつかの軽口話を改作し、俳諧師に関連づけて一話に仕立て直すという方法で作られている。本話でも、其角を登場させ、江戸住の俳人を取り上げるのが目的であったなら、乞食話が添えられた意図も考える必要があるだろう。

其角と乞食について考える場合、まず思い浮かぶのは其角染筆『乞食の画巻』である。元禄三年から六年までに染筆されたといわれるものである。乞食の絵に以下のような詞書が添えてある。

不論貴賤與親疎　んめが香や乞食の家ものぞかるゝ
（『続虚栗』貞享四年刊）
これらがたのしむ所、をのれもしらぬなるべし。
もし己れをしれるものならば、
橋下石上自ラ菩薩地　乞食哉天地を着たる夏衣（『虚栗』天和三年刊）
花摘　あまさかる非人貴し麻蓬（『花摘』元禄三年五月吟）
右は車林下の非人　貴しやそれ／／の風我等か夏といへる句を逸興してその非人に答侍る
哀親なしと聖太子の憐み聞えさせ給ふにも、慈悲をはなれたる孤独いくばくぞや
玉まつり門の乞食のおやとはん（『続虚栗』）
寒山讃　寝る恩に門のゆきはく乞食かな（『いつを昔』元禄三年刊）

晋其角　戯画

［（　）内は引用者］

ここにある「橋下石上自菩薩地」という記述は、本話の内容を彷彿とさせる（14）。また「元禄三年加生ら宛其角書簡」には次のようなことも書かれていた。

乞食の文二通のぼせ候て御めにかけ申度候へども、是は我等文庫の重宝にて候まゝ折もあるべく候。季吟は公方様の御点者、私は乞食の師となり候

事、天地懸隔に候へども、此道の満足、御さつし可被下候。以上。

北村季吟・湖春父子が幕府に召されたのは元禄二年十二月のことである。片や公方様の点者、片や乞食の師と其角は自嘲する。天地懸隔ではあるが、「此道の満足」と述べている。要するに、「乞食の師」に「道」を見いだした其角の心境が語られているのである。先にもあった元禄三年七月刊『花摘』には

三蔵といひけるかたいもの（乞丐者＝乞食）、つゞれたる袋より俳諧の歌仙取出して、点願はしきよしを申てしさりぬ。其巻の前書に、こゝにいやしき土の車の林の陰に身をかなしめる有と書り。いかなるものゝなれるはてにか有けん。かの巻の奥書に申つかはしける。

あまさかる非人貴し麻蓬　角

梅が香や乞食の家もと聞えつる、にほひ有けるにや。かかる功徳をうけ給て

名木を乞食に習ふ桜かな　山川

とあって、本話後半とも重なる内容となっている。こうした例から見ても、其角が乞食に対して深い興味を持っていたことが推測できよう。あるいは芭蕉の趣味と軌を一にしつつ、高野聖や西行の姿を、そこに幻視していたのかもしれない。

其角没後八十一年、天明七年刊重厚編『乞食袋』には、先の『乞食の画巻』より取られた「梅が香や」「乞食哉」「あまさかる」「玉まつり」の四句が載せられ、後世にも広く伝わっていたことが確認できる。その他、其角による乞食の句は次のようなものもあった。

菰一重わぶや乞食のぬくめ犬（延宝九年成『東日記』）

道ばたに乞食の鎮守垣ゆひて（元禄二年成『阿羅野』）

草ふかき乞食の玄関人まれに（元禄四年成『雑談集』）

世の花や五年以前の女とは　キ角

此句をおもふに王ふちの笠きたるは

今の世に乞食女ならではなし。然ば小町

が世にふる様もさこそかはりておもふ

らんと晋子がおもひ付たるなるべし

（元禄六年跋『桃の実』）

以上のような例から、其角の「乞食好み」が窺い知れるのである。彼の乞食趣味は、他者にも強い印象を与えたのであろうか。後世の『橋守』（元禄十年成）、『随門記』（享保八年写）、『梨園』（享保二十年刊）、『心ひとつ』（宝永三年刊）、『其角一周忌』（宝水五年刊）、『星月夜』（元文四年）等で、これら乞食の句が

取り上げられている（15）。このように、其角の「乞食好み」は、ある程度俳諧師の間で評判になっていたものと推察される。

本書『西鶴名残の友』の執筆時期については諸説あるが、先に述べたとおり本話の執筆を元禄元年以降とし、西鶴が記憶を呼び起こしながら本話を創作していったとしよう。本話では、まず元禄元年の其角来訪を描こうとしたと考えられる。物寂しい頃に遠方からわざわざ訪ねてきてくれた其角。西鶴は、その其角に相応しい話として、或いは其角から連想される話として、後半に乞食のエピソードを持ってきたのではなかろうか。そうであるとすれば、前半と後半は其角を中心に収斂していく。

まるで日記の一部分であるかのような二日間の記述だが、実際にはそのようなものではなかったのであろう。本話は思い出と連想を交えた作り話だったのである。其角という俳諧師から思い起こされる出来事とイメージを綯い交ぜにして創作し、かつまとめられた話なのである。

ここで再度、白楽天を取り上げた長谷氏の説に立ち戻ろう。長谷氏は、筆者が唱えた其角と乞食の関連（17）について賛同され、その上に『自註絵巻』の付合を重ねて論じている（18）。つまり「鴻の巣」―「笙」―「秋風楽」―「詩人（林間に酒好きの老人）」―「白楽天」とあった『自註絵巻』の付合に、「白楽天」―（酒好き）―「其角」―「乞食」と繋げたのである。そして其角が白楽天を意識していたことも取り上げつつ本話の構成を考え、前半の謡曲「砧」―「白楽天」―「其角」―「乞食」と連想し、本話の落ちは白楽天を乞食に見立てた趣向としたのであった。ただし、この連想に「極楽」が見えてこない点には注意しておきたい。本話の落ちは「極楽の乞食」である。笙を吹く乞食を「極楽の乞食」としたのは、やはり仏教絵画にある飛天のイメージであると考える。

（1）　野間光辰氏『刪補　西鶴年譜考証』（中央公論社　昭和58年11月）の元禄元年の条に「是歳冬、上洛中の晋其角、大阪に西鶴を訪ね久闊を舒す。西鶴、芭蕉の「辛崎の松は花より朧にて」の句を連歌なりと評す。翌日、轍士に誘はれて西鶴八尾に赴く」とある。淡々撰『其角十七回』に摸刻される自筆略年譜により其角の上方旅行日時を確認し、季節が合致する元禄元年秋より翌二年秋にかけての旅行とする。その動静から、「其角の西鶴訪問は、（元禄元年）十月二十日以降十一月二十二日迄の間のことと推測せられ、『名残の友』の記事と完全に符合する」という。これ以前の西鶴訪問は貞享元年六月晩夏の頃であるから、再会はおよそ四年後となる。

（2）　『俳諧秘蔵抄』の本文は柿衞文庫蔵本を用いた。

（3）　（1）に同じ。

（4）　今泉準一氏・石川八朗氏・鈴木勝忠氏・古相正美氏・波平八郎氏共編『宝井其角全集』年譜編（勉誠社　平成6年1月）

（5）西島孜哉氏『『西鶴名残の友』論序説」（『武庫川国文』第40号　平成4年11月）（『西鶴　環境と営為に関する詩論』（勉誠社　平成10年）に再録。

（6）この記事に関して野間氏は、「『俳諧秘蔵抄』の所伝は、まだその據る所を確かめ得ないから何ともいひかねるが、さりとて『雑談集』の記事によつての創作ともいひかねるやうである。元来右伝書は、村径が「或老誹」より書写伝授を受けたものであった。多分は当時の見聞・直話等に基いて、かくは言ひ伝へられたものであらう。」とされている。

（7）長谷あゆす氏「「例の狂言」考―『西鶴名残の友』の事実・虚構―」（『近世文芸』76号　平成14年7月）（修訂して『『西鶴名残の友』研究　西鶴の構想力』清文堂　平成19年9月）に再録。

（8）（7）と同じ。引用は注14を参照。

（9）前半部分に『源氏物語』「夕顔」を見ることは、（7）の長谷氏によって否定されている。『源氏物語』本文の「さまかへて思さるる」という源氏の心境は、「傍らにいる夕顔への愛情ゆえにそれらを許せる気持ちになった」のであって、「ひとり寂しく「おかしき人心」とつぶやいた西鶴の心境と重なり合うとは考えにくい」と長谷氏はいう。筆者としては、世俗の生活から一歩離れた境地にいる主人公が、市井の喧騒を興味深く聞くという設定を思う時、やはり「夕顔」の場面を思い浮かべるのではないかと考える。まして西鶴は俳諧師であるから『源氏物語』は自家薬籠中の物であったはずで、隣家の喧騒を興味深く聞くという場面が一致すれば連想は成り立つのではないだろうか。

（10）『新大系』脚注。『はなし大全』「乞食も夷講」の内容は次の通り。

夷講の日、乞食達が自分たちも夷講をしようと酒宴を始めた。下乞食の面桶（飯を盛る曲物で、乞食が持つもの）を盃にしてあちこち廻しているうちに、その面桶を割ってしまった。面桶がないと明日から乞食ができないと下乞食が泣いたところ、今日は自分たちの夷講だ。泣くと気にかかって悪いといったという話。

（11）『日本美術史事典』（平凡社　昭和62年）「飛天」の項の解説を参照。

（12）『三国伝記』『俊頼髄脳』等。安田夕希子氏「蝉丸伝承考」（『芸能史研究』110）等を参照。

（13）『独吟百韻自註絵巻』の本文は、新編日本古典文学全集61『連歌集・俳諧集』（小学館　平成13年7月）を使用した。

（14）柿衞文庫蔵。三画一軸の内の一つ。写真版は、『俳人の書画美術』（集英社　昭和53年）所収。

（15）「梅が香や乞食の家も覗かるゝ　乞食とせめ上たる所のぞくと手際尽くしたる所、句案第一成べし」（『随門記』）

「　墓参

一生苦海の変満を引かへ一生一升苦海辛海一句漂泊深し。今亦からきを甘キと師をしとふ

追善平生の交志はばゆからず
　梅が香やむかしを思ふ乞食好キ
のぞかるゝ乞食の家とせしは春裏野遊の戯れ、亦は十体の絵ともつくして、一枝の香風今墓前に清く吹て、したはるゝ一詠涿味のひたすら甲斐ありと哀れ多し」（『其角一周忌』）
など。

（16）暉峻康隆氏の説が現在定説となっている。「現在俳人に関する記述が元禄三、四年の間に集中されてゐるといふ事実と、さきにのべた西鵬号使用とをにらみ合せて、「名残の友」の成稿の元禄四年中なることは動かぬところであろう」（「西鶴著作考」『西鶴研究ノート』）。但し、長谷あゆす氏は本話の成立を貞享期とみている。ここでは一応暉峻氏の説に沿っておく。

（17）其角と乞食との関連についての論の初出は、拙稿「『西鶴名残の友』細見」（『国文学論考』37　都留文科大学国語国文学会　平成13年3月）である。

（18）（7）に同じ。

◆巻四の五　何ともしれぬ京の杉重

本話は上戸下戸論争を土台として、両方による気の利いた贈り物を紹介する話となっている。

上戸下戸論争を主題とする作品は古くから存在しており、中国唐の王敷による『茶酒論』から始まって、日本では蘭叔の『酒茶論』、御伽草子『酒茶論』、寛永五年の笑話集『醒睡笑』巻五、一六世紀頃の絵巻『酒飯論』、寛文頃の仮名草子『酒餅論』など多くの類似作品が伝えられている（1）。『茶酒論』は「茶」と「酒」が優劣を競い、最終的に「水」が仲裁するというもの。『酒茶論』は擬人化された酒と茶が合戦に至り、魚鳥の調停で和睦する内容となっている。『醒睡笑』巻五は俗人と頭陀僧の言い争いだが、聴衆の一人であった「一閑人」の狂歌によって落着する。『酒飯論』は酒好きの公家と飯好きの僧侶がそれぞれの徳を語り、武士が仲裁する。仮名草子『酒餅論』は本話と最も関わりが深いので、少し詳しくみていきたい。

老若が集まる場所で酒と餅がふるまわれた際に、上戸と下戸が互いにそしり始めた。割って入った者が上戸下戸騒動の草子を見せたところ、皆笑い合って読み、事なきを得たという。草子にあたる部分の大筋は次の通りである。

春の夕暮れ、茶菓子にと重箱を開いて餅を食い始めた人々がいた。それを見た酒方が酒宴の興ざめだと諌め、酒の徳を語り出した。これに餅方が反駁して戦へと発展する。餅方には飴や饅頭などの菓子や果物類が見方し、酒方には魚

鳥などの肴類が与した。数名の犠牲が出た頃、香の物を従えた飯の大将が登場し、両者を仲裁した。

このように『酒餅論』は異類合戦物の流れを汲んでおり、酒方の大将が南都諸白になっている点は御伽草子と変わらない。そして紹介したいずれの作品も必ず仲裁され、勝敗は引き分けで終了している。こうした上戸下戸論争を下敷きとして本話は成り立っているとして、本話の内容を確認する。

ある春の夕暮れ、西鶴は明石の俳友に招かれて椎本才麿と出かけた。夜咄の座で、まず西鶴は下戸の話をした。

奈良に住む門人、西流・西任から南都諸白の樽が贈られてきたが、下戸の西鶴はあまり嬉しくなかった。ちょうど居合わせた客にふるまおうと封を切ってみたら、中に餅が詰めてあった。西鶴は「呑ぬをしりて此気の付所、当流の作意」と褒め、一座は「それはその日の客は不仕合、亭主は大慶」といって大笑いをした。

西国衆が伏見から昼舟で下る時、京の人から杉重一つが贈られたが、枚方を過ぎた辺りで開けとの指定があった。大いに酒を飲み、枚方辺りで酔いがさめてきて、指定通り杉重を開いてみると、香の物・焼塩・洗いめしなどが入れてあった。これで水雑炊を炊き、人々は酔いをさまして正気になったという。明石の亭主も少しは酒が飲める方なので、「中〳〵下戸のなるべき事にはあらず。世に上戸程かしこきものはなし」といって気の利いた趣向を褒めた。そして「かゝる咄しの種も、呑まねばならぬ物」と、「不老酒」という名酒を入れておいた「天の岩戸」という大徳利を秘蔵の箱から取り出し、人々にふるまった。夜も白々と明ける頃には酔いも白々とさめて、気分が良いのは名酒のゆえんであろう。

従来、酒樽の話は『曾呂里狂歌咄』(寛文十二年刊)巻一によると指摘されていたが(2)、『新大系』によれば、本話と一致する話が載る菊屋版は延享元年以降の出版と推定され、『曾呂里狂歌咄』が『名残の友』の文章をとり入れたのだという(3)。つまり「酒樽」の話も「杉重」の話も先行作品は未だ発見されていないことになる。

先に述べたとおり、本話は『酒餅論』が下敷きになっていて、酒の大将である南都諸白の酒樽に餅を詰めてきたところが趣向となっている。南都諸白は上戸からすれば最高の贈り物だった。しかし西鶴は下戸である。そこで餅をわざわざ南都諸白の酒樽に詰めて贈ってきた。中身が予想外で一同は驚き、上戸は「力をおとし」て、下戸の西鶴は喜んだ。これこそ西鶴のいう「目の覚めたる作意」(4)なのであって、談林の一体として西鶴は西流と西任の気の利いた行為を褒めたのである。また、本話の登場人物が西流と西任であるのは、奈良の門人だったからだろう。奈良の門人と南都諸白の連想からきているのである。そして同道の才麿もまた、もとは大和宇陀の武士であるから、奈良で繋がって

いると考える。

後半は、京から贈られてきた杉重の話へと展開する。酒樽の餅と同様、中身が何か分からない杉重である。わざわざ開封を禁じておくあたりが謎めいていて面白い。酔いがさめる頃合いを見計らって枚方で開けるように指定し、酒宴の締めとなる雑炊の材料を入れておいたわけである。まさに下戸にはできない芸当であろう。『酒餅論』は飯が仲裁するが、本話では飯が上戸に味方したともとれる。そしてここで「世に上戸程かしこきものはなし」の台詞が生きてくるのである。

本話は上戸下戸論争の形をとってはいるが、実際に気の利いた行為をしたのは奈良の俳諧師と京の人であって、正しくは論争になっていない。つまり本話の場合、夜咄しにおける話題として処理されているところが見所であり、しかも上戸・下戸の徳を論ずるのではなく、もてなしの趣向を競う形になっているところが作者の創意なのである。この二つの話題は予想外の悦び、つまり「開けてびっくり大喜び」という共通点をもっており、これが最後に繋げられている。

明石の亭主は「世に上戸程かしこきものはなし」という結果から「かゝる咄しの種にも、呑まねばならぬ物」と酒をふるまうが、これは、本話中程に置かれた「惣じて此程は、世間気いたりて、大かたの事はおかしからず」という言葉に対応したものである。最近の話は世智賢くて面白くない。だが、今回の夜咄は気の利いた趣向の話で盛り上がった。面白い話の種も酒が飲めなければ出てこないというわけで、「天の岩戸」（なかなかあけない、または、踊ったらあけるという洒落（5）、あるいは岩戸から天照大御神が出て夜が明ける意味か）と銘のある大徳利に入れた「不老酒」をふるまった。皆は夜を明かし（明石をかけるか）て白々と酔いがさめた（6）。これは名酒の徳であろうといって終わる。

「不老酒」は菊水または甘露を暗示すると思われるが（7）、明石で酒造が始まったのは延宝頃とされ、貞享から元禄にかけては最も酒造りが盛んになっていた時期であることを考えると、明石の亭主への謝意と挨拶を表す意味で、上戸を褒めると同時に不老酒としたか（8）。

ここで本話の構成をまとめておく。端的に言えば、本話は酒の話なのである。酒好きの明石の俳友に誘われて夜咄の会に出かけた。上戸下戸の話となり、それぞれ「開けたら予想外の悦びであった話」を披露する。上戸の勝ちということになって酒宴が始まった。「開けたら悦ぶ」「夜が明ける」の繋がりで「天の岩戸」の徳利を出し、名酒ゆえか不老酒を飲んだら逆に頭がさえて、気がついたら夜が明けていたという話となっている。

紹介される俳人は南都に関わる西流、西任、才麿である。才麿は延宝五年に江戸へ行き、元禄二年以降大坂の俳諧師として活躍した。伊丹との関わりや、元禄五年以降、姫路・備前と行脚したことなどを勘案すれば、本話は才麿を意識して創作を開始した話なのかもしれない。しかし確証はないので、その可能性のみを述べておく。

（1）古川瑞昌氏「酒茶論の系譜」（『風俗』12―3　昭和49年5月）、渡辺守邦氏「『酒茶論』とその周辺」（『大妻女子大学文学部紀要』8号　昭和51年3月）（『仮名草子の基底』昭和61年　勉誠社に再録）。

（2）真山青果氏「西鶴語彙考証」第一（『真山青果随筆撰集』第二集　大日本雄辨会講談社、昭和27年）

（3）『新大系』脚注に「酒樽に餅をつめて贈る話は、寛文十二年（一六七二）の刊記を持つ曾呂里狂歌咄（菊屋喜兵衛版）・一に文章までも似通ったものがあるが、寛文十二年刊・狂歌咄（鈴木権兵衛版）にはない。菊屋版・曾呂里狂歌咄は、鈴木版狂歌咄・一の三丁から五丁（三・四・五ノ八の三丁分）に、曾呂利新左衛門の咄三丁分を入れ替えたもので、その出版は延享元年（一七四四）以降と推測されている。この名残の友の文章をとり入れたものと思われる」とある。『対訳』も同様の指摘をしており、『曾呂里狂歌咄』は「あるいは『名残の友』より後の出版と思われる」とされている。

（4）『西鶴独吟百韻自註絵巻』による。

（5）『新大系』脚注。

（6）『醒睡笑』巻五にある上戸下戸論には狂歌「酒は唯飲まねば須磨の浦さびて飲めば明石の浪風ぞ立つ」が載る。本話の「明石」と関わりがあるか。

（7）『西鶴独吟百韻自註絵巻』の発句は「菊慈童」を踏まえたもの。あるいは、漢の武帝の時、武帝秘蔵の不老酒を東方朔が飲んだ逸話を暗示するか。また、『酒餅論』は酒の起源として不老酒である甘露の説明から始まる。これらを意識したか。

（8）長谷あゆす氏「巻四の五「何ともしれぬ京の杉重」」（『西鶴名残の友』研究―西鶴の構想力』、初出『西鶴名残の友』の考察―座と癒しの文芸」（『国語国文』七五―八　京都大学国文学会　平成18年8月））は、本話の設定に謡曲「浦島」を見て説明している。浦島は玉手箱を「あけて悔しき」顛末を迎えたが、「あけてうれしき」例として函谷関や天の岩戸の故事があるとし、沖から不老不死の薬を持った亀が現れて、社殿からは浦島明神が登場するという謡曲の内容を紹介しつつ、本話の展開に合致すると指摘する。傾聴すべき説である。さらに、明石御亭主に明石藩主松平信之を重ねている。人丸社の盲杖桜を庇護した事情を説きつつ、「ラストシーンの不老酒は、〈祟りにおびえる明石藩主が「不老酒」を隠し持っていた〉という可笑しさを言外に醸し出していた。それは信之にちなんだ素材、謡曲『浦島』の設定を利用した趣向でもあった。ただし、今確認した事項をふまえれば、〈明石御亭主が「不老酒」を振舞う〉という設定の裏には、〈長寿の四大要素とともにある明石藩主が、蓬莱の「不老不死の薬」ならぬ「不老酒」を振舞う〉

という意味までもが重ね合わせてあったと解せるのである」とされる。また、西鶴と才麿が訪問するのは、鶴と人丸を表す両名が明石御亭主を訪問するということになり、「寿命を心配していた松平信之。その邸宅がある鶴舞峯に、松寿軒を号する舞鶴（西鶴）がやって来る。その同行者は信之が庇護した柿本人麿（人丸）―とは似て非なる椎本才麿（才丸）。（囲み線は本文のまま）」といった洒落を意図したものという。これは「明石御亭主」に重きを置いた説であって、本稿はこの説を採らないが、興味深い説であるのでここに紹介しておく。

◆巻五の一　宗祇の旅蚊屋

本話は、諺「宗祇の蚊屋」をそのまま望一に置き換えて作られた話である。描く対象の俳諧師は望一と思われるが、望一個人の言動や句などはなく、座頭であったことだけが紹介されている。以下はその梗概である。

寺の猫は鰹節を恐れ、謡の宗匠に飼われる鶯は口笛の音を出す。和歌に師匠なしというが、連歌・俳諧も巧者に付き添った人は自然とその道を覚えるものだ。旅宿で山家通いの商人が集まった時、七夕の由来を出鱈目に語る者がいた。人々が賞賛すると、縁は知れぬ物で、自分は宗祇と同じ蚊屋で寝たことがあると男は言った。またある時、無筆無学で連句をする俳諧師がいた。来歴を訪ねると、自分は伊勢の望一と同じ紙帳に寝て自然と俳諧が身についたと言った。人々は、どうせなら望一と同じ疳を病んだら座頭になれたのに、目が見えて残念だと笑った。

この短い文章の中に諺が複数用いられている。「猫に鰹節」「和歌に師匠なし」「縁は知れぬもの」と続き、全体は「宗祇の蚊帳」を具体化することでまとめられている。諺の具体化という方法は『名残の友』の方法の一つであるが、本話での諺は意図的に本来の意味からずらしてあり、そこに作者の趣向を見ることができよう。以下、おのおのの諺を確認していく（1）。

「猫に鰹節」は、「油断がならない」という意味で、過ちを起こしやすい状況であることをいう（2）。本話では、「猫に鰹節」とはいっても、精進を旨とする寺で飼われる猫は鰹節を恐れるとして、逆の意味合いで用いている。つまり鶯の例と同様、長年の習慣や環境が動物の性質や行動を変えてしまうといっているのである。

「和歌に師匠なし」は、藤原定家『詠歌大概』から派生した諺で、「和歌の修行では古歌が師匠であって、普通の意味での師匠は不要だ」という意味である。

この諺は、『名残の友』巻一の二「三里違ふた人の心」にも見られ、百韻で高点を取ったと勘違いした堺の連衆が言い放つ言葉として使われている。本話では「和歌に師匠なしといへど」と逆接的に繋げて、修行を志していない者であっても、巧者に付き添っていれば自然と連歌や俳諧を覚えるとする。つまり師匠は不要というが、師匠に近侍する環境が、連俳を修得させるといっている。

「縁は知れぬもの」は「縁は異なもの」と同じで、「男女の縁はどこでどのように結ばれるか分からない不思議なものだ」という意味である（3）。本話では、山家通いの商人が、旅の途中で宗祇と同じ蚊屋に寝たことを「縁はしれぬもの」だといっており、本来男女の縁に使うべきところを男同士の同宿に用いているところが可笑しい。

そして「宗祇の蚊帳」の意味は、「連歌師が宗祇と同宿し、一つ蚊屋に寝たといって自慢すること。嘘をついて風流ごとにみえを張ること」である。本来この諺は、習い覚えた風流事に見栄をはる意味で使われるはずであるが、本話では風流事を始めるきっかけとして使われている。宗祇や望一と同じ蚊屋・紙帳に寝て連歌・俳諧を始めたと話すその人物達は、連歌や俳諧などにはおよそ縁のなさそうな「山家がよひの商人」や「無筆無学」の人々である。つまり、聞きかじった程度の誤った知識を自慢し、「公家のおとし子か」と褒められてその気になるような人々を皮肉っているのである。

このように、本話の諺は意図的に意味をずらして別の意味合いとして使用されるが、これは本来の意味を知っているからできる言葉遊びなのであって、誤った知識の類いではない。それに対して、本話の作中人物は自分の誤った知識にさえ気付かず自慢する。この懸隔が皮肉となって最後の落ちへと繋がるのである。

冒頭の「和歌に師匠なしとはいへど、連俳も其功者に付そひたる人は、心ざしなくても自然と道を覚へり」という文が、「寺にかわれる猫に鰹節見すれば、身をちゞめてにげありき、諷うたひの軒の鶯は、口笛の音を出しぬ」という極端な例と共に挙げられているのは、この皮肉を強調する役割を果たすからである。そして人々は愚者の間違いを知りながら指摘はせず、望一が座頭であったことをふまえて、「目が見えて残念」と笑う。こうした落ちまでの流れは『名残の友』巻二の一「昔たづねて小皿」と同じである。月夜の四平が誤った知識を披露しながら行動し、人々はそれを指摘するどころか煽って笑う。無知を褒めそやして苦笑する人々という同じ構図となっている。

ここで、本話の眼目である「宗祇の蚊帳」について、もう少し掘り下げておきたい。『新大系』は「「宗祇の蚊屋」の故事を、「俳諧風に落としたところに滑稽味がある」「当時の俳諧師仲間の伝聞などにもとづいたのであろう」と説明している。その当時の状況を明確にするため、既に指摘される『崑山集』「祇空落髪の記」以外の用例も含めて、ここに提示しておく。

山東京伝の『骨董集』中（文化十一年刊）に「今俗に、見えをいふといふたぐひ、虚言して自誇事を、百七八十年前の諺に、宗祇の蚊帳といひたるよし」とあることから、西鶴のころには広く使われた諺であったらしい（4）。俳書の

例は以下の通りである。

『崑山集』（慶安四年）

おなじかやにねしはすなはちそふ義哉　貞徳

これは世の諺に、実なくて余情いふ事を宗祇のかやといふ事あれば、それを故事に用ひ侍る。

『物種集』（延宝六年）

忍ひ逢よるは宗祇の蚊屋釣て

古今の大事伝へられけん　　玖也

『俳諧雑巾』（延宝九年）

言水両吟に

それはそれ宗因の紙帳難波風　　友静

西鶴以降の時代にも用例が認められる。

『みかへり松』祇空編（正徳四年）

宗祇の蚊屋に三年とは、ふるくもいひ伝へて、是等さへおかしきに云々

『六物集』祇空（敬雨）の追善集　紀逸編（享保一八年）

祇空居士世にいませし折／／は、茅室にも一夜のやどりありし事などおもひ出るに、かの宗祇の蚊屋も今身に悔られて

以上のように『柳亭筆記』紹介の用例が参考になるが（5）、注目すべきは『俳諧雑巾』所引の「宗因の紙帳」等の用例である。これらから考えるに、「宗祇の蚊屋」を他の人物名で代置するケースがままあったらしく、本話は「望一」を取り上げ、「望一の紙帳」の趣向で一話が成立していることになる。そして本文の「扨は連俳の間は薄紙程の違ひなり」の部分は、宗祇から望一、蚊帳から紙帳に置き換えたことを指すとともに、連俳の違いも分からぬ輩を皮肉る内容となっている。

最後の「望一と同じ疳をやみ給はば、座頭に成給はん物を」の部分は、当時の俗信「小児疳疾の者、（省略）眼目生レ翳ヲ、或白膜遮レ睛ヲ、（省略）又眼無二障翳一、而不レ見ルレ物ヲ、名二青盲一」（片倉元周著『保嬰須知』巻下　嘉永元年刊）（6）とあるごとく、当時の俗信によるものと考えられる。

（1）　鈴木棠三氏・広田栄太郎氏編『故事ことわざ辞典』（東京堂出版　昭和51年5月）

（2）　「猫にから鮭」（毛吹草）などの例もある。

（3）　西鶴の場合は「縁は知れぬもの」（『好色一代男』巻五など）の方を以前から使っている。

（4）　『骨董集』（山東京伝　文化一二年刊）は、国立国会図書館蔵本を使用した。

（5）『崑山集』は近世文学資料類従古俳諧編『崑山集』（勉誠社　昭和49年）、『物種集』は『定本西鶴全集第十巻』（中央公論社　昭和29年）、『俳諧雑巾』は日本俳書大系第15巻『談林俳諧集』（春陽堂　昭和4年）、『みかへり松』は日本俳書大系第19巻『中興俳諧名家集』（春陽堂　昭和4年）、『六物集』は富山県立図書館所蔵志田文庫蔵本、『柳亭筆記』は『日本随筆大成』第一期第四巻（吉川弘文館　昭和50年）を使用した。

（6）『保嬰須知』は早稲田大学図書館蔵本を使用した。

◆巻五の二　交野の雉子も喰しる客人

本話は近年の人心についての指摘で始まる。世の中が贅沢になって遊興も変化していき、人々は流行りに乗って俳諧や楊弓を遊ぶようになった。若干のことを知っただけで諸芸に通暁した顔をする者が多いのだという。その典型例として京のお大臣のことが紹介される。出てきた料理素材の産地を次々と指摘していくお大臣に対し、亭主はからかい気味に彼の博識ぶりを褒めあげる。お大臣は調子に乗って「食（めし）の湯」を「逢坂」か「醒ヶ井」のものと当てずっぽうをいう。亭主である願西弥七は実は有馬の水だと茶化すのである。

本話は一知半解の偽粋人をからかったものであるが、『新大系』で指摘されるとおり、発想の原点は『大鏡』巻六にみえる「源公忠」の逸話による。『大鏡』はすでに古活字本があり、西鶴が読むことは可能だったと考えられる。『大鏡』の「源公忠」は、山城久世の雉子と交野の雉子の味を区別した。それを疑った人が久世と交野の雉子を混ぜて出したところ、公忠は間違いなくそれぞれを味わい分けて指摘したという。公忠は味覚の洗練を褒め称えられたのである。それ対して本話に登場する粋人は「伊勢や日向」と称されるごとく、所詮はでたらめであった。亭主は皮肉や冗談を交えながらおだてあげるが、大臣は全く皮肉に気付かない。それを相客が横で笑って見ているという構図である。

ここに描かれる大臣は、巻一の三の自称俳諧師や巻二の一に登場した月夜の四平と同じ立場といえる。西宮の鯛だろうと指摘した大臣に、亭主は恵比寿殿の一門衆から貰ったと冗談をいう。いい気になった大臣は雉子は交野、石花は桑名、鳥は猪野（いなの）の雲雀、酒は舞鶴と当てずっぽうをまくし立てる。付合語や枕詞などを並べつつ、飯の湯を逢坂の関の清水、醒ヶ井の水と言わせるあたりは、すでに言葉遊びだといってよい。これに「湯は御馳走のために有馬へ取につかはしました」と亭主がつけていくのだが、『新大系』に指摘するとおり、枕詞でもある有馬の湯は鉄分を含む赤湯が有名で炊飯には適さない（1）。それをさらりと言うところが味噌なのである。あり得ないことと知っている相客達は当然笑うはずである。得意気でいる大臣一人が笑われて、愚か者の役目を担っているわけである。

本話の大部分はこの笑話で占められており、最後に俳諧師が列挙されている。笑話に登場する亭主を京都の有名な太鼓持、末社四天王の「願西弥七」としたのは、俳諧師を登場させるための工夫であろう。末社四天王の一人である神楽庄左衛門がこの願西から話を聞き、大坂の俳諧の座で語ったと繋げている。話を聞いた人々は正信・竹亭・一礼・昨俳・素龍・鬼貫である。

前半は偽粋人の話になっているが、本質的には俳諧が意識されていると考えてよかろう。なぜならば、本文に「惣じて人の心、其時にはやる事ども移り気になって、俳諧・やうきうに日を暮し、ひとつ覚へては、百もぞんじた顔せらるゝもおかし」と述べ、最終的には「俳諧の座にて咄し出して、又、大坂にて一笑ひいたさせける」と照応するかたちになっているからである。としてみると、俳諧の座ひいては笑った人間たちの顔ぶれが問題になる。

正信は大坂の人で川崎庄左衛門といい、貞門系であったとされるが、生没年未詳である（2）。竹亭は京都醒井に住む溝口氏といい、貞門系とされるが、元禄五年に没している（3）。一礼も生没年未詳であるが、『俳文学大辞典』（乾裕幸）は元禄頃に没したとしている。柏屋市左衛門という大坂の俳人で宗因門または益翁門だったという（4）。

昨非は大坂の人で俗名を桑名屋清左衛門という。はじめは立圃門だったが、元禄二年に江戸から大坂へ移住した才麿に近づき、その門下となった（5）。轍士の『花見車』（元禄十五年）で「一たび落ていさんしたが、いまはまたはんじやう」と評されるところを見ると、元禄期に再び活躍したらしい。

素龍こと柏木全故（たけもと）はもと阿波藩士で、元禄初年に大坂へ出て昨非と交流している。その後江戸へ下り、芭蕉と出会うのが元禄五年冬のことと考証されている（6）。いわゆる『おくのほそ道』の素龍清書本を書いた人である。大坂在住の頃から俳諧に作品を残しているが、上方在住の頃は北村季吟の次男正立と親交があったという（7）。榎坂浩尚氏紹介の『見聞集』には「柏木義左衛門　季吟弟子」とあり、松平大和守直矩邸に出入りしていた歌人でもあった。

上島鬼貫は、いうまでもなく摂津伊丹の酒造業上島家出身である。八歳から俳諧を初め、重頼に入門。季吟、宗因の指導も受けたという。貞享二年に大坂へ出て学問に励み、のち藤原宗邇と称して筑後国三池藩、大和国郡山藩、越前国大野藩等に出仕し、藩政改革を手がける経済官僚となる。元禄二年から四年までは大坂にいたらしく、『大悟物狂』（元禄三年刊）を出している。これには才麿や西鶴との鉄卵（元禄二年没）追悼五十韻を収めている（8）。

以上のごとく、分かる範囲で各人の閲歴をながめてみると、およそ元禄二年から元禄四年の間に大坂滞在が可能だった俳人達であったことが分かる。また、経済力のある知的背景をもった人々と考えられ、この連衆の俳諧の座に、太鼓持ちの神楽庄左衛門が呼ばれたという設定も自然に納得がいくのではないか。京で遊ぶ一知半解の偽粋人の話が、こういった富裕層の粋人が集まる大坂の座で語られるからこそ、滑稽が増すのである。

（1）有馬の湯は赤湯の金泉と透明な銀泉があるが、『有馬山温泉記』などは赤湯を紹介する。ここで有馬を出してきたのは、「有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする」（後拾遺和歌集・小倉百人一首）によるか。

（2）『俳文学大辞典』『俳家人名辞書』『貞門談林俳人大観』『元禄時代俳人大観』『対訳』『新大系』参照。正信は佐倉笑種『続古今俳手鑑』（元禄十三年自序）に名があるので、元禄頃の人か。

（3）『俳文学大辞典』『俳家人名辞書』『貞門談林俳人大観』『元禄時代俳人大観』『対訳』『新大系』参照。

（4）『俳文学大辞典』は益翁門、『対訳』『新大系』は宗因門とする。

（5）桜井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』（前田書店　昭和54年）

（6）杉浦正一郎氏『芭蕉研究』（岩波書店　昭和33年）、植谷元「素龍―楽只堂の学輩達―」上・中・下（『山辺道』昭和40年3月・12月、昭和42年3月）、上野洋三氏「芭蕉と同時代の歌壇」（『和歌文学講座第八巻　近世の和歌』島津忠夫編　勉誠出版　平成6年1月）

（7）野村貴次氏『季吟本への道のり』（北村季吟古注釈集成解説　新典社　昭和58年3月）

（8）桜井武次郎氏『伊丹の俳人　上島鬼貫』（新典社　昭和58年10月）

◆巻五の三　無筆の礼帳

巻五の三は、西国に住む俳友達が西鶴のもとへ寄り合った時の話となっている。

四天王寺の桜が咲く頃、豊後の西国、筑後の西与、美濃の木因、備後の西鷺などが西鶴のもとへやってきて雑談をした。豊後の国に、家柄は良いが文盲の武士がいた。家来も字が書けなかったため、年始客の名を絵で控えていた。返礼をしようと帳面を見たところ、「鳥居と摺鉢」は宮川備前殿、「杜若と刺鯖」は八橋能登殿と理解したが、「不動」が誰か分からない。家来が「監物様だ」と言うと、主人は「当て字はいけない。監物なら鍾馗大臣か樊噲をなぜ書かない。これでは不動院に読み間違える」と言って叱った。

章題の「無筆の礼帳」は当然笑話の内容を指している。この笑話の典拠については、野間光辰氏が『鹿の巻筆』（貞享三年）巻三の六「無筆のげんくわ帳」を指摘し、さらに『徒然御伽草』（宝永四年）の類話もあげている（1）。それを受けて岡雅彦氏は『はなし大全』（貞享四年）巻下の二十二「無筆の主従」の存在を指摘しつつ、直接利用したのは『鹿の巻筆』とする。いずれも判じ物といわれる謎解きを笑話に仕立てたもので、本話と同様の落ちになっていることから、貞享頃に語られていた笑話を利用したことが分かる。これを四人の俳友

と取り合わせたわけだが、四人のうちの誰を中心に描こうとしていたのだろうか。笑話を豊後の話に設定しているので、豊後の西国が語った土産話として本話を創作したのではないかとも考えられる。しかし、西鶴は『名残の友』の数話で複数の俳諧師が寄り合った場面を描いており、その場合は描写対象を一人に絞らず、何らかの共通項を持つ俳諧師達を登場させることが目的だったようである。とすれば本話もまた西国に住する俳友達を登場させるための話ではなかったろうか。

先行研究では本話を事実にもとづく話として、豊後の西国・筑後の西与・美濃の木因・備後の西鷺の四人が同席する時期を探る（2）。

豊後の西国は延宝五年四月に上坂して西鶴に師事し、『俳諧の口伝』一巻を授与される。延宝六年三月、西鶴・由平と三吟で『胴骨』を興行し上梓。さらに同年秋から翌七年初夏まで、たびたび上坂している。延宝八年の『大矢数』には席を連ねていないが、この年自撰の『雲くらひ』（延宝八年九月）三冊を深江屋太郎兵衛方から出版するために上坂して、京坂あたりを遊歴していたらしい。貞享二年以降しばらく俳壇での動きがなかったが、元禄四年四月に豊後日田を出て備後を経由し、六月に江戸へ至っている。元禄五年十二月まで江戸に滞在して内藤露沾ら江戸の俳人らと交流し、翌元禄六年秋に郷里へ帰ったという（3）。

筑後の西与は、西治編『二葉集』（延宝七年刊）に入集し、延宝八年の『大矢数』に席を連ねている。のち泥足編『其便』（元禄七年刊）、路通編『桃舐集』（元禄九年刊）などに名がみえるが、詳しいことは分かっていない（4）。

美濃の谷木因には年譜があるので、動静を確認しやすい。木因の上坂は延宝八年と元禄二～四年の二度という（5）。一度目の延宝八年は五月七日に『大矢数』の興行に出座、その後諸俳人たちと連句を興行したとされ、二度目は西鶴庵を訪ねて句を残している（6）。

備後の西鷺は、野間氏の考察によって備後の西鷺軒橋泉と同一人物だとされている。周知の通り『近代艶隠者』の作者である。『近代艶隠者』は西鶴の序文を有する作品で、貞享三年春に刊行されている。序文の内容から西鷺軒橋泉の来訪は貞享二年神無月と推測されるが、作者については旅僧ということが分かる程度である。俳書に西鷺の名が見えないため、本業は僧侶であり、俳諧は余技だったとしている（7）。

以上四人の上坂時期をまとめてみると、西国は回数が多くて特定が困難であり、西与は延宝八年以外詳細不明、西鷺も貞享二年以前というだけで詳細不明、谷本因は延宝八年と元禄二～四年の二回が確認される。本話が事実にもとづくと考える場合、四人の同席が可能となるのは延宝八年となり、よって「無筆の礼帳」の場面は延宝八年のことと考えられるわけである（8）。ただし季節やそこに集った連衆が一致しておらず、全てが事実とするには未だ疑問も残る。また、『新大系』は「元禄二年春の木因来坂の折か」としていて、延宝八年説をとっていない。

事実の一部を発想契機とするならば、次のような想像もできないだろうか。

豊後の西国が元禄四年に備後経由で江戸へ向かう際、西鶴庵に立ち寄ったとする(9)。その土産話が西与と西鷺を思い起こさせた。これに木因の元禄期の来訪が重なる。西鶴を訪ね、潮干舟でもてなされた際に吟じたという木因の句「けふばかり桜植たき潮かな」が『移徙抄』(元禄五年正月刊)にあり、季は春である。これら元禄の近い時期に訪問した俳友達を登場させるのが本話の目的であったとしたらどうであろう。そもそも俳諧師と笑話を取り合わせるという『名残の友』の創作方法を考慮すれば、事実に虚構が含まれていてもおかしくはない。西国の土産話から想起された一話として本話を読めば、登場する俳友達の名前にも納得できるのではないだろうか。

(1) 野間光辰氏「西鶴の方法」

(2) 野間光辰氏「近代艶隠者の考察(其の一・其の二)」(京都帝国大学国文学会『国語国文』6巻8・9号 昭和11年8月号・9月号)(『西鶴新攷』筑摩書房 昭和21年、『西鶴新新攷』岩波書店 昭和56年に再録)

(2) 野間光辰氏は(1)で、「この「無筆の礼帳」の冒頭の一節もまた、西鶴生涯における一事実を伝へてゐるものではなからうか。かく考へ来れば、そこに記された各俳人の動静を探り、その記事の年代を明らかにすることが、我々の謎を解く鍵であるやうに思はれる」と述べ、それを諸注も踏襲している。

(3) 大内初夫氏「俳人中村西国伝」(鹿児島大学『文科報告』第3号 昭和42年6月)(「九州談林派の雄 中村西国」と改題して『近世九州俳壇史の研究』九州大学出版会 昭和58年12月に再録)

(4) 大内初夫氏「九州俳壇史の研究—古風時代の九州俳壇(その一・その三)」(鹿児島大学『文科報告』第5号 昭和44年10月、第9号 昭和48年10月)(「九州談林派の有力俳人たち(二)大塚西与」と改題して『近世九州俳壇史の研究』九州大学出版会 昭和58年12月に再録)

(5) (1)および森川昭氏『谷木因全集』(和泉書院、昭和五十七年)

(6) 「けふばかり桜植たき潮かな」(『移徙抄』(元禄五年刊))本文は竹下義人「翻刻『俳諧わたまし抄』」(『国文学研究資料館紀要』15号 平成1年3月)を使用した。

(7) (1)に同じ。

(8) (1)に同じ。

(9) 野間氏は木因と西国との一座を事実と考えているため、「もっとも彼(西国)は、この後元禄四年に日田代官松平大和守の招請によつて江戸に赴き、翌五年まで滞留してゐるが、恐らくその際には、西鶴庵にて木因と一座するといふやうなことはなかつたらう」とされる(注(2)の論)。

◆巻五の四　下帯計の玉の段

本話は水田西吟ゆかりの話として、西鶴が桜塚に駕籠で赴くに際し、眠気覚ましに歌っていた謡「山姥」を駕籠かきに咎められた前半の話と、能に造詣の深い駕籠かきが零落した所以を記す後半の、二部構成からなる。

西吟主催の万句興行に出席するため、西鶴は青木友雪と同道して桜塚に駕籠で赴いた。途中眠り機嫌となり、目覚ましに拍子をうって「山姥」を謡ったところ、駕籠かきに咎められる。能に造詣の深い駕籠かきの身の上を聞くと、打囃子に凝って身代を潰し、さる貧乏大名の能太夫なっていたが、寒さの身にしむ秋に、丸裸で「海士」の玉の段を演じるよう命じられて暇乞いをしたと語った。

この話に対し、長谷あゆす氏は、西鶴・友雪共編『両吟一日千句』（延宝七年）第十にある

池田の奥に龍が吟ずる　　友雪
さく花の雲起っては隠里　　西鶴

を意識したものとし、この付合から話の分析を展開している（1）。だがそうした場合、本話は友雪に焦点をあてた話となってしまうのではないか。本話は、冒頭で照準を定めたとおり、水田西吟ゆかりの話として処理されるべきであって、友雪はあくまでも一話にリアリティを付加する存在でしかないと考える。よって、ここでは西吟に焦点を定めて本話を読み進めていく。

荻野清氏の伝記研究（2）および桜井武次郎氏の『元禄の大坂俳壇』（3）に従えば、西吟は延宝六年頃に大坂から桜塚に移住したという。撰集『昼網集』『鬼の目』は伝存しないため、まずは『庵桜』（貞享三年）に注目すべきだろう。そこで改めて『庵桜』を披見してみると、本話との関連が確認できるのである。

『庵桜』の冒頭には、桜塚における西吟閑居の様子が描写されている。そして次の詞章も掲出されているのである。

やさしからぬは来ぬのみぞ　　西吟
作にとはれむ　　庵桜

書名「庵桜」を暗示するこの文言は、人の来訪なくば作品のみの訪問をも誘うという趣向である。この詞章に続いて、「さればこそ人の候」（宗因）の文言が添えられている。これは、謡曲「雲林院」から、そのまま文言を引用したもの

である。

謡曲「雲林院」は、『伊勢物語』を愛読する蘆屋の公光という男が、霊夢に導かれて桜満開の雲林院を訪ねる話である。「雲林院」の場合は「今は現に都路の遠かりしほどは桜にまぎれある雲の林」に急ぐのであるが、宗因は桜塚へ急ぐ構図とした。「雲林院」では、美しさに花を手折る公光をみて、老人が「や、さればこそ人の候」とその存在を認める。その文言を、宗因は「桜塚」に集う人を指す文言として引用したのであった。こうした雲林院の桜花爛漫たるイメージは、桜塚の満開の桜を暗示することになる。「桜塚」という地名に付随する桜花爛漫たるイメージは、俳書『庵桜』の冒頭部分を鮮やかに彩るのである。そして『庵桜』の一番最初に置かれた宗因の句は象徴的な意味を持つ。

急いで見む三里一肩桜塚　　西山　梅翁

この句は、桜塚に駕籠を仕立てて急行する世界ではないか。だとするならば、「下帯計は玉の段」と同じ趣向ということになる。さらに句を連ねる俳人の中に、西鶴・友雪の次の句も確認できる。

爰ぞ万句誹諧名所の桜塚　　難波　西鶴
桜塚や等類くられて帰咲　　青木　友雪

西鶴は万句興行のお祝いとともに、俳諧の新しい名所としての位置付けを「桜塚」に付与していく。乾裕幸氏は「桜万句・羊躑躅万句成就への祝句であろう。この桜塚は、西吟が万句を興行した俳諧の名所である。もちろん桜の名所を響かせる」と解説している（4）。続く友雪の句にある「等類」は「先行の作品に作意や表現などが類似していること」（5）、「くられて」の「くる」は「順々に送りやる」「頁をめくる」などの意味ととる（6）。解釈しづらい句ではあるが、しいて意味をとるならば、桜の句として種々等類を送られて（または検討して）、桜塚は俳諧の名所に返り咲く、やはり俳諧の名所にふさわしい桜塚という意なのではないか。「帰咲（かえりざく）」のは花であるとともに、俳諧の名所として「桜塚」が再認識されると捉えられるのである。

この句に対し長谷氏は「似た者同志こぞって」の意と解釈している。「等類」を「似たもの」、「くる」を「来る」ととったと推察するが、「くられて」とあることから「等類」は人ではなく句として解釈した方が自然ではないだろうか。

このように『庵桜』をひもといてみると、「下帯計の玉の段」と照応する世界を随所に発見することができる。しかもこの『庵桜』には、「比待えたる桜狩〳〵、落月庵の春を見るべく」と謡曲の詞章めかした前書きが存在しており、これについては山崎喜好氏が『伊丹風俳諧全集　上』ですでに指摘している（7）。

西吟の住む「桜塚」は決して歌枕なのではないのだが、ここに集うた俳人たちは謡曲的世界にのせて、「桜塚」の興趣を世に問うたのではないのか。このような謡曲を趣向とした連想が、本話の前提になったと考えたい。

その意味で、「継駕籠たてならべて行」き、長柄の渡しを越えて「山姥」を謡う趣向は効果的といえる。それは内容的に「山姥」と照応していくからである。「山姥」は「玉江の橋」を渡って話が展開していくが、本話の方は「長柄の渡し」を越えて話が展開していく。さらに本文「休む重荷にかた替さまに」が「山姥」の「休む重荷の肩を貸し」を意識していることというまでもない。なお、駕籠かきに非難された謡は、囃子をつけない素謡であったから、ここではおそらく「不拍子」になっていたのだろうと推測する。特に「山姥」の曲舞は鼓に合わせて謡うものとされていて、素人が謡うと調子狂いになってしまい、駕籠かきの調子も狂って、「もちおもりがする」と咎められたのである(9)。

後半は能に造詣の深い駕籠かきの零落譚が記される。さる貧乏な御大名に能役者としてお仕えしている時、あまりの貧乏のために、紙子一つの「鉢の木」や丸裸の「海士の玉の段」を要請されて暇乞いにいたるという話である。この能に関する笑話は、有名な「鉢の木」と「海士の玉の段」を、演能とは異なるリアルな扮装をさせる滑稽味が眼目といえる。この話は夜食時分の『座敷はなし』(元禄七年序)巻四の三に類話がある(10)。また、『初音草咄大鑑』(元禄十一年刊)巻六の十三「貧すれば鈍する」と類似していることは、諸注釈の指摘するとおりである。『初音草咄大鑑』に先行する『座敷はなし』は刊年に諸説あるが、元禄七年の序文と『増益書籍目録大全』(元禄九年板行)の記載から、初版は元禄八年正月頃といわれている(11)。西鶴の没年は元禄六年であるから、『座敷はなし』を読んだはずはないが、同様の笑話が元禄頃に語られていた可能性はあろう。以下本文を載せておく。

『座敷はなし』巻四の三「貧乏したる能太夫どの」

能太夫の何がし、さん〳〵おちぶれて、何くふまいとまゝなる躰となりけるを、あたりの人々見かねて、合力能を一日めされいとて、高砂忠則松風など番与(ばんぐみ)をしたりけれども、衣装一つもなければ是も埒のあかぬ時、能太夫しあんして申さるゝは、高砂も松風もとりをいて、紙子着て鉢木と、はだかにて海人とつかまつらふといはれた(12)

この笑話にある、紙子着て「鉢木」と丸裸で「海士」という落ちは、本話と同じである。つまり本話は、全体を通じて能の曲目を提示しながら一話が構成され、「海士」の「玉の段」から笑話へと繋げられた話なのである。目録題の「下帯計の玉の段」は、謡曲「海士」の玉取りの段を踏まえつつ、そこから尻をからげて下帯ばかりで仕事をする駕籠かきの様子が連想されたもので、その連想はラストの下帯のみで「海士」を演じるという落ちとも照応していき、一話はまとまりをもって締めくくられるのである。

(1) 長谷あゆす氏「「例の狂言」考―『西鶴名残の友』の事実と咄―」(「近世文芸」76 平成14年7月、『『西鶴名残の友』研究―西鶴の構想力』清文堂 平成19年9月再録)。『両吟一日千句』の本文は『定本西鶴全

集』第13巻（中央公論社　昭和25年7月）を使用した。

（2）荻野清氏「俳人評伝」『続俳句講座』第一巻（創元社　昭和9年3月）

（3）桜井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』（前田書店　昭和54年9月）

（4）乾裕幸氏『井原西鶴』（蝸牛俳句文庫23　平成8年12月）

（5）『俳文学大辞典』（角川書店）

（6）『日本国語大辞典』（小学館）

（7）「此待えたる櫻狩／／、落月庵の春を見るべく」と謡曲の詞章めかした前書をして、鬼貫が百丸と共にこゝを訪れて、三者応酬の句文があり、之亦文は鼓舞した筆致で物せられてゐる」（岡田利兵衛編著『伊丹風俳諧全集』上巻　柳原書店　昭和15年）。なお、『庵桜』の本文は、同書にある翻刻を用いた。

（8）今春・金剛・喜多の三流をいう。

（9）謡曲「山姥」は「名誉の曲舞」と絶賛された曲舞（『申楽談儀』）が主眼の夢幻能。曲舞は中世に流行した歌舞の一種で、語り物風の歌謡を鼓に合わせて謡う。観阿弥によって「山姥」に取り入れられた。

（10）『座敷はなし』（元禄七年　夜食時分序、元禄十年刊（再板））巻四の三「貧乏したる能太夫どの」に「紙子着て鉢木とはだかにて海人」の話が載る。本話の存在については石川了先生にご教示を賜った。

（11）武藤禎夫氏『未刊軽口本集　下』（古典文庫　昭和51年）、平山聖悟氏「都の錦と噺本―舌耕者としての一側面」（『雅俗』第13号　平成26年7月）、佐伯孝弘氏「夜食時分の浮世草子」（『東アジアの古典文学における笑話』新葉館出版　平成29年10月）は、刊行を元禄八年頃としている。

（12）『座敷はなし』の本文は国会図書館蔵本を使用した。

◆巻五の五「年わすれの糸鬢」

本話は、西鶴と同時代の俳諧師である遠舟と歌舞伎役者四名が登場する話となっている。なぜここに歌舞伎役者が登場するかというと、役者の弟子を多く持っていた遠舟の存在がやはり絡んでくるのだが、ただ単に遠舟繋がりというだけでなく、役者達もまた俳諧を嗜む者達であったことが注目点となる。本話に登場する歌舞伎役者は、西鶴とどのような関わりがあったのか。それを解き明かしつつ、本話の内容を見ていきたい。まず、西鶴が役者達と交流する過程を追っていく。

生玉万句以降、談林派での地位確立を望む西鶴は俳書を編集し、『大句数』で自分の進むべき方向性を決定づけた。矢数俳諧最初の試みであった『大句数』の役人は執筆の青木友浄（友雪）と水田西吟、指合見の児玉菊砌、桑門順座の四人だけで、懇意の者に頼んだものと推測される。第九句に竹薗、順座、重政、武仙、西賀子、菊砌、西長、日信、光如、會圓がそれぞれ句を寄せており、「数

百人の連衆」が集まったと序文にはあるものの、その規模は三年後の『西鶴大矢数（以下、『大矢数』と略記）』と比較にならない。

『大矢数』は役人を含め立合の人々が五五人、句を寄せた者を合わせると七〇〇人を越える。まさに大坂の俳諧師を集結させたかのようであった。そこには時に鞘当てを演じた惟中や、酒造家鴻池氏の山本（山中）西六（1）など有力商人、人気歌舞伎役者たちの名もみえる。『大句数』以降、人間交流が相当に拡大されたことが看取されよう。『大矢数』序文に「当地宗匠親疎ともにつらなり」とあるとおり、一躍時の人となった西鶴の周辺には、親疎はともかく大勢の人々が集まり、西鶴との交流を望んだのである。

西鶴が俳諧から遠ざかったとされる貞享二年から元禄二年の五年間で、その集まった人々がどの程度去っていったかは詳らかでない。疎句化の波に乗って去っていった人々も多数いたと考えられるが、矢数俳諧で親交を深めた一部の人々との交流は俳諧以外の場でも継続し、浮世草子創作に大きな影響を及ぼした。梨園関係者もそうである。延宝七年から元禄元年まで西鶴が演劇界と深い関わりを持ち、浮世草子に演劇的なものを取り入れていったことは既に知られている（2）。その交流の一端を垣間見せる話として、本話「年わすれの糸鬢」がある。まず、話の前半部分を確認してみよう。

年の瀬に心よく名残の芝居をみた後、大和屋甚兵衛、宇治右衛門、藤川武左衛門、坊主百兵衛などが連れだち、人より早く夕方から道頓堀の大黒風呂に入ってさっぱりした。毎日洗っても垢が絶えないのはおもしろいことである。ちょうど江戸の草履取りである墓原角蔵という者がいて、月代を剃るのが上手いというので板の間に呼び、各自髭から産毛まで残らず剃らせて気持ちが良いことだった。「考えてみれば、下手に頭を剃らせるのと若い医者の薬を飲むことほど気がかりなことはない」と言うと「確かにその通り、では上手な方に私もお願いしよう」と百兵衛が頭を出した。角蔵はその頭を見て、「骨惜しみするわけではないですが、この中剃りはご容赦ください。年末の心落ち着かない時は糸鬢の境目が見えません」といった。皆大笑いして「何のために見えないほど細い鬢にしているのか。頭が冷えて損だ。」というと、百兵衛は「そのかわり夏は涼しい」という。

以上、前半部分は坊主百兵衛の糸鬢が細すぎて坊主と見分けがつかないことを紹介する内容となっている。「男と坊主との糸鬢のさかいが見えませぬ」「見えぬ程の細鬢」と形容されることで、坊主百兵衛の糸鬢の細さが強調され、読者に印象づけられた。これは後半部分への伏線ともなる。

「めいめい自分の頭なのだから好きにすればよい」と笑いながら、彼ら梨園の人々は玉造に住む和気遠舟の楽庵へ年忘れの俳諧に出かけた。その後、師走の月見をしようと観音堂の舞台で酒宴をして遊ぶことになったが、これは少し物好き過ぎた趣向であった。観音堂からは葛城山、秋篠、高安の里、闇峠、平

岡明神も手近く見渡せた。亭主（遠舟か）が山々を案内して「さて、あそこにある森から、世間で噂される姥が火というものを余興としてお目に懸けましょう。もう八つ（午前二時頃）の鐘も突いたので出る頃です」といい終わらぬうちに、雲に光が移り、子供が遊ぶ鬼灯提灯程度の火が数百筋の糸を引いてきりきりと舞い上がった。恐ろしくもあり面白くもある。「できることなら、あの火をここに取りよせて煙草を吸いたいものだ」「火鉢へ入れてあたりたい」「伽羅を焚きたい」とそれぞれ冗談をいい捨てた。「あれは手を叩くと近くに来る」というので、皆立ち並んで手を打ったが、来もしないし返事もしない。「さてはこの中に大尽客がいないと見立てて無愛想にすると見えた。是非とも呼び寄せよ」というと、金剛（役者の草履取り）どもが勢いにまかせて「ほいほい」と招いた。その声につられて飛んできた姥が火が皆の頭の上に火を吹いたので、気を失って恐れをなした。正気に戻った金剛たちが自分の体を見てみると、火傷をして髪の毛が焦げない者はいなかった。百兵衛だけが何事もなかったのは、糸鬢の徳をこの時に見せたのだった。

後半は『西鶴諸国ばなし』巻五の六「身を捨て油壺」に描かれる「姥が火」を再び用いた怪異風の話となっている(3)。ここでは同じ素材を使いつつ笑い話に転じてみせた。『諸国ばなし』では、「姥が火」に出会った人は三年以内に死ぬと語られ、「油さし」の一言で消えるのはおかしなことだと結ばれている。『名残の友』では恐ろしさよりも可笑しさに焦点を当て、「姥が火」が埒もない小さな火であることを明かし、人々がこの「姥が火」を余興として捉えていた様を描くのである。

本話の設定として、年わすれの時期であることにも留意しておきたい。本来このころは魂迎えの季節であり、また鬼人を追い払う節分の季節でもあった。寛文二年の『案内者』によると、「大晦日」の条に「この夜まめをうつ事」などとあり、「鬼はそと福はうちへとうちおさまりて」の記述がみえる。こうした習俗からみるに、年わすれの時期は異界からの来訪者を迎える折と把握しておいてよく、その条件を満たすものとして「姥が火」が描かれるのである。

また、地理的な連想も介在していよう。『玉造小町子壮衰書』などに明らかなごとく、遠舟のいる玉造は老いさらぼえた女性を連想させる。また眼下に見える平岡明神は、『河内鑑名所記』や『諸国里人談』などが紹介するとおり、姥が火が出没することで有名な場所であった。そうした連想から、姥が火の登場には必然性があったことになる。

この妖怪「姥が火」を、『名残の友』では人々の余興として描くのである。俳諧を嗜む役者たちは「姥が火」を単なる「火」ととりなし、煙草・火鉢・香（伽羅）と付けて面白がっている。次に、呼んでも来ない「姥が火」を遊里の遣手と見なし、「姥が火」も大尽客がいないと見立てたらしいと軽口をたたいて盛り上がる。調子に乗った彼らは無理矢理「姥が火」を呼び寄せようとするが、怪異の「姥が火」に冗談を理解する心があるわけもなく、火を吹かれてしまったのである。

本文に「こんがうども我身を見れば、やけどにあふて髪の毛のこげぬはなし」とあるので、金剛たちだけが火傷を負ったと読むこともできるが、その場合、役者の一人である百兵衛だけが無事だったというくだりは齟齬をきたしてしまう。従って、その場にいた全員、すなわち遠舟も役者も金剛も、髪を焦がされたと読むのが妥当であろう。百兵衛を除く全ての人の髪が焦げたとする方が分かりやすい。ただ「皆」と書かずに「こんがうども」と限定していることが不可解ではある。

さらに、そもそも「姥が火」の火は物を燃やす火なのだろうか。『河内鑑名所記』（延宝七年刊）によれば、姥が火は「光り物」で、「彼の火炎の躰は死しける姥が首よりして、ふきいだせる火のごとく見へ侍る」とあり、『和漢三才図会』（正徳頃）は「燐（鬼火）」の項で姥が火を取り上げ、「其の色は青く、状は炬（タイマツ）のようで、或は聚（アツマ）り或は散じ、来逼（セマ）りて人の精気を奪ふ」としつつ、鴆鵲などの鳥だと思うが何鳥かは実際のところ不明であるといっている。「姥が火」の火が何かを燃やしたという記述は見当たらないため、本話のような髪の毛を焦がしたという内容は西鶴による創作なのではなかろうか。だとすれば、後半部分はなにやら可笑しい話になるのではないか。役者達が「姥が火」を単なる火と見て冗談をいった。西鶴はそのまま「姥が火」に燃える火を吹かせた。怒りにまかせて火を吹いた「姥が火」だが、姥なので老眼だったのか、坊主百兵衛の糸鬢を見落としてしまったというのである。本来、青白く怪しい炎であるはずの「姥が火」が、まるで火炎放射器のように描かれている。しかも怪異のくせに百兵衛を坊主と見間違えてしまった。怪異も笑いに変換してしまうところは、さすが俳諧師といえようか。

いずれにせよ、本話の眼目が坊主百兵衛の糸鬢であることは間違いない。坊主百兵衛の糸鬢は非常に細く、月代を剃るにも注意が必要なほどであり、怪異の「姥が火」も糸鬢を見落としてしまったという話である。坊主と見間違うほどの細鬢だということを殊更に強調した百兵衛の紹介話とみることもできよう。

では次に、他の登場人物がどのように関わるのかを順にみていくこととする。

●和気遠舟

本話のように、歌舞伎役者達が遠舟の楽庵を訪れるのは至極当然であった。和気遠舟の門人には役者や劇場関係者が多かったからである。乾裕幸氏は「俳諧狂言説異聞」において、「歌舞伎役者の噂が、連衆の世話話にとどまらず、溢れ出て俳諧句作へ流れ込んだのが、延宝期の誹調だった」とし、談林俳諧における素材拡張の方向が、歌舞伎関係へと急激に傾斜していき、歌舞伎の「籠抜」ないし「蓮飛」が「ぬけ」や「とぶ」として談林俳諧の手法と結びついたことを論述した。さらに、梨園俳座の成立にも言及し、延宝八年の遠舟編『太夫桜』には梨園関係者が多出しており、俳号に「舟」の一字を含む巻尾五十三名中に岑野帆舟（峰野小爆）・小野山恋舟（小野山宇治右衛門）・坂田忍舟（坂田作弥か）・光瀬玉舟（光瀬左近）・松嶋知舟（松島七左衛門）・山下半舟（山下半左衛門）らがみえることを指摘。またこれらの人々が延宝七年の『道頓堀花みち』

に同じ俳号で入集していることから、彼らは延宝七年以前に入門した遠舟の門弟であり、遠舟と梨園俳座との関わりは西鶴よりも古く、直接的だったと述べておられる（4）。これをうけて、土田衛氏は「西鶴と役者俳人との間に遠舟が介在したと考える可能性も十分にあるように思う」としたのだった（5）。

遠舟と西鶴が懇意であったことは既に知られている。遠舟は『大矢数』で役人の筆頭となっているし、西鶴が編集した俳書『生玉万句』『歌仙大坂俳諧師』『物種集』『二葉集』などには遠舟の句が必ずといっていいほど載っている。遠舟編の俳書『太夫桜』にも西鶴の名がみえ、遠舟宅での「藤万句」（延宝四年）では梅翁の発句、遠舟の脇に次ぎ西鶴が第三を勤めているのである。さらに、井筒公木壮行の俳書『六日飛脚』（延宝七年）では遠舟、西鶴そろって参加している。そうした遠舟との親交の中で、西鶴は梨園の人々とも出会い、矢数俳諧のエンターテイメント性をもって、彼らを惹きつけていったのではないか。そして梨園の人々からもたらされた話題をもとに、貞享期の浮世草子が創作されていったと考えることができるように思うのである。

では、実際に交流した役者がどのような人々だったのか。

●大和屋甚兵衛

本話に紹介される大和屋甚兵衛は二代目で、大和屋甚兵衛座の座本でもある。若衆方の頃は鶴川辰之助と名乗り、延宝年中に大和屋甚兵衛を襲名して立役に転じた。従兄弟にあたる敵役の松永六郎右衛門、甥で娘婿であった女方の水木辰之助と共に興行を重ね、延宝から元禄二年までは大坂、元禄二年冬以降は京で活躍する。坂田藤十郎、山下半左衛門、元禄七年に上京した市川団十郎などと共演した、当時を代表する人気役者である。彼の演劇における活躍については先行論文（6）を参照いただき、ここでは西鶴との関わりをまとめたいと思う。西鶴と大和屋甚兵衛の両方が関わる作品を年譜風に一覧にしてみる。

一六七九年　『句箱』（延宝七年八月）木村一水編　深江屋太郎兵衛刊
　　『二葉集』（延宝七年九〈一一〉月）西治編　深江屋太郎兵衛刊
　　『道頓堀花みち』（延宝七年一一月）辰壽編　深江屋太郎兵衛刊
一六八〇年　『太夫桜』（延宝八年四月）遠舟編　深江屋太郎兵衛刊
　　『八束穂集』（延宝八年五月）桂葉編　武村三郎兵衛刊
　　西鶴大矢数興行（延宝八年五月）
　　『阿蘭陀丸二番船』（延宝八年八月）宗円編
一六八一年　『西鶴大矢数』（天和元年〈延宝九年〉四月）深江屋太郎兵衛刊
一六八二年　『犬の尾』（天和二年正月）松花軒蛇鱗編
　　『家土産』（天和二年五月）幾音編
一六八三年　『難波の皃は伊勢の白粉』（天和三年正月）
一六八四年　『諸艶大鑑』（貞享元年〈天和四年〉四月）池田屋三郎右衛門刊
　　西鶴二万三五〇〇句独吟興行

一六八五年　『椀久一世の物語』（貞享二年二月）森田庄太郎刊
一六八七年　『男色大鑑』（貞享四年正月）深江屋太郎兵衛・山崎屋市兵衛刊
一六八八年　『日本永代蔵』（元禄元年〈貞享五年〉）金屋長兵衛・西村梅風軒・森田庄太郎刊
『武家義理物語』（元禄元年〈貞享五年〉二月）山岡市兵衛・万屋清兵衛・安井加兵衛刊
一六九一年　『四国猿』（元禄四年五月）律友編　井筒屋庄兵衛刊
一六九二年　『西鶴独吟百韻自註絵巻』（元禄五年秋）
一六九九年　『西鶴名残の友』（元禄一二年四月）
一七〇四年　『梓』（宝永元年〈元禄一七年〉春）如艸編　井筒屋庄兵衛刊

西鶴と大和屋甚兵衛の交流を示す資料は延宝七年八月の『句箱』が最初である。大和屋甚兵衛は俳名を「生重」といい、俳諧を始めたのは西鶴と出会うより前であったらしい。甚兵衛の追悼集『梓』にある才麿の発句の前書に

生重は哥舞誹優に名のあまねきもの也。こゝろざしは風雅にありて、むかし梅翁の吟席にも膝をいるゝ交りをゆるされ、玄（ママ）順が案下に箒を捧て埃を払ふたすけともなりぬ。ことし此春泉門の客となる。かれが婿子如艸慟哭のあまりに自他の句をあつめて積善のはしともなさんと予に句を請。

と書かれており、南元順（南方由）と師弟関係にあったと推定される（7）。寛文一〇年刊の元順撰『寛伍集』に生重の名が見えないことから、両者に師弟関係が生まれたのは寛文一〇年以降と乾氏はいう（8）。元順は生没年未詳であるが、西鶴の処女選集として名高い『生玉万句』の追加百韻を宗因とともに詠んでいる。

追加

咲花や懐紙合て四百本　井原鶴永
水引壹把青柳の糸　南　方由
春風をおさめるへきに熨斗添て　西山宗翁

『定本西鶴全集』第一二巻解説にしたがえば、元順がここで脇を務めるということは、元順が、催主の西鶴と最も関係の深い師友先輩もしくは後援者の一人であったことを意味する。また、貞享元年に住吉社で行われた西鶴二万句の矢数俳諧にも元順は列席している（9）。その弟子が生重すなわち大和屋甚兵衛であったわけである。元順は宗因と昵懇であったから（10）、その弟子の生重も「梅翁の吟席にも膝をいるゝ交りをゆるされ」る機会があったのかもしれない。

話を『句箱』に戻すと、『句箱』は仙台の木村一水が西鶴と青木友雪を招いて興行した九吟歌仙六巻を上梓したものであった。生重（大和屋甚兵衛）、辰壽（富永平兵衛）、頓悦（梅津加兵次）、定方（田中治右衛門）、重行（小勘太郎次）、

立花（小嶋妻之丞）ら歌舞伎役者がそれぞれ発句を詠み、脇を一水、第三を西鶴が付けている。『句箱』は一水の主催によるものとみられるが、第三を吟じた西鶴も興行の企てに主要な地位を占めていた可能性がある（11）。板元が大坂の書肆深江屋太郎兵衛であることも西鶴との関わりを示唆する。残念ながら『句箱』は関東大震災で失われ、現在は西鶴の付句を抄出したものが存するだけであるため、詳しいことは分からない。

『句箱』刊行の三ヶ月後、『物種集』（延宝六年　西鶴編　生野屋六良兵衛刊）の追加として刊行された『二葉集』に『句箱』の六名すなわち生重、辰壽、頓悦、定方、重行、立花が入集。同じ延宝七年刊の『道頓堀花みち』は狂言作者富永平兵衛すなわち辰壽の編で、多数の歌舞伎役者らと共に宗因、元順、西鶴、遠舟など談林俳諧師が参加する。翌年延宝八年の『太夫桜』は先に述べた通り遠舟の編で、生重はじめ梨園関係者が多出。同年の『八束穂集』は、大矢数で役人を務めた秋田の桂葉が編集し、宗因、西鶴、遠舟などの句とともに生重の句も収載する。『阿蘭陀丸二番船』も、大矢数で役人を務めた宗円の編で、西鶴ら誹諧師たちと生重の句を載せる。この『阿蘭陀丸二番船』には八才の大和屋牛之助の句もみえるが、これは生重の甥の水木辰之助である。

この頃における梨園での俳諧熱は相当高いといえ、先に述べた遠舟による紹介だけでなく、西鶴を取り巻く談林俳諧の世界に梨園関係者が多数接近したと考えた方がより現実に近いのではなかろうか。有力商人や揚屋の亭主なども俳諧を嗜んだ時代である。たとえば俳号を扇風と称した新町越後町の揚屋の亭主扇屋四郎兵衛も『花みち』『太夫桜』に参加している。また、九軒町の揚屋の亭主吉田屋喜左衛門は西鶴と歌舞伎界との橋渡し的存在だったとされている（12）。そうした状況をふまえるならば、西鶴と歌舞伎役者との交流は俳諧によって始まり、揚屋などの社交場で大物商人を巻き込みつつ拡大したと考えられないだろうか。

延宝八年五月に興行され、延宝九年に刊行された『西鶴大矢数』では、桂葉、宗円のほか梨園関係の生重、定方も役人を務めた。句を寄せた梨園関係者は他に恋舟（小野山宇治右衛門）、由香（松永六郎右衛門）、冬貞（坂田藤十郎）、吉也（上村吉弥）、帆舟（岑野小瀑）、重行（小勘太郎次）、立花（小嶋妻之丞）などがいる。天和二年に出る『犬の尾』および『家土産』も西鶴、遠舟、生重の句を収載。特に梨園を意識しないこの二俳書に生重の名があるのは、生重を歌舞伎役者としてみているのではなく、誹諧師としてみていたことを匂わせる。同時代の役者兼狂言作者であった金子吉左衛門の日記では、実名で記す近松門左衛門、坂田藤十郎などに対して、大和屋甚兵衛だけは俳名の生重を記しているのである（13）。

このことをみても、大和屋甚兵衛は誹諧師として周囲に認められていた可能性がある。俳諧を嗜む程度であった他の梨園関係者とは異なり、大和屋甚兵衛だけは別の見方をする必要があるのではなかろうか。

師の宗因が没した天和二年以降、西鶴が俳諧から浮世草子へと活動の場を移したことは今更いうまでもない。『好色一代男』は演劇の影響が色濃く（14）、

天和三年の『難波の皃は伊勢の白粉』はまさに役者評判記である。そして西鶴が浮世草子へ移行したのと同時に、大和屋甚兵衛も西鶴の浮世草子に登場してくる。甚兵衛の椀久狂言に啓発されて成立した『椀久一世の物語』（貞享二年）、甚兵衛との個人的な親交が描かれる『男色大鑑』（貞享四年）七の三、八の五、『諸艶大鑑』（貞享元年）四の五、『永代蔵』（貞享五年〈元禄元年〉）二の三、『武家義理物語』（貞享五年〈元禄元年〉）二の二と大和屋甚兵衛の名が記されている。西鶴と大和屋甚兵衛は互いに影響を及ぼしつつ元禄に至るまで親交を継続していたわけである。

元禄三年、阿波の律友が同郷の人々とともに上京し、京坂の俳人達と交流した。律友は西鶴の門弟と目される人物で、『名残の友』三の一には四国を訪れた西鶴とともに俳諧興行をしたことが書かれている。よほど気持ちが通じ合ったのか、律友は西鶴帰坂後すぐに同郷の人々の俳諧を携えて阿波から大坂へ上ってきた（15）。そして西鶴や団水の紹介で京坂の俳人達と交流する。この時の作品を編集したものが『四国猿』（元禄四年刊）である。京都井筒屋庄兵衛から刊行された本書には西鶴と律友の両吟半歌仙が附載されており、西鶴はその前書きに「精進嫌ひの捨坊主、今に歯の根つよく、蛇の鮨に蓼好し折節、阿州の律友に逢て、此人はめつらしく同じ心の両吟のうち、世上のかしましきを聞ぬもよし」と記している。「同じ心」の誹諧師が減少し、俳壇をめぐる環境をかしましく感じる当時の西鶴の気持ちをもらしたものであろうか。本書は両吟半歌仙の次に萬海・律友・西鶴の三吟も載せるが、萬海もまた『名残の友』四の二に大坂俳人の一人として登場する人物である。

大坂で西鶴と再会した律友は、五月頃になって大坂から京へ上った。そして団水と再会し、京俳人と交流する。この京俳人の句を載せた本書後半に大和屋甚兵衛生重の句「猪の足跡かくす薄かな」がある。元禄二年冬に京へ上った大和屋甚兵衛は、俳優兼俳人として京でも活動し、西鶴、団水との交流を継続していたことがわかるのである。

元禄五年頃成立とされる『西鶴独吟百韻自註絵巻』では、西鶴は甚兵衛を「殊更、座本に甚兵衛が椀久やつし」と紹介する。当時の歌舞伎界を具体的に紹介する部分について、加藤定彦氏は「何よりも目立つのは、遊女・役者を評判した部分で、自注の範囲をはるかに逸脱している。地方のお大臣に島原や道頓堀の情報を提供することが、西鶴のもっとも得意とする分野であり、効き目のあるサービスだったのである。」とし、該当箇所の注には「芝居通の西鶴にとって腕のふるいどころ（中略）役者評判はついついサービス過剰、自注の範囲を超えてしまったのである」とも書いた（16）。役者と西鶴は持ちつ持たれつの関係であったといえそうである。

大和屋甚兵衛の俳風は、最後まで談林俳諧にとどまっていたらしい。先に紹介した追善集『梓』の最後に付された生重・如艸両吟の序に次のようにある。

此巻は去ぬる元禄七ノ吟、そのころ海鬼灯となづけ、あづさにぬひものせんと云けるが、つゐにその事なくてやみぬ。風躰ふりて今様ならでと打す

ておくにしのびがたく、即此集の終に書て、かの甑（ママ）君の志に企る事をねがひぬ。

元禄七年になした両吟は当初『海鬼灯』と名付けて刊行されるはずであったが実現しなかった。甚兵衛が亡くなった元禄十七（宝永元）年には談林俳諧も廃れていたのであろう。風躰古くさいが捨てておくには忍びがたく『梓』の巻末に載せたというのである。大和屋甚兵衛もまた俳諧の趨勢を目の当たりにした人だったにちがいない。西鶴と彼の人生にどれほどの接点があったかを考えずにはいられないのである。

●小野山宇治右衛門

本話に登場する宇治右衛門の俳号は恋舟といい、その俳号から遠舟の弟子であったとみられている。初め小野山賤妻（後、主馬）と名乗り、天和二年に宇治右衛門を襲名した。敵役として有名な人物である。『大矢数』には巻三二「何能」に

夫検地打て出しても構ふにこそ　恋舟

の句が載るが、その他は『道頓堀花みち』と『太夫桜』に句がみえるのみである。生重とは違い、俳諧は手すさびであったか。俳号を変えた可能性はあるものの、詳細は今のところわかっていない。

歌舞伎の方から活動を追ってみると、延宝八年跋『役者八景』に「小野山暮雪」と題して「しつとめて名残やしたふ雪の暮」とあり、漢詩の内容から色白であったことや若衆名が「賤妻」であったことが確認できる。『大矢数』の「恋舟」という俳号は若衆時代のものであろう。

その後、宇治右衛門を襲名して大坂大和屋甚兵衛座で立役を勤めるが、初めは注目されなかった。京へ上って村山座に敵役として出たときから評判になったという。諸評判記には「都一番のかたき役、ほうひげに長がたな、せいには少あまれども能さしこなし」（貞享四年刊『野良立役舞臺大鏡』）、「此人まなこつきでもつたかたき役としるべし。此人に一にらみにらましては、三年ふるうたをこりもおつるなり。」（元禄五年刊『役者大鑑』）、「睨姿爛々眼明星（にらんだすがたらん／／として　まなこみやうぜう）　瞋體均々聲殷霆（いかるていびく／／さす　こゑなるかみ）」（元禄六年刊『雨夜三盃機嫌』）と評されている。その特徴は「背は低いが長がたなをさしこなす」「目が大きく睨みをきかす」「声が大きく雷のようである」といったもので、江戸の市川団十郎と重なるところがあった。上方で敵役の名人となった宇治右衛門は元禄一三年の顔見世から江戸へ下るが、当初は江戸に馴染めず、江戸の人々に受け入れられなかったという。同一四年三月刊の評判記『役者略請状』（江戸）では「去冬御下りおそく、あづま風の藝のこなし、きゝ合さるゝ間なく、俄しぐみにて出られし故、なんでも見事にあてゝくれんと、思召たる心あて程には評判なくして、別てき

のどくに思召さん」とされつつも「すいの目から上手芸とほむる、ずいぶんあいぜん明王をいのられ、大あたりの狂言を仕出し給へ」と書かれている。同一四年三月刊の評判記『役者万石船』（江戸）になると「かたき役は少柔和にみゆるとの事にて、実方をまぜて柏木のゑもんとなり、実役させてみしに、男ぶり格別になり。のつしりとみへ、にくげみぢんなく、ずいが上手ゆへ、見事にしにせてより此かた、めつきりとあてられて、江戸中沙汰よろしく、どふでも都にて、ほめられし役者ほど有うよと、いはぬ人もござらぬ。とかく末／＼評判よろしいでござらふ。」と評され、名人の面目は保たれたのだった。

江戸でも一応の評価を得た宇治右衛門は元禄一四年一一月より大坂で勤める契約をしていたが、暇乞いの宴で食した河豚にあたり江戸で死去したらしい。その様子は都の錦の『御前於伽』（元禄一四年一一月序）に詳しく描かれている。同書は宇治右衛門の死を元禄一四年一〇月四日のことと記すが、元禄一五年三月刊の評判記『役者二挺三味線』序文中、口寄せで呼び寄せた役者達の霊魂のうちに「小野山宇治右が大きな目から涙をこぼし」と書かれていること、元禄一六年以降の役者評判記には宇治右衛門の名がないことから、その記事は正しいと判断できる。つまり都の錦は最新ニュースを新作に取り入れていたということになろう。

宇治右衛門が後年河豚にあたって死ぬことなど、元禄六年に他界した西鶴が知るはずもない。しかし、恋舟として俳諧をしていたころから宇治右衛門を見知っていた西鶴は、敵役として注目される貞享三年、名人と評されるようになる元禄五年に至るまで、彼の成長ぶりを見守ってきたわけである。

●藤川武左衛門

藤川武左衛門は俳名逸選とされるが(17)、俳諧活動の詳細は不明である。寛永九（一六三二）年、一説には元和四（一六一八）年生まれで、享保一四（一七二九）年三月三日に没したという大変長寿の役者であった。外孫である二代目藤川平九郎の俳名が逸風（また笑鬼）であることから、俳諧は同じ師についていたと推測される。武左衛門は京坂の歌舞伎役者であり、延宝三年に江戸へ下って以降、江戸と上方を往来するようになる(18)。もと実方で武道を得意とした彼が元禄に入って実悪を演じ、大評判をとったことはよく知られている。実悪の開山、藤川系の祖と称される彼の実と悪を兼ねた演技は名人の妙といわれ、巧者の名をほしいままにした。

貞享四年の『野良立役舞臺大鏡』には「京一番の武道がた、外にないわざで万こうしやなる所おゝし（中略）とかく武道ひとすじの役者と心得給ふべし」とあり、貞享四年の時点ではまだ武道方として勤めていたようである(19)。元禄四年正月京村山座での安部貞任という実悪役が大好評であったとされ（『歌舞伎年表』）、同じ四年に文覚上人を演じて「ひつじの年、もんがく上人になられし時、つねのげいより一わりかたもよく見えたりといへり。ひさ／＼のつとめほど有て身のはたらきにうつる所あり」と評判記には記されている（元禄五年刊『役者大鑑』）。武左衛門が演じる実悪は生得の悪人でなく、本来善人である

が訳あって悪人に与したというものであった。そうした移り変わりの演技が定着評価されるのは元禄十二年の「けいせい仏の原」で演じた助太夫からであったらしい。「子を思ふ心のやみにまよひ悪道にくみし老人の敵がた、ようしめさるゝ、四ばんめのつめに、善心へ立かへり、因果の道理をわきまへ、とくしんせらるゝ所、大ていの敵役のならぬ所」（元禄一二年刊『役者口三味線』）と書かれていて、当時は「敵役」としての評となっている。実悪という言葉が彼の評判で使われるようになるのは元禄一三年以降であり、実悪という役柄が定着するまでは敵役に分類されていたようである（20）。

諸評判を通覧すると、武左衛門の演技は長い活動期間全体を通して好評であった。一時変化の無さを指摘されるが、実悪という独自の役柄を創造していった役者だったのである。その過渡期にあたるのが元禄初めの数年だった。

●『名残の友』巻五の五と役者

『西鶴名残の友』各話の執筆時期は貞享から元禄の間といわれている（21）。本話巻五の五の執筆がそのいずれであるかを明確にはできないが、仮に元禄期とするならば、登場人物の選定にある程度の意図を読み取ることも可能であろう。

俳諧と歌舞伎のつながりで親交を結んだ和気遠舟と大和屋甚兵衛生重、遠舟の弟子で西鶴の『大矢数』にも句を寄せていた恋舟こと小野山宇治右衛門、そして宇治右衛門と同じ敵役の藤川武左衛門が登場する。大和屋甚兵衛は立役の代表的存在。小野山宇治右衛門と藤川武左衛門は敵役として元禄の初め頃に名人巧者と評判されるようになった人物である。どちらも敵役らしい風躰で睨みをきかしたり憎々しげな顔つきをする役者であって、怪異を恐れるイメージではない。彼ら三名は立役として当時有名な俳優であり、そのような彼らが同道して「姥が火」見物に出かけたのだった。そして押しも押されもしない立役達に混じって、坊主百兵衛が話をまわすのである。

本話の眼目が坊主百兵衛の印象づけにあったことは先に述べた通りである。坊主百兵衛は江戸で喝采を得た坊主小兵衛の追随者で、糸鬢も小兵衛の真似であった。元祖の小兵衛は、寛文から貞享の間、江戸で持てはやされた道化方の名優であり、遅くとも元禄中頃迄には仏門に入ったとされる（22）。『歌舞伎年表』に百兵衛の名がみえるのは貞享四年七月以降で、江戸森田勘弥座に勤めていたらしい。元禄元（貞享五）年二月、長州侯邸にて森田座の役者狂言があった際に道化百兵衛も出演している。

江戸の役者であった彼が上方に来た時期ははっきりしない。『西鶴事典』は、『好色由来揃』（元禄五年刊）「道化出所」で板東又九郎や鎌倉新蔵、南北さぶ等とともに百兵衛が紹介されていることをあげ（23）、「延宝から元禄期の道化方。延宝・貞享期は江戸におり、元禄期上方へ上った」としている（24）。『好色由来揃』と『名残の友』の記述によって上京を推測したと思われる。不思議なのは、『好色由来揃』が刊行された元禄五年以降、評判記から百兵衛の名が消えることである。元禄七年から坊主団九郎の名が記されるようになり、百兵衛の

活動は確認できなくなる。本話で月代を剃る草履取りの名が「墓原角蔵」で、「坊主」と見分けがつかないゆえに何の子細もなかったという下りは、百兵衛の出家か何かを暗示するか。『新大系』に「元禄六年（一六九三）刊・古今四場居色競（しばいいろくらべ）百人一首に「絵に残る姿も懐かしい」とあり、この頃は活躍していない。晩年出家したことが五元集の詞書で知られる」との指摘がある。だとすれば、坊主百兵衛の出家は元禄五年から六年の間と推定され、本話はその坊主百兵衛を偲ぶ意図で創作された可能性があり、本書目録の副題の「坊主百兵衛がむかし」も納得できるのである。それらを勘案すると、本話の創作時期は元禄五年頃と考えられる。

坊主百兵衛の俳諧活動も未詳だが、巻二の一「昔をたづねて小皿」に登場する「月夜の四平」のような役割と考えれば、俳諧を嗜んでいなくても問題はないであろう。巻二の一の俳友たち「永貞・保俊・春倫・宇野河内」が一夜庵を尋ねるのと同様に、巻五の五では俳諧を嗜む「遠舟・生重・宇治右衛門・武左衛門」が平岡明神を見物する。そして「月夜の四平」が人の失笑を買うように、同道の坊主百兵衛も頭のエピソードで笑いをとりつつ、その糸鬢ゆえに怪異の害を免れたとして、話の落ちがつけられるのである。

『西鶴名残の友』巻五の五は、西鶴が矢数俳諧で交流し親交を深めた役者達のエピソードで構成された。そうした役者達との交流は他の浮世草子作品にも影響し、西鶴の創作を後押ししたのである。文学史的にみれば矢数俳諧の評価は低いが、矢数俳諧の成功が西鶴にもたらしたものは、その後の浮世草子創作に大きな影響を及ぼした人脈そのものだった。それは多くの人々を惹きつけた矢数俳諧のエンターテイメント性と速吟の妙による成果だったといえるのではないだろうか。

（1）『物種集』（鴻池西六）、『西鶴五百韻』（山本西六）、『太夫桜』（山中西六）とある。『大矢数』第百七「何門」の西六の発句は「鬼神も下馬鶴の羽音ぞ大矢数」。

（2）野間光辰氏「西鶴五つの方法」（『文学』35巻9号～37巻3号　昭和42年9月～44年3月）（『西鶴新攷』昭和56年　岩波書店に再録）、浅野晃氏「西鶴と歌舞伎・浄瑠璃」（『共立女子大学文学部紀要』16輯　昭和45年5月）（『日本文学研究大成　西鶴』国書刊行会　平成1年、『西鶴論攷』平成2年　勉誠社に再録）、土田衛氏「西鶴文学における演劇と演劇的なるもの」（『講座日本文学　西鶴　下』昭和53年　至文堂）など。

（3）姥が火の図は、『諸国はなし』巻五の六の図とは相違する。このことについては『新大系』に指摘がある。補足しておくと、本話に登場する宇治右衛門の襲名は天和以降のことであり、『和漢三才図会』の記事によると姥が火は、貞享頃には絶えていたという。とすると、本話の時間設定は天和から貞享の間となるか。

（4）乾裕幸氏「俳諧狂言説異聞」（『国語国文』43巻2号　昭和49年2月）

（『俳諧師西鶴』昭和54年　前田書店に再録）。

（5）土田衛氏「西鶴文学における演劇と演劇的なるもの」（『講座日本文学西鶴　下』昭和54年　至文堂）。

（6）土田衛氏「大和屋甚兵衛の芸風」（『愛媛国文研究』第14号　昭和39年2月）、高杉佐代子氏「大和屋甚兵衛の興行手腕―大阪時代から元禄四年まで（『武蔵大学人文学会雑誌』第28巻1号、平成8年9月）、同「元禄七年前後の京劇壇の情況―市川団十郎上京に対する大和屋甚兵衛、およびその他の在京役者の反応」（『武蔵大学人文学会雑誌』第30巻第1号　平成10年10月）、荻田清氏「役者1　上方」（『近松と元禄の演劇』（講座元禄の文学4）　平成5年　勉誠社）など。

（7）『梓』の本文は祐田善雄先生華甲記念『近世藝文集』（『山辺道』第十五・十六合併号　昭和45年8月）に載る影印を使用した。

（8）（4）に同じ。

（9）団水による西鶴没後十三回忌追善集『こゝろ葉』（宝永三年刊）の序文に「サル程ニ、貞享元年六月五日、攝の住吉ノ神前ニ於テ、西鶴亦一日一夜ノ独吟二萬三千五百句ヲ唱テ、然モ楮上ニ顕ハス（中略）其日席ニアル者、高滝以仙、前川由平、岡西惟中、幾音、宗貞、元順、来山、万海、一礼、意朔、如見、旨恕、友雪、西鬼、豊流等、東西二列座ス」とある。

（10）田中義真氏「西鶴と堺（三）―南方由」（『堺女子短期大学紀要』21・22合併号　昭和62年3月）参照。

（11）『定本西鶴全集』第一三巻解説。

（12）注（2）の浅野晃氏の論。

（13）和田修氏「〈資料翻刻〉金子吉左衛門関係元禄歌舞伎資料二点」（『歌舞伎の狂言　言語表現の追求』鳥越文蔵編　平成4年、八木書店）。

（14）（12）に同じ。

（15）西鶴の帰坂に同道してきたとも考えられる（吉田幸一氏「「四国猿」について」『西鶴研究』第九集　昭和31年　古典文庫）。

（16）加藤定彦氏校注『西鶴独吟百韻自註絵巻』（『連歌集　俳諧集』新編日本古典文学全集61）。

（17）『新訂増補　歌舞伎人名事典』（平成14年　日外アソシエーツ）、『日本人名大辞典』（昭和54年　平凡社）、『歌舞伎俳優名跡便覧（第四次修訂版）』（平成24年　日本芸術文化振興会）など。

（18）延宝三年の江戸市村座顔見世番付にその名がみえる（土田衛他編「宝永以前歌舞伎役者年表」『近松研究所紀要』創刊号　平成8年11月）。

（19）『新竹斎』（貞享四年刊）巻三の四「京歌舞伎の見続旅途の言伽」には「立役は藤川武左天龍馬入大井川よりあらき所もすぐれて又じつかた。」とある。また、同章には「宇治右衛門は茶つぼほどな眼自慢」とあって、同時期に宇治右衛門と藤川武左衛門が舞台に立っていたことが分かる。

（20）『野良立役舞臺大鏡』『役者大鑑』『雨夜三盃機嫌』の本文は『歌舞伎評判記集成　第1巻　自万治三至元禄七年』（岩波書店　昭和47年）、『役者略請状』『役者万石船』『役者二挺三味線』は『歌舞伎評判記集成　第3巻　自元禄十四至宝永元年』（岩波書店　昭和48年）、『役者口三味線』は『歌舞伎評判記集成　第2巻　自元禄八至元禄十四年』（岩波書店　昭和48年）を使用した。

（21）長谷あゆす氏『『西鶴名残の友』研究―西鶴の構想力』（平成19年、清文堂出版）。

（22）『日本人名大辞典』（昭和54年　平凡社）。

（23）『好色由来揃』での表記は「坊主百平」。

（24）松澤正樹氏「登場人物一覧　役者」（『西鶴事典』平成8年、おうふう）。

◆巻五の六「入歯は花のむかし」

古くから宇治の茶は有名であるが、代表茶師であった上林の逸話に面白いものがある。

上林掃部丞（かもんのじょう）は宇治の代官を兼ねる宇治茶師であり、千利休に茶を学んだ人物である。信長、秀吉、家康との関わりも深く、宇治や近隣地域を支配するような家柄だった。そんな彼が粗相をしたという逸話が『見聞談叢』（伊藤梅宇、元文三年〈一七三八〉序）「宇治上林茶会に於ける利休の点前評」に載っている（1）。

夜会をするというので、上林掃部丞のところへ、師匠の利休が大名衆とともに訪ねてきた。掃部丞は大勢の前で緊張したのか、手元がふるえる様子で、茶杓が棗からおちるのもなおさず、茶筅が転んだのもそのままに、膝をついて利休の前に茶碗をだした。列座の若い大名方は皆めくばせして笑ったが、利休は「日本一の点前であるよ」と感心して誉め称えた。後になって、大名達が利休に誉めた理由を尋ねたところ、「あなた様方をはるばるご招待したのも、ただこの一服の茶を進上するためだけなのだ。この茶を、お湯がさめないうちに奉ろうとの一心で、あやまちには心をかけなかったところこそ、あっぱれに点て済ましたことである」と利休は申し上げたという。

掃部丞は、天下一と称された師匠と名だたる大名達を前にして、張り切るあまり手が思うように動かなかったのだろう。しかし、美味なお茶を奉るのが茶道の根本であり、客をもてなそうと懸命になる心が大切なのだと利休は掃部丞の点前を絶賛したのである。

それにしても、格式張った点前の場面で、茶杓や茶筅が転がっているというのは、想像するのも可笑しい図ではないか。道具が転がるのもかまわず茶を点ててしまうのだから、実際のところ、掃部丞はパニック状態だったにちがいな

い。青くなったり赤くなったりして必死に茶を点てている掃部丞と、それを静かに見守る利休が見えるようである。懸命なる心は別にして、大名達のごとく、その様子の可笑しさに興味がわくのも仕方なかろう。

このような茶席での滑稽に目をつけ、話を仕立てたのが西鶴である（2）。西鶴の作品には茶の湯にちなむ話がいくつか見られるが、『西鶴名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」もその一つである。その冒頭からみていくことにする（3）。以下『西鶴名残の友』の本文は、冨士昭雄氏・麻生磯次氏訳注『対訳西鶴全集16　西鶴俗つれ／／・西鶴名残の友』（明治書院　昭和52年）を使用する。

一

梅・椿も室咲はかぢけておもしろからず。時節と春の梢は、おのづから詠めもよしと、柳去年の水仙を生まぜて、釣釜のたぎりを聞る楽しみ、何かあるべし。此心、詫（わび）数寄をよしといへど、ことたらずしてはたのしみなし。

この冒頭において、すでに明確な作者の意見が述べられているのに気づく。「詫数寄をよしといへど、ことたらずしてはたのしみなし」という部分である。作者は宇治茶師である上林の言葉を次に引用し、自説を補強している。

「世を心のまゝなる人の茶事は、不自由なる体（てい）に仕かけたるこそよけれ」と、宇治の上林の法師、俳諧の座にて語られしが、是も尤もに思ひあたる事あり。

ここでいう「不自由なる体に仕かけたる」の解釈が問題であろう。「体」とは「その様な様子」を表し、「仕かく」とは「こちらから働きかける」だとか「工夫を設ける」「しむける」という意味である。とするとここは「世を心のままにできる人の茶事は、不自由な様に見えるよう工夫してあるのがよい」ということになる。すなわち、不自由な風にみせかけるけれども、実際には十分に足りているのが良いと言っていることになるのである。

実は同様の事を、西鶴は『西鶴織留』巻三の二「藝者は人をそしりの種」でも述べていた。以下、本文は冨士昭雄氏・麻生磯次氏訳注『対訳西鶴全集14　西鶴織留』（明治書院　昭和51年）を使用する。

茶の湯は道具にたよれば、中／／貧者の成がたし。「万事あるにまかせて侘（わび）たるをよし」といひ伝へり。是利休の言葉にもせよ、貧家にてはおもしろからず。ことのたりたる宿にして、物好をさびたるかまへにいたせる事ぞかし。しかじ世に住めるからは、巧者の中程に居て、人並に呑ほどの事は知るべし。

いうまでもなく、茶の湯はその初期段階において「書院飾りの茶」「台子飾りの茶」などといわれ、唐物茶道具の賞玩が中心であった。これが無駄な品をできるだけ省いて飾る「書院の茶」「台子の茶」へと変化し、その後、村田珠光によって「草庵の茶」「わび茶」が始められたわけである。「わび茶」といっても、唐物名物の鑑賞がなくなったわけではない。村田珠光、武野紹鷗（4）、そして千利休もまた、唐物名物を愛蔵、愛用しており、伝来の名物道具を尊重する姿勢は受け継がれていたのである。

したがって、西鶴が「茶の湯は道具にたよれば、中〳〵貧者の成がたし」というのは正しい。「ことのたりたる宿にして、物好をさびたるかまへにいたせる」のが正当なのであり、本当に不自由であっては困るのだ（5）。この「わび」について、現表千家家元の千宗左氏が分かりやすく解説している。

わび、ということばは、わぶという動詞が名詞化してできたことばである。そして、わぶはもともと、零落し、悲観し、心細く、はかなく思い悩む心理状態を意味していた。そういう消極的、あるいは否定的な意味内容を持つ、わびが、むしろ積極的な価値を持つ美意識を意味するもの、と考えられるようになるには、室町時代の能楽論や、連歌論などと結びつく必要があった。そして、わびは、枯淡、閑寂、孤高、渋み、さびというようなことばにおきかえられるようになるが、わびが単に乏しき状態に安住することを越えて、積極的な意義を持つことができるためには、その根底に禅的な物の見方が控えていることが必要であった。

利休のデザインによってつくられた道具は、いずれもみな形は端正であり、色は地味で、くすんで、渋い味わいのものばかりである。それは、美しいばらが美しいと見られるようには、すべての人に無条件で、かつ感覚的にとらえられるような性質のものではない。つまり、感覚的な美をむしろ否定して、なんらか満たされない精神状態、もしくは生活状態に積極的な意義を見いだし、そこに、ことばではいいあらわしえないような情趣を感じとることのできる心が、あらかじめ用意されていなくてはならないのである。そういう心の素地をつくったのが、禅的な物の見方であった（6）。

すなわち、茶の湯の「わび」を理解するには、なんらかが満たされない状態の中に無限の美を見いだす心が必要なのだということができよう。しかしながら、こうした「わび」の概念が全ての人に理解されていたのではなかったのである。「入歯は花のむかし」の続きは、そうした「わび」を理解しきれなかった人のエピソードとなっている。

ある弥生の日に、俳友五、七人連れだって昼前から津の国野田にある草庵を訪ねたが、その庭はどれも作りすぎていて気の詰まる物好きであった。歌仙を巻いたあと、亭主は自らが挽いたばかりの茶を大服に点てて差し上げようと言いだす。これまたつくろい過ぎた古風な点前で、しかも盆点にして見せつける

ように出してきたのだった。

正客は身繕いをして飲みかけるが、急に赤面して大服の茶を一人で飲み干してしまう。実は入れ歯が中へ落ちたのだと謝罪し、そのまま退出した。亭主も残った客も問題ないと言うが、結局興が冷めてしまった。改めて一服点てるところだが、他に挽いた茶もない。亭主も茶会を仕舞いかねて、はやり歌を歌い出し、どっと皆笑った。

茶会の中での失敗などよくあることだが、この話では亭主の格式張る様子をことさらに強調し、しかも挽いたばかりの茶をと気を遣ったことが結果的に茶会の崩壊を招いたと描かれ、なんとも皮肉な可笑しい話として仕上がっている。この亭主が占てた大服という茶は、事典によると以下のように解説されている（7）。

○大福茶「おおぶくちや」大服茶とも書く。元旦祝儀としての茶で、大福・王服・皇服などと古来種々記されており、御仏供茶を語源とする説もある。その源は村上帝の時、空也上人が悪疫を治すため、梅干・昆布とともに茶を飲むことを流布し、疫病が治ったため、毎年正月元旦に一般もこれに倣った。（略）これに対し大服という語は濃茶・薄茶に限らず右の祝儀に関係なく多量に点て吸茶するなどの時に使われる。

○大服茶碗【おおぶくちゃわん】年頭の祝儀に点じる茶を大福茶といい、それに用いる茶碗を大福茶碗と称したが、転じて多量に茶を点てる大ぶりの茶碗を俗に大服茶碗とよぶようになった。したがって少量の茶を点じる小ぶりの茶碗を小服茶碗という。

大服は現代でも奈良で初釜の頃に行われており、大ぶりの茶碗を傾けている写真が案内書などで紹介されている。薬としての大福の意味もあるが、「入歯は花のむかし」では「大ぶく」と表記されており、話の可笑しさを考えれば、多量の茶を点てる「大服茶」として解釈したほうがよかろう（8）。この大服は、大勢の茶を一度に点てるため、非常に大きな茶碗を使うのだが、人によっては一人で支えきれないこともあって、隣の客が手を添えることも許されるという。さらに、盆点で出したということは、その茶器が名物だったことを意味する。たとえば『槐記』（享保九年から享保二十年近衛家熙の言行を筆録したもの）（9）、『茶式花月集』（編者不詳　二編四冊　前編四巻二冊は天保八年、後編二冊は天保十年）（10）には

唐物とさへ云へば、盆に載する事に非ず。唐物の中にて、盆に載するは、文琳、丸壺、茄子、此三色ならでは、盆には載することなし。此外の唐物は、盆に載せず。唐物點にする事なり。（『槐記』）

一　傳授之分　茶通箱　唐物點　臺天目　盆點　亂飾（『茶式花月集』）

とあり、本来盆点は伝授の一つで、相当の名物でなければ行わないものだったらしい。「入歯は花のむかし」の亭主は「見せ皃に正客にさし出」したのだから、よほど自信のある名物だったのだろう。大服にしろ盆点にしろ、通常一般ではあまり行われないもので、ここに描かれる茶会は、亭主の力が入りすぎた異常なものだったと分かるのである。

「けふおの／＼御出とぞんじ、老人の手にかけて引ましたばかりを御馳走」というのも、特別なもてなしだということを勿体ぶって言っているのだが、ここに落とし穴があった。

これ見よがしに盆点で出してきた亭主に何とか答えようと、居住まいを正して飲みかかった正客であった。しかし大きな茶碗に大口を開けて挑んだため、入れ歯が中に落ちてしまったのである。状況から考えて、おそらくは上の前歯であろうと思うが、落ちたと感じた瞬間の正客の気持ちはいかなるものだったか、「俄に赤面」という描写が物語っていよう。一旦は口を茶碗からはずして「是はこれにてしまいます」と言ったとあるから、平静を装うことはできたらしい。だが、その言葉を聞いた座の人々は、何のことだが分からなかったはずだ。聞き返す間もなく、正客は大きな茶碗を傾けて、大量の茶をぐいぐいと飲み干していったのである。

座の人々は驚き、あっけにとられて、その様子を見つめたにちがいない。正客は飲み終えた後でご丁寧に茶碗のうちまで改めたという。つまり拝見の所作をしたわけで、一見作法にかなっているようでありながら、実は落とした入れ歯を探していたのであった。可笑しさに追い打ちをかけるような描写ではないか。

大量の水分を腹に流し込んだ正客は、素直に入れ歯のことを白状して退却する。困ったのは残された人々である。この格式高い茶の席で、大笑いするわけにもいかない。入れ歯が落ちたことは不可抗力なのだから、もちろん非難するわけにもいかない。事の直後では「ちっともくるしからぬ御事」と皆すまして答えたものの、後でなにやら妙な雰囲気になったのも当然である。皆一様に体裁を取り繕ってはいるか、やはり可笑しいものは可笑しいのだ。笑うに笑えない妙な間があったのも想像に難くない。

ここで気を取り直して、もう一服点てられればよかった。そうすれば、そんなこともあろうよと気持ちを入れ替えることができたし、茶の湯という風流の場を立て直すこともできたはずである。しかし、肝心の茶がない。

「万事あるにまかせ」たために、言葉通りの不自由な「わび」となってしまったのである。先ほどまで完璧な風流を装っていた茶会は妙な雰囲気の中にあって、亭主もどうして良いかわからなくなる。とうとう捨て鉢となり、藪から棒に流行歌を歌い出した。すると、皆こらえていたものが一気に溢れて「どっと笑ふくれける」となったのである。

このエピソードを紹介した後であるから、最後に繰り返された作者の考えは納得をもって読まれることになろう。

是をおもふに、惣じて詫たる事のよいといふ事はなし。あたま数の焼物、猫といふもの世に住ば、用心して、替釜かけ置、茶の湯ありたき物ぞかし。次第にいたりたる世のさま、豊なる御時のためし也。

『西鶴織留』で利休の言葉として示された「万事あるにまかせて佗たるをよし」の逆をいうように「惣じて詫たる事のよいといふ事はなし」と述べられている。確かに、本当に不自由であっては人をもてなすことも出来ないのだから茶の湯にならない。そういう意味では、「詫数寄をよしといへど、ことたらずしてはたのしみなし」という作者の考えは首肯できる。

だが、利休がいう「わび」は茶の湯での「わび」である。それは西鶴とて理解していただろう。西鶴が非難する「わび」は不自由そのものであって茶の湯の「わび」ではない。問題はそこを取り違えてしまう不心得の人々なのである。

『草人木』（筆者不明　寛永三年〈一六二六〉　源太郎版）（11）「立炭」の部分には退出する際の心構えが書かれており、亭主と客の心が一致しなければ、茶の湯の席が成り立たないことを教えている。炭を使う茶の湯では、釜の湯がたぎっている状態を保つのは難しい。火をおこし、湯が沸騰するまでの間はそれなりに長く、もう一服点てるか点てないか、帰るか帰らざるかの微妙なところで、亭主も客も気を遣ったようである。利休没後は炭点前の拝見が一般的になったとされるが、いずれにせよ、客の長居や残茶の所望もあることを考え、やはり「用心して、替釜かけ置、茶の湯ありたき物」なのであった。招いた客が満足するように万端整えておくのが亭主の心得であり、事足らなくなる前に退出するのが客の心得だったのである。

何事も贅沢になると、人は物に対する執着が強くなる。そうした中で、物欲を捨て、清浄質朴であろうとするのが茶の湯の「わび」である。生活に不自由な状態での「わび」とは違うのだと西鶴は理解していた。また、「侘は万事にその心なくてはあるべからず。世の常の茶湯にほこる人は、かやうの心持、胸におちがたき物也」と『長闇堂記』（久保利世　寛永十七年〈一六四〇〉成立）（12）にあるように、物が足りすぎて「わび」の心がなくなっては元も子もないということも分かっていた。西鶴のいう「ことたる」とは、ただ名物や真壺（13）を所持しているということではなく、客を招く準備と心構えが十分足りているということだったのである。そして彼が理解した茶の湯の「わび」とは、客をもてなすだけの財力はありながら、それを奢らず、質素にかまえるということだったのである。

「入歯は花のむかし」の亭主は、それとは全く逆のことをした。大名の茶のように庭や名物を飾り立て、わび茶とはいえない茶会で肝心の挽き茶だけはわびてしまったからである。経済的にも安定していく時代の中、このような心得違いの茶人は増加していたであろう。「次第にいたりたる世のさま、豊なる御時のためし也」という最後の言葉は、『西鶴名残の友』全体を締めくくる祝言であると同時に、本来の「わびの心」を理解もせず、贅沢三昧に名物を求める人々が多くなった世の有様を皮肉る言葉ともとれるのだ。

『西鶴織留』『西鶴名残の友』をみるにつけても、西鶴が茶の湯を嗜んでいたことは疑いないようである。西鶴と茶の湯との関係については、石塚修氏が一連の論文ですでに論じておられ、西鶴作品を読む上で茶道の知識が必要であることが証明されている(14)。

では、西鶴はどの流派だったのだろうか。今のところ明確な答えはでておらず、また、証明も難しい状況である。交流関係などから推測することはできるかもしれないが断定は難しい。西鶴の主張は一貫して「わび数寄といっても物に不自由のないのがよい」というものであった。これは精神の「わび」と物的不自由の「わび」との違いを理解してのものなのだが、この両方を考える時、思い浮かぶのは二つの「わび」を持ち合わせていた千宗旦である。

千宗旦は利休の孫にあたるが、利休との血の繋がりはないという。父の少庵宗淳は利休の後妻宗恩の連れ子で、実父は松永弾正久秀とも、堺の能楽師宮王三郎とも伝えられている。宗恩が利休に嫁した時、少庵はすでに三十余歳であり、宗旦も生まれていた。

利休没後、血の繋がりがない連れ子の少庵が利休の跡を継いで不審庵二代となったことはよく知られている。利休の実子で嫡男の道安は茶の湯の腕前も非凡であったとされるのに、なぜ少庵が二代を継いだのか。少庵が利休の娘婿であったとか、道安の子だったのではないかとか、様々な憶測が出された所以である。利休、道安、少庵の間に確執はなかったとされており、なんらかの血の繋がりがなければ納得できないということなのだろう。他に、道安の剛毅な性格と少庵の温和な性格を考慮し、千家守成のために少庵が二代を継いだのではともいわれている(15)。

そしてその少庵の子宗旦は、十二・三歳のころから茶の湯の基礎を学ぶために大徳寺春屋和尚のもとへ預けられていた。この禅の修行が生涯宗旦のよりどころとなり、利休のわび茶をさらに深めた宗旦自身のわび茶へと導いたのである。

宗旦は権門には一切近づかず、乞食宗旦と評された通り、清貧の生活を続けた。そのかわりに息子達のうち三人を大名に出仕させている。『元伯宗旦文書』の手紙類を読むと、息子の有付や奉公、健康状態に至るまで、さまざま心を配り、助言を与えていたことが分かる。子煩悩と思えるほどの内容であり、一人の父であった宗旦の姿が浮かび上がるのである。そして愛情注がれた息子達もまた、父の暮らしを支えようと金銭を度々送った。

「炭茶もきれ候へ共少づゝ方々よりつゞき申候」(寛永十九年六月十六日付宗左宛書状)(16)という困窮生活を送っていた宗旦のところに、息子宗左から金子が届いた。「金六両内三両給候由盆前満足申候。心労の物を請事笑止に存候。併壱両も無レ之候処大慶に候。」(寛永十九年六月二十一日付宗左宛書状)とあり、宗左は生駒家から支給された六両のうち三両を父に仕送りしたらしい。申

し訳ないとは思うが、その時一両もなかったので助かったと宗旦は書いている。しかし、この金子は盆の費用で使い果たしたのか、七月二十八日には節季の支払いが滞っていた。

手前何共不レ成候て、かけ共少も済不レ申由母申候。貴所宗拙しんろうの上に我等かやうに合力迷惑に候へ共、不レ及二是非一候。（略）貴所茶あるまじく候。下度候へ共便無レ之候。貴所壺の茶此にも入候而ひき候て我等のをたし候て下可レ申候。（七月二十八日付宗左宛書状）

節季の支払いが少しも済まないと母親がこぼしていることまで書き記し、宗左、宗拙が辛労の上に自分達にまで仕送りをするのは迷惑だろうと思うが、仕方がないと詫びている。同年九月の手紙には、口切の茶会を催す費用さえ賄えないので小棗を売却してあてた旨が書かれる。

爰許同前つまり申候。其許も同前由笑止候。小なつめも金一つにはなし候て口切申候。（略）此方手前何ともかとも成申候。きづかい候まじく候。併極月には不レ知候。（寛永十九年九月二十三日付宗左宛書状）

宗左も同じく不如意であることを知り、何とかなるので気遣いは不要と述べてはいるが、逼迫していることは隠しきれない。「去月廿七日銀子又書付道安宿より参着候。殊借用候而被レ上事一入満足候。」（寛永十九年十二月二十八日付宗左宛書状）とあるのをみると、十二月には息子宗左が心配して、わざわざ借金してまで銀子を送金したのがわかる。

宗旦が常々困窮していたことは確かで、茶の湯活動の他に、諸道具を売ったり、茶道具の調達を請け負ったりして金を得ていたようである。だが、息子達からの送金や物品のやりとりがなければ、茶会を行うにも事欠くありさまだった。寛永十年には屋敷を売ろうとしていたことが手紙にみえるが、結局掛け軸などを処分して、屋敷は売らなかったらしい。

こうした寛永期は千家のわび茶が翳りを見せていた時期とされ(17)、千家の人々が力を合わせて苦境を乗り越えようとしていたことが読み取れるのである。慶安二年の手紙にも

周防殿、殊奇特申事候。此方の沙汰はさひたる事はやらんとの事と申上候。其心得あるへく候。茶湯之師共そら事を数年申されあらわれ候よしにて候。う（つ）けてもわれわれかやうに正直なるはよく心得候べく候。抑々使者うつけ共にて客をよぶも一入肝煎胸いたく候。（慶安二年十月八日付宗左宛書状）

とあるように、苦境にあってなお他に迎合することなく、千家のわび茶を主張し続けたのである。「茶湯之師共そら事を数年申されあらわれ候」とは、当時流

行していた大名茶や公家茶の師匠であろうか。宗旦と金森宗和の仲が良くなかったことは有名である。

石州金盛うそどもあらわれ江戸のわらい草由候。我等体なりともましたるべく候。おかしく候。（慶安二年十月十日付宗左宛書状）
金盛うそつき茶湯沙汰、翠岩……よし石州も江戸に而うそあらわれ候よし先書申し候き。（慶安二年十月付宗左宛書状）

こうした手紙から、林屋辰三郎氏は金森宗和と宗旦との関係について次のように述べている。

茶道伝書の公刊による啓蒙活動は、金森宗和の流儀についてはほとんど見当たらない。それにもかかわらず（『西鶴織留』に）金森の一伝が挙げられるのは、啓蒙の対象の圏外にある遊里の情況であったからと思われる。金森宗和（重近）は、父可重（ありしげ）が利休の嫡男道安の弟子で、「目ききの巧者」（長闇堂記）と言われたくらいで、宗和自身武士をすてて京都に入り、茶匠として姫宗和とよばれた。仁清の陶芸を発見して御室御所に出入し、東福門院（徳川和子）とも親しかったように、どちらかと言えば、その茶は優美で女性的な茶であった。したがって乞食宗旦と言われたわび茶の千宗旦とは、はなはだ対蹠的な存在であった。（略）晩年に宗旦は、「京当世者の所へハふっと不参、よばす候、六ヶ敷候」と言って、一種の人間きらいになり、町人社会から遠ざかったくらいだが、それにしても金森宗和・片桐石州などと対立した理由は、金森・石州の茶が遊楽に近づいた点にひそんでいるように思われる。とくに金森の場合、公家を通じて遊里（島原など）に入る系路が十分考えられる。（略）ここで引合に出される石州は片桐且元の弟貞隆の二男で、茶をやはり千道安門下の桑山宗仙に学んだが、所領の大和小泉の慈光院に好みの茶室をつくり、ついで柳営に入って将軍の茶道師範ともなった。彼はわび・さびの茶趣を排して宗旦の茶に反撥し、利休以前の書院の茶の世界に理想を求めるところがあった。この石州・金森の二つの流儀は、ともに当時のわび茶の系譜からは遠いものであって、それだけにいわゆる茶道的倫理にもとらわれぬところがあったのである(18)。

当時力を持っていた茶は、武家茶であり公家茶であった。その華麗な茶は宗旦にとって受け入れがたいものだったのである。また、宗旦と宗和の確執には流儀の違いだけでなく、刻限の認識の相違による行き違いなどもあって、そうした出来事が不仲になった要因の一つだとも指摘されている(19)。

その後、息子達の活動により宗旦流が大名達にも理解され、宗旦のわび茶も評価されるようになると、宗旦を召し抱えようとする大名が多く出てきた。しかし、宗旦が出仕することはなかったのである。

評価が高まる晩年、宗旦は不審庵を江岑宗左に譲り、裏庭に今日庵を建てて隠居する。隠居後は大徳寺の僧など親しい人間としか付き合わなくなったという。その頃の宗旦を坂口義保氏は

宗旦の茶は体得した厳しい禅の思想を、茶の湯に具現化した簡素枯淡なわび茶であった。つまり、利休が大成した千家流の簡素枯淡なわび茶を、よりわびた厳しい茶風に導いたのだ。

それにくらべ、片桐や金森の茶は、近世という時代感覚を反映させたものである。つまり明るく軽やかで、さわやかな清潔感のある茶趣であったと言えよう。宗旦が片桐・金森ら時流に適合した当世流茶人を嫌うのも無理はなかろう。

宗旦は京の町衆の茶人との交わりを絶っている。それというのも、公家や町衆のあいだで千家流の茶趣が敬遠されているからである。公家はもとより、町衆の雰囲気を敏感に感じ取った宗旦は、みずから町衆との交際を避けるようになった。単に茶趣の違いだけではなく、京衆とは肌があわなかったというのが実情だろう。そこで気心が知れている大徳寺へと足が向くのである。大徳寺には気持ちの通じ合う親しい禅僧がいる。その禅僧との語らいが、宗旦の唯一の慰めとなっていた。

と書いている(20)。四男宗室の有付も決まり(21)、七十四歳のころには隠居生活も安定していたのか、知人との茶の湯を楽しんでいる様子である。万治元年十二月十九日に宗旦は没し、今日庵は四男の仙叟宗室が継いだ。

三

ここで、西鶴が活躍する延宝から元禄期に流行した茶道諸流派をまとめておきたいと思う。まず、紹介した宗旦流であるが、宗旦死後、千家復興に尽力してきた宗旦の意志を継いで、その息子達と宗旦四天王をはじめとする門人達が精力的に活動した。その結果、この時期の宗旦流は一定の力を保持し続けたようである。藪内竹心の『源流茶話』(元禄十四年以降享保頃成立か)は元禄期の茶の諸流派として、織部流・遠州流・宗旦流の三大流派をあげている(22)。

古織・宗旦・遠州も、みな茶道の達人にて、趣は一致に候へ共、気質の不同、才徳の次第有之、勝劣なき事あたはず。千英の花は実なく、実美なれば花美ならず、たとへば、古織は実美なれども花よからず、遠州は花うるはしけれど実よからず、宗旦は竹の緑なれども花なきがごとくにて、おの／＼其風体、かれを得れば是をうしなふに似たり。利休は作法物ずきに到るまで、枝葉相しげり花実相かねて、他の宗匠達チの爪立及ばれぬ秀逸に候故、利休を賞翫候而、源を利休に汲給ひし事に候(23)。

これら三つの流派が流行する背景には茶書の板行があった。まず古田織部の茶法を中心に最初の公刊茶書『草人木』が寛永三年に板行され、遠州以後、柳営茶道の主流が石州流へと移行する頃になると、遠州流が世間に流布して茶書の板行がなされるようになった。また、宗旦四天王の山田宗徧によって千家流最初の公刊本『茶道便蒙抄』が利休百年忌である元禄三年に出版されると、利休復興の動きの中で茶書の公刊が相次いだという(24)。

公家社会では、織部や宗旦などさまざまな茶も取り入れられたようだが、やはり華麗な金森宗和の影響が見られる。近衛家熙（一六六七～一七三六）の言行録として名高い山科道安の『槐記』には、宗和を讃する記述が多くみえる(25)。逆に、宗旦流については、「ふくさを腰に付る事も、右にかぎりたる事なれども、今様宗旦流と云ものは、必左にするとも云。又は、こぼし（建水）に従ふとも云、皆あやまり也。兼て云通り、宗旦が左（左ぎき）なる故に、勝手にまかせたるを、見とりにしたるあやまり也。（享保十一年正月二十八日）」とあって、距離を置いた記述となっている。

元禄の頃、京・大坂の地で遠州流が盛んになったとされるが(26)、一方では宗旦四天王の杉木普斎が京・大坂で活動して門弟を増やし、京の呉服商であった藤村庸軒は伊勢藤堂家に宗旦流を伝え、その次子正員は大坂の関東屋にあって庸軒の茶を伝えた。また、柳営・諸藩においては石州流に繋がる茶道役達が武家茶道を担っていた(27)。

元禄にいたる時期の上方において、世間に流布したと思われる主な流派は、織部流を受け継いだ遠州流、極わびの宗旦流、公家社会と遊里に伝わる宗和流、武家に伝わる石州流があげられ、そこから枝分かれした門人の茶が町人社会に広められていったと考えられるのである。

四

『西鶴名残の友』には宇治上林の名が二度出てくる。その二話とは、巻五の六「入歯は花のむかし」と巻二の三「今の世の佐々木三良」である。巻二の三では西鶴が伏見の俳友二人と共に上林家へ寄り、是非にと勧められて、句を詠み捨てつつ散策したことが書かれている。巻五の六には「宇治の上林の法師、俳諧の座にて語られし」とあることから、西鶴と宇治上林家は俳諧と茶の湯を介して交流があったと考えられよう。

冒頭に紹介した上林掃部丞久徳（久茂）は三人の弟達を分家させて、上林味ト・上林春松・上林竹庵の三家を興し、孫を養子として上林平入家を立てた。また、姻戚関係を結んだ有力な宇治茶師に上林姓を名乗らせて上林三入・上林道庵・上林牛加などを加え、勢力を拡大したという(28)。

宇治市史および宇治市歴史資料館から刊行されている『収蔵資料（文書）調査報告書29』などを参考に、西鶴と同時代の人物を探すと、掃部丞の嫡流である峯順家では五世重胤（上林久重を初代とすれば六世）、春松家では四世（五

世）秀外、三入家では四世幸伯または五世幸寛が見いだせる。だが、西鶴が法師と呼ぶ上林がどの家の人物であるかは不明である。他家の系図も含め、西鶴や俳諧との関わりなど今後の研究が待たれるところである。

西鶴が上林家を通して茶道界の情報を得ていた可能性は高い。宇治茶師であった上林家が茶道諸流派の名人や大名家と深い関係にあるのは当然だからである。西鶴編『古今俳諧師手鑑』に載る伏見小堀遠江殿宗甫は小堀遠州政一その人であり、宇治上林記念館には上林峯順宛の遠州書状が収蔵されている。また、京都大学文学部蔵「上林文書」には、書状のほかに代々小堀家に茶を納めていたとする記録が残る。『古今俳諧師手鑑』にある宗甫の句「冬に今朝霞やはるのさきそなへ」は、天理図書館蔵『小堀遠州発句集』（写本一巻）の句とは一致しないが、筆跡は似ており、古筆治平所持品か諸国各地から集めたという短冊の一つであったと考えられる(30)。

上林三入家文書は、金森宗和をはじめ大名達からの書状が多く残されていることで有名である（31）。坂本博司氏によると、茶の善し悪しなどといった茶に関する知識や理解を得る窓口または指南役が三入だったと推定でき、大名達は三入を通じて上林一門の筆頭である峯順への口利きを依頼し、三入と並行して峯順から茶を調達していたという。その大名にはもちろん京都所司代板倉重宗も含まれる。

板倉重宗といえば、西鶴の『本朝桜陰比事』との関係が取りざたされる『板倉政要』が思い起こされよう。板倉勝重・重宗父子の名裁判話を編述したものである。『板倉政要』は刊行されていないものの、その内容は広く巷間に流布していたらしい(32)。その重宗は遠州・宗和と関わりがあり、千宗旦との交流も確認されている。

『元伯宗旦文書』には上林竹庵・味トとのやりとりを示す手紙が八通ほど見られる。宗旦は上林家の中でも竹庵・味ト家と関わりが深かったといえよう。味トは宗旦を通して、宗左に紀州藩との仲立ちを頼んだようである。後に仲介が成立したのか、味トは宗旦に出頭衆の名字を尋ね、渡辺一学、菅沼九兵衛両名宛の手紙を宗旦、宗左を介して送っている。

このように、茶師であった上林家は、流派にこだわらず茶人と交流を結び、その販売網を拡大していったのである。そして西鶴は、その上林家から諸流派の情報を得ていたのではないだろうか。

さらに、西鶴と茶道諸流派との接点として古筆家の存在を加えておきたい。茶会では掛け軸もまた必要不可欠な物である。したがって、古筆家と茶人は切っても切れない間柄にあるといえよう。古筆家の祖である古筆了佐は『古今俳諧師手鑑』に「雨中とてさけにやよひの二日かな」の句が載せられており、また『古今俳諧師手鑑』自体、古筆治平の収蔵する古筆をもとに作られているのである。金森宗和書状にも古筆了佐、その息子古筆三郎右衛門了栄宛のものがみえるが、特に千宗旦はこの一家と昵懇の仲であったらしい。仕事上の関係だけでない様子が数々の書状から見て取れる。息子の古筆了栄や古筆勘兵衛が使いをする様子も書かれている。

以上のごとく、上林家・古筆家との交わりは、近世前期における芸術家グループへの架け橋となり、各流派の情報源にもなっていたと考えられるのである。そしてそうした情報を素材として西鶴の作品は創作されていったと思われる。

五

いつの時代も同じように、経済的余裕ができると人々は教養を求め始めるものである。できるだけ格式の高い芸術に触れ、おのれの価値をあげて高位の人々と交わりたいと思うのも理解できよう。西鶴が生きた時代、生活に余裕のできた町人達はこぞって教養を身につけようとした。『西鶴織留』巻一の一「津の国のかくれ里」には、俄に分限者となった一家の息子が諸芸にうつつを抜かす様子が描かれている。

又中息子が義、親の目にも見とゞけぬ者なり。さしあたり利発、万事を人の跡に付事にあらず。惣じて音曲鳴物、四座の直伝をならひ請、連歌は新座池へ立入、俳諧は難波の梅翁を里にむかへ、立花は池の坊に相生迄習ひ、鞠は紫腰をゆるされ、茶の湯は金森の一伝、物読は宇津宮に道を聞、碁所に二つまで打なし、楊弓は一中がゝりに大金貝の看板、十炷香は山口圓休に聞覚へ、有職の道者にしたひ、此外芚笆琴は葉山、小哥は岩井、嘉太夫ぶし、弥七が文作、あふむが物まね、おかし中間のする事までも口拍子にまかせ、かゝる器用人の有事、此所の外聞と皆大もてはやせば、其身渡世の事をかつてしらず。

ありとあらゆる芸道に師匠が存在し、富裕町人がやみくもに芸道習得を望んだことを大袈裟に描くわけだが、この息子と同様に、家業ではなく芸道に打ち込みすぎて没落する息子が最近は多いと西鶴は述べている。「茶の湯は金森の一伝」とあるから、この息子はわび茶と違った美麗な茶を習っていたということになろう。実は『当流聞書口伝』（桜山一有　一七〇七成）（33）に、金森宗和は浪人時代わび茶の名人だったが、金森家から合力されて富貴になると、屋敷を建て、京中の木や石などを運ばせて豪勢過ぎる庭を作るようになり、茶の湯が悪くなったとの記述がある。わび茶から大名の茶へと変化した宗和流への批判である。

「津の国のかくれ里」で西鶴は、各芸道の最高峰と思う宗匠を列挙したのではないかと思われるが、だからといって西鶴が宗和流を学んでいたかというと疑問が残る。

前に取り上げた『西鶴名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」を思い起こしてみよう。「此心、詫数寄をよしといへど、ことたらずしてはたのしみなし。」「惣じて詫たる事のよいといふ事はなし」と主張されるため、わび茶批判と見えがちだが、実は違う。亭主の庭を「いづれを見ても子細の過て、気のつまる物好なり」、茶の湯を「手前つくろひ過てむかし行なり。殊に盆だてして見せ皃

に正客にさし出せば」と書いていたではないか。つまり、大名ばりの格式ぶった亭主の茶の湯を批判しているのである。これは、俄分限者となった町人が金に飽かして名物を買いあさり、身分不相応にも書院の茶のごとき茶会をして、自慢げに道具を見せびらかしていたことへの皮肉なのではないのか。だとすれば、西鶴が宗和流だと断定するのは危なかろう。

では、宗旦流であったかというと、やはり納得しかねる。わびに対する批判めいた主張は宗旦流と相容れないからである。深読みすれば、生活苦で肝心の茶や炭さえ事欠いていた宗旦の行き方に対する皮肉とも取れる主張である。だが、宗旦流を真っ向から否定する立場でもないと思われる。宗旦四天王の一人で、西鶴と同時代に名が知られていた杉木普斎は、『名残の友』巻一の一「美女に摺小木」で賞賛する光貞妻の同族であり、西鶴もその存在を知っていたはずである。興味こそあれ、わび茶そのものを批判していたとは考えにくい。

西鶴は『西鶴織留』巻三の二で「世に住めるからは、巧者の中程に居て、人並に呑ほどの事は知るべし」と述べていた。「極わび」は確かに憧れるが、宗旦のようにわび茶を極めるのは、商売をする一般町人にとっては困難なのである。町人であるならば、生活を破綻させるほどの「わび」を求めるのではなく、巧者の中程にいるのがよいと考えたのではなかろうか。だから、茶の湯をするならば「ことのたりたる宿にして、物好をさびたるかまへにいたせる事ぞかし」といったのである。

石州流はこの頃まだ武家の茶であって、西鶴のような町人にまで広まっていたとするのは難しい。最後に残ったのは「きれいさび」と称された遠州流だが、残念なことに西鶴が遠州流であったと断定する資料はない。ただ、西鶴の作品から読み取るならば、古風過ぎて気のつまる書院の茶ではなく、かといって、利休復興の動きで勢いづいている宗旦流の厳しい極わびでもなく、その中程がよいのだと考えていたのではないだろうか。それは、どの流派に偏ることのない宇治上林家のあり方にも通ずるように思う。

そして、古流当流の中を行こうする姿勢は、西鶴の俳諧における主張とも合致する。利休という宗匠を得て完成したわび茶は、元禄にいたる頃には変容して多数の流派と膨大な茶人を生みだした。安易に茶の湯の道に入り、正しく理解することもなく茶人ぶる人々が増加していったのである。そうした流れは俳諧も同じである。流行するにつれ俳諧人口は増大し、俳諧をするとは思えぬ人々までが、修行もせずに句をひねり始めた。このような状況の中にいて、西鶴にとっては俳諧と茶道が同じように見えていたのではないだろうか。だからこそ、『西鶴名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」は俳諧と茶の湯を重ね合わせた話になっていると考える。

以上、確たる証拠もないまま西鶴の茶道認識について述べてきたが、これだけはいえると思う。西鶴にとって俳諧の座と茶の湯の席は同じものだったということである。茶の湯は芸道集団のネットワークを作り出し、そこで認められれば他の芸道への道も開かれた。茶席に集う人々は、同時に俳諧の座を形成し、互いの情報を交換し合う仲間となったのである。そして茶話は創作の糸口にも

なった可能性がある。西鶴作品の解釈と、西鶴の交流関係をさぐる時には、茶の湯を視野に入れて考えることが不可欠だといえるだろう。

（1）伊藤梅宇『見聞談叢』（岩波文庫　昭和15年）

（2）茶人ぐらした不心得の者達が茶席で粗相を繰り返す話は、『西鶴諸国はなし』巻五の一「灯挑に朝顔」にもある。茶道との関連は、石塚修氏「『西鶴諸国はなし』に何を読むか―「灯挑に朝顔」を中心に」（『江戸文学』23　ぺりかん社　平成13年六月）、「『西鶴諸国ばなし』巻五の一「灯挑に朝顔」再考―茶道伝書との関係を中心に」（『文芸言語研究（文芸編）』42　平成14年10月）に詳しい。（『西鶴の文芸と茶の湯』（思文閣　平成16年3月に再録。）

（3）『西鶴名残の友』の最終章にあたる本話は、章全体が後人による補作との説が出されている（宗政五十緒氏「西鶴後期作品成立考」（初出「西鶴の後期諸作品の成立についての試考」龍谷大学国文学会『国文学論叢』第10輯　昭和37年12月、『西鶴の研究』未来社　昭和44年4月に再録）、金井寅之助氏『近世文学資料類従　西鶴名残の友』解題、塩村耕氏「『西鶴名残の友』の芭蕉評について」（初出『国語と国文学』67巻3号　平成2年3月、『近世前期文学研究―伝記・書誌・出版―』若草書房　平成16年に再録）。しかし、後人補作と断言する証拠もないので、ここでは西鶴作品の一つとして本話を取り上げておく。

（4）武野紹鷗はわび茶でなかったという説がある。（神津朝夫氏『千利休の「わび」とはなにか』角川選書）

（5）ただし、「さばしたる」様子は非難されていた。「利休の云、さびたるはよし、さばしたるはあしゝ。古語にも風流ならざる処又風流と有之候。もとめて風流なるは却而風流ならざる也（略）利休、去かたへ鵙や宗安を伴ひ、茶に参られしに、内露地の扉に、いかにもさびたる狐戸をつられたり。宗安見て、さびたる風情おもしろき由、感心申されしを、利休、いや、それがしはさびたるとは思はず。いかんとなれば、深き山里などより所望して、こゝにしつらひたるにやあらん。さあればさばしたる風情なりと云へり（濁点句読点筆者）。」とある。（『茶道古典全集』第三巻『源流茶話』上）

（6）千宗左氏『定本　茶の湯表千家』下巻（主婦の友社、昭和61年）

（7）林屋辰三郎氏ほか編『角川茶道大事典』本編（角川書店　平成2年）

（8）『対訳』、『新大系』も茶の一服を大量に立てることとされる。

（9）享保九年（一七二四）から享保二十年（一七三五）にいたる近衛家熙の言行を筆録したもの。本文は『茶道古典全集』第五巻を用いた。

（10）編者不詳　二編四冊　大徳寺宙寶宗宇の題言がある。前編四巻二冊は天保八年（一八三七）、後編二冊は天保十年（一八三九）に一楽斎の蔵板を新刻したもの。本文は早稲田大学図書館蔵本を用いた。

（11）千宗室氏編『茶道古典全集』第三巻（淡交社　昭和52年）
（12）（11）に同じ。
（13）葉茶壺の最上のもの。
（14）石塚修氏「西鶴の「しほらし」―茶の湯との関連を中心にー」（『文芸言語研究（文芸編）』33　平成10年年3月）、「「約束は雪の朝食」再考―茶の湯との関連からー」（『文芸言語研究（文芸編）』35　平成11年3月）、「「茶の十徳も一度に皆」考ー「茶の十徳」を中心としてー」（『文芸言語研究（文芸編）』37　平成12年3月）、および（2）論文。（『西鶴の文芸と茶の湯』（思文閣　平成16年3月に再録。）
（15）平宗左氏「茶の湯の歴史」（『定本　茶の湯表千家』下巻　主婦の友社　昭和61年）
（16）『元伯宗旦文書』の本文は、千宗左氏編『元伯宗旦文書』（茶と美舎　昭和46年）に拠りつつつ、坂口義保氏『元伯宗旦ー宗旦と三千家の成り立ち』（新典社　平成16年）および田中稔氏『現代語訳　宗旦文書』（慧文社　平成16年）を参照。片仮名は平仮名にし、濁点を付した。以下同様。
（17）坂口義保氏『元伯宗旦―宗旦と三千家の成り立ち』（新典社、平成16年）
（18）林屋辰三郎氏「遊里と遊芸」（岩波講座『日本歴史12　近世4』岩波書店、昭和51年）
（19）筒井紘一氏「金森法印と宗和」（『茶人の逸話』淡交社、昭和59年）および注2の石塚氏論文参照。
（20）注17と同。
（21）熊倉功夫氏「宗旦四天王と三千家」（『茶道文化研究』第二輯　昭和55年3月）、谷端昭夫氏『近世茶道史』（淡交社、昭和63年）
（22）中村修也氏「千少庵論」（熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収　思文閣　平成15年）では、「考えなければならないのは、宗旦の茶が織部・遠州と同列に論じられていることである。（略）それが可能であったのは、宗旦には千家三代目としての評価が定まっていなかったからと考えるほかない。」とされている。
（23）『源流茶話』の本文は、千宗室氏編『茶道古典全集』第三巻（淡交社　昭和52年）に拠る。
（24）筒井紘一氏『茶書の研究ー数寄風流の成立と展開』（淡交社、平成15年）
（25）『槐記』（享保十年正月二十日、享保十二年十月十五日、享保十五年五月十日など）。本文は日本古典文学大系『近世随筆集』所収の「槐記」を用い、濁点、文中注は筆者。片仮名表記は平仮名になおした。
（26）山田哲也氏「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」（熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』所収　思文閣　平成15年）
（27）谷端昭夫氏「わび茶の拡大」（『近世茶道史』所収　淡交社、昭和63

年）

（28）林屋辰三郎氏ほか編『角川茶道大事典』本編（角川書店、平成２年）

（29）「上林三入家文書」（『収蔵文書調査報告書』３　平成12年）、「上林春松家文書」（『収蔵文書調査報告書』６　平成16年）、「上林春松家文書２」（『収蔵資料調査報告書』９　平成19年）、『大名と茶師』（宇治歴史資料館編・発行、平成５年）

（30）『古今俳諧師手鑑』西鶴序に「古筆治平自限をもつて其徳其名世にみてる作者集をかれしを望寫、是を種として其外國々所々に所持いたされしを尋もとめ」とある。

（31）坂口博司氏「三入宛書状の研究　その五」（『平成13年度　宇治市歴史資料館年報』研究紀要　平成14年３月）

（32）『対訳』第十一巻解説。

（33）桜山一有（一六四九～一七二八）がまとめた聞書。（世田谷区立郷土資料館・世田谷区教育委員会編『続石井至穀著作集』平成４年）

『西鶴名残の友』の各話を解釈してきたが、ここでその創作方法についてまとめてみる。『名残の友』の各話が、俳諧師の逸話と笑話を組み合わせて創作されていることはいうまでもない。実存の俳諧師が現実性を表すもの、笑話が虚構の役割を担うものとして準備され、その二つを組み合わせることで、笑話とも俳論ともとれる独特の作品を生み出したわけである。

○登場人物の選定

俳諧師に注目してみると、描写対象として選ばれた俳諧師は三つのタイプに分類される。まず第一に、創作当初既に故人となっていた昔の俳諧師や、西鶴が直接交流しえなかった人物。第二に、西鶴より一世代前の俳諧師で、実際の活躍を見聞できた人物。第三に、西鶴と同時代の俳諧師で、西鶴と交流したり、俳壇で動向を聞くことができた人物である。

第一の分類に属する人々は、「宗祇、荒木田守武、光貞妻、津田休甫、松永貞徳、斉藤徳元、山崎宗鑑、牡丹花肖柏、望一、藤井徳庵、高崎玄札、安原正章（貞室）、雛屋立圃」であり、『滑稽太平記』に登場する俳人が多く含まれている。彼らを描いた章は、一俳人の逸話として読むことが出来る構成となっていることが多い。このうち、「荒木田守武、山崎宗鑑、光貞妻、宗祇、望一、牡丹花肖柏」の六名は、西鶴にとっては伝説的な存在で、敬意をもってその功績を讃える対象となっている。ゆえに、彼らについては名をあげてはいるものの笑い話の主人公としては扱わず、事蹟や人となりを紹介したり、第三者に追憶させる体で語っている。

「津田休甫、松永貞徳、斉藤徳元、藤井徳庵、高崎玄札、安原貞室、雛屋立圃」は、さきの荒木田守武などよりは親しみを感じる描き方をしている。彼らの実際の逸話を挿入しつつ、彼ら自身を笑い話の登場人物に置き換えて語り、話の中で動かしてみせるのである。特に「休甫、徳元、徳庵」の三名は生き生きとした描写が笑いをさそい、虚構である笑話が実際の事であるような錯覚を起こさせる。立圃の場合は弟子の行動が描かれるのみで、立圃自身は話の中で動かないが、その弟子の様子から宗匠として尊敬されていたことが分かるようになっている。玄札は最後に登場するだけであるけれども、一話の最も重要なところ、俳諧師の存在意義とでもいうような、機智によって人を救う有様をみせることによって、読者に強く印象を残すのである。

第一の分類に属する人々の描写は、本当の俳諧師とはどういう存在なのかを我々に示してくれている。短期間で爆発的ともいえる俳諧人口の増加をもたらした江戸時代初期、その流行を生み出し存続させたのはまさに彼らだった。彼らは憧れの俳諧師として行状や人となりが次世代の人々に語られたのである。光貞妻のように、行き過ぎた憧れの対象になったこともあるであろう。それは、凡人とは違う特別な何かを持った人物として認識されていたからである。創作当時、彼らは故人であった。だから事実と異なる笑話と組み合わせても問題はなかったと推測される。偉人としての評価や認識が崩れることはなく、愚人たちに少々的外れな批判をされようが、彼らの功績自体に影響はない。だからこそ、笑話の登場人物との置き換えが可能だったのである。

第二の分類に属する人々は、「任口、永貞、保俊、春倫、浄治、立以、貞親、可玖、蒲釧、正式、秋月、未得、春可、道甘、胤及、成安、成之、顕成、一三子」としておく。西鶴より年長で俳諧においては先輩にあたる人々である。任口と道甘は長命であったから西鶴との交流も可能であった。任口は尊敬と親しみをもって西鶴との交流の一部が語られており、道甘は本書に二度登場する。交流可能な年長者という意味では、多門院門加（1）と兼松友世を入れてもよいかもしれない。

これらの人々が各話に採択された基準は、活躍時期や地域によると推測される。巻二の一の「永貞、保俊、春倫、浄治（宇野河内）」は大坂の人々で寛文十年頃に活躍。巻二の三の「任口、門加、友世」は伏見の人々、巻二の四の「立以、貞親、可玖」は大坂の立圃門、巻二の五の「蒲釧、正式、秋月、未得、春可、道甘、胤及」は話の展開上、諸国から集まった俳人たちであるが、西鶴の『古今俳諧師手鑑』に採択された人々で、西鶴より一世代前に活躍する。巻三の三の「成安、成之、顕成」は堺の人々である。

巻二の三は任口との関係で伏見の人々が選ばれ、巻二の四は立圃の関係で大坂の立圃門、巻二の五は蒲釧から引き出された『古今俳諧師手鑑』の入集者、巻三の三は徳庵の関係で堺の人々が採択されており、いずれも中心となる俳諧師から引き出された脇役的な存在として登場している。彼らは笑いの対象にはならず、笑われる人は他に設定されており、巻三の三以外は俳諧と無関係の人が最後の笑話で笑いを提供するのである。したがって、第二に属する人々は一

話に現実味を加える役割を担っていながら、笑いの対象にはならないよう描き分けられているといってよい。

第二に分類した人の中で、一三子だけは扱いが異なる。問題の巻三の四に登場する人物である。桃青（芭蕉）と並べて語られているために微妙な位置にあるが、本来は牡丹花肖柏や休甫と同類の奇人として、第一の分類に属する人なのかもしれない。生没年ははっきりしないが、活躍時期は寛文十年頃で、やはり西鶴より一世代前の人物かと思われる。

第三の分類に属する人々は、巻三の五以降に登場する人々である。巻三の一のみ、登場する俳友たちから判断して、本来巻三の五以降に編集されてよい章だと考える。第三の人々は西鶴と直接交流した可能性のある俳諧師たちで、その多くは西鶴より後に没している（2）。これらの人々が登場する章の笑話は、俳諧の座での話であったり、旅先での見聞として書かれており、俳諧師たちがそれを見聞きして笑うという設定になっている。よって、第二の分類と同様、俳諧師たちは笑いの対象にはならないよう描き分けられているのであって、そこに何かしらの気遣いが感じられるのである。

第一の分類で述べたように、既に故人であり苦情を言われる心配のない俳諧師であれば、笑話の人物と置き換えて描くことも可能だったろう。しかし、第二・第三分類の人々、特に第三の分類の人々を同様の方法で描くことは危険だったと思われる。「笑い」の中には、ややもすると皮肉や中傷として受け止められ兼ねない危険性があった。だから彼らを描く際には気遣いが必要だったのではないか。彼らを笑う側に設定し、極力問題のないように描いていても、読み手がどう捉えるかは分からないのである。実際のところ、現在でも皮肉として捉える解釈があるのだから、やはり同時代俳諧師を扱う作品としては少なからず危うい側面を残していたといえる。そうした作品の性質が、出版を遅らせた理由だったのではないか。ある程度まとまった草稿があったにも拘わらず、『西鶴名残の友』が生前に出版されなかったのは、同時代の俳諧師達に対する懸念があったからと考える。

○編集と創作時期

『西鶴名残の友』の執筆時期については、暉峻康隆氏の推定が定説となっている（3）。暉峻氏は『名残の友』に書かれた事実に注目し、執筆時期を元禄四年中とされた。暉峻氏が事実と推定する話は次のとおりである。

巻二の三「今の世の佐々木三郎」
西鶴が任口を訪れた寛文十二年もしくは延宝元年夏。
巻三の一「入日の鳴門浪の紅ゐ」
西鶴の徳島行きは、『四国猿』（元禄四年刊）よりみて、元禄三年冬のこと。

巻三の六「ひと色たらぬ一巻」
田代松意の来訪と『虎渓橋』の興行は延宝六年秋。
西鵬号を使用しているので執筆は元禄元年から四年の間。
巻四の一「小野の炭かしらも消時」
西鶴が京都の団水を訪れ、『団袋』の両吟歌仙を巻いたのは元禄三年冬。
巻四の四「乞食も橋のわたり初」
其角の西鶴庵訪問は元禄元年十月から十一月。
巻四の五「何ともしれぬ京の杉重」
才麿が江戸から大坂へ出て活動したのは元禄二年十月以降。
巻五の二「交野の雉子も喰しる客人」
鬼貫の大坂住は元禄三、四年。
巻五の三「無筆の礼帳」
木因・西国・西与・西鷺が参会したのは延宝八年五月。
巻五の四「下帯斗の玉の段」
西吟の万句興行に赴いたのは延宝末年。

この説に対して長谷あゆす氏は、西鶴の阿波、京、明石への訪問は記録されていないだけであって他の時期に訪れることも可能であり、元禄期に限る必要はないとする。巻四の五の才麿は延宝期から西鶴と交流していたので、元禄二年以降とするのは適当ではないとし、巻五の二で鬼貫が正信・竹亭・一礼・素龍・昨非と同座した時期は元禄元年以降まで遡るという。さらに巻三の五「幽霊の足よは車」は、登場する言水の肩書から貞享期の執筆とみるという新見解を出された。

確かに、俳諧師の動静は克明に記録されているわけではないので、訪問時期などを確定することはできない。従って、暉峻氏が事実とされる時期も動く可能性はある。だが、巻四の四「乞食も橋のわたり初」の解釈で述べたように、事実の時期が遡るからといって、執筆時期まで遡るとは限らないのである。繰り返しになるが、巻三の六「ひと色たらぬ一巻」は延宝六年の出来事を描いているけれども、執筆は西鵬号を用いていた元禄元年以降であって、内容と執筆の時期に開きがあることは否定できない。つまるところ『名残の友』の執筆時期はいつかという問題について私見を述べると、『名残の友』は全てが同時期に書かれておらず、書き溜められた草稿なのであって、事実の記述から執筆時期を確定するのは困難だと考える。執筆時期にばらつきがあるとする点では、長谷氏と同意見なのである。

ただし、巻三の六は西鵬号を用いていることで元禄元年以降となり、巻五の二に登場する素龍が、大坂へ出て昨非と交流するのも元禄元年以降、巻五の五「年わすれの糸鬢」の坊主百兵衛の来阪も元禄元年以降となる。巻三以降の話には元禄期執筆のものが含まれることから、『名残の友』の執筆時期を大きく二期に分けて考えたい。すなわち、巻一巻二の前期と巻三以降の後期である。

巻一巻二の話は有名俳諧師を軸に展開され、登場する俳諧師のほとんどは『古今俳諧師手鑑』に採択された人々である。これらの人々は「登場人物の選定」で述べた第一分類と第二分類の俳諧師に該当する。また、巻一巻二では内容に連続性が認められる。巻一の二「三里違ふた人の心」と巻一の三「京に扇子能登に鯖」は徒然草の利用や内容構成がよく似ており、同じ巻一の三で「気のつかぬ人」が出され、巻二の一「昔たづねて小皿」で「長あそびの客」が出された後に、巻二の二「神代の秤の家」で「俳諧師といふものは、気のつかぬものにて、長あそびをする」という台詞が使われた。これらに連続性をみるならば、巻一の二、巻一の三、巻二の一、巻二の二は近い時期に執筆された可能性がある。

巻三以降の各話は、西鶴の経験談とおぼしき話が多く、西鶴が登場していない場合でも、西鶴と同時代の俳諧師が同座している様子を描いたものとなっている。笑話は旅先での見聞や俳座で聞いたものとして語られ、俳諧師が主人公となっているものはない。

巻三以降にも連続性が認められるものがある。巻三の一「入日の鳴門浪の紅ゐ」で「源氏祖母」と「天気占い」が出され、巻三の二「元旦の機嫌直し」で「絹屋のむらさき式部」と「夢占い」が出てくるのである。ここにも発想の連関が看取できよう。

巻三の七「人にすぐれての早道」と巻四の一「小野の炭がしらも消時」では、巻をまたぎながらも哀れな話が続く。巻三の七は大和巡りの際に吉野で哀れな話を聞く設定になっており、巻四の一では西鶴が京へ上った際に小野で哀れな話を聞く設定となっている。狐だった父が殺される話と炭焼きの今浦嶋が消える話で、どちらも笑話ではなく奇談であり、一話に笑う要素がない。

巻四の二と巻四の三も似ている。巻四の二「それ／＼の名付親」は難波での座、巻四の三「見立物は天狗の媒鳥」は京での座で、どちらも俳諧師が集う俳諧の座に依頼が飛び込んでくるという内容である。俳諧師の回答も、実際には役に立たない冗談の言い捨てで終わっている。

これらに連続性があるとみた場合、創作と編集の過程が想像されよう。つまり近い時期に二、三話を創作して保存しておき、後でそれらをまとめたと考えられるのである。そして内容の構成からみて、まず巻一巻二がまとめられて、次に巻三以降がまとめられたと思われる。特に巻三の五以降の作品は元禄期の創作と推定されるものが含まれることから、創作の順序は巻一巻二がまず創作され、巻三の五以降が後から創作されたと推測する。

いまここで敢えて巻三の一から巻三の四をあげなかったが、それには訳がある。登場する俳諧師や内容構成からみて、巻三の三「腰ぬけの仙人」は前期の巻一巻二にあるべき話と考えるからである。そして巻三の二「元旦の機嫌直し」と巻三の一「入日の鳴門浪の紅ゐ」が後期に入るとする。つまり、本来の順序は巻二の五「和七賢の遊興」の後に巻三の三「腰ぬけの仙人」があり、巻三の二「元旦の機嫌直し」、巻三の一「入日の鳴門浪の紅ゐ」、巻三の五「幽霊の足よは車」と続いていたと推測する。この順序で並べると、「入日の鳴門浪の紅ゐ」

以降は西鶴の経験談が続き、俳諧師の登場の仕方も内容構成も同じとなって後期の話全てがまとまるのである。

実は、この順序であったとしたとき、章番号の不自然さも説明がつくようになる（2）。巻三の三の章番号が「巻三の一」と刷られているのは、本来の順序によるからである。そして巻三の一の章番号「一」の位置が下がりすぎているのは、もともと「二」か「三」だったものの上二画を削ったせいである。従って、もともと巻一巻二のグループに巻三の三を加えたものが、既にまとまって存在していた。そして巻三の二、巻三の一、巻三の五以降の話が元禄以降に執筆されたと考える。そして巻三の四だけは、他の話と執筆時期が異なるとしたい。

○創作意図・創作意識

最後に、『西鶴名残の友』の創作意図もしくは創作意識について私見を述べておきたい。これまで『名残の友』という作品は、随筆、笑話集、俳論といった複数の捉え方がなされてきた。そして現在、最も参考にされるのは井上敏幸氏の説であろう。井上氏は『新日本古典文学大系77』の解説で西鶴の創作意識・意図について述べ、「元禄期における談林俳諧師西鶴の心境そのものが基本的創作意識であり、その心境に基づく様々な批判や自己の立場の主張が、そのまま創作意図であったということになる」とされた。井上氏が読み取られた西鶴の心境とは、「（一）当代俳諧への憤懣、（二）咄への傾斜、（三）今時の俳諧師批判、（四）理想的俳諧世界の主張」の四点である。その中で特に井上氏が強調された部分は、（一）と（三）であった。そしてこれに応えるかのように、塩村氏は巻三の四に西鶴の芭蕉に対する感情と皮肉を読んでいる。

確かに、元禄俳壇の状況を知る者ならば、西鶴の中に潜む不満のようなものを感じ取ることができよう。しかし、もっと穏やかに西鶴の心境を捉えることも可能なのではないか。『名残の友』には貞門の俳諧師や元禄俳諧への流れに乗ろうとする俳諧師たちも登場している。だが、彼らに対する表だった批判の言葉は示されていない。やんわりと今時の俳諧師と述べているだけで、彼らがそうだとは決して言っていないのである。西鶴の今時の俳諧師に対する批判は、誰も彼もが俳諧を志すようになった時代に、相当な修行も覚悟もせず、俳諧を知ったつもりになっている似非俳諧師に向けられているのであって、西鶴と交流するような、俳書に名が載るような人々に対してではなかった。貞門であろうが新興の俳諧であろうが、真面目に俳諧と向き合う人々には一定の敬意が払われているのである。

「登場人物の選定」「編集と創作時期」で述べたように、『名残の友』の創作には少なくとも二つの段階がある。初めは『滑稽太平記』の当代版を意識した執筆意図があったように思われるが、実際には暴露咄などではなく、俳諧師の存在を印象づける面白い逸話というものだった。それは金井寅之助氏が「作ら

れた噂話が俳人の性格や習癖を髣髴させる時、読者は拍手を送るであろう。その性格や習癖がわかれば、名残の友はもっと面白く読める筈である（４）」と述べておられたことに通じる。西鶴は俳諧師とは何かを語ろうとしていたのである。

第二段階にきて、西鶴の書きぶりに変化が見られるようになる。その変化をもたらしたのは、西鶴自身の変化であり、「老い」への意識である。水谷隆之氏が『団袋』に関連させて述べておられるように（４）、元禄三年頃の西鶴には「老い」の意識があった。だが、体力の衰えを感じていたとしても、俳諧への気持ちは依然として持ち続けていた。その気持ちは、井上氏が言うようなネガティブなものだけではなかったはずである。確かに元禄元年三月の西鶴書簡には、「此ごろの俳諧の風勢気ニ入不レ申候ゆへ、やめ申候。嘉太夫ぶしの上るりニ、うき世をなぐさミ申候」と書かれているが、実際には俳諧を続けていたのである。元禄三年に至って西鶴は俳諧活動を再開し、鬼貫と百韻一巻を巻き、『俳諧石車』を刊行し、『西鶴独吟百韻自註絵巻』を手がけている。目を病んだと弱音を吐きながら、それでもこれだけの行動を見せる西鶴に、嫉みの気持ちばかりをみるのは違和感を感じる。それよりも、水谷氏がいうように、新たな俳諧との接点を、西鶴らしい視点で模索しようとしていたと捉える方が事実に近いのではないだろうか。そして彼は自身の俳諧人生を顧みるのである。

西鶴が『名残の友』巻一巻二の原稿をまとめ、さらに第二段階の執筆を始めたのはいつ頃だろうか。おそらく元禄二年以降ではないかと推測する。元禄元年は『日本永代蔵』を初めとした六作品が続けざまに刊行されていて、『名残の友』を執筆するような心境ではなかったであろう。元禄二年三月まではまだ『本朝桜陰比事』や『新吉原常々草』の刊行が続いている。しかし、元禄二年の十一月になると『俳諧のならひ事』を執筆、門人に与えているのである。その後、立ち戻るように俳諧活動を再開していることは多くの人が認めるところである。

こうした動向に筆者の主観的な思いを加えて、『西鶴名残の友』における西鶴の創作意識について述べたい。先にひとことで言ってしまえば、それは、西鶴自身の俳諧師としての追憶である。この捉え方は古く片岡良一氏が「昔ながらの鋭さと強さとが内に貯えられて、暢びやかな落着きに安住し得た彼の気持ちが、そこに端的に偲ばれる。天の理法に味到した彼は、こうして一切を肯定しながら、淋しい微笑のうちに生きていたのである」と言われた捉え方に戻るようであるが（５）、その誹りをあえて受け入れたい。

『名残の友』を読むとき、当代俳諧や俳諧師たちへの否定的な印象よりも、彼らの機智や大笑いしている座の様子の方が強く印象に残る。それはやはり最後が笑話で締めくくられているからである。これまでの西鶴を形作ってきたものは、こうした俳諧師たちとの交流であり、彼らとの時間だった。元禄俳壇に対する不満がなかったわけではないだろうが、俳諧があったからこそ、次の世代の人々、律友たちや団水のような弟子たちとの交流も続いているのである。俳諧に熱くなっていた自分を振り返り、「今おもへばおろかなり。世に長いきし

て、萬むかしに成事を、ひとつ〳〵おもひ出すもあはれなり」と述べる西鶴に、元禄俳壇への攻勢は見られない。それよりも、自分が歩んできた俳諧の世界をもう一度見つめ直しているのだと思われる。守武や宗鑑に憧れていたころや、『古今俳諧師手鑑』『物種集』など俳書を編んでいたときを思い起こしているのである。そして軽口に乗せてそれを再現して見せている。皆が知っている俳諧師のことを話し出して、その人となりが知れるような逸話をからませ、最後に面白い話で締めくくる。あるいは、西鶴の日常の一端や俳友と同道したことなどが語られたり、見知った俳諧師たちの座の様子が描かれる。そしてまたちょっとした笑いで終わるのである。人と会話をしているときに、その場を和ませるような面白いことをいって、話を終了させることはないだろうか。『名残の友』には、そうした雰囲気がある。西鶴が微笑を浮かべながらこれらの話を書きとめていた様子が想像されるのである。そうやって自分の俳諧人生を捉え直しているのではないのだろうか。だから積極的な批判などにはならず、一歩離れたところから見て、俳諧師とは何なのか、自分が求めていたことは何だったかを確かめているのである。

『西鶴名残の友』は西鶴の、俳諧師としての追憶の書であった。自分の人生、または自分自身を形作った俳諧を思い、既に去って行った俳諧師とこれから俳諧師として進んでいく人々への思いを、得意の軽口に乗せて伝えている。西鶴にとって俳諧とは、最後まで滑稽の文学、笑いの文学だったのである。

（1）多門院門加は生没年未詳であるため、年長者であるかは定かでないが、描かれ方からみて第二に分類しておく。

（2）玖也以外は元禄以降に亡くなった人々である。玖也自身は西鶴より一世代前の人物であるから、第二の分類に属するのだが、宗因門の玖也は西鶴と面識があった可能性もあるし、彼から連想された出羽来訪の俳諧師たちは第三の分類に属するので、第三に入れておく。

（3）暉峻康隆氏『西鶴研究ノート』（中央公論社　昭和28年）

（4）金井寅之助氏「『西鶴名残の友』の版下」（初出『近世文学資料類従西鶴編　19　西鶴名残の友』勉誠社　昭和55年2月、『西鶴考　作品・書誌』八木書店　平成1年3月に再録）

（4）水谷隆之氏「『団袋』の西鶴―団水との両吟半歌仙について―」（『国語と国文学』86巻7号　平成21年7月）（『西鶴と団水の研究』和泉書院　平成25年2月）

（5）片岡良一氏「『置土産』と『名残の友』とに示された晩年の心境」（初出『井原西鶴』至文堂　昭和元年、『片岡良一著作集第一巻』中央公論社　昭和54年8月再録）

第三章　『西鶴名残の友』と八文字屋本

第二章では『西鶴名残の友』各話の分析を行い、その創作方法を確認してきた。それにより、短い文章の中にも、さまざまな工夫がこらされた面白い作品であったことが理解できたであろう。内容はともかく、体裁の悪い遺稿集という一面を持つ本作が、後世どのように読まれていたのか気になるところである。

第三章では、西鶴作品の影響を強く受けた八文字屋本に注目し、『西鶴名残の友』が八文字屋本でどのような扱われ方をしているのかをみていく。

第一節　『忠臣略太平記』と『西鶴名残の友』

『忠臣略太平記』は正徳二年（一七一二）正月に京都江島屋市郎左衛門より刊行された浮世草子である。赤穂浪士事件を扱った本作は、まずその「あまり高く評価出来ぬ作」であるところから、江島其磧作なのかどうかが疑われた（1）。その後、趣向・剽窃・用字・用語等から其磧作の可能性があるとの見解が出され（2）、さらに近年では赤穂浪士ものの先行作品との比較から、『太平記』の故事・内容を巧みに利用した、其磧時代物構想期における習作として再評価されている（3）そのほか、古浄瑠璃との関わりを論じたものも報告されている（4）。本稿は、赤穂浪士事件・『太平記』・古浄瑠璃との関わりなどをひとまず脇に置き、ただ一点、すなわち『忠臣略太平記』における『西鶴名残の友（以下、『名残の友』と略す）』の利用部分に絞って考察し、願わくは先行研究に一言添えたいと思う。

一

『忠臣略太平記』（以下、『略太平記』と略す）の西鶴剽窃部分については、すでに先行研究で言及されており（5）、そのうち『西鶴名残の友』の利用は、巻

一の四「知恵の種蒔田畑の買置キ」での『名残の友』巻四の四、巻三の一「極楽のかごかきは天竺牢人」での『名残の友』巻五の四が指摘されている。しかしながら、そのほか巻四の二、巻五の三にも『名残の友』の利用が確認できるので、重複を厭わず詳細を挙げて再検討してみたい。本文を比較するにあたり、まず『略太平記』、次に『名残の友』本文を挙げることとする。また、『略太平記』の該当部分を解釈しつつ、剽窃部分がどのように取り込まれているかをみていく。以下、『略太平記』の本文は、『八文字屋本全集　第3巻』(汲古書院　平成5年)、『名残の友』の本文は、冨士昭雄氏・麻生磯次氏訳注『対訳西鶴全集16　西鶴俗つれ／＼・西鶴名残の友』(明治書院　昭和52年)を使用する。

◆『忠臣略太平記』巻一の四「知恵の種蒔田畑の買置キ」

垣根の蔦かづら秋霜にいたみ。朝皃あさましく花見し朝とは各別に替りて。松の夕風、綿入着よといはぬばかりの声さはがしく。南隣には下女が力まかせて拍子もなきしころ槌のかしましく。賤が住居を今知る事のおかし。高名を埋て身を野夫と同しうすれば。所の庄屋に笑ひを作り。是も浮世にすめる耳の役とて北隣をきけば養子との詞からかい。後には互の身の恥どもいひさがして。跡はさだまつて盃事になるもおかしき人心と。

＊『西鶴名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」

垣根の蔦かづら秋霜にいたみ、朝皃あさましく、花見し朝とは各別に替りて、松の夕風、綿入着よといはぬばかりの声さはがしく、南どなりには、下女が力にまかせて、拍子もなきしころ槌のかしましく、うき世に住める耳の役に聞ば、北隣には養子との言葉からかい、後には俳言つよき身の恥どもいひさがして、跡は定まつて、盃事になるも、おかしき人心と、

提示した『略太平記』の箇所は、仇討ちを心に秘めつつ百姓に身をやつす大菱由良之助の生活を描く場面である。偽装とはいうものの、家老であった由良之助が零落して「野夫」の住家に混じり、「庄屋」の機嫌さえも取るような侘び住まいをしている。今までは聞くこともなかった庶民の生活を耳にして「おかしき人心」と思うが、こうした表向きの生活とは裏腹に、実際は夜も眠れないという由良之助の緊張感が描写されていくことになる。

『名残の友』の本文をそのまま利用しているが、一部分を変更するだけで、全く別の話に仕立てているのがわかる。不自然さを感じさせずに他者の文章を取り込んでいるところは、評価に値する。ここでの共通項は「侘び住まい」「秋」という設定で、西鶴の侘び住まいを由良之助の侘び住まいに置き換えている。

◆『忠臣略太平記』巻三の一「極楽のかごかきは天竺牢人」前半

京橋より伏見迄の継駕籠にのりゆくに。枚方にて中食したゝめ又是より駕籠替て乗心よくゆくに。そろ／＼眠りきけんなれば。目覚しに手鼓打て山姥をうたへは。跡肩の者息杖を取なをし。休む重荷にかた替さまに。又今日もぶ拍子なる旦那どのをのせて。次第にもちおもりがするといふ此詞耳にかゝりて。それは我等が謡の事か。おそらく下かゝり一流は大事のこらずならひ請て。世におそろしきものはなきに。汝いやしき渡世の身として。何をか聞知ていふぞとちとむつと気にていへば。私は何もぞんぜねども。謡の拍子かたのよき御方をのせました時はかるし。素人のうたいの時はかならず。駕籠かゆるきでまして。かたぼねがたまりませぬと。無用の論をいたす時、さきがたかきたる男のいへるは。跡なる男は伏見の者でござりますが。近キ比此街道へ出まして。我／＼もかやうにあいかたにて心やすふ咄しますが。能の謡はちつとおぼへておりますさふなと。此男は口上からがおいぬきのかごかきと見へたり。とかく跡肩の者心にくゝ。それから慰にうたひたい謡も。はづかしうなりてやめたるは。我心に未熟なるをしつて斟酌すると見へたり。

＊『西鶴名残の友』巻五の四「下帯計の玉の段」

池田海道の秋の気色おもしろく、青木友雪同道して、継駕籠たてならべて行に、長柄の渡しを越て、心よく眠り機嫌なれば、目覚しに手鼓うつて「山姥」をうたへば、跡肩の者、息杖を取なをし、休む重荷にかた替ざまに、「又けふも不拍子なる旦那殿をのせて、次第にもちおもりがする」といふ。此言葉耳にかゝりて、「それは我／＼が諷の事か。おそらく下がゝり一流の大事、残らず習ひ請て、世におそろしきものはなきに、汝いやしき渡世の身として、何をか聞しりていふぞ」。「わたくしは何も存ぜねども、うたひの拍子がたよき御かたをのせました時はかるし。素人のうたひの時は、かならず駕籠がゆるぎ出まして、かたぼねがたまりませぬ」と、無用の論をいたす時、さきがたかきたる男のいへるは、「跡なる男は、すこしうたひの事は覚へましたはづが御座る。

『略太平記』巻三の一の冒頭は、『名残の友』巻五の四と巻四の四の本文を組み合わせたもので、剽窃部分が他にくらべて長文である。そこでまず冒頭前半をみてみる。

呉服商の海士川屋土平は由良之助に依頼されて元藩士の岩百右衛門を捜していた。ある日、駕籠に乗りながら眠気覚ましに謡曲の「山姥」を歌ったところ、駕籠舁きに文句を言われる。謡に詳しい跡肩の男は、もともと身分のある人物だったが、今は零落して駕籠舁きをしているようだと推測される。

利用された『名残の友』巻五の四の駕籠舁きも零落した人物で、千貫目の身代を打嚙子に費やし、その後さる大名の能太夫になっていたが、大名の無理難題に嫌気がさして、ついに駕籠舁きにまで落ちた男であった。つまり「零落」「仮の姿」という内容から引かれた部分であろう（6）。このすぐあとに、『名残の友』

巻四の四を剽窃した部分が続く。

◆『忠臣略太平記』巻三の一「極楽のかごかきは天竺牢人」冒頭後半

くだんの謡知の跡肩のかごかき。茶屋の前に生茂りし大木の榎木にのぼり。枝にかゝりし塵をさがしけるほどに。何かするとたづねければ。是に此程迄鴻の巣をかけしが。此巣の中にありける石は。笙の舌をしめすによしと。古人つたへけるほどに尋ねまするといふ。いよ／＼手がおかれて汝は笙をふくかととへば。むかしはすこしおぼへし事もありと。かすかなる懐より手馴し笙を取出して。穐風楽の調子をふきける。さるほどに人はしれぬもの。こや極楽のかごかきなるべしと感にたへて。相肩の者をとをくへのけて彼男をちかくへまねき。詞もなをしてひそかにいひけるは。

＊『西鶴名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」

其乞食の中よりやせかれて色こじろき男出て、大木の榎木にのぼり、枝にかゝりし塵をさがしけるを、「何かする」とたづねければ、「是に此程まで鴻の巣をかけしが、此巣の中にありける石は、笙の舌をしめすによしと、古人つたへける程に、たづねまする」といふ。「汝は笙をふくか」といへば、「むかしはすこし覚し事も御座候」と、ふところより手なれし笙を取出して、秋風楽の調子をふきける。さるほどに人はしれぬもの、乞食に筋なし。あれは極楽の乞食なるべしと、聞捨ける。

休憩中にとった行動から、駕籠舁きが笙も嗜む風流人だと知った海士川屋は、この駕籠舁きこそ、諸芸の達人だったという岩百右衛門に違いあるまいと考え、密かに本名を聞き出そうとする。ここも前半と同じく「零落」「仮の姿」から選択された部分と思われるが、季節を合わせている点も作者の意向ととってよいのではないだろうか。討ち入りへの準備期間である「秋」を、『名残の友』巻四の四、巻五の四の季節設定「秋」でつなぎ、「零落」した二人の人物（駕籠舁きと乞食）を百右衛門一人に収斂したのである。最後に笙で「秋風楽」を吹くのも季節からきているのであり、そこも上手く利用している。『略太平記』巻三の一の章題「極楽のかごかきは天竺牢人」というのも『名残の友』からきていることは明白である。『名残の友』巻四の四の「極楽の乞食」と巻五の四の「駕籠舁き」を組み合わせ、浪人となった岩百右衛門が「天竺牢人」すなわち流浪人となって姿をくらましたという内容を表す題なのである。

◆『忠臣略太平記』巻四の二「焼印の編笠かづいたり似大臣」

兼好がつくり木を嫌ふ事。ながめたるためなれば無用の言葉とおもひしに。今時の世間見合とくと合点をいたせり。草木つくるは常なり人をつくるほとおかしき

はなし。御機嫌取の商売とてある智恵をないかほして。我より純(にふ)き大臣にまはされ、軽箔あるほど申て馬鹿いんぎんにいふて廻り。指のまたをひろげて口を過けり。宇都の宮弥八は此度師直になり賃金子五両にきはめて敵持の名代になりてあほうつくす事。たとへば若い医者の薬をのみ。下手に月代をそらすがごとく。心もとない成物なれ共是も金が敵の世のならひ

＊『西鶴名残の友』巻一の二「三里違ふた人の心」

兼好が作り木を嫌ふ事、詠めるためなれば、何をか無用の言葉と思ひしに、今時の世間見合、とくと合点をいたせり。草木作るはつねなり、人を作る程おかしきはなし。心あらん目からは、是恥しき事なれば、面／＼に嗜なむべし。

＊『西鶴名残の友』巻五の五「年わすれの糸鬢」

ひとり／＼髭まで剃せて、きさんじに産毛も残らず、さりとてはきみよし。「是をおもふに下手にあたま剃すと、若ひ医者の薬を呑む程、世に心がゝりなる物はなし」といへば

『略太平記』巻四の二「焼印の編笠かづいたり似大臣」の剽窃部分は、分量的に少ないものの、二カ所の『名残の友』利用を指摘できる。まず「人をつくるほどおかしきはなし」という内容から『名残の友』巻三の一の冒頭を用いている。

高師直に変装した太鼓持ちの弥八が似大臣となって廓で遊ぶ場面である。由良之助は主君の敵である高師直を討とうと準備を進めていた。それに対し、仇討ちを危惧する師直方は計略をめぐらす。師直がひそかに廓遊びをするという噂を流し、この時を狙って由良之助たちが踏み込んできたところを捕らえようというのである。師直の家臣河津左衛門は、背格好が似ている弥八を師直に仕立て、由良之助一味を待ち構えていた。罠と見抜いた由良之助は早々に引き上げて事なきを得る。

太鼓持ちである弥八は、本来の自分を隠し、馬鹿なふりをして大臣の機嫌をとるのが仕事である。つまり「人をつくる」のがもともと商売なのである。それが今回は師直に扮して遊興することになった。「人をつくる」の意味を、弥八を師直に仕立てるという内容へとつなげ、「似大臣」の廓遊びとしたのである。一歩間違えば殺される可能性がある弥八は、「若い医者の薬をのみ。下手に月代をそらすがごとく」不安で仕方が無い。しかし五両という金に目がくらんでこの役を引き受けたのであった。「気がかりで不安な事」という内容から、『名残の友』巻五の五の文言を利用している。

◆『忠臣略太平記』巻五の三「菱川がそらとぼけは情の絵そら言」

身請いやがる女郎と鰹節喰ぬ猫は。我身しらずといふものと。あげやのていしゆ

がつぶやくも断ぞかし。画入太夫にむかひて申けるは。尤其方幼少より此里につとめて。外をしられぬゆへに御大名につかゆる事。おそろしきやうにおもはるべけれど。それは大キな思入ちがいをの／＼の風俗を好んで。召抱へらるゝ上は。馴染のかゝるにしたがひ御寵愛こそふかくなれ。何しに悪敷事のあるべき。

＊『西鶴名残の友』巻五の一「宗祇の旅蚊屋」

寺にかわれる猫に鰹節見すれば、身をちゞめてにげありき、諷うたひの軒の鶯は、口笛の音を出しぬ。されば和歌に師匠なしとはいへど、連俳も其巧者に付そひたる人は、心ざしなくても自然と道を覚へり。

『略太平記』巻五の三の傍線部は『名残の友』巻五の一を踏まえていると考えるが、剽窃といえるほどではない。由良之助と深い仲であった遊女吉野は、師直に請け出されることを防ぐため、自分の姿を醜悪に描いてほしいと絵師画入に頼む。つまり王昭君のパロディである（7）。ここは、遊女は身請けを喜ぶものだが、身請けを嫌がる吉野は鰹節を食わない猫と同様だと揚屋の亭主がいう場面となっている。

この部分が「猫に鰹節」という諺からくることは言うまでもない。猫の近くに鰹節を置くようなもので、油断のならないことだという譬えである。西鶴はこれを逆に用いて、寺に飼われる猫は鰹節を嫌がり、謡歌いの家の鶯は口笛を習い覚えると書く。つまり環境に応じて動物も人も変わるもの、または身近なものに影響を受けやすいのだというのである。『名残の友』巻五の一では、さらにそこから反転し、身近なものに影響を受けやすいとはいっても、有名歌人や俳諧師と一晩同じ部屋に泊まったからといって、すぐに和歌や俳諧が身につくものではないという皮肉で話が締めくくられる。諺を逆転した発想の方を『略太平記』は利用したわけで、「身請いやがる女郎と鰹節喰ぬ猫は我身しらずといふもの」という文言は、諺から『名残の友』の逆転発想を経由して『略太平記』に取り入れられたと考える。

ちなみに、『傾城禁短気』（宝永八年四月　作者は推定江島其磧）巻六の二「女郎買大善根の施主の企　付リ　虵も太夫さまに間夫の気ざし」に、「猫に鰹節」をそのまま諺として利用している例がある。身請けした太夫の下屋敷へご機嫌伺いに幇間達が度々やってくるのだが、その中に宇内という美男がおり、女ばかりの下屋敷へ宇内が来るのは「猫に鰹節」で不義のもととなるのではないかと疑う場面である。ここでは諺本来の意味で用いているわけで、『略太平記』の方は『名残の友』と同じく諺の逆転発想を採用していることが確認できよう。

以上、『略太平記』における『名残の友』利用箇所を、追加したものを含めて提示してみた。これらをまとめると、次のようになる。

『忠臣略太平記』巻一の四　↑　『西鶴名残の友』巻四の四「侘び住まい」
『忠臣略太平記』巻三の一　↑　『西鶴名残の友』巻五の四「駕籠舁き」
巻四の四「笙を吹く乞食」
『忠臣略太平記』巻四の二　↑　『西鶴名残の友』巻一の二「兼好が作り木」
巻五の五「下手に頭剃らす」
『忠臣略太平記』巻五の三　↑　『西鶴名残の友』巻五の一「猫に鰹節」

これとは別に、引用元を上段に、引用先を下段にして表を作成した。

（表１）

西鶴名残の友	忠臣略太平記
巻一の二　「兼好が作り木」	巻四の二
巻四の四　「侘び住まい」	巻一の四
巻四の四　「笙を吹く乞食」	巻三の一　冒頭後半
巻五の一　「猫に鰹節」	巻五の三
巻五の四　「駕籠舁き」	巻三の一　冒頭前半
巻五の五　「下手に頭剃らす」	巻四の二

『略太平記』の作者が『名残の友』を読んでいたことは確かであろう。これまで言われていた巻四、巻五のみならず、巻一も利用するのであるから、『略太平記』の作者は、『名残の友』全巻を所有していたと思われる。『名残の友』の利用部分を確認したわけだが、次に問題になるのは、都の錦作『元禄曽我物語』の影響についてであろう。

二

『元禄曽我物語』巻三の三で『名残の友』巻四の四と巻五の四を利用していることはすでに長谷川氏が次のように指摘している（8）。

彼（都の錦）もやはり浮世草子執筆に辺り西鶴を読んでゐるのであつて、剽窃箇所を気付いただけしるすと、一の二（俗つれ／／一の一）、二の一（武道伝来五の四）、三の三（俗つれ／／四の一、名残の友四の四、同五の四）、五の一（武家義理序、武道伝来七の二）、五の二（武家義理四の一）等がある。

この指摘を踏まえて宮本氏は、『略太平記』において、『名残の友』の二章をまとめて利用したのは、『元禄曽我物語』を介しているためと考えられる」とし、以下のように推察する（9）。

巻四―四と巻五―四には、身分のあった人物が零落した点以外に、特に共通する点は無い。一方、『元禄曽我物語』は、敵討ちの物語で赤穂浪士の事件と重なる点があることと、巻三―三では、身をやつすのに「太平記読になりて塩谷判官竜馬進奏の巻一冊懐中すれば」とあり、章全体に赤穂浪士の存在が見え隠れする。その設定の共通項から、『略太平記』が『元禄曽我物語』を利用し、その元ネタである『名残の友』の文章自体を利用したものと考えられる。

都の錦が、赤穂浪士の事件に多大な興味を持ち取材していたことは先学に指摘がある。其磧が赤穂浪士ものの執筆を考えた時に都の錦の名前が浮かび、作品を読み直し勉強したために、ここでその作品から摂取したということも考えられよう。

これらの指摘をうけ、以下『元禄曽我物語』の本文を再検討したい。便宜上、本文をA～Eの五つに分割し、それぞれ『名残の友』の本文を添えておく（傍線部は共通部分）。『元禄曽我物語』の本文は、叢書江戸文庫6『都の錦集』（中嶋隆氏校訂　国書刊行会　平成1年）を使用する。

◆『元禄曽我物語』巻三の三「一節に昔を忍ぶたび姿」

A　清貧のたのしび、亦此外もあらじとうらやみながら行に、竹の村々茂りたる岸根をみれば、ちいさき棟をならべ莚戸に煙立のぼり、乞食の住る所と見へけるが、海道よりをのが住家へのほそ道に、少し溝川の流れあり。それに木竹をひろひ集て五尺にたらぬ橋をかけ、けふ渡り初とて、欠徳利に酒を入て祝儀といふもおかしく、しばし立どまりて様子をみるに、四十余りの乞食茄子二つ手にもち、一つをばかぶりながら「よい肴がある、先は初物七十五日が所じや」といへば、

（―中略―）

＊『名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」

なよ竹のむら／／茂りたる岸根を見れば、ちいさき棟をならべ、莚戸に煙立のぼり、乞食のすめる所と見えけるが、海道よりおのが住家への細道に、すこしの溝川流しに、木竹をひろひ集めて、五尺にたらぬ橋をかけ、けふ渡り初とて、欠徳利に酒を入て、祝義といふもおかしく、しばし立どまりて様子を見るに、

B　あらけなく怒ながら竹杖にすがりて此橋をわたりそめければ、跡につゞいていろ／／の片輪者ども渡りて「是は目出たし」と声をそろへてよろこびける。時に渡り初したる乞食、あまたのものどもをちかふよびて「よろづを我にあやかる

べし。十二の年より乞食して、折々寒ひ目には逢へどもひだるい目にはあはず。子供八人生のまゝにそだてゝ、夫婦ながら息才(まめ)に、今八十八まで世にすみて、何か此上の栄花をもひ残す事なし」と、心のたのしびを申せば、いづれもあやかり物とて、竹の箸切てもらひける。

＊『名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」

白髪あたまの乞食、竹杖を腰にさして、此橋をわたりそめければ、其あとにつゞきて色／＼のかたわども渡りて、「是はめでたし」と、声をそろへてよろこびける。時に彼老人あまたのものどもをちかふよびて、「よろづを我にあやかるべし。十三の年より乞食して、一日もひだるいめにあはず。子ども十二人生のまゝそだてゝ、夫婦ながらそくさいにて、今八十八迄世に住て、何か此上の栄花、思ひ残す事なし」と、心のたのしみを申せば、いづれもあやかり物とて、竹の箸切てもらいける。

C　それ／＼の身祝ひおかしやと是を笑ふに、其乞食の中より、痩形にすらりとして、顔だち面長に鼻筋通て色小白き男、かたはらなる大木の松が枝にのぼり、枝にかゝりし塵を探しけるを「何にかする」と問ければ「是に此程まで鴻の巣をかけしが、此巣の中に有ける石は、笙をふく時舌をしめすによしと、楽府にみへける程にたづねまする」といふ。「さては汝は笙を吹か」といへば「むかしは少(ちと)覚し事も御座ります」と、ふところより手馴し笙を取出して、太平楽の調子を吹ける。まことに人はしれぬもの、乞食に筋なしとはいふなれど、三人大に感じて一千剃の床に腰を掛、

＊『名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」

「それ／＼の身祝ひおかしや」と、是を笑ふに、其乞食の中よりやせかれて色こじろき男出て、大木の榎木にのぼり、枝にかゝりし塵をさがしけるを、「何かする」とたづねければ、「是に此程まで鴻の巣をかけしが、此巣の中にありける石は、笙の舌をしめすによしと、古人つたへける程に、たづねまする」といふ。「汝は笙をふくか」といへば、「むかしはすこし覚し事も御座候」と、ふところより手なれし笙を取出して、秋風楽の調子をふきける。さるほどに人はしれぬもの、乞食に筋なし。

D　月額(さかやき)壱つと望にさすが日所作の錬磨、きさんじに産毛も残らず、さりとては気味よし。「是をおもふに下手にあたま剃すと、出家に金借しする程、世に心がゝりなるものはあらじ」と

＊『西鶴名残の友』巻五の五「年わすれの糸鬢」

ひとり／＼髭まで剃せて、きさんじに産毛も残らず、さりとてはきみよし。「是をおもふに下手にあたま剃すと、若ひ医者の薬を呑む程、世に心がゝりなる物はなし」といへば

E　むだ口扣内に、継駕籠立ならべて、心よく眠り機嫌の男、目覚しに手鼓うつて山姥をうたへば、跡肩の者息杖を取なをし、休む重荷に肩替さまに「またけふも不拍子なる旦那殿をのせて、次第に持重りがする」といふ。此言葉耳にかゝりて「それは我々が謡の事か。おそらく観世一流の秘曲残らず習ひ請て、四座の外には又おそろしきものはなきに、汝いやしき渡世の身として、何をか聞しりていふぞ」「いや私は何もぞんぜねども、うたひの拍子方よき御かたをのせました時はかるし。素人のうたひの時は、かならず駕籠がゆるぎ出ましてかた骨がたまりませぬ」と、無用の論をいたす時、さき肩かきたる男のいへるは「跡なる男はすこしうたひの事は覚えました筈が御座る。うちはやしに千貫目程の身代をたゝき揚まして、今はかうした商売いたしをります」と、一しぼりに成て息杖あら／＼しく掻て行。げに世の中を渡りくらべて今ぞしる。山の奥にもよい筋の人ある事よ。されば旅に出ては、おかしき事、いやな事、たのしび悲行通ひて、見る事聞事にをもふ心なるべし。

＊『西鶴名残の友』巻五の四「下帯計の玉の段」

継駕籠たてならべて行に、長柄の渡しを越て、心よく眠り機嫌なれば、目覚しに手鼓うつて「山姥」をうたへば、跡肩の者、息杖を取なをし、休む重荷にかた替ざまに、「又けふも不拍子なる旦那殿をのせて、次第にもちおもりがする」といふ。此言葉耳にかゝりて、「それは我／＼が諷の事か。おそらく下がゝり一流の大事、残らず習ひ請て、世におそろしきものはなきに、汝いやしき渡世の身として、何をか聞しりていふぞ」。「わたくしは何も存ぜねども、うたひの拍子がたよき御かたをのせました時はかるし。素人のうたひの時は、かならず駕籠がゆるぎ出まして、かたぼねがたまりませぬ」と、無用の論をいたす時、さきがたかきたる男のいへるは、「跡なる男は、すこしうたひの事は覚へましたはづが御座る。うちはやしに千貫目程の身体をなくなしまして、さるから大名の能太夫になつて居ましたが、御意をそむきまして、お国をにげてまいつて、今は我等と棒組いたします」と、語る。

『元禄曽我物語』は、その名が示す通り敵討ちの話である。父宇兵衛を殺された岩井兵助は、敵である所堀源右衛門をおびき出そうと高札を立てた。所堀は返り討ちを企み、弟子の中で腕の立つ松井初右衛門、鳥居砂右衛門の二人を連れ、岩井兵助が待つ美濃国へと向かった。

提示したA～Eの本文は、所堀、松井、鳥居の三人が美濃国へ赴くまでの描写

で、巻三の三「一節に昔を忍ぶたび姿」の後半部分にあたる。

A・Bは先学の指摘通り、『名残の友』巻四の四からの剽窃だが、『略太平記』では利用されなかった部分である。Cは一で挙げたように、『略太平記』巻三の一にも利用された『名残の友』巻四の四の最終部分。Eも先学の指摘通り、『名残の友』巻五の四からの剽窃部分で、『略太平記』巻三の一に使われている。

Dは、これまで指摘されていなかった箇所である。『名残の友』巻五の五からの剽窃。そしてこれは、『略太平記』の巻四の二でやはり使われている。

（表２）

西鶴名残の友	元禄曽我物語	忠臣略太平記
巻四の四「渡り初め」	巻三の三　A・B	なし
巻四の四「笙を吹く乞食」	巻三の三　C	巻三の一　冒頭後半
巻五の四「駕籠舁き」	巻三の三　E	巻三の一　冒頭前半
巻五の五「下手に頭剃らす」	巻三の三　D	巻四の二

都の錦は『元禄曽我物語』巻三の三で『名残の友』巻四の四「渡り初め」「笙を吹く乞食」・巻五の四「駕籠舁き」・巻五の五「下手に頭剃らす」の三話を使っている。そして『略太平記』巻三の一では、そのうち巻四の四「笙を吹く乞食」と巻五の四「駕籠舁き」を採用し、『略太平記』巻四の二では、『名残の友』巻五の五「下手に頭剃らす」の一文を採用したということになる。

この表２と一で示した表１を合わせて表示してみる。

（表１と表２の結果）

西鶴名残の友	元禄曽我物語	忠臣略太平記
巻一の二　「兼好が作り木」	なし	巻四の二
巻四の四　「侘び住まい」	なし	巻一の四
巻四の四　「渡り初め」	巻三の三　A・B	なし
巻四の四　「笙を吹く乞食」	巻三の三　C	巻三の一　冒頭後半
巻五の一　「猫に鰹節」	なし	巻五の三
巻五の四　「駕籠舁き」	巻三の三　E	巻五の三

この表から看取できることはなにか。すなわち、『略太平記』の作者は『名残の友』の五話から本文を利用した。そのうち巻四の四・巻五の四・巻五の五の一部は、宮本氏がいうように（10）、都の錦の『元禄曽我物語』を介して活用の糸口を見いだし、その他の部分は作者自身が『名残の友』を読み返すことによって利用したということである。そもそも何故「介して」という微妙な言葉になるかというと、まず、『略太平記』以前の八文字屋本で、『名残の友』巻四の四・巻五の四を利用したものがないこと、さらに本文を利用する上で、「零落」という共通項をもとに巻四の四・巻五の四を結びつける方法が酷似しているということがあげられ、この二点から、やはり『元禄曽我物語』を参考にした可能性が高いと思うからである。しかしながら、

一、『元禄曽我物語』巻三の三は五月の設定であったため、『名残の友』巻四の四「笙を吹く乞食」の「秋風楽」を「太平楽」に変更しているが、『略太平記』では季節設定を『名残の友』と同じ「秋」でまとめているので、元の「秋風楽」に戻している。

二、『元禄曽我物語』では使われなかった『名残の友』巻四の四「侘び住まい」の本文も、『略太平記』では利用している。

三、『名残の友』巻五の一「猫に鰹節」と巻五の五「下手に頭剃らす」は、『略太平記』より前に刊行されたとされる『野傾旅葛籠』ですでに利用している（第三章第二節の表を参照）。

四、『元禄曽我物語』で採用されなかった『名残の友』巻一の二「兼好が作り木」を『略太平記』では利用している。

この四つの点を勘案すると、『忠臣略太平記』は都の錦の『元禄曽我物語』を介して、（または参考にして）『西鶴名残の友』巻四の四・巻五の四の二章をまとめて利用したが、その他の部分は作者自身によって『西鶴名残の友』から新たに利用されたと考えられる。

以上、『忠臣略太平記』における『西鶴名残の友』利用の詳細をまとめた。先行研究で指摘されていなかった部分を補い、『野傾旅葛籠』の『名残の友』利用部分と重複するところがあることを言い添えたが、結論的には先行研究の説を補強する結果となった。『忠臣略太平記』の作者を江島其磧であると決定づけるような結果はでなかったが、八文字屋本全体の『名残の友』利用を調査すれば、何がしかの糸口が見つかるかもしれない。以後は八文字屋本全体における『名残の友』利用を追ってみるつもりである。

（1）　長谷川強氏「『曲輪太平記』考」（『かがみ』23・24号　昭和57年3月、補訂の上、『浮世草子新考』汲古書院　平成3年に再録）。「本書（『曲輪

太平記』巻末に名の出る『忠臣略太平記』は、実は江島其磧が八文字屋と確執に及び、息子の名で開かせた江島屋から正徳二年（同年秋以前）に刊行した浮世草子である。其磧作とすると上出来といえぬものである。」とある。

（2）篠原進氏「抗争期の其磧」（『近世文芸』34号　56年5月）

（3）宮本祐規子氏「『忠臣略太平記』試論」（『日本文学』55―4　平成18年4月）（『時代物浮世草子論　江島其磧とその周縁』笠間書院　平成28年2月所収）

（4）青木亜里砂氏「古浄瑠璃及び浮世草子における説話類型の変容―継母の描写に注目して―」（『演劇映像』56　平成27年3月）

（5）長谷川強氏『浮世草子の研究』（桜楓社、昭和44年）および注3論文。

（6）「零落」が共通項である点は、すでに注3の宮本氏論文に指摘がある。

（7）巻五における王昭君の故事の利用については、先学の指摘するところである。注1・2・3参照。

（8）注5に同じ。

（9）注3に同じ。氏は『浮世草子事典』（笠間書院　平成29年）においても同様の説を載せている。

（10）注3に同じ。

第二節　八文字屋本における『西鶴名残の友』の受容

第一節で『忠臣略太平記』における『名残の友』利用の状況をみてきたが、八文字屋本の各書では、どれほど利用されているのであろうか。まずその単純な疑問を解き明かすべく、八文字屋本全集にある各作品を調査することにした。『名残の友』を文、筋ともに効果的に利用している作品としては『浮世親仁形気』がある。この『浮世親仁形気』に至るまでを一区切りとして、『名残の友』の利用状況を確認していくこととする。

一

江島其磧による西鶴作品の利用は、多くの先行研究で既に報告されているが（1）、『名残の友』に限って僅かながら追加できた部分がある。次の表は先行研究と今回追加した部分をまとめたものである。

八文字屋本における『西鶴名残の友』利用状況一覧表

八文字屋本	刊年	書肆	作者	巻章段	名残の友巻数1	名残の友巻数2	指摘者
風流曲三味線	宝永三年七月	八文字屋八左衛門	江島其磧	巻一の一	名残の友巻五の六		鈴木敏也氏①
野白内証鑑	宝永七年八月か	八文字屋八左衛門	江島其磧か	巻三の十九番	名残の友巻二の五		長谷川強氏②
寛闊役者片気	（宝永七年十一月） 正徳元年十一月後印か	江島屋市郎左衛門	江島其磧か	上の巻	名残の友巻二の五		長谷川強氏③
				上の巻	名残の友巻四の一		鈴木敏也氏①
				下の巻	名残の友巻五の六		
				下の巻	名残の友巻五の二		大木
野傾旅葛籠	宝永七年 （寛闊役者片気よりあと）	江嶋屋市郎左衛門	江島其磧	巻一の三	名残の友巻二の二		大木
				巻三の二	名残の友巻五の一	名残の友巻二の一	
				巻五の三	名残の友巻五の五		
忠臣略太平記	正徳二年秋以前か	江嶋屋市郎左衛門	江島其磧か	巻一の四	名残の友巻四の四		宮本祐規子氏④
				巻三の一	名残の友巻五の四	名残の友巻四の四	宮本祐規子氏④
				巻四の二	名残の友巻一の二	名残の友巻五の五	大木
				巻五の三	名残の友巻五の一		大木
商人軍配団	正徳二年冬か	江嶋屋市郎左衛門	江島其磧か	巻五の三	名残の友巻五の六		大木
通俗諸分床軍談	正徳三年中か	江嶋市郎左衛門	江島其磧か	巻三の一	名残の友巻四の四		長谷川強氏⑤
京略ひながた	正徳四年九月	中嶋新板	未詳	上の四	名残の友巻一の三		大木
丹波太郎物語	正徳五年春（正月） （序）	ゑじまや市郎左衛門	江島其磧	巻二の四	名残の友巻二の五		暉峻康隆氏⑥
				巻三の一	(名残の友巻四の三)		大木
				巻三の七	名残の友巻五の五		暉峻康隆氏⑥
世間子息気質	正徳五年冬		江島其磧	巻二の二	名残の友巻五の六		篠原進氏⑦
国姓爺明朝太平記	享保二年五月洛陽書林	江島屋と谷村清兵衛	江島其磧	巻三の三	名残の友巻五の五		大木
世間娘気質	享保二年中秋吉旦	谷村清兵衛・江嶋屋	江島其磧	巻一の三	名残の友巻三の二		佐伯孝弘氏⑧
浮世親仁形気	享保五年正月	八文字屋八左衛門・ ゑじまや市良左衛門	江島其磧	巻二の一	名残の友巻一の三		滝田貞治氏⑨
				巻二の三	名残の友巻三の二		佐伯孝弘氏⑩
				巻三の二前半	名残の友巻三の三		滝田貞治氏⑨
				巻三の二後半	名残の友巻三の三		安部亮一氏⑪
				巻三の三	名残の友巻三の四		滝田貞治氏⑨

一覧表にある各論考は次の通り。
①鈴木敏也氏　『西鶴の研究』大正9年2月　天佑社352頁
②長谷川強氏　『浮世草子の研究』昭和44年3月　桜楓社197～198頁

③長谷川強氏　『浮世草子の研究』昭和44年3月　桜楓社331頁
④宮本祐規子氏　「『忠臣略太平記』試論」（『日本文学』55―4　平成18年4月）（『時代物浮世草子論　江島其磧とその周縁』笠間書院　平成28年2月所収）
⑤長谷川強氏　『浮世草子の研究』昭和44年3月　桜楓社339頁
⑥暉峻康隆氏　「西鶴と後続文学」（『古典研究』六巻五号　昭和一六年）（『西鶴研究ノート』（中央公論社　昭和二八年所収）81頁
⑦篠原進氏　「『世間子息気質』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』15号　昭和54年3月）、「『浮世親仁形気』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』19号　昭和58年3月）
⑧佐伯孝弘氏　「其磧気質物の方法―西鶴剽窃の意図―」（『日本文学』38号8号（平成1年8月）（『江島其磧と気質物』若草書房　平成16年7月所収）
⑨滝田貞治氏　『西鶴の書誌学的研究』（野田書房　昭和16年）
⑩佐伯孝弘氏　「『浮世親仁形気』の現実感」（『清泉女子大学紀要』44号　平成8年12月）（『江島其磧と気質物』若草書房　平成16年7月所収）
⑪安部亮一氏　「江島其磧の気質物」（『近世文学』2巻5号　昭和11年10月）

これら先学の指摘を含め、それぞれの利用箇所を八文字屋本と『名残の友』の本文をあげつつ確認していきたい。まず八文字屋本の書名を囲み線で示して本文をあげ、その後に『名残の友』の該当箇所を示す。表現が同じ部分には傍線を付し、本文提示の後に考察を加えた。八文字屋本の本文は『八文字屋本全集』（汲古書院）、『西鶴名残の友』の本文は『対訳西鶴全集』（明治書院）を使用した。

二

風流曲三味線

○巻一の一「女道衆道并の岡の隠家　南風に廻りのよい風車の客衆」

妙心寺を過て。兼好の旧跡ならびの岡山のふもとに。筧音なして一つ屋の軒まばらに。見越の松杉枝をふらせ。びやくしん龍につくり。つゝじの帆かけ舟。桜山吹のおのれと咲し外は。皆兼好のきらはれし庭木。所に住ながらつれ／＼草さへしらぬかと。あさましく見入レれば。

＊『西鶴名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」

津の国の野田といふ里に、藤の咲比、かならず弥生のほとゝぎすの来りて鳴事有。「是をきゝにこよ」といへる楽坊主に約束して、俳友五、七

人、其日の昼まへより草庵にたづねしに、見越の松・杉さま／＼に枝ふらせ、びやくしん竜に作り、つゝじの帆かけ舟、こでまり・山吹のおのれと咲し外は、皆兼好が嫌ひたる庭木、へうたんの手水ひしやくさし、釣瓶のふるきに摺鉢きせたる燈籠、いづれを見ても子細の過て、気のつまる物好なり。

大尽とその一行が、兼好ゆかりの御室双ヶ岡で老翁と老女から色道の話を聞くという内容である。老翁は衆道を褒め、老女は女道を勧めるわけだが、彼らの住まいを描写する際に『名残の友』巻五の六の本文を利用している。『名残の友』巻五の六は、『徒然草』第十段「家居のつき／＼しく」にある「おほくの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目もくるしく、いとわびし。（本文は日本古典文学大系（岩波書店）を使用）」を踏まえて、摂津野田に住む庵主の作りすぎた庭木を批判する。『曲三味線』では所を双ヶ岡に変え、兼好法師ゆかりの場所に住みながら『徒然草』を知らないと批判しつつ家を覗き見るという筋にしている。『曲三味線』で「こでまり」を「桜」と変更したのは、大尽が御室の花見に行く設定だったからである。

この部分で注意すべきは、其磧が『名残の友』を利用しながらも、一旦『徒然草』に立ち戻って、「双ヶ岡」に設定しなおしていることであろう。兼好法師ゆかりの場所でなければ作り木を批判する必要もなく、その一軒家を覗き見ることもなかった。『曲三味線』の筋は、『名残の友』にはない「双ヶ岡」を必須条件としているのである。

其磧の創作手順を考えるとき、先行作品の利用箇所（剽窃部分）が先に頭にあって筋書きを作るのか、筋書きが先にあって利用箇所を決めているのか疑問になるのだが、その答えはまだ出ていない。だが気にとめておく必要があろう。また、『曲三味線』巻一の一冒頭について付け加えておくことがある。冒頭は次のような文である。

むかしより花紅葉月雪をながめて。是たのしみともて興ずる事。おそらく虚かと存ずる。智恵あり顔に髭なでゝ、朝から晩迄なんとして、ついには詠あきて首のほねをいため。興つきてあくびせらるゝを思へば。ひつきやう外聞ばかりの楽しみにして。真実おもしろきといふにはあらず。

この冒頭文は、宗因賛西鶴画の「花見西行偃息図」（柿衞文庫蔵）を髣髴とさせる。「かくれもなき法師すがたと見奉りて　ながむとて花にもいたし首の骨　梅翁」の図である。この句は宗因の代表句の一つであり、西行法師の歌を踏まえていることは言うまでもない。西鶴はこの句に対し、横臥する法師が頬杖をついて桜を眺める図を描いている。笑みを浮かべながら桜を眺める様子や口髭といった描写が印象的な図だが、『曲三味線』の冒頭はこの図を念頭に置きながら書き出されたものではないだろうか。勿論この図が複数存在したとも思われないので、

其磧はいくつか印象に残る作品を記録しておき、創作に入ったのではないか。いわば、西鶴の未刊行作品である『筆蔵』のような覚え書きがあったと想定される。

また、『曲三味線』巻四の一の冒頭に「年々花は替らず。歳々人同じ姿にあらずといへり」とある部分にも言及しておきたい。この典拠は『和漢朗詠集』や『古文真宝前集』に載る有名な宋之問の詩であるから、特に『名残の友』から利用したとは断定できない。だが、『名残の友』巻二の一「昔たづねて小皿」の冒頭にもこの詩の利用されていることは注意しておくべきだろう。『和漢朗詠集』の本文は「年々歳々花相似、歳々年々人不同」である。『名残の友』は「年／／花は同じ、歳／／人は同じからず」と書き下した文になっていて、『曲三味線』とは「替らず」「姿」だけが異なる。おそらく直接『和漢朗詠集』から引用したのではなく、何か媒介する節用集のようなものがあったのだろうが、書き下しが似ていることから、『名残の友』を参照した可能性もあるとしておく。

野白内証鑑

○巻三の十九番「化女の卦　并ニ　よめ入の乗物はあたらしいを賞翫
付リ　むこのうれしさは見へすくびいどろ」

見すれば若衆の似合ざるたしなみ物。笑ひ草となつて明日から女形つとめる舞台のさまたげ。殊には。若衆をたてゝの商売見られて藁たかれてはとおし出して男女の差別しれる。とつて置の物も見せられず。見せねばむたいにむりわざをしさふなり。一生の大事爰なりと下帯しめて勧念（ママ）する時。表の戸をきびしくたゝいて戸をあくると中間はいつて。万石俵屋の俵助殿とはこなたでござるか。宵の火事のどやめきに。此お家へ祝言せらるゝ乗物と。かきちがへて嫁子が替つてござる。それゆへとをいからわざ／／取かへにまいつたと。のり物を台所へかきこませば。

＊『西鶴名残の友』巻二の五「和七賢の遊興」
此親仁どもむまのり違へ、馬次第に行程に、里の夜道もよくしりて、めい／／の宿に帰れば、待かねたる妻や子ども、松火ともして、「おそひ帰り」と皃見れば、是の親仁にあらず。いかなる事とおどろき、いづれもせんさくする所へ、隣の村より、「親仁が替りました」と替にきて済ける。

『野白内証鑑』巻三の十九における『名残の友』の利用方法については、文章をそのまま使うのではなく笑話の筋を利用している点が注目される（2）。『内証鑑』の内容は以下の通りである。

客に女姿のまま参上するよう要請された荻野沢之丞が乗物で出かけ、途中火事の騒ぎに巻き込まれる。なんとか先方へ到着するとすぐに祝言が始まり、合

点がいかぬまま床で婿殿と対面する。慌てて自分が若衆であることを告白するが婿は納得しない。証拠をみせよと迫る婿に抗っているとき、火事の騒ぎで取り違えたと嫁の乗った駕籠が到着する。

この話の面白いところは、よその嫁に傷がつかないよう早く部屋から連れ出さねばと人々が慌てているなかで、自分の息子のことだからもう遅いと父親が言う場面である。額に皺を寄せて自分の息子の手の早さを語るのだが、読者は相手が若衆の荻野だと分かっているので、可笑しい。案の定、荻野を連れて婿が出てきて、若衆には手味噌はつけないといいつつ嫁と取り替えたという。

『名残の友』の笑話は、酒に酔った親仁二人が、乗る馬を間違えて互いの自宅へ帰ってしまい、家族が親仁を取り替えに来たというものである。第二章で述べた通り諺「老馬道を知る」の諧謔化なのだが、『内証鑑』はさらに工夫している。取り違えたのが嫁だったというだけでなく、片方を女装した若衆にしたところが上手いところである。床での攻防と外の慌てぶりが読者の笑いを誘う。単に本文を引用するのではなく、笑いの部分を深化させたのは『内証鑑』の作者の功績であろう。

寛濶役者片気（坂田藤十郎追悼話）

『寛濶役者片気』は三箇所で『名残の友』を利用し、引用する本文も長い。利用箇所については、鈴木敏也氏、長谷川強氏が指摘されている。本作は坂田藤十郎を追悼する内容であり、亡くなった藤十郎を恋い慕う女性たちが描かれた作品である。具体的な利用箇所を確認していく。

○上之巻の三「女郎のしなだれかゝる藤屋伊左衛門が身振」

（夜歩きをする息子が親父を騙す話）

大文字屋源吉と生野や甚六は嶋原狂いであった。甚六の相手女郎は藤十郎に打ち込み、文をかわしていた。形見の一重紙子を着て藤屋伊左衛門に扮した藤十郎の姿で女郎に会えば床入りも各別であろうという。四つ門うつとて名残惜しくも帰宅する。源吉と甚六は泥酔。親父に見つからぬよう母の気遣いもあって無事一寝入りした。親父から源吉を起こすよう言われて小者が起こしに行くと、寝ていたのは甚六であった。

小者ゆきて申／＼源吉様旦那さまのおしかりなされますおひなりませと顔を見てきもをつぶし台所へかけいで、おふくろにむかいて、申源吉様の寝所には此町の生野屋甚六様が寝てござりますと申せば、是はがてんのゆかぬ事とおやぢもろともに母もゆきて見らるゝに、小者がいふごとく源吉はいずして甚六一重紙子のや

ぶれたるを着ながらよねんもなく寝ていれば、二親肝をつぶし、是は甚六かねかなつかいて親甚入に勘当せられ紙子一重になりてゆき所のないを、悴源吉がねんごろのたのもしづくにてかくまへおきしにまがいなし。甚入こらしめのために追出されしを断もせず、此方にかくしおくは、性のわるいものゝ肩をもつやうな物なれば、甚入かたへ我等ぢきにゆきて、此段をことはるべし。元来子共の悪性は、親々の不断あまきゆへなれば、其子がとがにはあらず。皆おやのそだてから也。身どもが悴源吉などは、平生きびしく、行義に仕立るゆへを以て、けがにも悪所へゆかふかともせぬと。自慢いわるゝ舌もひきいれられぬ所へ、酒気でたわいもなふ寝て居る源吉をかごにのせ、生野屋甚入ついて来り。是々むすこが替りましたと紙子着ている甚六と替に来て、互に子共を取かへてかへりぬ。

＊『西鶴名残の友』巻二の五「和七賢の遊興」
時に片山里の親仁二人―中略―馬に樽どもおろして、「酒ゆへふしぎの出合なり」と前後覚ぬ大酒。和七賢もよい機嫌にて、「さらば／／」と別れける。此親仁どもむまのり違へ、馬次第に行程に、里の夜道もよくしりて、めい／／の宿に帰れば、待かねたる妻や子ども、松火ともして、「おそひ帰り」と皃見れば、是の親仁にあらず。いかなる事とおどろき、いづれもせんさくする所へ、隣の村より、「親仁が替りました」と替にきて済ける。

『寛濶役者片気』で最初に利用された『名残の友』の箇所は、『野白内証鑑』と同じ巻二の五の笑話である。ここでも筋を改作しているが、息子どもが泥酔している点は『名残の友』に近い。笑いを誘う部分は『内証鑑』と同様に、父親の台詞にある。藤十郎の真似をして紙子を着ていた生野甚六を見て、源吉の親仁は次のように言う。

勘当せられ紙子一重になりてゆき所のないを、悴源吉がねんごろのたのもしづくにてかくまへおきしにまがいなし。

源吉の父親は、勘当された甚六を息子が匿ったのだと解釈し、我が息子を信じて疑わない。子が悪いことをするのは親の躾が甘いせいで、自分は厳しく育てたから息子は悪所になど行かないと自慢している。しかし、実際は源吉も甚六とともに悪所へ行って遊んでいた。ここでも読者の方が真相を知っているものだから、親仁の言葉に可笑しさを感じる。そして案の定、泥酔したままの源吉が「むすこが替りました」といって連れてこられたのであった。

馬ではなく駕籠に変更されている点は『内証鑑』と同じである。したがって諺は全く関わりを持たない。密かに寝床までたどり着く様子が描かれているが、そもそも他人の家であるのに自分の寝床が分かるのだろうか。泥酔して前後不覚の状態で部屋までいき、夜着を着て寝たと本文にはある。ただ、昔の家屋で構造が似ていたとか、親しい友人の家だから寝床も分かるといえば、問題ないのかもしれない。

すでに二度採用されたことになる『名残の友』巻二の五は、後で取り上げる『丹波太郎物語』にも利用されているが、こちらは『名残の友』の本文のほとんどが

そのまま使われているため、『内証鑑』『役者片気』と同様の工夫を観察することはできない。だが、この二例から判断すれば、『名残の友』巻二の五の笑話を利用する場合は、文言ではなく話の展開を用いる傾向があるといえよう。

○上之巻の四「名残の人形は物いわぬ鴛鴦の池」

柳桜も年よりたる人の姿を見るごとく冬山のさびしさ、東山をすぢかいにして北山の在郷道を行に、松の嵐の音のみ。春は爰らも人の山なるべきに、おりふしは京のあそびずきも、よもや出まじとおもひしに、麓に遠き森の陰に幕打まはして、今は何か見る事もなきに、酒に乱ての小哥きけば、女の声もしてすこし浦山敷心になりぬ。猶もおくの松の木の間に浅黄に紅葉染こみたる絹幕の見へて、琴の音かすかに耳おどろかし、扨も都なればこそ、霜月の末つかたに野遊山の幕を所々に見る事、余所の国にはない事ぞと冬枯の心もおのづからはんなりとして、岡の細道をはるかに行て、龍安寺の池の端につきて又おもしろし。岸の枯芝の上に氈敷ならべ、此池の鴛鴦の妻あらそひを見る事近年はやりて、毎日の人絶る事なし。是も京の冬のひとつの詠とかたりける内に、汀なる草庵より法師立出て手ぢかく餌をまきてまねかれければ、かぎりもなくおし鳥爰にあつまりて、おのがさま／／のたわふれ、水は紅井にいろどり、浪に白玉をちらし、夕日の移り、稲妻を久しく見るがごとく、昼とも夜ともわきまへのなき遊興、おなじ遊山とはいひながら、若後家の鴛鴦のたわふれを、見に来らるゝは、男伊達の喧詂見にゆくやうなもので、事を好に似たり。

＊『西鶴名残の友』巻四の一「小野の炭がしらも消時」

柳桜も年よりたる人の姿を見るごとく、冬山の淋しき比都にのぼりて、俳諧の友とせし団水・言水などゝ、うき世の事どもを語りなぐさみて、「何も心にかゝらぬ楽介、世間のいそがしき時、ことに隙坊主」と、我身をうち笑ひて、北山の在郷道を行に、松の嵐のおとのみ。春は爰らも人の山なるべきが、折ふしは京のあそびずきもよもや出まじと思ひしに、麓に遠き森の陰に幕うちまはして、今は何か見る事もなきに、酒にみだれてのこうた、聞ば女の声もして、すこし浦山敷心になりぬ。なをまた奥の松の木の間に、あさぎに紅葉染こみたるきぬ幕の見えて、琴の音かすかに耳をおどろかし、扨都なればこそ、師走の廿日過て野遊山の幕を所／／に見る事、余所の国にはない事ぞと。せはしき心ゆたかになりて、それより岡の細道をはるかに行て、竜安寺の池のはたにつきて、又おもしろし。岸の枯芝の上に氈・花むしろをしきならべ、此池の鴛鴦のつまあらそひを見る事近年はやりて、毎日人の絶る事なし。「是も京の冬のひとつの詠め」とかたりけるうちに、汀なる草庵より法師立出て、手づかく餌をまきてまねきければ、かぎりもなくおし鳥爰にあつまりて、おのがさま／／〻のたはぶれ、水は紅井にいろどり、浪に白玉をちらし、夕日の移り稲妻を久しく見るが

ごとく、昼とも夜ともわきまへのなき遊興、

『名残の友』巻四の一「小野の炭がしらも消時」からの利用であるが、ここは本文をそのまま、かなりの長さで使っている。内容は風景と風俗の描写であって、其磧がそうした描写を多く取り入れる傾向にあることは、篠原進氏が指摘される通りである（3）。『名残の友』にある団水・言水などの部分を削り、謡曲「井筒」の曲舞を歌っていた後家を別の後家に入れ替えている。『役者片気』の後家は藤十郎そっくりの人形を作って日々寵愛しており、それを聞きつけた大勢の女性が人形を拝みにくるという内容である。章題の「鴛鴦の池」は後家の庵がある龍安寺周辺の池を指し、「物いわぬ」は人形に向かって恨み言を吐く女性たちに対して、無言のままの藤十郎人形のことを指している。

□下の巻の一「役者楽枕心屋すひねざめの提重」

芸子たちが寝覚提重を持って藤十郎の墓参りをする場面だが、途中で酒事となって肴がないことを残念がっていたところ、「まちかね」という珍しい肴を取り出して見せたという内容がある。ここは『名残の友』巻四の五「何ともしれぬ京の杉重」の内容を踏まえているのではないだろうか。ただし、本文引用はないので、一覧表には入れなかった。

さらに後半で、死んだ役者たちが茶の湯をする場面は、『名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」を踏まえたか。亭主の「わびたる物ずき」や、「挽ためのお茶湯をしんずべし」と客をもてなすところ、「菩提樹の枝たれ。高野槇の作り木まで心ある物ずき」という描写など、似た表現がみられる。これも本文引用とまでいかないので、一覧表には入れなかった。なお、『名残の友』巻五の六の本文は、後の「野郎隠し芸に身を打こむ道頓堀」に提示してある。

□下之巻の三「女道衆道の堺町（辶＋存）はちがいくぎぬき」

年々花は替らず歳々人同じからずといへど。役者ほど年の寄ぬものはあらじ。

『曲三味線』巻四の一の冒頭と同様の表現。『名残の友』巻二の一「昔たづねて小皿」で使われる和漢朗詠集の漢詩であるが、一覧表には入れていない。

○下の巻の四「野郎隠し芸に身を打こむ道頓堀」1

誰物すきにて芸子の小袖是が難波のうらめづらしや。紋付の熨斗目よき絹よりは至りぜんざく。さだまつて梅にうぐひすの茶染もおもしろからず。むかしの野郎は舞台の外の芸に。小哥上るり。三味線のねてもさめても是をはげみぬ。今は至りて十種香をきく。など名香の品〃耳とつて鼻におぼへず。それもすたれば俄に

弓矢をとりつき虫大臣に無心申て力をも入ずして楊弓の星の林夜は俳諧にさしあひかまはず。

＊『西鶴名残の友』巻五の二「交野の雉子も喰しる客人」

誰物好にて、遊女の小袖、是は難波のうらめづらしや。紋付の熨斗目、よき絹よりはいたりぜんさく。定まつて梅に鶯の茶染もおもしろからず。むかしはこうたの撥音、今は茶湯、楊弓を、女良の手業にもてあそびける。惣じて人の心、其時にはやる事ども移り気になつて、俳諧・やうきうに日を暮し

この部分はこれまで指摘のなかった部分であるが、短いながらも本文の利用は明らかであろう。章の冒頭部分をそのまま用いており、世の中が贅沢になって誰もが茶の湯や楊弓を嗜むようになったというところである。この茶の湯から次の『名残の友』巻五の六の利用へと繋げている。

○下の巻の四「野郎隠し芸に身を打こむ道頓堀」2

塩瀬がふくさのかはりに紫帽子の紐をときて。是又野郎のわひずきおもしろしとてむしやうにはやりぬあるとき本町の可好といふ大臣かはゆがられし若衆を正客にて。嵐三右衛門木津法師。富沢政之助。以上四人塩町の。屋しきにて御茶下さるべきよし。嵐三右。此屋しきはじめてなれば。庭を見まはし。大尽の茶事おもひやりぬ比は春ふかく見越の松杉さま／／、に枝ふらせびやくしん虎につくりつゝじの帆かけ舟こてまり山吹のおのれとさきし外は皆兼好がきらひたる庭木瓢単の手水ひしやくさし釣瓶の古きに摺鉢おきせたる燈籠いづれを見ても子細の過てきのつまる物ずき料理もさぞとすいしぬるにたかはず蒟蒻に豆粉かけて是自慢の肴とは銭つかふ大臣の物すきとはいわれず酒さへのまれずしてよいかげんに物まぎれの道具ほめて旦那に油をのせましめつたにそやせばあるじ悦びいづれもへ馳走に大ぶくに立参らせんと手まへつくろひ過てむかし行なり殊に盆たてして見せ顔に正客の若衆にさし出せば身をつくりてのみかゝりしが其つき人もまはしかねて俄に赤面して是にて仕舞ますとひとりしてのみて茶碗うちまであらためてさしをく嵐をはじめ連衆是は無作法とおもひながら大臣秘蔵の若衆なればいづれも詞をそろへ大ぶんのお客ぶりよふはまいつたといへば此若衆いよ／／めいわくがつて近比／／めんほくなけれどわたくしの入歯茶碗の中へおちこみましていかにしても外へはしんじかたくてかくの仕合なれば御めんとのことはりはをうとまし入歯する年迄。若衆顔して客せめらるゝ事。勝手づくとはいひながら。てん是をとがめたまひ。かはゆがらるゝ大臣の前にて。今日のはぢを見せたまふと。三右衛門小声にてさゝさき。此太夫にいやがらせしが。

＊『西鶴名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」

津の国の野田といふ里に、藤の咲比、かならず弥生のほとゝぎすの来りて鳴事有。「是をきゝにこよ」といへる楽坊主に約束して、俳友五、七人、其日の昼まへより草庵にたづねしに、見越の松・杉さま／／に枝ふらせ、びやくしん竜に作り、つゝじの帆かけ舟、こでまり・山吹のおのれと咲し外は、皆兼好が嫌ひたる庭木、へうたんの手水ひしやくさし、釣瓶のふるきに摺鉢きせたる燈籠、いづれを見ても子細の過て、気のつまる物好なり。

発句望まれて、八吟の歌仙詠草書にしてしまへば、あるじ釜仕かけ置て、「けふおの／／御出とぞんじ、老人の手にかけて引ましたばかりを御馳走。さらば大ぶくにたてましてあげん」と、手前つくろひ過て、むかし行なり。殊に盆だてして、見せ皃に正客にさし出せば、身をつくりて呑かゝられしが、其次へもまはしかね、俄に赤面して、「是はこれにてしまいます」と、ひとりして呑て、茶碗うちまで改め、「近比／／面目なけれど、わたくしの入歯此なかへ落込まして、いかにしても外へは進じ難くて、かくの仕合なれば、御免」と、断りいひ立に、広座敷へ出ける。「ちつともくるしからぬ御事」と、亭坊も客も同音に申ながら、興を覚して、其跡おかしくなりぬ。

先に述べたように、『名残の友』巻五の六は「役者楽枕心屋すひねざめの提重」のところで一度踏まえられていると思われるが、ここで再度はっきりと本文を利用しているのが興味深い。『名残の友』では、気詰まりな一席で正客が大服の茶を飲みかかり、入歯を落としたと言って全て飲み干す内容になっている。これだけでも可笑しいのだが、『役者片気』ではさらにこの正客を若衆とし、入歯が落ちたと告白した時点で、若衆が相当年配であることが発覚してしまうという筋にかえている。若衆が正客になるまでの筋書きといい、それによって笑いが増幅されるように工夫されている点といい、かなり構想を練って書き出したと想像される部分である。

『寛濶役者片気』での『名残の友』利用は、少なくとも四章から本文が用いられており、一致する本文も長文で、話の筋においても活用していることがわかるのである。また、先行する作品と同じ章（巻五の六、巻二の五）を再利用しつつ、新たに巻四の一と巻五の二を用いた。この利用の一致を、『風流曲三味線』『野白内証鑑』『寛濶役者片気』を繋ぐものとしてみることもできるのではないだろうか。

野傾旅葛籠

○巻一の三「武蔵野の月星日の出の若衆　鶯も勤の一声謡うたひの大腹中」

一とせ住吉の汐干を心ざして。おなじ心の友をさそひ。弥生の一日にくだり船。

難波の浜につきて。爰もむかしの京なれば。民の竈にしやくしかけ。青畳敷津のうら座敷見たて。暫かり宅もよしやと。春の日二日は何となく暮て。けふは三日の桃の花。伏見の城山を。桜増りとながめしが。旅はさま／＼にかはりて。大坂酒に曲水の宴ぞかしと。心いはゐの小諷。もたいの竹葉より思ひ出して。吸筒をわすれな。茶弁当に火箸は入ツたか。からし酢は此徳利にあり。塩は堺を手池の浜。蛤手して拾ふなど。所に住て朝夕にみればこそあれと。よみし景も一しほけふは出立ばへして。此おもしろさすぐに。駕籠かりて淡路へゆかん汐干かなと。如泉が秀句迄思ひ出され。こればかりはよういふたと見る所に。

＊『西鶴名残の友』巻二の二「神代の秤の家」

一とせ、住吉の汐干を心ざして、門弟の了味など同道して、弥生のひとへにくだり舟、難波の浜につきて、爰もむかしの京なれば、民の竈にしやくし掛、青畳敷津のうらを見立、しばらく借座敷もよしやと、春の日二日は何となく暮て、けふは三日の桃の花、伏見の城山を桜まさりと詠めしが、旅はさま／＼に替りて、大坂酒に曲水の宴ぞかしと、心祝ひのこうたひ、竹葉より思ひ出して、「吸筒をわすれな。茶弁当に火箸は入たか。からし酢は此徳利に有。塩は。堺をはじめて見る事嬉しや」と、下／＼いさみて、駕籠ふとん敷て、「めしませい」といふ時、貞室立出られしが、座して、「けふの参詣成難し。いかにしても汐干の発句おもはしからず」と、する／＼の者ばかり見せに遣はし、其身は宿に残られける。貞室程の作者、世のつねの発句なきにはあらず。世の沙汰にならざる一句はいと口惜と、此道に執心ふかき事を感じぬ。

『野傾旅葛籠』（以下、『旅葛籠』と略す）はまず巻一の三「武蔵野の月星日の出の若衆　鶯も勤の一声謡うたひの大腹中」で『名残の友』巻二の二「神代の秤の家」の二段落以降を利用する。一段落目は安原貞室の紹介であるから、ここを省いたわけである。二段落の「門弟の了味」とあるところを「おなじ心の友」とかえている。傍線を付けていない後の部分は、良い汐干の発句ができないといって貞室が外出をやめたところだが、そこを『旅葛籠』では、「駕籠かりて淡路へゆかん汐干かな」という如泉の句に置き換えて、話を後半に繋げるのである。

『旅葛籠』巻一の三は「松本兵蔵」という若衆の話である。この若衆が秘蔵の鶯を門付けの謡うたいに譲る場面は、『名残の友』巻五の一「宗祇の旅蚊屋」の「謡うたひの軒の鶯は、口笛の音を出しぬ」という文言が発想元ではないかと推測するが、特に本文の引用もないので、一覧表には記載しなかった。ただし、この「宗祇の旅蚊屋」は、次にあげる巻三の二で利用が見られる。

○巻三の二「末社は恋に骨をおる嶋原　腹一盃酒がいはする思ひのたけ」1

寺にかはれる猫に鰹節見すれば。身をちゞめて逃ありき。諷うたひの軒の鶯は。

口笛の音を出しぬ。所に馴て（以下次の文へ繋がる）

＊『西鶴名残の友』巻五の一「宗祇の旅蚊屋」

寺にかわれる猫に鰹節見すれば、身をちゞめてにげありき、諷うたひの軒の鶯は、口笛の音を出しぬ。されば和歌に師匠なしとはいへど、連俳も其巧者に付そひたる人は、心ざしなくても自然と道を覚へり。

『旅葛籠』巻三の二の冒頭は、『名残の友』巻五の一を利用する。そして鶯に繋げて郭公（ほととぎす）を出し、次の『名残の友』巻二の一の冒頭部分を引き出している。

○巻三の二「末社は恋に骨をおる嶋原　腹一盃酒がいはする思ひのたけ」2

所に馴て不断見ると。みざるのちがひにて。人のもてはやすものなればとて。明暮詠めては。東山の花も塵になりてうるさく。今一声としたひぬる郭公も。山崎の人は。かしましきとて耳ふさくとや。爰に衣の棚の万吉さまといへる大臣の末社に。月夜の藤三といふ男。

＊『西鶴名残の友』巻二の一「昔たづねて小皿」

山崎の山のすがたは、むかしに替らぬ春の色、年／＼花は同じ、歳／＼人は同じからず。爰に住給へる宗鑑法師の一夜庵の跡ゆかしく、都にのぼり―中略―気の短きほとゝぎすの鳴わたり、あまりに耳ちかければ、めづらし事は外に成て、「かしがまし此里過よ時鳥、都の堕馬髻我を待らん」と読れし狂哥も今思ひあはせり。―中略―月夜の四平といふもの、是は京のひがし川原にて、遊び宿の亭主成が、此商売する程もなく、さりとてはかしこからず、うまれつきての埒明ずなり。

「山崎の人は。かしましきとて耳ふさく」とあるのは、『名残の友』巻二の一「昔たづねて小皿」の山崎宗鑑の逸話を踏まえたものである。宗鑑の狂歌は諸書で紹介されているため、この部分だけだと利用の確証がないのだが、すぐあとに「月夜の藤三」という末社が登場することから、『名残の友』の利用と断定することができる。『名残の友』の「月夜の四平」を「月夜の藤三」に置き換えたのである。本文をそのまま利用するのではなく、話の内容や登場人物を大まかに踏まえる方法はしばしば見られるようであり、作者の創作方法を考える上で注目されよう。さらに、『名残の友』の内容をかすめたと思われる部分が先にあり、後で本文利用の明確な章が出されるといった現象も見受けられるが、これを創作方法の一部または特徴として捉えて良いか戸惑うところである。

この現象の一つ目の例は、『寛濶役者片気』下の巻「役者楽枕心屋すひねざめの提重」で提示した茶の湯の発想が『名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」

からきたと推測され、その後、『役者片気』下の巻「野郎隠し芸に身を打こむ道頓堀」で本文利用が確認できるところがあげられる。二つ目は、『野傾旅葛籠』巻一の三「武蔵野の月星日の出の若衆　鶯も勤の一声謡うたひの大腹中」での「謡うたひと鶯」の発想が『名残の友』巻五の一「宗祇の旅蚊屋」からきたと推測され、後に巻三の二「末社は恋に骨をおる嶋原　腹一盃酒がいはする思ひのたけ」の冒頭で本文利用が確認できるところがあげられる。

○巻五の三「親父の異見は是が申納めの鐘木町　借銭の淵に首だけの間夫狂ひ」浮気なる若い医者の薬のむと。下手に月代剃すと。むかふ足に疵の多い馬に乗と。器量のよい役者の若男に。太鼓持せて女郎買ほど。世の中に心もとないものはなし。

＊『西鶴名残の友』巻五の五「年わすれの糸鬢」
折ふし江戸草履取の墓原角蔵といへる者、髪月代を得たれば、是を板の間によびて、ひとり／＼髭まで剃せて、きさんじに産毛も残らず、さりとてはきみよし。「是をおもふに下手にあたま剃すと、若ひ医者の薬を呑程、世に心がゝりなる物はなし」といへば、

『名残の友』巻五の五の利用は、第三章第一節の『忠臣略太平記』でも指摘したが、利用の順序でいえば『野傾旅葛籠』の方が先行する。ここで巻五の五を利用して、『略太平記』で再利用したことになろう。『旅葛籠』と『略太平記』の『名残の友』利用は重複するものが多い。巻四の四、巻五の一、巻五の五の利用が同じである。第三章第二節冒頭に付した一覧表を参照されたい。

商人軍配団

○巻五の三「繁昌の盛花の都に二代の長者」

梅椿も室咲はかじけておもしろからず。時節と春の梢おのづから詠もよし。柳に去年の水仙のいけまぜて。釣釜のたきりを聞る楽何かあるべし。此心侘数寄をよしといへど。根から事たらずしてはたのしみなし世を心のまゝなる人の茶事は。不自由成ていにしかけたるこそよけれ。平生の事は猶さらなり。分限者の雪の朝の紙子。肩当火打も紬の茶色おもしろし。貧者の紙子物ずきに仕てからさふはみえず。肩当の浅黄段（緞）子。気をはつてせられてから。刀袋のもらひ物と見立られ口惜。たとへば地薄き似せ八丈を着て。絹被ふかくお物師こしもと。手代久三をつれられたる内儀のは。絹やが見ても本八丈とみなし。供なしの奉公人女。奥さまの着落しの本八丈を着て通りても。似せと落しつけていへり。

＊『西鶴名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」
梅・椿も室咲はかぢけておもしろからず。時節と春の梢は、おのづから詠めもよしと、柳に去年の水仙を生まぜて、釣釜のたぎりを聞る楽しみ何かあるべし。此心、詫、数寄をよしといへど、ことたらずしてはたのしみなし。「世を心のまゝなる人の茶事は、不自由なる体に仕かけたるこそよけれ」と、宇治の上林の法師、俳諧の座にて語れしが、是も尤に思ひあたる事あり。

『商人軍配団』では再び『名残の友』巻五の六を利用している。ただし、これまでは「津の国野田といふ里に」から始まる第二段落から引用していた。ここでは初めて冒頭の文章を利用したことになり、作者の工夫が見て取れる。

『名残の友』は茶の湯の席でのエピソードとなっているが、『軍配団』の話は金があってこその詫数寄であるとして、金儲けの重要性を説く展開となる。

通俗諸分床軍談

○巻三の一「松賀砂手習にて色道の奥儀を極む」

先丹波越を心ざし。桂川を打越野道を行ば。折ふし秋の暮物あはれげに。萩も薄も見るかげなく。立がれの綿木がゞつきて。昼狐うろたへ案山子の笠は風にとられ。おどしの弓は色鳥のとまり木となり。沢の浮藻かたまりて。つなぎ捨たる岸根をみれば。ちいさき藁の棟をならべ。むしろ戸にけふり立のぼり。乞食のすめる所と見えける。其かたほとりの砂川の水なき所に。三十計のやせがれて。色の小白き乞食。身にはつづれをまとひながら横座組て。砂に家作りの図を書。何やらいふては打消。又改て書事気ちがひにやと。そろ／／行て後に立やうすをみれば。—中略—是こそ常の者にあらず。乞食に筋なしまさしくよい大臣の果と。

＊『西鶴名残の友』巻四の四「乞食も橋のわたり初」
其つぎの日は轍士にさそはれて、道の程三里にたらぬ八尾といふ里へ、俳のもやうしありて行に、野道も折ふしは物の哀れに、萩も薄も見るかげなく、たちがれの綿木かゞつきて、昼狐うろたへて、案山子の笠は風にとられ、おどしの弓は色鳥のとまり木と成、沢の浮藻かたまりて、つなぎ捨たる小舟に柳の落葉埋みて、砂川の歩行わたりおかしく、
なよ竹のむら／／茂りたる岸根を見れば、ちいさき棟をならべ、莚戸に煙立のぼり、乞食のすめる所と見えけるが、—中略—其乞食の中よりやせかれて色こじろき男出て、大木の榎木にのぼり、枝にかゝりし塵をさがしけるを、「何かする」とたづねければ、—中略—さるほどに人はしれぬもの、

乞食に筋なし。

『通俗諸分床軍談』の利用箇所は長谷川氏によって指摘されるところである。ここで利用されている『名残の友』巻四の四は『忠臣略太平記』で既に使われた章だが、面白いことに、本作の場合も引用箇所の重複を避ける工夫が見られる。『略太平記』で利用された部分は、『名残の友』巻四の四の冒頭部分と、最後の笙を吹く乞食の二箇所であった。『床軍談』の利用はまさにその間で、しかもご丁寧に重複しない直前の「色こじろき男」までを引いている。さらに驚くのは、「乞食に筋なし」という締めの言葉も重複しない点である。『略太平記』では「さるほどに人はしれぬもの」までを使ったあと、「乞食に筋なし」の言葉のみを飛ばして「極楽の乞食なるべし」の部分を利用していた。『床軍談』の「乞食に筋なし」は、まさしく重複しないこの一言を意図的に用いたことになるのである。これほどの工夫はなかなかできるものではない。『略太平記』を脇に置きつつ執筆したか、利用部分の詳細かつ正確なメモでもあったのか、いずれにせよ作者の注意深さに感嘆せざるを得ない。

京略ひながた　十二段

○上の四「借リ手形の座持は太鼓程な印判」

服部ぢかくへたばこがやらるゝ物か。能登へ刺鯖やるやうな事いふなといへば。

『名残の友』巻一の三「京に扇子能登に鯖」を踏まえるか。

丹波太郎物語

『丹波太郎物語』における『名残の友』の利用については古くから指摘され、既に詳細な検討もされている（4）。『名残の友』巻二の五と巻五の五の本文を、ほとんどそのまま利用しているため、本文をここに提示する必要はないと判断した。本作はもともと西鶴の遺作として出版されており、其磧の序文に「難波の友。西鶴自筆の艸案を持来りて」と書かれていたために、西鶴作であるかどうかがまず問題にされたのであった。現在は偽作というのが定説である。

本作の主人公である丹波太郎の背景、笑話との関わり、真の作者等については佐伯孝弘氏の詳細な研究があり（5）、本稿はそれに従う立場である。

八文字屋本での『名残の友』利用は、これまで見てきたように、相当の工夫と気遣いが認められるものであった。それと比較して、『丹波太郎物語』はほぼ丸

取りとなっていて、同じ人物が書いたものとは思えないのである。内容に齟齬も多く、まとまりに欠ける点も考えれば、真の作者も其磧作ではないと考える。よって真の作者は「未詳」とされる佐伯氏の説に従う。

世間子息気質

○巻二の二　「内証はしらぬが仏有難い出家形気」

かくて重四郎には此むねをいひきかせ。俄にあたまこそげさせて。約束の寺へ後住にありつけ。九族生天と親一門。悦びの入院ぶるまひ事すめば。其身も日比よりねがひまゝの道に入しと。心まめに朝水手向お経よみならひ。心に何の欲もなく世間に十露盤はぢきて。金銀の取やりする物前にも。木ばさみ持てゆたかに。庭なる白槙龍につくつて。天にも至りし心になつて。ふびんや下界の人間共書出し時分に気ぼねをおり。夜もろくにねぬ事よと今此身をば満足せり。

＊『西鶴名残の友』巻五の六「入歯は花のむかし」

見越の松・杉さま／＼に枝ふらせ、びやくしん竜に作り、つゝじの帆かけ舟、こでまり・山吹のおのれと咲し外は、皆兼好が嫌ひたる庭木

『世間子息気質』での『名残の友』利用は篠原進氏の指摘がある（6）。本書での利用は、右の「白槙龍につくつて」という短い言葉のみで、さらに該当箇所は既に『風流曲三味線』『寛濶役者片気』で利用された部分であった。『名残の友』巻五の六は既に二度（『商人軍配団』を入れると三度）利用されていることから、内容や文言を記憶していたのかもしれない。ここでは、心まかせに庭を作る豊かさを表す目的でこの言葉を使っている。

国姓爺明朝太平記

○巻三の三「日本の智恵袋打開ひた敵の城門」

おやぢ殿むすめごの脈見る時九寸五分の相口をぬいて枕屏風のきわにわすれてをきました。身共が麁相じやと思ふて下さるゝな。こりやむすめの腹の子は男じやといふ印に相口をおいて帰つた物じや。こちへ下されとぬからぬ顔での軽口。おやぢおかしく相口もつて出て。御ゐしやの麁相なと下手な髪結が大酒して月代剃とは心もとなひ物でござるといへは。徳安腹たて麁相で人をもり殺してもつゐになぜ殺したとて今日までねだれた事がない。

＊『西鶴名残の友』巻五の五「年わすれの糸鬢」
折ふし江戸草履取の墓原角蔵といへる者、髪月代を得たれば、是を板の間によびて、ひとり／＼髭まで剃せて、きさんじに産毛も残らず、さりとてはきみよし。「是をおもふに下手にあたま剃すと、若ひ医者の薬を呑程、世に心がゝりなる物はなし」といへば、

『名残の友』巻五の五の該当箇所の引用は、『丹波太郎物語』を除けば、三度目になる。『野傾旅葛籠』『忠臣略太平記』『国姓爺明朝太平記』でそれぞれ同じ文言を引用しているのだが、気をつけたいのは、いずれも『名残の友』の「下手にあたま剃す」と「若ひ医者の薬を呑」を、上下逆に書いている点である。試みにそれらを並べると、

『野傾旅葛籠』　浮気なる若い医者の薬のむと。下手に月代剃すと
『忠臣略太平記』　若い医者の薬をのみ。下手に月代をそらすがごとく
『国姓爺明朝太平記』　御ゐしやの麁相なと下手な髪結が大酒して月代剃と

となり、医者が上、下手が下という順序が同じであることがわかる。其磧の頭にはこの順序で記憶されていたのではないか。ちなみに、『丹波太郎物語』が『名残の友』と同じ順序となっているのは、他の作品と違って文章の丸取りであったためであろう。

また、「下手にあたま剃す」については『好色一代男』に次のような用例が既にある（7）。

傾城狂ひのしまつと、下手に月代剃すほど、世にいやなる物はなし。
（『好色一代男』巻五の五「一日かして何程が物ぞ」）

『一代男』では「医者」との組み合わせでなく「傾城狂ひのしまつ」と並べて用いられていることから、もともと「下手にあたま剃す」は組み合わせが定まった言葉ではなかったと考えられよう。さらに『一代男』の用例では「嫌なこと」の例えとして用いられているのであって、「気がかりなこと」「不安なこと」「危険なこと」といった意味合いが強く出ていないのである。『名残の友』で「医者」と組み合わせたことによって、より危険で不安な気持ちが強調されることになった。後の『役者色仕組』（享保二年刊）になると「盛立たる娘の子と、下手な上戸の髪結に髭そらすとは油断のならぬ物ぞかし」とあり、「下手」と「盛立たる娘」の組み合わせで用いられている。つまり『名残の友』以降「下手にあたま剃す」という言葉は油断のならない危険なものの例えとして定着したのである。

「下手にあたま剃す」と「若ひ医者の薬を呑」を組み合わせて使用し、「危険で不安」という意味合いを強調したのが『名残の友』の表現であった。そして『野傾旅葛籠』『忠臣略太平記』『国姓爺明朝太平記』は、『名残の友』から「下手」と「若ひ医者」の組み合わせを用いたのであろう。ただし、この組み合わせを最初に使用したのが『名残の友』であったかはまだ確定できない。浮世草子以外の

用例をも調査する必要がある。

世間娘気質

○巻一の三「百の銭よみ兼る哥好の娘」

鏡屋の愚平次とて久しき町人。代々小家をもちくずさず。落もせず秀もせず。いつも一尺の鏡の中を廻つてちいさい弟子二人に腰をつかはせ。借銭せぬを手柄に世をわたる律気者あり。縁とて此ものゝ妻は御所方のお歴ゝゝのすへにめしつかはれて。歌書の御文庫あづかりし。四人の中の其ひとりの女なれは。今町人のせはしき世に住ながら。ありしむかしの玉かづら色つくれる面影常にかはり。不断紫に紋なしの小袖いくつも同じかさね着して。其色の後帯朝見る姿殊にうるはしく。諸人何となく気を移して。鏡やの紫式部といへり。大内山の花の香どこやら自然と備りし所ありて。もとより琴をひき歌の道に心ざしふかく。万花奢なる行かた。摺鉢のうつぶせなるを富士をうつせし焼物かとながめ。釣瓶取を小船の碇かとやさしく見なし。同じ油火も松明すゝむるといひ。一文菜の鰯をおむらさきのおぼそのと。首筋もとばかりせゝり箸して。手元に延紙おいて一口喰ては口のごふなど。物毎やさしく糠味曽迄も酒塵と見るを見まねに弟子小童まで言葉あらたまり。亭主が片言も女房を恥て大かたの事はいはずにくらし。我ばかりよい物持たかほつきにて。妻女を浮世のたのしみと。手の物の髭ぬき鏡取て見れは。跡の月より鼻毛もよほどふとくなつたと。女房自慢にいつとなく家業ぶさたに成行。内証はからの鏡屋となつて。花奢事好んてたしなみふかく。ね所から鏡見て脇腹にある瘤を見出され。ある時は様子なしにありきて。伊勢が哥のみじかき足をあらはし。いにしへの遊楽の琴の音も碓にひきかへ。小麦の粉の白きを富士の雪と見たてしも。いつしかかのこまだらに上置食を引かゝへて。五六はいとは女の食にけうとし。

＊『西鶴名残の友』巻三の二「元旦の機嫌直し」

名乗は重好とて、大発句帳にも見えける。此人の妻は、五の宮様のすゑにめしつかわれて、歌書の御文庫をあづかりし四人の中のそのひとりの女なれば、今町人のせはしき世に住ながら、ありしむかしの玉かづら、色作れる面影つねに替り、不断紫に紋なしの小袖いくつも同じ着して、其色のうしろ帯、朝見る姿ことにうるはしく、諸人何となく気を移して、大内山の花の香、どこやら自然とそなはりし所ありて、もとより琴をひき、哥の道にこゝろざしふかく、俳諧すける男の身にしてはたのしみふかし。誰いふともなく、此女房を「絹屋のむらさき式部」といへり。

此亭主俳諧と女とに、いつとなく家業外になりて、遊楽の琴の音も碓にひきかえ、我すがた見と読る十寸鏡もふるかね買が手に渡して、身のうへ次

第におもしろからぬ年くれて、余所の宝をかぞほる隠れ蓑・かくれ笠・小袋をうち出の小槌まで絵書たる、舟を敷寝のよるの夢に、女は都の富士に煙絶て、黒木小刀で割と見しは心細し。又男は駿河のふじに白突の食を移し、田子の入海は若和布汁程に見たと、夫婦夢を語りあはせ、

佐伯孝弘氏の「『子息気質』『娘気質』における西鶴等の作の利用箇所一覧」を参照すれば、これまで先学によって指摘された『子息気質』『娘気質』での『名残の友』利用箇所が確認できる（８）。

『娘気質』巻一の三「百の銭よみ兼る哥好の娘」は、町の年寄となった愚かな夫が、賢女である女房に全ての判断を委ねるという話である。女房の描写に『名残の友』を利用しているが、職業を「鏡屋」としたのは『名残の友』の本文にある「十寸鏡」からの発想だろうか。『名残の友』巻三の二を利用したのは本書が初めてであって、利用箇所の重複を避けた結果であると思われる。

浮世親仁形気

○巻二の一「金を楽しむ高利の親父」

松永貞徳花咲町に。年久しくすまれし其隣に。小石屋又右衛門といふ銭見世出して。見過大事と心得たる親父あり。春みる桜ぎらひにて。身は花色布子のつよきを考へ。明くれのもてあそびに。二十五桁の十露盤を枕にして。四十年以来同町にゐながら。貞徳の俳諧せらるゝとは。諸国の目安の談合いたさるゝ分別者とばかり合点し。近い隣殿なれども。一代公事訴訟いたさねば。貞徳を頼み俳諧書てくだされいと御無心申事もなしと。花の都に住ながら。かゝる親仁もあれば。増て田舎人は。たとへ衛士籠を雛の綿の塵よる物かといふ共笑ふまじ。

＊『西鶴名残の友』巻一の三「京に扇子能登に鯖」

松永貞徳、都花崎町に年ひさしく住れし。其隣に、鞍馬屋の吉左衛門といふ、銭見せ出して、見過大事と心得たる男あり。春見る桜嫌ひにて、身は花色の紬のつよきをかんがへ、明暮のもてあそびに、二十五桁の十露盤を枕にして、三十年此かた同町に居ながら、貞徳の俳諧せらるゝとは、諸国の目安の談合いたさるゝ分別者とばかり合点し、「近ひ隣殿なれども、一代公事訴訟いたさねば、貞徳をたのみ、俳諧書てくだされいと御無心申事もなし」と、京に住ながらかゝる人もあれば、増て田舎人は、たとへ衛士籠を、「雛の綿の塵よる物か」といふとも笑ふまじ。

○巻二の三「殺生を楽しむ仏嫌ひの親父」

室町通に御所染の絹商売して。大菱屋といへる身体よし。子供を多く先だて。度／＼の愁に無常を観じ。一人取残せし大切の一子三郎四郎に跡職をゆづり。我若き時に小鳥狩蠅頭の釣をたのしみ。大分の殺生せし報ひにて。子を失ひしどおもひ合せて。吹筒打破釣竿へし折て。大釜の下へ焼て捨。夫婦もろ共にあたままろめて。夫は常覚。内儀は妙覚と名をあらため。毎日の寺まいり。去とは殊勝なる取置。

＊『西鶴名残の友』巻三の二「元旦の機嫌直し」

室町通り西行桜の町に、御所染の絹商売して、菱屋といへる人有。

○巻三の二「飛行を楽しむ仙人親父」

摂泉の堺は。―中略―藤井元徳といへる有徳人の親父。つねに列仙伝を見て。仙人の身持は第一世帯に物がいらず。好色をはなれ。美食をくらはず。世路に気をついやさず。松の葉などの麁食を喰。正月ぎる物も木のはのつゞれにてすまし。髭月代もそらざれば。髪結賃を出さす。行たい所へ物のいらぬ雲に乗て飛行する事自由なれば。仙術を行ふてたのしみにせんと。与風思ひこまれしを。―中略―髭をのづからのばし。身に唐織をまとひ。人のつきあひをやめて。我宿ながら諸木しげれる奥座敷に取こもり。専ら仙術を行ふとて。三年あまり気をすまし。大かたは春秋の時節もわすれて。只忙然として夢のごとし。此心ざし軒ちかき雀も見馴。梢の烏もちかより。朝夕の飯をわくれば手よりすぐにはみける。扨は仙家も爰になりぬ。諸鳥我をおそれぬ事是ためしなり。いよ／＼学びて異見せし悴手代共をはじめ。一門一家扨は知音ちかづきに目をさまさせんと。身上苦にならぬ身なれば。明くれ此道に気をこめ。その心になりぬ。されば唐土の玄宗皇帝は音律の名人にて。二月の初に花の咲ぬ事を遅しと。楼台にのぼり鞨鼓を打給へば。余寒払て梢の花開色見せけると也。又鄒燕は筆に妙を得て。六月に冬の調子を吹て。霜をふらせし事も語り伝へり。我も仙術の心見にとて。ある時身をきよめ。秋の夜の月くもりなく。堺の南北一目に見わたし。三階蔵のやねへつぎ階子さして。七十にあまりて達者にもない足をつまだて。漸／＼屋ねへあがりて。住吉の方に向ひ。観念の眼をふさぎ。一代の大願此時也。今心ざす所は生駒山迄の飛行ぞと。両の手をさしのべて飛ければ。棒樫の枝をこすり。捨石のたゞ中に落かゝりて。そのまゝ腰をぬかし。やれ仙術が生煮にて。まだよく熟もせぬに飛で。腰骨を打をつたは。こりや目が眩は出あへ／＼とよばはる声に。家内の者共おどろき。手燭ともしつれ庭に出。是は／＼とさはぎたち。おもやへ人を走らせ。医者よ針立よ。ひようたんの黒薬よと。隠居とおもやの大さはぎ。町内迄も家／＼に行燈出して元徳仙人が軽わざの仕そこなひされて。腰の骨がをれたげなと。堺中に此沙汰ひろまり。それより大坂につたへて。是はかはつたせんさくと。今に咄のたねとは成ぬ。されば此元徳。若き時より俳諧をこのみて。其名ひろく手鑑にもしるして。表徳号を社楽斎と申ぬれば。及ばぬ事をする者をば。しやらくさい

事と。世話にいひしは此因縁ぞかし

＊『西鶴名残の友』巻三の三「腰ぬけ仙人」

世の時花言葉に、人に替りたる風俗を見て、「しやらくさい」といふ事、泉州の堺に藤井徳庵といへる俳諧師の、名乗を社楽といふより、世界のてんがうロになれるはじめなり。

此人つねに替りて、鬚おのづから延し、身に唐織をまとひ、人のつきあいをやめて、我宿ながら諸木しげれる奥座敷に取籠、仙術をおこなふとて、三とせあまり気をすまし、大かたは春秋の時節もわすれて、只ぼうぜんとして夢のごとし。此心ざし軒ちかき雀も見なれ、梢の烏もちかより、朝夕の飯をわくれば、手よりすぐにはみける。「扨は仙家も爰になりぬ。諸鳥我をおそれぬ事其ためしなり。いよ／／是をまなびて万人に目を覚させん」と、明くれ其心になりぬ。

されば唐土の玄宗皇帝は、音律の名人にて、二月の初に花の咲ぬ事をおそしと、楼臺にのぼり鞨鞁うち給へば、余寒払つて梢の花開色見せけるとなり。又鄒燕は篳の妙を得て、六月に冬の調子をふきて霜をふらせし事も語り伝へり。

我も仙術の心見にとて、有時身を清め、秋の夜の月曇りなく、堺の南北一目に見わたし、二階蔵のやねより住吉のかたに向ひ、観念の眼をふさぎ、「一代の大願此時なり。心ざす所は生駒山までの飛行ぞ」と、両の手をさしのべて飛ければ、棒樫の枝をこすりて、捨石のたゞ中に落かゝりて、其まゝ腰をぬかし、「やれ仙術はかなはぬ手あし」と、うめかるゝ声におどろき、いづれもかけつけ、

○巻三の三「酒を楽しむ賢人親父」

何事も其人によりて。風俗のかはりたるも一興あり。むかし連歌師の牡丹花は。牛の角を金銀の箔にだみて。紅井の引綱付て。心の行所へ乗廻られしも。人がらそれに備り。世の人指はさゝざりき。津田休甫が紅鹿子の女小袖着て。白昼に大坂の町を通りしも。其身道者の徳あらはれ。目にかくる人もなし。此人／／はその心より発らずしては。まねてならぬ事ぞかし。見ぬもろこしの親仁共。竹の林に遊んで。浮世を実に見かぎり。肴もない酒をたのしみけるとかや。

＊『西鶴名残の友』巻三の四「さりとては後悔坊」

何事も其人によりて、風俗の替りたるも一興あり。むかし連歌師の牡丹花は、うしの角を金銀の箔にだみて、くれなゐの引綱付て、心の行所へ乗まはられしも、人がらそれにそなはり、世の人指はさゝざり。津田休甫が紅鹿子の女小袖着て、昼中に大坂の町を通りしも、其身道者の徳あらはれ、

目にかくる人もなかりき。此人／／は、其心より発らずしてはまねてならざる事なり。

『浮世親仁形気』に関しては、篠原進氏、佐伯孝弘氏の優れた研究があるので(9)、ここでは『名残の友』に関することのみを述べておく。

これまで見てきた八文字屋本諸作と、『親仁形気』での『名残の友』の利用とに違いを見つけるとすれば、それは「固有名詞の有無」である。作者が『名残の友』を利用する時、これまでは俳諧師など個人を表す部分を削って引用していた。しかし、『親仁形気』では「松永貞徳」「藤井元徳（徳庵）」「牡丹花（肖柏）」「津田休甫」の名前を維持したまま本文を利用しているのである。俳諧師や俳諧にまつわる内容は、笑話とともに『名残の友』の主題であり、特徴でもあった。俳諧師の名をそのまま出すことは、時代や俳諧の世界を取り込むことになり、これまでの作品ではそれを避けたのだと推測する。ではなぜ『親仁形気』では可能だったか。おそらく俳諧師の奇人ぶりが『親仁形気』の主題に合致していたからであろうと考える。『親仁形気』の主人公である「親仁」たちは偏屈であったり奇行や奇癖があったりすることで笑いを生み出していた。その親仁の奇人ぶりが俳諧師の奇人ぶりを許容したのである。こうした主人公の偏屈・奇行・奇癖を描いて笑いを生み出すのは、『子息気質』や『娘気質』など、其磧気質物の特徴であったが、『親仁形気』では描写対象が「親仁」だったために、同じ年頃の中年（または老年）男性の俳諧師を取り上げることができたのではないだろうか。

『親仁形気』に利用された四名は、いずれも伝説的な偉人である。笑話の中に登場させてもその地位が揺るがぬ人々であった。変わった行動が逆に彼らの評価を上げてもいるのである。「まねてなるまじき事」「まねてならざる事」と語られた奇行を、普通の親仁がすることで可笑しさが生まれる。それをみこして作者はこの四名を敢えて取り上げたと考える。

もうひとつ付け加えるならば、『親仁形気』で利用された『名残の友』の箇所は、これまで先行の作品で利用されていたものとの重複を避けたふしがある。巻一の三は『京略ひながた』で章題のみが使われていたが、内容の引用は今回が最初である。巻三の二は『世間娘気質』で利用されているが、『親仁形気』での利用は冒頭部分のみで重複していない。巻三の三と巻三の四の利用は本作が初めてである。重複を避けるという作者の気遣いは、ここでも確認できる。

以上、八文字屋本における『西鶴名残の友』の利用を確認してきたが、それによって、分かったことを次にまとめてみる。

1．『名残の友』の本文で、俳諧や俳諧師に関わる部分は、基本的に使用しない。

2．『浮世親仁形気』は主題との合致から、敢えて数名の俳諧師の名が載る本文をそのまま使った。

3．『名残の友』の風景描写は、一部の単語を変更する程度で、そのまま利用する。
4．笑話にあたる内容については、話の筋や構想を利用し、話を作り替える。
5．短い文言については、数作品において複数回用いることがある。
6．利用する章は極力重複を避け、同じ章を用いる場合は、引用する本文で重ならないよう調整する。

『西鶴名残の友』だけに限っていえば、以上のようなことがいえるだろう。1は、もともと俳諧に関する作品ではないので、俳論めいた文章は必要なかったからであろう。2は、創作当時ほぼ伝説化している俳諧師のみが使われている。西鶴と同時代の俳諧師の中には、宝永・正徳年間も生存していた者がいる。したがって、個人名は避けたと考えられる。3は既に先学が指摘する通りである。4は、人が入れ替わった話や茶碗に入歯を落とす話などがその例である。5に関しては、「下手に頭剃らす」という一例のみである。6は、作者が相当準備して創作にあたったことを示唆している。これについては、第二節冒頭の利用状況一覧表を参照されたい。

西鶴作品の本文をそのまま利用することは、確かに安易な方法ともとれるが、設定や主題などが本来異なる文章を、新たな筋の中に利用するのはそれほど簡単なことではない。齟齬をきたさないためにも細心の注意が必要であるし、諸作にわたって重複を避けるとなると、本文利用の記録や管理が必要になるわけで、全てを新たに創作する方がよほど楽だと思われる。ゆえに、本稿で取り上げた作品の作者は、相当の労力を使って創作に挑んでいたと推測されるのである。

ではなぜわざわざ西鶴作品から本文を利用するのであろうか。佐伯孝弘氏は其磧の創作方法について「西鶴の文辞をモザイク模様のように組み合わせて行く、その巧妙さを見せんとする意図」があったとし、さらに次のように述べておられる。

> 其磧は自らの創作の際、まず前半で西鶴の文辞を多く借りつつ話を設定し、次に後半で自由に西鶴から離れ（しばしば逆転させ）ながらストーリーを展開させている。この「西鶴離れ」あるいは「西鶴転じ」という趣向こそ、彼の眼目だったのではなかろうか。気質物の特色である「対照」と「誇張」は、設定を同じくする西鶴から離れる（かつ読者の笑いを得る）ために必要な手段であった。
>
> 西鶴をその文辞を記憶に残す程精読している一部の読者に対してはその展開予想を覆して見せ、同時に西鶴の文や想の魅力を借りることで新たな読者をも開拓する―おそらく其磧には、かかる二重の意図があったのだろう(10)。

其磧もまた、先行作品と新たなものを組み合わせることによって、または先行作品を提示しつつ後半で離れていくことによって、自身の作品を作っていたのである。こうした組み合わせは、剽窃として非難されるものではなく、逆に評価されるべき作者の工夫であると考える。

八文字屋本における『西鶴名残の友』の利用箇所を提示したとしても、そのことによって作品の読みが変わるわけでないことは承知している。ただ、一つの作

品のどの部分を利用し、どの部分を利用しなかったかを知ることによって、作者が先行作品を利用する際の傾向を知る手掛かりになるのではないか。其磧の咄本や歌舞伎評判記なども含めて、『西鶴名残の友』受容の調査を続けるつもりである。

（1）西鶴作品利用の指摘については、以下のような先行研究がある。

鈴木敏也氏『西鶴の研究』（天佑社　大正9年）

安部亮一氏「江島其磧の気質物」（『近世文学』2巻5号　昭和11年10月）

野間光辰氏「嵐無常物語―解釈とその理解―」（『国語国文』昭和16年8月、昭和21年1月、昭和23年4月）（『西鶴新新攷』岩波書店　昭和56年所収）

滝田貞治氏『西鶴の書誌学的研究』（野田書房　昭和16年）

暉峻康隆氏「西鶴と後続文学」（『古典研究』六巻五号　昭和16年）（『西鶴研究ノート』（中央公論社　昭和28年所収）

塚田義房氏「年刊西鶴研究」九（昭和31年11月）

岩井宏融氏「江嶋其磧の文章の一特色」（『近代語研究』二集　昭和43年1月）

長谷川強氏『浮世草子の研究』（桜楓社　昭和44年3月）、『日本古典文学全集37　仮名草子集・浮世草子集』（小学館　昭和46年）、『新日本古典文学大系78　けいせい色三味線・世間娘気質・けいせい伝受紙子』（岩波書店　平成1年）

篠原進氏「『世間子息気質』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』15号　昭和54年3月）、「『世間娘容気』論」（弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』16号　昭和55年3月）、「『浮世親仁形気』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』19号　昭和58年3月）、『要註・世間子息気質』（武蔵野書院　昭和54年）

塚田義房氏「西鶴と其磧（Ⅰ）―其磧の描く遊女―」（『上武大学論集』16号　昭和59年11月）、「西鶴と其磧（Ⅱ）―其磧の描く大臣―」（『上武大学論集』17号　昭和60年11月）、「西鶴と其磧（Ⅲ）―其磧の描く町人―」（『上武大学商学部論集』19号　昭和58年3月）

森耕一氏　「『浮世親仁形気』論序説(1)」（『園田国文』10号　平成1年3月）

佐伯孝弘氏「其磧気質物の方法―西鶴剽窃の意図―」（『日本文学』38号8号（平成1年8月）、「『浮世親仁形気』の現実感」（『清泉女子大学紀要』44号　平成8年12月）（両論文いずれも『江島其磧と気質物』若草書房　平成16年7月所収）

宮本祐規子氏「『忠臣略太平記』試論」（『日本文学』55―4　平成18年4月）（『時代物浮世草子論　江島其磧とその周縁』笠間書院　平

成28年2月所収）

（2）表現の利用ではなく内容（筋）の利用であることは、既に長谷川強氏が『浮世草子の研究』（桜楓社　昭和44年3月）で指摘している。

（3）篠原進氏　『世間娘容気』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』16号　昭和55年3月）

（4）暉峻康隆氏「西鶴と後続文学」（『古典研究』六巻五号　昭和16年）（『西鶴研究ノート』中央公論社　昭和28年に再録）、中村幸彦氏「万の文反古の諸問題」（『国文学　研究と資料　第一輯　西鶴』（慶應義塾大学国文学研究会編　昭和32年　至文堂）（『中村幸彦著述集』第六巻　中央公論社　昭和56年に再録）など。

（5）佐伯孝弘氏「其磧の焦り―『丹波太郎物語』をめぐって―」（冨士昭雄氏編『江戸文学と出版メディア―近世前期小説を中心に―』（笠間書院　平成13年）（『江島其磧と気質物』近世文学研究叢書17　若草書房　平成16年7月に再録）

（6）篠原進氏「『世間子息気質』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』15号　昭和54年3月）

（7）「下手にあたま剃す」の警句が『好色一代男』『役者色仕組』で用いられていることは、篠原進氏「『世間子息気質』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』15号　昭和54年3月）に指摘がある。

（8）佐伯孝弘氏「其磧気質物の方法―西鶴剽窃の意図―」（『日本文学』38巻8号　平成1年8月）（「其磧気質物の方法―西鶴利用の意図―」と改題して『江島其磧と気質物』近世文学研究叢書17　若草書房　平成16年に再録）

（9）篠原進氏「『浮世親仁形気』論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』19号　昭和58年3月）、佐伯孝弘氏「『浮世親仁形気』の現実感」（『清泉女子大学紀要』44号　平成8年12月）（『江島其磧と気質物』若草書房　平成16年に再録）

（10）（8）に同じ。

結び

『西鶴名残の友』の創作方法は、既存の笑話または笑話に作り直した伝承や奇談と俳諧師を組み合わせて一話に仕立て上げるというものである。創作の手順は、まず描写対象の俳諧師または俳諧師グループを選び、それに合わせて笑話を選ぶというものであったと推測する。描写される俳諧師が既に故人であった場合に限り、その人物を笑話の主人公に置き換えるが、西鶴と時代が重なるような俳諧師の場合は、第三の愚者を用意し、それを俳諧師が笑うという設定にしている。そこには、同時代俳諧師に対する気遣いがあったと考える。

もともと西鶴は『西鶴諸国はなし』や『日本永代蔵』などにおいて、伝承と現実を組み合わせて新たな話を構築するという方法を用いていた。伝承に拠るふりをして自分の世界を語ったり、あるいは実際の事柄を語り出しておいて、自分の作り話に誘い込んでいくという方法である。この方法を実存の俳諧師に応用したのが『名残の友』だったのである。

いくつかの事象が事実であると確認された結果、読者はつい実話だと思って時期や人物に拘ってしまう。実存の俳諧師であるから、その交流も事実に基づくだろうと思い込んでしまうのである。しかしふと気づくと作り話の中に迷い込んでいて、どこからどこまでが本当なのか分からなくなる。それが西鶴の方法であり、その方法が最も素直に表された作品が『名残の友』なのである。

事実である俳諧師と虚構である笑話、その組み合わせは作品解釈に大きく影響している。序章で述べた二つの立場、すなわち咄の集として笑いを重要視する立場と、談林俳諧師としての西鶴自身の心境とみる立場というのは、まさに笑話と俳諧師という組み合わせのどちらに注目するのかということなのである。そして最近の研究の流れをみると、現在は俳諧師の方に重きがおかれているように思われる。だが、その読み方は本当に西鶴の意図に添ったものなのだろうか。

西鶴が元禄元年の手紙に「此ごろの俳諧の風勢気ニ入不ㇾ申候」と書いていることも、元禄五年の歳旦吟に「俳諧時勢をうとふに、我年ふりておかし」の前書があることも否定はしない。しかしそれを『名残の友』にかぶせて読むのは研究者の賢しらであって、西鶴がその不満を『名残の友』執筆の目的としていたかは別なのである。

当代俳諧への批判が真の目的であったなら、笑話など用いずに俳書を利用した方が有効であったはずである。しかし西鶴は笑話を選んだ。ことさらに俳書を出して批判するようなことはしなかった。巻四の一「小野の炭がしらも消時」にある「とかく足のおもたく、やう／／歌仙の中ほど、瀬を越所にして止ぬ」や、巻四の四「乞食も橋のわたり初」にある「一日語るうちに、互ひに俳諧の事どもいひ出さぬも、しやれたる事ぞかし」、巻五の三「無筆の礼帳」の「俳諧は外になして、耳をよろこばせける」といった部分を引き合いに出して西鶴の動揺を読み取るむきもあるが、当代俳諧への主張をはっきりと述べないことが、逆にそれを目的にしていなかった証拠になるのではないのだろうか。当代俳諧への主張に繋

がる展開を敢えて書かず、俳諧師との交流を主に描いたことを重要視すべきなのである。西鶴が『名残の友』で書こうとしていたことは、俳諧師との交流であり、俳諧師そのものだったと考える。そして読者に伝えようとしていたことは、俳諧をすることの意味、俳諧師ということの意味、俳諧人生の意義である。

『名残の友』を読んでまず感じることは、面白さである。もちろん面白いという概念は人によって異なり、論述や批判意識などを興味深いものとして捉える人もいるだろう。しかしそれは知識人の楽しみ方であって、一般的には滑稽で可笑しいものを指す。俳諧を扱うために俳論めいた言辞も含まれるけれども、読者に面白いと思わせる要素はやはり笑話なのである。その笑話の効力によって、俳諧師とは面白い人たちなのだと、俳諧の座や俳諧師との交流は楽しいものなのだと思わせることに成功している。

西鶴が笑話を選んだ理由は何だったのか。もともと俳諧の座で語られていたからかもしれないが、より重要なのは、談林俳諧そのものが諧謔の文学だということである。談林俳諧は無心所着を特徴とする。和歌的な世界を諧謔してこそ俳諧であった。だから西鶴は連歌と俳諧の違いを繰り返し主張しているのである。そうした考えがあるから、俳諧師に笑話を組み合わしたのではなかったろうか。

西鶴は笑いの効力をよく理解していた。淡々と過ぎていく日常に明るさを加えるのは笑いである。つらい現実や不安な生活に救いを与えるのは笑いである。だから笑いを作品の中で大いに活用している。そしてその西鶴の方法を最も理解していたのが江島其磧だったのである。其磧は『名残の友』の面白さや価値を把握していた。文章表現の巧みさを知っていて、その文章をそのまま利用している。笑いの描写が作品の出来を左右することを理解しているから、笑話の部分はより滑稽さを増幅して作品に取り込んでいるのである。其磧がいかに西鶴作品を読み込み、深く理解していたかは、『名残の友』の受容状況をみるだけでもわかるだろう。

『西鶴名残の友』は各巻の話数が揃わず、章番号に誤りがあるなど、西鶴の他作品と比べて体裁が悪いのも事実である。しかしその内容は評価に値するものなのである。それを知る後世の作家は他にもいるだろうし、明らかにする必要があるだろう。本稿では『浮世親仁形気』までしか扱えなかったが、さらに多くの作品を対象として、『名残の友』の受容を調査していく予定である。

付録　『西鶴名残の友』俳人一覧

凡例

①本一覧は、基本的に連歌・俳諧に関する人物を中心とした一覧である。よって、歴史的に有名な兼好法師や紫式部などは採録しなかった。
②解説は可能な限り簡略にし、参考となる論文類を提示した。

序　団水／1663～1711／京の人。のち大坂に移住。本名、北条義延。別号、白眼居士・滑稽堂。西鶴門の重鎮で俳人かつ浮世草子作家。西鶴没後、元禄七年春（元禄六年とも考えられるが）、京から大坂の西鶴庵に転居。元禄十四年に大坂から京に帰る。宗政五十緒「北条団水年譜」（『西鶴の研究』未来社）。『北条団水集』（近世文芸叢刊17）参照。

巻一・一／荒木田守武／1473～1549／伊勢の人。連歌俳諧作者。内宮禰宜を世襲した荒木田氏の一門園田家に生まれ、天文十年（1541）に禰宜の長官。『荒木田守武集』（神宮古典籍影印叢刊）など参照。

巻一・一／光貞妻／1582～1647　伊勢の人。『普斎系図』（「茶道文化研究」第二輯）によると「普斎　杉木氏、名光敬、通名吉太夫、字同禅、父者光貞、母同苗　宗太夫末吉女　字はみつ」。「杉木氏家系図」は「仁右衛門宗太夫浄欣長女」という。「望一から園女まで」（志田義秀『俳文学の考察』）参照。

巻一・二／正道／生没年未詳／伊賀上野の人。他は未詳。

巻一・二／津田休甫／寛文末年頃まで生存か／大坂の人。津田氏（宇喜多氏とも）。別号、江斎・谷之坊。本来豊臣方の武将・宇喜多秀家に仕えるも、関ヶ原の合戦で敗北して伊豆で落髪。以後は大坂生玉で隠者としてすごし、遊里や若衆歌舞伎の世界にかかわり、俳諧では貞徳・重頼らと交流。近世大坂俳壇の草分け的存在。乾裕幸「津田休甫小伝」（「会報　大阪俳文学研究会」24）・加藤定彦「近世俳諧の成立」（『俳諧の近世史』若草書房）・塩村耕「津田休甫と若衆歌舞伎縁起巻」（『近世前期文学研究』、若草書房）参照。

巻一・三／松永貞徳／1571～1653／京の人。歌人・俳人。幼名小熊、名勝熊。号逍遊、別号長頭丸・明心。初め三条衣棚、晩年五条稲荷町の花咲の宿に住み、花咲の翁と呼ばれた。貞門の総帥。小高敏郎『松永貞徳の研究』正続（臨川書店）・島本昌一『松永貞徳』（法政大学出版局）参照。

巻一・四／斎藤徳元／1559～1647／美濃国岐阜の人。のち草創期江戸俳壇の長老。

連歌・仮名草子作者。斎藤道三の外孫。豊臣秀次・織田信秀らに仕えるが、敗れて若狭国に亡命。後、京極忠高に仕官。笹野堅『斉藤徳元集』（古今書院）・安藤武彦『斉藤徳元研究』（和泉書院）参照。

巻二・一／山崎宗鑑／生没年未詳／洛西山崎の人。出身など不明な点が多く、一説に支那弥三郎範重。近江の人というが、洛西山崎に閑居し、山崎宗鑑と称される。「言い捨て」の俳諧を収録した『犬筑波集』の撰者。吉川一郎『山崎宗鑑伝』（昭30）・木村三四吾「山崎宗鑑」（『俳句講座』2、明治書院）参照。

巻二・一／永貞／生没年未詳／大坂の人。岡山氏。立圃系俳人。『遠近集』等に入集。

巻二・一／保俊／生没年未詳／大坂の人。竹野氏。『物種集』等に入集。

巻二・一／春倫／生没年未詳／大坂の人。浜田五郎左衛門。『遠近集』に多数、『鸚鵡集』などに入集。

巻二・一／宇野河内／生没年未詳／「高麗橋一丁目宇野河内」（『難波丸綱目』四）とある。俳号は浄治。

巻二・一／月夜の四平／生没年未詳／京の人。

巻二・二／安原正章（貞室）／1610～1673／京の人。通称・鍵屋彦左衛門。貞門俳人。『俳諧之註』で松江重頼と対立。以後、重頼への反発は『毛吹草』批判の『氷室守』へとエスカレート。小高敏郎「安原貞室」（『俳句講座』2、明治書院）参照。

巻二・二／了味／生没年未詳／京の人。宮川三郎右衛門長之。貞室門で寛文九年（1669）了味と改号（『歳旦発句集』等）。

巻一・二／浄久／1608～1688／河内国柏原の人。大文字屋。本名は三田七左衛門。肥料業・舟運業を兼務。家業の余暇に連歌（西順に師事）・俳諧（貞徳・宗因・玖也に師事、西鶴とも親交）・狂歌作者。『河内鑑名所記』を表す。貞室の浄久訪問は、明暦二年（1656）、またはそれ以前の夏。本話執筆時期は浄久死後の元禄元年以降か。平林徳治『三田浄久』（大阪女子大学国文研究室）参照。

巻二・三／西岸寺任口／1606～1686／紀伊国の人か。のち伏見の西岸寺三世住職となる。連歌作者名・如羊。宗因・重頼等と親しく、貞享二年（1685）春、芭蕉は『野ざらし紀行』の旅中に任口を尋ねた。西鶴の訪問は寛文七年（1667）夏。岸得蔵「西岸寺任口」（『仮名草子と西鶴』成文堂）参照。

巻二・三／多門院の門加／生没年未詳／伏見の高瀬道甘門。『古今俳諧師手鑑』・『諸国ばなし』巻一の五等にその名が見える。

巻二・三／兼松氏友世／生没年未詳／伏見の人。兼松源右衛門友世（『寛文比俳諧宗匠並素人名誉人』）。『古今俳諧師手鑑』では金松氏。

巻二・三／上林／生没年未詳／京都宇治の人。宇治茶師の総支配。代官を勤めたこともある上林家の人。ただし上林峯順家・上林昧卜家・上林春松家・上林竹庵家・上林平入家等があり、本話の人物がどの家に属する人かは不明。『茶道辞典』(淡交社)等を参照。

巻二・三／山名外見／生没年未詳／未詳。

巻二・四／烏丸大納言（光広）／1589～1638／京の人。近世初期の歌人・書家。藤原氏。細川幽斎より古今伝授をうける。連歌・聯句・俳諧・狂歌にも通暁。幽斎と歌道に関する一問一答を交わした、日記体聞書の『耳底記』は有名。小松茂美『烏丸光広』（小学館）・高梨素子「烏丸光広年表稿」（一）～（四）（「研究と資料」21～27）参照。

巻二・四／雛屋立甫／1595～1669／京の人。野々口氏。親重。通称、庄右衛門等。本来は立圃。雛人形の細工を業とし、雛屋、あるいは紅粉屋とも称す（『滑稽太平記』）。別号、松翁・無文。雅趣にとむ俳画入り句文集を多く残している点でも有名。連歌を猪苗代兼与に、和歌を烏丸光広に学ぶ。木村三四吾「野々口立圃」（『俳句講座』2、明治書院）参照。

巻二・四／立以／生没年未詳／大坂の人。喜多村宗清。別号、休斎。備後町住。初め令徳・貞室門、のち立圃門。

巻二・四／貞親／生没年未詳／大坂の人。林氏。初号、器水。立圃門。

巻二・四／可玖／生没年未詳／大坂の人。西村重親。通称、善右衛門。初め吉竹、長愛子。薙髪して可玖。立圃門俳人で大手御祓町住。

巻二・四／尾崎清章／1636～1696／大坂の人。泉南郡阪南町尾崎の大庄屋、吉田清章。通称、九右衛門。俳号、尾蝿。宗因門俳人で、契沖や伏屋重賢等と交流。永野仁『堺と泉州の俳諧』（新泉社）参照。

巻二・四／広親／生没年未詳／京の人。

巻二・五／蒲釧／生没年未詳／京の人。俳諧・狂歌作者。「交野僧蒲釧」（『後撰夷曲集』『河内鑑名所記』）、また「渚之住」（『佐夜中山集』）との伝もある。西鶴は、「禁野釈蒲釧」（『古今俳諧師手鑑』・『物種集』）とする。

巻二・五／正式／？～1672頃入水自殺か／大和郡山の人。和歌・狂歌・俳諧作者。池田氏。号、委斎。通称、十郎右衛門。大和郡山藩本多政勝の家臣。晩年は浪人。貞室門俳人で、重頼の『毛吹草』批判書『郡山』を草している。『大和郡山市史・文芸篇』（昭41）・島本昌一「池田正式の論」（「連歌俳諧研究」59）参照。

巻二・五／秋月／生没年未詳／大坂の人。片山氏。通称、清右衛門。名は正朝。立圃門俳人で『歌仙大坂俳諧師』等に載る。

巻二・五／未得／1587～1669／江戸の人。石田氏。通称、又左衛門。別号、乾堂・巽庵。両替店を営むも、訳あって相模に蟄居。後に再び江戸に出て、徳元・玄札らと親交を結ぶ。狂歌家集『吾吟我集』（慶安二年）は著名。森川昭『江戸貞門俳諧の研究』（「成蹊論叢」特別1号）参照。

巻二・五／春可／寛永年中没／京の人。重頼門。「京衆　毛吹草巻頭作者　百人一句入　朝生軒　春可」（『寛文比誹諧宗匠並素人名誉人』）という。

巻二・五／道甘／1610～1691／京都伏見の人。高瀬氏。名、正代。通称、弥三右衛門。別号、専庵・楽々庵。伏見俳壇の中心的存在。梅盛の兄（『誹家大系図』）。

巻二・五／胤及／1615～1676／備前国片上（現岡山県備前市）の人。医師で俳人。岡本氏。名、仁意。貞徳門、のち季吟門。宗因とも親しく、談林俳人とも交わる。編著に『鉋屑集』（万治二年跋）がある。

巻三・一／葎友（律友）／生没年未詳・1681～1704とも／阿波国の人。荻野氏。別号、琴枝亭。西鶴門。編著に『四国猿』（元禄四年）がある。

巻三・一／釣寂／生没年未詳／阿波国の人。細井氏。別号、春江堂。

巻三・一／吟夕／生没年未詳／阿波国の人。富松氏。別号、修竹斎・可住庵。京阪を旅行した折に才麿・来山・立志・団水・言水らと唱和して『眉山』（元禄五年）を編集。

巻三・二／重好／生没年未詳／山城国の人か。菱屋と号す。『鷹筑波』『毛吹草』『毛吹草追加』その他に入集する重好か（『貞門談林俳人大観』）。『誹諧詞友集』（寛文十年）の山城国の条にある重好であるならば「下村氏」。

巻三・二／高崎玄札／1594～1676か／江戸の人。江戸貞門五哲の一。高島氏。名は玄道。伊勢山田の人で、江戸へ出て医を業とした。草創期江戸俳壇の中心的存在。内藤風虎の指導にもあたった。森川昭『江戸貞門俳諧の研究』（「成蹊論叢」特別1号）参照。

巻三・三／藤井徳庵／1599～1660／堺の人。医師、藤井宗徳の長子。家督は弟の宗余に譲り別家する。寿仙、法橋に叙せられる。幼名、宗意。のち玄柳、また徳庵。斎号を社楽と言う。禅を沢庵に、神道を吉川惟足に、歌道を烏丸光広に学ぶ。

巻三・三／成安／1582頃～1664／堺の人。成安は姓を俳号としたもの。『名残の友』では「なりやす」とルビをふるが、俳号としては通常「じょうあん」と読む。通称、四郎右衛門。伴井云也に俳諧を学び、堺正法寺祭華庵に隠居後、堺俳壇の総帥となり、『埋草』（寛文三年）を刊行。『貝殻集』編集半

ばに他界。前田金五郎「地方俳壇としての堺」（「国語と国文学」昭33・4）参照。

巻三・三／成之／生没年未詳／堺の人、池島氏。『塵塚』（寛文十二年、ただし零本一冊のみ現存、刊年は『誹諧書籍目録』で確認できる）の編者。『古今俳諧師手鑑』には「堺　池島宗今」。他に「宗吟」とも。

巻三・三／顕成／1635頃～1676頃／堺北庄の人。阿知子氏また山井氏と別称か。通称、作左衛門（『夢見草』）。入道して林庵（『古今俳諧師手鑑』）。編著に、堺最初の撰集『境海草』（万治三年）以下、『続境海草』（寛文十年）、『手繰舟』（寛文十二年）がある。永野仁『堺と泉州の俳諧』参照。

巻三・四／牡丹花／1443～1527／京の人。室町末期の和歌・連歌作者。牡丹花肖柏。別に夢庵・弄花老人。中院通淳の子、通秀の弟。和歌・連歌を好み、早くより隠遁し、宗祗に師事、古今伝授を受け、『新撰菟玖波集』撰進を助ける。綿抜豊昭「牡丹花肖柏年譜」（「連歌俳諧研究」66）、木藤才蔵『連歌史論考』下（明治書院）参照。

巻三・四／一三子／生没年未詳／讃岐高松の人。中野氏。別号、半孤軒・泉郎子。『誹諧詞友集』（寛文十年）・『時勢粧』（寛文十二年）・『古今俳諧師手鑑』（延宝四年）等に入集。『新編香川叢書　文芸篇』（香川教育委員会）は没年を寛文頃というが不明。

巻三・四／桃青／1644～1694／伊賀上野の人。のちに江戸へ移住。俳諧宗匠としての活動は極端に短く、貞享・元禄俳壇にあって、独特の活動を展開した。代表作として『野ざらし紀行』や『おくのほそ道』等が有名。門弟を指導して編纂された『猿蓑』（元禄四年）などもある。今栄蔵『芭蕉年譜大成』（角川書店）参照。

巻三・五／三千風／1639～1707／伊勢射和の人。三井友翰。大淀氏を称す。俳諧師となるために陸奥国松島に趣き、約十五年滞在。天和三年四月には『日本行脚文集』の旅に出立し、五月象潟を問い「西行桜木陰の闇に笠捨たり」を詠む。岡本勝『大淀三手風研究』（桜楓社）参照。

巻三・五／言水／1650～1722／奈良の人。池西氏。江戸在住時代すなわち延宝・天和時代に桃青（芭蕉）らと俳壇をリードする存在となる。貞享元年（1684）秋、象潟を訪う。荻野清『元禄名家句集』（創元社）・宇城由文『池西言水の研究』（和泉書院）参照。

巻三・五／道甘／1610～1691／巻二の五参照。大津の道甘とするが伏見の誤り。

巻三・五／友　／1641～1719／南部の人。本来は幽閑。太田友悦。越前生まれ

の人で、喜連川・江戸へと移住し医術および儒学を修業。延宝五年に五人扶持で南部侯に出仕、宝永六年に致仕。小林文夫『岩手俳諧史』（萬葉堂）参照。

巻三・五／清風／1651～1721／出羽国尾花沢の人。鈴木道祐。通称、島田屋八右衛門。金融業を営むかたわら、出羽国物産の問屋も兼ねる。諸国の俳人と交流を重ねるが、ことに言水との関係は深い。星川茂平治『尾花沢の俳人・鈴木清風』（地域文化振興会）参照。

巻三・五／桂葉／1624～1706／出羽国秋田の人。能代柳町八幡神社別当大光院の修験僧。平賀氏。本名、尊為。北村季吟との関係は深い。『八束穂集』（延宝八年）を編集。浅野晃「『一代男』中の俳人」（『西鶴論孜』勉誠社）、井上隆明『東北・北海道俳諧史の研究』（新典社）、高橋雅彦「近世初頭秋田藩の文事」（『日本文学史論』世界思想社）等参照。

巻三・五／祖寛／生没年未詳／出羽国秋田の人。大久保氏（『古今句帳』）。延宝八年の『西鶴大矢数』で後座につき、『俳諧百人一句難波色紙』（天和二年）には句と團像がみえる。出家しており、和歌・俳諧に遊んだ。井上隆明『東北・北海道俳諧史の研究』参照。

巻三・五／玖也／1623～1676／大坂の人。松山氏。休甫門、のち宗因門。内藤風虎の招聘により、寛文四年（1664）以降、三度も陸奥岩城へ趣いている。紀行文として『東下り富士一見記』『八嶋紀行』が知られるも、『名残の友』にいう紀行文に該当するものは不明。加藤定彦解説『桜川』（勉誠社）参照。

巻三・六／松意／生没年未詳／江戸神田の人。田代氏。通称、新左衛門。談林軒・冬嶺堂。延宝三年（1675）、西山宗因に接し『談林十百韻』を興行して一躍脚光を浴びるが、宗因没後には消息不明。木村三四吾「田代松意」（『俳句講座』2、明治書院）参照。

巻三・六／葎宿／生没年未詳／京の人。那波氏。通称、七郎右衛門。別号、葎翁・江雲。初め北村季吟に学び、後宗因に親炙。『虎渓橋』（延宝六年）の作者。

巻三・七／正盛／生没年未詳／大和国高市郡今井村の人。今西氏。通称、与治兵衛。今井の惣年寄三家の一人。貞門俳人。貞室編『玉海集』（明暦二年）より寛文末年までの諸俳書に句が見える。今井勢の代表格。『俳家大系図』（天保九年跋）は、著書の『耳なし草』を報ずる。

巻三・七／可慶法橋／生没年未詳／大和の人。「法隆寺法橋哥慶」として、狂歌六首を載せる（『河内鑑名所記』）。西鶴は「和州前清浄

院哥慶」（『古今俳諧師手鑑』）とする。清浄院（現奈良市西大寺町）と法隆寺との関連などは不明という（井上敏幸注『新日本古典文学大系』）。

巻四・一／団水／1663～1711／序文参照。

巻四・一／言水／1650～1722／巻三ノ五参照。江戸で活躍していた言水は、天和二年（1682）三月上旬、京都に移り、新町通六角下ル町（『京羽二重』三）に住す。言水と団水とは一条を隔てるだけの近隣に住していた。巻三・五の言水の条を参照。

巻四・二／益翁／1605～？／堺の人。のち大坂住。山崎（高滝とも）氏。通称、正左衛門。別号、以仙・見独子・梅風軒。初め令徳、後宗因門。大坂俳壇の古老の一人。種茂勉「談林俳壇の構造」（「言語と文芸」68）、板坂耀子「翻刻『箱柳七百韻』」（「近世文芸　資料と考証」10）参照。

巻四・二／由平／生没年未詳／大坂平野の人。前川氏。通称、江介（江助）。別号、自人・舟夕子・半幽・半幽軒・瓢叟・破瓢叟。宗因門。延宝末には西鶴・遠舟と並び、大坂俳壇の三巨頭とされる。寛文から宝永頃の人だが、元禄になると雑俳の点業に専念。桜井武次郎『元禄の大坂俳壇』（前田書店）参照。

巻四・二／来山／1654～1716／大坂の人。平野の薬種商の子。はじめ淡路町渡辺橋付近に仮寓するが、のち今宮住。小西氏。通称、伊右衛門。初号、満平。由平門、後宗因門。別号、十万堂・湛々翁。元禄大坂俳壇の雄。今栄蔵「小西来山」（『俳句講座』2、明治書院）、飯田正一『小西来山全集』（朝陽学院）、『小西来山俳句解』（前田書店）佐藤勝明『元禄名家句集略注　小西来山篇』（新典社）参照。

巻四・二／如見／生没年未詳／大坂の人。樋口氏。通称、五貫屋。宗因門の点者。『山海集』等に入集。

巻四・二／豊流／生没年未詳、1696以降に没／摂津天王寺村の人で、大坂住。岩橋氏。名、豊春。宗因門。原本振仮名「とよはる」は、実名との混乱。『西鶴大矢数』の脇座をつとめる。雑俳の点業にも専念。著書に『彼岸桜』（貞享二年）。

巻四・二／賀子／生没年未詳／大坂の人。斎藤氏。紅葉庵。宗因門。絵俳書『山海集』（延宝九年）、『大坂みつがしら』（延宝九年）、『蓮の実』（元禄四年）等、西鶴・大坂俳壇を考えるに重要な俳書が多い。野間光辰「『山海集』解説」（『定本西鶴全集』11、中央公論社）参照。

巻四・二／万海／生没年未詳／大坂の人。武村（竹村）氏。名、清左衛門。以仙門。初号、益友。別号、素琴亭・曳尾堂。貞享期、万海と改号した頃から師を離れて独自に活躍。元禄期には雑

俳点者として活躍。桜井武次郎『元禄の大坂俳壇』（前田書店）参照。

巻四・三／似船／1629～1705／京の人。富尾氏。通称、弥一郎。別号、芦月庵・柳葉軒。安静門。延宝半ばに宗因風に転向し、元禄期にも『苗代水』（元禄二年）、『堀河之水』（元禄七年）等大部の書を出版。京都俳壇の実力者。雲英末雄『元禄京都諸家句集』（勉誠社）、同『元禄京都俳壇研究』（勉誠社）参照。

巻四・三／常牧／生没年未詳／京の人。半田氏。通称、庄左衛門。初号、宗雅。別号、蘭化翁・雲峰子。元禄八～十年（1697）の間に没。常矩門。『遠あるき』（元禄元年）、『万歳楽』（元禄三年）等、元禄京都俳壇の様相をよく投影した俳書を刊行。雲英末雄『元禄京都諸家句集』参照。

巻四・三／我黒／1640～1710／京の人。中尾氏。通称、四郎左衛門。別号、青白翁・李洞軒。重頼最晩年の弟子。元禄京都俳壇の典型的な俳人で、雑俳点者としても活躍した。編著『磯清水』（元禄五年）等。雲英末雄『元禄京都諸家句集』参照。

巻四・三／晩山／1662～1730／京の人。爪木氏。初号、永可。別号、二童斎等。松堅門。『千代の古道』（元禄三年）を端緒とする随流一派との論争等で評判にもなった。雲英末雄『元禄京都諸家句集』参照。

巻四・四／其角／1661～1707／江戸の人。榎本氏、のち宝井氏。別号、螺舎・晋子。芭蕉の高弟。其角は西鶴の独吟二万三千五百句興行の後見役もつとめており、両者は親密な関係にあった。石川八朗ら『宝井其角全集』（勉誠社）、田中善信『元禄の奇才　宝井其角』（新典社）参照。

巻四・四／露言／1630～1691／江戸の人。福田氏。別号、調也・素竹軒・風琴子。初め調和門で後に露沾門。延宝六年以降、宗匠として活躍。

巻四・四／一晶／?～1707／京の人。のち江戸と上方を往復。芳賀氏。名、治貞。別号、冥霊堂・崑山翁。似船門。のち芭蕉とも交流。西鶴画像で知られるように、師宣風の画もよくした。白石悌三「芳賀一晶」（『江戸俳諧史論考』九州大学出版会）参照。

巻四・四／立志／1658～1705／江戸の人。高井氏。名、吉章。初号、立詠。別号、和階堂。一世立志の二男。編著に『宮古のしをり』（元禄五年序）等がある。『二世立志終焉記』（宝永元年奥）には立詠の「終焉記」があり、末尾には「病中の記事」もみえる。

巻四・四／挙白／?～1696／江戸の人。草壁氏。蕉門俳人。陸奥国の出身か。『お

くのほそ道』に名がみえ、『陸奥衞』に肖像が載る。編著に『四季千句』（元禄二年奥）等。

巻四・四／轍士／？～1707／大坂の人。室賀氏か。別号、東鮒斎・風翁。宗因門。後に京高倉四条下ル町に移住（『鳴弦之書』）。西鶴・団水と親しく、また芭蕉を敬愛してもいた。東北地方や各地を歴訪。俳人評判記『花見車』（元禄十五年跋）の編者としても有名。雲英末雄「元禄俳人の旅」（『元禄京都俳壇研究』）参照。

巻四・五／才麿／1656～1738／大和国宇陀の人。椎本氏。初号、則武。別号、西丸・才丸。のち大坂住。初め西武門。宗因・西鶴にも親炙。延宝五年（1677）江戸下向。元禄二年冬より大坂住。若い頃儒学に傾倒、漢詩文にも通暁。朝鮮通信使との酬和もあるという。和歌・狂歌もたしなむ才人。辛島啓子「椎本才麿年譜稿」（「叢」6）、富田志津子「才麿発句注解」（「大坂大学医療技術短期大学部研究紀要」23・24）参照。

巻四・五／西流／生没年未詳／奈良の人。木村氏。『点滴集』（延宝八年序）に「南部」として三十数句を所収。『西鶴大矢数』等に名が見える。

巻四・五／西任／生没年未詳／奈良の人。『点滴集』（延宝八年序）に「南部」として十五句入集。『西鶴大矢数』第八十四の発句作者。

巻五・一／宗祇法師／1421～1502／出生地不明。飯尾氏。別号、種玉庵・自然斎等。連歌の第一人者。関東・越後・西国への旅を繰り返し、箱根湯本で没。金子金治郎『宗祇の生活と作品』（桜楓社）、島津忠夫『連歌師宗祇』（岩波書店）、『伊地知鉄男著作集Ⅰ』（汲古書院）、奥田勲『宗祇』（吉川弘文館）参照。

巻五・一／望一／1586～1643／伊勢の人。杉木氏。伊勢山田の盲人で勾当、また俳人。望都・茂都。「もういち」「もいち」「もいつ」とも。作品は『望一千句』（寛永初年頃成）・弟正友が抄出した『伊勢俳諧大発句帳抜書』等に知られる。越智美登子「初期伊勢俳壇の問題」（「国語国文」482）参照。

巻五・二／弥七／生没年未詳／京の人。願西弥七。名太鼓持で末社四天王の一人。

巻五・二／神楽／生没年未詳／京の人。神楽庄左衛門。名太鼓持で末社四天王の一人。

巻五・二／正信／生没年未詳／大坂の人。川崎氏（『続古今誹諧手鑑』）。名は庄左衛門。貞門系。

巻五・二／竹亭／？～1692／京の人。醒井綾小路下ルに住。享年を、『誹諧家譜』では32才、『誹家大系図』では35才とする。溝口氏。

和及・竹翁と親交。編著に『誹諧をだまき』(元禄四年)。

巻五・二／一礼／生没年未詳／大坂の人。中村氏。他に柏・柏谷とも。通称、市左衛門。別号、白雨軒。益翁（以仙）門。寛文末から元禄の頃に活躍。編著に益翁との共編の『ぬれ烏』（延宝七年）等。尾形仂・朝倉治彦「資料翻刻　ぬれがらす」（（連歌俳諧研究」19）参照。

巻五・二／昨非／生没年未詳／大坂の人。桑名屋清左衛門（『難波巡礼』）。原本「昨俳」とする。別号、蘂香亭・蘂香軒・昨非堂・半隠。はじめ立圃門、のち才麿門。編著に『根合』(元禄三年)等。桜井武次郎『元禄の大坂俳壇』参照。

巻五・二／素龍／?～1716／阿波徳島の藩士。のち大坂・江戸へ移住。柏木氏。名は儀左衛門・藤之丞。別号、全故。歌人かつ俳人で能書家。元禄初年浪人し、大坂に出て昨非と交流。同五年（1692）冬江戸に出て芭蕉と交流し『おくのほそ道』を清書（同七年）、跋文をよせる。幕府歌学方の北村季吟に接近し、のち柳沢吉保・吉里に伺候する。杉浦正一郎『芭蕉研究』(岩波書店)、植谷元「素龍ー楽只堂の学輩達ー」(「山辺道」昭40・3、同12・同42・3)、上野洋三「芭蕉と同時代の歌壇」(『和歌文学講座　近世の和歌』勉誠社）参照。

巻五・二／鬼貫／1661～1738／摂津国伊丹の人。上島氏。宗邇。別号、犬居士。初め重頼、のち宗因門。大坂に出て医術を学んだこともあるが、基本的に筑後国三池藩・大和国郡山藩・越前国大野藩等で経済官僚として活躍。鬼貫の俳論には禅宗と蕉門俳論の影響が認められるも、「誠の俳諧」論は有名。荻野清『元禄名家句集』、岡田利兵衛『三訂版　鬼貫全集』(角川書店)、桜井武次郎『上島鬼貫』(新典社）参照。

巻五／三／西国／1647～1795／豊後の人。中村氏。通称、島屋庄兵衛（勝兵衛とも)。別号、松葉軒・落安舎・卜幽。豆田町の商人。西鶴門。延宝五年（1677)、大坂にて西鶴から『俳諧之口伝』をうける。大内初夫『近世九州俳壇史の研究』(九州大学出版会）参照。

巻五・三／西与／生没年未詳／筑後久留米の人。大塚氏（『二葉集』)。西鶴門。『西鶴大矢数』(延宝八年）第十八に付句一句。のち蕉門とも交流し、支考が西与宅を訪問したこともあった（『梟日記』)。大内初夫『近世九州俳壇史の研究』参照。

巻五・三／木因／1646～1725／美濃国大垣の人。谷氏。通称、九太夫。別号、白桜下・観水軒・呂音堂・杭瀬川翁。船問屋。北村季吟に古典・俳諧を学び、芭蕉・西鶴・高政・轍士らと交流す

る。森川昭編『谷木因集』（和泉書院）参照。

巻五・三／西鷺／生没年未詳／備後の人か。西鷺軒橋泉のことという。西鶴門。野間光辰「近代艶隠者の考察」（『西鶴新新攷』岩波書店）参照。

巻五・四／西吟／？～1710／摂津巌屋の人。水田氏。通称、庄左衛門。はじめ大坂住で宗因門。別号の落月庵は天和二年（1682）より使用。西吟は延宝末に二回万句を興行しているが、本話と季節はあわない。西鶴と親しく、執筆をつとめかつ俳書の版下をしばしば清書した。『好色一代男』（天和二年）の版下を書き跋文を記したことは有名。桜井武次郎『元禄の大坂俳壇』参照。

巻五・四／友雪／生没年未詳／大坂の人。青木氏。別号、松水軒。西鶴門。『西鶴大矢数』では脇座に招待される。

巻五・四／嘉太夫／1635～1711／紀州国宇治の人。のち伊勢・京に住。徳田氏。通称、紀伊国屋。浄瑠璃太夫で、受領名の宇治加賀掾の方が有名。西鶴作『暦』『凱陣八島』の二作品を上演したことで有名。西鶴は加賀掾のために『小竹集』を編んでいる。信多純一「宇治加賀掾年譜」（『加賀掾段物集』近世文芸資料）、同「同補正」（『古浄瑠璃集・加賀掾正本（一）』古典文庫）、浅野晃「西鶴と歌舞伎・浄瑠璃」（『西鶴論攷』）参照。

巻五・五／大和屋甚兵衛／1652頃～1704／大坂の人。道頓堀の大和屋甚兵衛座の座元で、立役をかねた二代目甚兵衛。天和の頃より座元をつとめ、元禄二年（1689）冬上京、同五・十五年来坂。俳諧は西鶴門で、俳号は生重。追善集に『梓』（元禄十七年）がある。土田衛「大和屋甚兵衛の芸風」（『考証元禄歌舞伎　様式と展開』、八木書店）、『祐田先生花甲記念　近世芸文集』（天理大学国語国文学会）参照。

巻五・五／宇治右衛門／生没年未詳／大坂の人。歌舞伎役者、小野山宇治右衛門。初め小野山賤妻。天和二年（1682）に宇治右衛門を襲名。貞享三年（1686）、大和屋甚兵衛座より上京。敵役として有名。俳諧は遠舟門。俳号は恋舟。

巻五・五／藤川武左衛門／1632（1618とも）～1729／京の人。歌舞伎役者。初代。貞享・元禄頃、京一番といわれた武道方。また実悪の名優でもあり、江戸下りも数度に及んだ。俳号、逸選。

巻五・五／坊主百兵衛／生没年未詳／貞享・元禄期の上方の道化方役者。糸鬢で有名な江戸の道化方、坊主小兵衛の亜流。上方の百兵衛については、その具体は不明。小兵衛については、喜多村信節の『画証禄』が、「小兵衛が糸びんはそのかみ奴の体をうつせる也、小兵衛より始めしにはあらず」とい

う。『五元集』に「坊主小兵衛道心して」とあるので、後に出家したらしい。坊主小兵衛ないしは百兵衛に関する記事は、『松平大和守日記』にみえ、道化方に関する考証は、郡司正勝『かぶき　様式と伝承』（学芸書林）が参考となる。

巻五・五／墓原角蔵／生没年未詳／大坂の人。未詳。

巻五・五／和気遠舟／1653～？／大坂の人。和気氏。通称、仁兵衛。別号、朧麿・東柳軒。宗因門。「遠船」は「遠舟」の誤り。活躍時期は、延宝期と元禄五・六年（1692～1693）の二期に分かれる。ここは元禄期か。なお書家としても知られ、玉造黒門および道頓堀東堀詰高津に住した。西鶴と親交があり、門弟に梨園のものが多い。潁原退蔵「八重一重について」（『潁原退蔵著作集』5、中央公論社）参照。

巻五・六／宇治の上林／生没年未詳／巻二の三参照。

『西鶴名残の友』とその周辺　初出一覧

序

第一章　西鶴の雑話物と町人物

第一節『西鶴諸国はなし』

Ⅰ初出　「『西鶴諸国はなし』ノート―楽しみの魚摩魚古の手―」

（『緑岡詞林』第二十号　一九九六年三月）

Ⅱ初出　「夢に京より戻る―発想契機とはなしの構造―」

（『藝能文化史』第十四号　一九九六年十二月）

第二節『日本永代蔵』と『本朝二十不孝』

Ⅰ　『日本永代蔵』巻二の二「才覚を笠に着る大黒」

Ⅱ　『本朝二十不孝』巻一の一「今の都も世は借物」

初出　「西鶴の方法―二話の分析を通して―」

（『国文学論考』第三十三号　一九九七年三月）

第二章　『西鶴名残の友』成立と解釈

第一節　『西鶴名残の友』書誌と成立に関わる問題

初出　『西鶴名残の友〈影印〉』

（楠元六男・大木京子　おうふう　二〇〇七年二月）

第二節　『西鶴名残の友』各話解釈

初出　『西鶴名残の友〈翻刻〉』

（楠元六男・大木京子　おうふう　二〇〇七年二月）

「『西鶴名残の友』細見」

（『国文学論考』第三十七号　二〇〇一年三月）

「『西鶴名残の友』若干」

（『国文学論考』第三十九号　二〇〇三年三月）

「西鶴と茶」

（楠元六男編『江戸文学からの架橋――茶・書・美術・仏教――』竹林舎　二〇〇九年七月）

「矢数俳諧と浮世草子　矢数俳諧の人脈と浮世草子への影響」

（篠原進・中嶋隆編『ことばの魔術師西鶴　矢数俳諧再考』ひつじ書房　二〇一六年一一月）

＊各話解釈については、全話において大幅な加筆訂正を行った。

第三章　『西鶴名残の友』と八文字屋本

第一節　『忠臣略太平記』と『西鶴名残の友』未発表

第二節　八文字屋本における『西鶴名残の友』の受容　未発表

結び

付録『西鶴名残の友』俳人一覧

初出『西鶴名残の友〈翻刻〉』

（楠元六男・大木京子　おうふう　二〇〇七年二月）